
ONLINE

niziya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONLINE

【Nコード】

N9691Z

【作者名】

niziya

【あらすじ】

史上初のMMO仮想現実ゲーム『PHANTASIA ONLINE^{ファンタジア・オンライン}』。そのクロードβテスターになった久賀慎一^{くが・しんいち}のゲームと恋と青春の物語……になったらいいな、と思っている投げやりな一人称長編小説／※本作は2005年から「Bookshelf（http://bookshelf.jp.org）」で公開しています。すでに時代遅れな部分も色々とありますので、その点、予めご了承下さい。

授業中にも関わらず、俺はボンヤリと窓の外を眺めていた。
退屈だった。

だったら授業に集中しろ——と言われそうだが、やる気がでない。
スポーツで発散しろ——とも言われそうだが、だるいからパス。
趣味に没頭したら？——と言われても、趣味らしい趣味が無いの
で無理。

欠伸をひとつ。

授業に意識を戻すと、老齢の歴史教師が17条の憲法を黒板に書
いていた。俺はブレザーの内ポケットから、スライド式の携帯電話^{ケータイ}
を取り出して、ゲームを立ち上げた。隣の席に座る女子が睨んでき
た気もするが、チクる様子もないので放っておくことにする。

しばらくすると放課後になった。帰り支度を済ませ、ボートとし
ながら教室を出る。

クラブ活動はやっていない。やる気がおきない。ゲームばかりし
ているという噂の電算部に入りかけたこともあったが、上下関係が
面倒なので最終的にパスした。とはいっても、帰ってもやることが
無い。いつものように、登下校路の途中にある繁華街でゲーセンに
寄ることにする。

席が空いていたので『Ultimate Swordy』
という対戦格闘ゲームで軽く遊ぶ。

キャラ選択をランダムセレクトに任せると、ゲームの主人公格に
あたる黒衣の剣士になった。コマンドやコンボは全キャラ分、すで
に覚えているので、俺はそのまま、CPU戦を始めた。

1戦目の蜥蜴人戦は完勝。

2戦目の斧使い戦も楽勝。

3戦目は刀武者——と思ったら、乱入された。

乱入者の選択キャラは、黒衣の剣士と同系統にあたる細剣の女剣

士——スペック的には黒衣の剣士より上とされている——だった。もっとも、いざ初めて見ると、このキャラの持ち味とっていい中上段と中下段の使い分けが単調すぎて、話にならなかった。

ゲージが溜まったところでエクストラスキル発動。小下段、中上段とつなげて乱舞系の超必を発動。これで終了。退屈だ。

と、乱入者は再びコインを投じてきた。

今度の選択キャラは、小柄な大剣使い——このゲームの隠しキャラだった。

俺は少しムツとした。

こいつは反則級のスペックを持っている。スピードが速く、攻撃レンジも広く、隙も少なく、ゲージも溜めやすい。おまけに超必は回避不能。盾騎士であれば逆にカモれるが、スピード系では1本とれば上々。そんな反則級のキャラであるため、特殊な操作をしないと選択できないようになっている……

案の定、早々に2本とられ、俺は負けてしまった。

「……………」

後ろに“待ち”が居ないことを確認。連コインで再挑戦する。

選択キャラは——黒衣の剣士。

また負けた。

連コイン——黒衣の剣士。敗北。

連コイン——黒衣の剣士。敗北。

連コイン——黒衣の剣士。敗北。

連コイン——黒衣の剣士。1本とったが、敗北。

100円玉が尽きた。

「……………」

ムカついた。なによりムカついたのは、最後の対戦でコマンドの入力ミスをやらかしたことだ。それも超必の出し損ないだ。

俺はムカついたまま席を立ち、外の出ようとした。

今夜は家で前作のコンシューマー版をやりこもう。すべてはそこからだ。

——ヴーン、ヴーン、ヴーン

不意にケータイが震えた。メール着信のバイブレーションだ。メールは叔父からだった。

——ゲーム、好きか？ 好きならくれてやる！

少しめまいがした。

前から思っていたことだが……俺の叔父は、どこか変わっている。本当にこの人は、あの“石橋を叩いて渡らない”がモットーの親父の弟なんだろうか。職業もよくわからないし、いい歳としなのに浮いた話も聞こえてこない。

ともかく。

俺は本文を空白のまま、『YES』という題名で返信しておいた。

LOG・01” GAME START”

#01-01

```

| | Login Account .. 436-332-2000
4-9719
| | FAL Check .. . . . OK
| | Bit al Check .. . . . OK
| | Login Check .. . . . OK
| | Login Time .. 25, March 20X0
14..01..46
| | Limit Time .. 25, March 20X0
15..01..46
| | Contents Code .. PHANTASIA O
NLINE ver C1.0102
| | Abator Name .. SHIN
| | Login Place .. BLUEPOLIS / C
ENTRAL CIRCLE / LOGIN BOX 07
| | Login Sequence .. . . . .
. . . . . complete

```

独特な浮遊感覚はスーツと消えていった。

両目を開けてみる。

正面には誰かが立っていた。目つきの悪い、ガリ痩せでヒョロリとした根暗男だ。

ただ、適当に短くしてある髪は黄金色だった。

不健康な色白肌も、東南アジア系の濃褐色になっている。

現実の俺との違いはそれだけ。

他はすべて、実像のままだ。

「……………」

ああ、そうか。これ、鏡か。

俺はガリガリと頭をかいた。鏡の中の俺も、苦笑まじりにガリガリと頭をかいていた。

いや、それは俺であって、俺ではない。

今の俺は久賀慎一くが しんいちではない。

“SHIN”シン——それが今の俺。この外装アバターの名前なのだ。



10年前、国際的なIT企業グループ『NEURO』ニューロは、特殊な電磁波で人の神経系に干渉する技術——通称『PV』ピーブイを開発した。視覚や聴覚だけを騙す“不完全な仮想現実（False Virtual Reality）”とは異なる、“完全な仮想現実（Perfect Virtual Reality）”を可能としたのだ。

ただ、誰もが真っ先に思いつく娯楽利用は、諸々の事情から絶望視されていた。それでも関係者は努力を続け、昨年12月、ようやく娯楽用普及機の開発に成功した。こうして今年20X0年から様々なテストを行い、来年にはNEUROグループの完全子会社である『VRN』ヴァーナルエヌを通じて、普及機を一般販売すると宣言した。

世界に激震が走ったのは言うまでもない。

もともと、その際に発表されたコンテンツというものが、単に仮想世界で観光を楽しむだけのものとか、仮想都市に住むだけのメタバース系コンテンツだとか……それもあって、俺の興味は一気に失せてしまった。

そういうのが悪いというつもりはないが、単に“行く”だけの仮

想現実には旅行と変わらないと思うのだ。ゆえに興味がわからない。ということ、今年の正月、久しぶりに帰省した叔父に話した。たまにたまTVニュースでPVのことが取り上げられ、おまえはどう思う、と尋ねられたからだ……

叔父はVRN社の社員だった。

寝耳に水だ。

しかも、公開されていないPVコンテンツに関係しているというのだから、なんだか笑うしかない。

コンテンツの名は『PHANTASIA ONLINE』。
ワンド魔杖と呼ばれる魔法的な道具を操る「ウイズ魔杖師」たちの物語、というバックストーリーを持った陣営対決メインのMMORPGだ。

公式設定によると――

遙か昔、神秘の結晶たる魔杖に支えられた偉大なる文明があった
だが悪しき魔杖師が現れたことで世界は滅亡の危機に瀕してしまう

魔杖戦争 ワンドウォー

輝ける十二英雄の時代にして偉大なる文明の黄昏たる時代
勝者は無く ゆえに敗者も無く
文明は滅び ゆえに争いも滅び

・
・
・

千年の時間が流れた

世界は悪しき魔杖師が遺したクリーチャーたちが徘徊する秘境の地と化していた

だが二つの月が重なりし時 異界に通じる三つの扉が開いた
《赤》の門は荒野に 《青》の門は海に 《緑》の門は森に

それは最後の英雄が遺した奇蹟

異界に生きる魔杖師たちの化身を召喚する究極の秘術

呼び出された彼らを待ち受けるものは何か

魔杖戦争に秘められた謎とは

今、魔杖師たちの謎に満ちた冒険が始まろうとしている――！

ありがちな異世界ファンタジーモノと思えば、間違いないらしい。
ゲームで最も重要な“陣営”の特色は――

《赤》の陣営――荒野・廃墟に中枢都市を持つ陣営。機械系の外装オプション有り。

《青》の陣営――海辺・群島に中枢都市を持つ陣営。爬虫類系の外装オプション有り。

《緑》の陣営――森林・山岳に中枢都市を持つ陣営。哺乳類系の外装オプション有り。

――となっている。

もっとも、陣営ごとのゲーム的な差は何もない。違いは、当面の主なフィールドの地形と外装の追加オプションだけだ。

ちなみにネットの情報を漁った限りでは、一番人気は猫耳や尻尾を追加できる《緑》、二番人気は躰のパーツを機械と換えられる《赤》、ゲテモノ系の《青》は圧倒的すぎるほど人気が無く、製品版では別のものに変えられるだろうと見られている。

さて。

俺は叔父のコネのおかげで、史上初のMMO仮想現実RPG『PHANTASIA ONLINE』のクロースドβテストになれたわけだが、なんでもうちの高校には、俺の他に、何らかの手段でテストになったヤツが何人かいるという話だ。

実際、テスターになったことを自慢げに語る連中が現れた。そいつらはちょっとしたヒーローになっていたが、俺は黙っていた。

目立つのは嫌いなのだ。

いや、嫌いなのは人間全般……違うな。面倒なだけだ。人間関係ってやつが。

だから俺は、誰にもテスターになったことを言わなかった。

普段通り、ボーッとしながら毎日をすごした。

そんな俺だから、陣営は《青》を選んだ。

理由は“人が一番少なさそうだから”。

それ以上でもそれ以下でもない。

外装オプションは最低ひとつ選ばなければならないので、俺は瞳孔が縦長になる“竜眼”^{ドラゴンアイ}を選んだ。そのせいで、俺の凶相がさらにパワーアップしたが、まあ、別にどうでもいい話だ。どうせ仮想現実^{ヴァー}なのだし。

「さて……」

俺は鏡で瞳孔を確かめたあと、改めてログインボックスの中を眺めてみた。

どこことなく電話ボックスを連想させる広さだ。

形状は円筒だが、鏡の部分だけ平らになっている。ドアは鏡の対面、つまり俺の背面にある。“OPEN”と書かれた自動ドアのタッチボタンのようなものを押すと、壁にしか見えないところがシュツといいながら左右に開いた。

外に出てみる。

(へえ……)

そこは半分ほど海に突き出している巨大な円形広場だった。

見上げると真夏の青空にまぶしい太陽が輝いている。太陽のある方角が南だとすると、その反対側にあたる北側には街並みが広がっていた。3車線ほどの幅がある道路沿いに、エーゲ海っぽさを感じさせる家々が建ち並び、その先に断崖絶壁をくりぬく形で、古代ギ

リシアを思わせる神殿があった。

全体的に東地中海のイメージでデザインが統一されている。

ちよつとした観光旅行に來た気分になさしてくれる光景でもある。

これはこれで、意外と悪くない。

「うわぁ……」

不意に傍らから声が響いた。

見ると隣のログインボックスから、同年代と思われる女性のテストアが外に出てきた。

身長は俺よりかなり低い。多分、150センチ台だろう。

癖のない金髪を腰まで伸ばし、東南アジア系を思わせる瑞々しい肌を太陽に晒している。

空を見上げる大振りな黒い双眸は、猫のように縦長の瞳孔で……

「……………」

俺は苦笑した。

まさか、俺と同じような色とオプシオンを選ぶテストアがいるとは。

それも芸能人並みの容姿を持つ女性外装で。

「あっ」

向こうも俺に気づいたようだ。俺のつま先から頭のとっぺんまで、マジマジと観察してから、丸くした目で俺を見上げてきた。

お互い、服装は初期装備のままだ。

上は無地の白いTシャツ。下はゆったりとした膝丈のショートパンツと太い革ベルト。足はベルトで固定するタイプのサンダル。ちなみに下着はボクサーパンツで、倫理規定によって縁の部分が皮膚と癒着している。女性はこれに、スポーツブラが追加されるらしい。少なくともマニキュアルには、そう記載されている。

彼女は無言のまま苦笑した。

俺も無言のまま、ガリガリと頭をかいた。

「ひと」と彼女。「少ない……ですね」

俺はうなずきながら、彼女と一緒に周囲を見回した。

広場は限りなく無人に近い。

俺たちが出てきたログインボックスは、中央広場のちょうど中心に、円を描くようにして並んでいる。ログインしてきたテスターは、この周辺に止まっているままなのだが、ザッと見ても20名前後しかいないようだ。しかも、そのほとんどがトカゲ人間としか言いようがないテスターの集団だった。

外装オプションで種族を選んだ面々らしい。

この場では一番大きな集団であり、今は、互いの軀を見せ合っては、「うひょー！」とか「きたー！」とか叫んでいる。

正直、波長が合いそうにない。

「ちよつと……近づきづらいですね」

見ると彼女は例の集団を見ながら苦笑していた。

「確かに」

俺はそう応えた。

「あの……」と彼女。「闘技場コロセウムって、どこにあるかわかりますか？」俺はちよつとだけ目を見開いた。

今日はこれというイベントが無い。NPCもセットされておらず、都市の外に出ることもできない。おまけに連続ログイン時間リミットタイムはたったの1時間。ログインを試す以上のことはできない日と断言している。

だが、頭を捻れば、やるべき事も簡単に見つかる。

例えば——戦闘訓練トレーニング。

『PHANTASIA ONLINE』には多種多様な魔杖ワンドが用意されている。スタッフ・インタビューによると、それぞれの扱いに慣れるだけでも、最初はかなり手こずるという話だ。そこで『PHANTASIA ONLINE』では、戦闘訓練が可能コロセウムな場所として闘技場と呼ばれる場所が用意されている。

ただ。

「……戦闘の？」

思わず俺は、そう尋ね返していた。

一般的に、女性テスターは『PHANTASIA ONLINE』のゲーム以外のところ――NEUROが最初に告知したメタバース系コンテンツとしての魅力――に楽しみを抱いていると言われている。というか、このゲームの戦闘は、斬った撃ったの野蛮なものだ。そんなものに興味を持つ女性が、それもこんな可愛い子が……

いや、ここは仮想現実だ。

俺のように実像に限りなく近い外装でログインする馬鹿、そういうるはずもない。

「……………」

彼女は無言のまま、困ったように微笑みながら頷いてきた。

実像（中身）は違うかもしれないとわかっていても、男なら誰でも落ち着かなくさせるような、品のある微笑みだ。もっとも俺の場合、それが逆に気持ちを萎えさせたのだが。

「転移で……」

一応、俺はそう答えながら、自分の左肩を軽く2度、叩いてみた。この動作を『ダブルタップ』と言う。叩く肩は、左右どちらでもかまわない。重要なのは“自分で自分の肩を2度叩く”というところだ。仮想世界では、こうすることでシステムウィンドウを展開できる……らしい。

「おっ」と俺。

「あっ」と彼女。

ちょうど俺の胸の前に、斜めに傾いた藍色の板のような出現した。システムウィンドウが展開したのだ。

パッと見たところ、平面ディスプレイが何の支えも無しに浮かんでいるように見える。どうやら出現座標は胸を基準にしているらしく、身体を左右に揺すってみると、呼応するようにウィンドウも左右に揺れた。

なんとなく、美術の時間に使う画板に近い気もする。

「へえ……………」

俺は感心しながら、ウィンドウの上段に並ぶアイコンのひとつに触れてみた。

感触は液晶ディスプレイそのもの、操作感覚はタッチパネルそのままといった感じだ。

選んだアイコンは、都市内を移動する時に用いる“転移”を示したドアのアイコンだ。すると画面は切り替わり、転移可能なポイントを示しているらしい都市の略図が表示された。その中には、古代ローマの闘技場そのままのイラストもあった。転移ポイントであることを示す赤い光も点滅していた。

「お先」

俺はそう言い残し、コロセウム闘技場と思われるイラストにタッチ。“コロセ闘技場ウムに転移しますか？”という問いかけに“YES”と答えた。

#01-02

```

| | Login Account .. 436-332-2000
4-9719
| | FAL Check .. . . . OK
| | Bit al Check .. . . . OK
| | Login Check .. . . . OK
| | Login Time .. 29, March 20X0
22..00..08
| | Limit Time .. 29, March 20X0
23..00..08
| | Contents Code .. PHANTASIA O
NLINE ver C1.0102
| | Abator Name .. SHIN
| | Login Place .. BLUEPOLIS / C
OLOSSUM / LOGIN BOX 01
| | Login Sequence .. . . . .
. . . . . complete

```

ぼんやり待つこと十数分——俺は久賀慎一からSHIN^{シン}に変わっ
ていた。

「……………」

Tシャツの裾は外に出し、両手で金髪を軽くかき上げてみる。
本来は午前9時から可能になるはずのログインが、今日は調整の
関係で、午後10時にまでずれ込んでいた。そんなわけで、俺は初
めてタイマーログイン機能というものを使ってみたわけだが。
普通のログインと大した違いがない。

なんだかなあ、という感じがする。

「……よしっ」

俺はログインボックスを出た。

目の前には、断崖絶壁を背にした古代ローマの闘技場がそびえ建っていた。

蒼都の闘技場だ。コロセウム

周囲が針葉樹林で囲まれているため、どことなく、森の奥にある古代遺跡っぽい感じがあった。正門は南側にあり、その手前に広がる煉瓦敷きのスペース、南端にズラリとログインボックスが並んでいるところが、俺のいる正門広場になっていた。

ちなみに、向かって左側には煉瓦敷きの歩道が西にある針葉樹林へと伸びている。これを進み、針葉樹林を越え、小川にかかる石橋を越えれば市街地に入る――のだが、今現在、蒼都の東区は整備中のため入ることができない。

しかも初日に、どこかの浮かれたテスターたちが“大声で性器の名前を叫んでは転移して逃げる”という迷惑行為をやらかしたとかで、以後、都市内の転移機能が封印されることになっている。つまりまあ、俺は事実上、闘技場に隔離されているわけだ。

もつとも、隔離されたのは俺だけじゃなかった。

――シュツ

背後から、ドアの開く音が聞こえてきた。

振り返ると、ログインボックスのひとつから、初日に出会った女性テスターが出てきた。

彼女もまた、俺と一緒に隔離されたテスターだ。

名前はわからない。

だいたい、顔を見合わせたら会釈する程度の関係でしかない。今日もそうだ。

長い金髪をなびかせながらでてきた彼女は、俺に気づくと、どこかで見たことのあるような笑みを浮かべながら、上品に会釈をしてきた。

俺は顎を突き出すような会釈を返し、ガリガリと頭をかきながら、

コロセウム
闘技場へと入っていった。

向かう場所は、サッカーがやれそうなほど広い芝生のグラウンドだ。芝生を踏んだ俺は、ダブルタップでウィンドウを開いた。

上段に闘技場を模したアイコンが出現している。

タッチ。

切り替わった画面には“TRAINING”というボタンだけが出現した。

タッチ。

これですぐ戦闘訓練用のウィンドウが展開する。

『PHANTASIA ONLINE』の戦闘はFPS（一人称視点）のシューティングゲームとほとんど同じだ。それこそ、魔杖を銃だと思えば話が早い。

初期の魔杖は拳銃型の《スペルガン》。形状はガバメントと呼ばれる拳銃に良く似ているそうだが、軽さといい、反動の薄さといい、本物に比べると玩具としかいいようがないものらしい。

感覚的にはエアガンと似ているそうだ。俺は詳しくないので、よくわからないが。

「さて……」

俺は少し悩んでから、ガンタイプⅡパターンAの訓練を選択した。ウィンドウが消え、真正面に一枚のカードが出現した。

『PHANTASIA ONLINE』では様々なものがカードという形で表現されている。基本的に、装備品や消費財を表す『アイテムカード』、セットすることで追加能力を付与する『アビリティカード』、家屋の権利書などを意味する『エクストラカード』の3種類に分けられている。もちろん、今出現したカードは《スペルガン》が描かれたアイテムカードだ。

これを右の中指と人差し指とで挟みとった俺は、

「コール、オープンカード」

とつぶやいた。

カードがシュッと光の粒子に変わったかと思うと、右手が熱くな

った。

掌に丸いボールが押し当てられている感触がある。

俺はそれを握りしめた。

ボールはググッと独りでに大きくなり、急にニユルニユルとした手触りに変化。再び固さを取り戻すと、真っ白な拳銃の形になった。直後、カシャンという小さなSEが響き、拳銃を覆っていた白い殻は光の粒子と化して消えてしまった。

《スペルガン》が右手の中にあった。

時間にして約3秒。戦闘中だと仮定すると、少し微妙な時間だ。使い方は初日のヘルプで確認済み。慣れない手つきで弾倉を外し、ちゃんと20発入っていることを確認する。まあ、本当は確認する必要も無いのだが。

――ポーン

トレーニング開始のSEが耳元で鳴り響いた。

前を見ると、10メートル離れたところに巨大な丸い^{まじ}的が出現していた。

半身になりながら、《スペルガン》を右手だけで構えてみる。

銃口から赤い光の線がまっすぐ伸びていた。

^{ガイドライン}
射撃補助線だ。

驚くほど視認しやすいのは、システムの補正があるためらしい。たとえ真っ赤な場所で銃を構えても、射撃補助線はしっかりと見えるそうだ。

自分にも、敵にも。

(それが問題だよな)

射撃補助線は消すことができない。つまりPVP(プレイヤー対戦)では邪魔になるはずだ。おそらく、構えてから撃つまでを一瞬で終わられるかどうかが、強い銃使いの条件のような気がする。

(まっ、今はそれ以前の問題か)

俺はそのまま20発、的に向かって撃ってみた。

パスッ、パスッというエアガンそのものな音が響いた。そのくせ、

銃口からはX字の青白いフラッシュノズルが瞬く。どうにもチグハグな感じがする。

全弾撃ち終わると、左斜め上に小さなウィンドウが出現した。

―― point 1874 / RANK A

満点は2000点。ランクは1000点以下でE、以後は200点ごとにD、C、B、A。つまり、1800点以上だった今回はランクAだ。ネットの情報によると、1900点を超えるとSになり、ウィンドウのメニューの横に星印が付くらしい。それが何を意味しているのかは、今のところ不明なのだが。

「えっ!？」

不意に例の女性テストターの声が聞こえた。

俺が練習していた場所は、グランドの出入り口のすぐ右手だ。女性テストターは反対のすぐ左手で、同様に《スペルガン》の練習をしていた。もっとも、練習中の的は本人にしか見えないので、どのメニューを選んだのかは俺にもわからない。

ウィンドウもそうだ。

他人のウィンドウは、透明な硝子板にしか見えず、表示内容を確認することができない。また、《青》ではウィンドウのデフォルトカラーが深い藍色だ。そのため俺からは、彼女のウィンドウが薄い空色の硝子板にしか見えなかった。

それはともかく。

「――やったあああ!」

彼女は弾けるように跳び上がった。

「やった! やったやった! ほらほら、ランクS! ランクえ――」

俺のほうに顔を向けたところで、彼女はハッとなり我に返った。
無言の俺。

固まる彼女。

俺は彼女から顔を背け、

「コール、リトライ」

とつぶやいた。

ヴォイスコマンドに応じて、再びガンタイプⅡパターンAのメニューが起動する。

今度はグリップの下に左手を添えながら20発、連続して撃ち込んだ。

ファンファアレに似たSEが響く。

―― point 1949 / RANK S
よしっ。

視線を横に向けると、彼女は展開したウィンドウを操作しながら、チラチラと俺を盗み見ていた。

俺はすぐにガンタイプⅡパターンBのメニューを選んだ。今度は先ほどと同じ10メートルほど離れたところに、3×3に分かれた木枠が現れた。木枠の手前では、赤い文字で5秒からカウントダウンが始まっている。

今度は、枠の中に現れる標的を次々と撃っていくメニューだ。

俺は素早く弾倉が20発に戻ったことを確認した。

弾倉を戻すと同時に、右足を踏み出し、右手だけで構える。

カウントがゼロになった。

撃つ。

ひたすら、現れた^{まじ}標的を撃ち続ける。

ファンファアレが鳴った。

すぐさまガンタイプⅡパターンCを選ぶ。

的は^{まじ}変わらないが、今度は目の前に新しいカードが1枚現れた。

カートリッジカードだ。

手にとると、カウントダウンが始まった。

「コール、オープンカード」

左手の中に弾倉を具現化させる。

カウントダウンがゼロになった。

撃つ。今度もひたすら撃つ。と同時に、撃った弾数を数え続ける。

(――20！)

俺は即座に弾倉を外した。

空のカートリッジが芝生に落ちるより前に、新しいカートリッジを装填する。

ガチャッと初弾を装填。直後、俺は両手で構えながら残りの標的を撃ち続けた。

ファンファールが鳴った。

パーフェクトだった。

「よしっ」

思わず左手で小さくガッツポーズをする。

チラッと隣を見ると、新しいメニューを終わったばかりらしい彼女が、微妙に肩を落としてつつ、チラッと俺のほうに目を向けてきた。

俺はニヤッと笑いながら小さくつぶやいた。

「3つ」

途端、彼女はムツとした表情になった。

（勝った）

だがこれで満足する俺ではない。

すぐにパターンDに挑戦——が、今度は次々と起きあがりつつ接近してくる人型標的を撃つというメニューで、しかも点数計算がシビアだった。2度、3度と挑戦しても、ランクSどころかランクBにしかない。

「——3つ目え！」

彼女が叫んだ。見ると彼女は、ニヤッと笑っていた。

（追いつかれた!?!）

しばらくして、俺はパターンDを攻略した。

「よし……」

「よしっ！」

彼女の声だ。ほぼ同時に攻略したらしい。

俺たちは一瞬だけにらみ合い——ほぼ同時に、パターンEを選択した。

――リミットタイムまで残り30秒

耳元でシステムメッセージが響いた。それでも俺は引き金を絞り続けた。彼女もそうだ。やめる気配をみせない。5分前、3分前、1分前の警告メッセージが響いた時もそうだった。まるで、先にやめたほうが負けになるような状況だった。

「ふう」

向こうが銃を降ろした。パターンFが終わったらしい。

残念がついているところを見るとランクSには届かなかったようだ。とはいえ、俺のほうもパターンFではランクBまでしか出せていない。今回のチャレンジも今ひとつだ。

「ランクは？」

彼女が尋ねてきた。チラッと視線を向けると、俺のことを睨んでいた。

無視して銃を撃ち続ける。

終わった。

―― P o i n t 1 7 6 9 ／ R a n k B

くそっ、まただ。

俺は銃を降ろし、ふう、と溜め息をついた。

――リミットタイムまで残り20秒

「ランクは？」

再び彼女が尋ねてきた。

「Bだよ。そっちは」

「……Cよ」

少し悔しげに言い返してきた。これには少しだけ驚かされた。

たとえ低くても、強がって俺と同じか、上のランクを言ってくる
と思ったが……

「22時」

見ると彼女は、俺の方に身を向けながら鋭く睨んでいた。

「わたし、明日も22時にログインするわ」

——リミットタイムまで残り10秒……8、7、6

俺は、彼女に向き直った。

「……22時だな」

「そうよ」と彼女。

「逃げるなよ」

「どっちが」

——リミットタイムです。強制ログアウト処理に入ります。

こうして5月29日（テスト5日目）のテストは、デッド扱いの
強制ログアウトで幕を降ろした。

#01-03

6月2日（テスト9日目）——まだ蒼都東区の立ち入り制限は解除されていない。転移機能は7日目の時点で完全削除されることが決まった。つまり俺たちは当分の間、コロセウム闘技場に隔離され続けることになったわけだ。

「遅い」

「悪い」

今日からリミットタイムが3時間になる。市街地ではNPCショップが開店し、家屋の売買も可能になった。

クリスタルを入手する手段はカジノぐらいしかないが、市街地では5月30日（テスト6日目）のカジノ祭りに続き、シヨップ祭りで賑わっているようだ。

少なくとも、帰宅後に見たネットの情報ではそうになっていた。

「弁明は？」

並んで歩きながら、彼女が尋ねてきた。

「別に」

風呂上がりには晩酌中の親父につかまった——だなんて、言ったところで意味が無い。

そもそも、俺たちは友達でも何でもない。

今だって並んで歩いているとはいえ、1メートル近く距離が離れている。

互いの顔を見たのも、俺がボックスを出た直後だけ。

会話も互いに正面をみながらやっている。

名前だって知らない。どちらも名乗っていないし、名前を聞こうとしてもしていないからだ。俺のほうは、なんとなく聞いたら負けな気がして言わないし、聞かないでおこうと決めているだけだが。

「やるわよ」

「ああ」

グラウンドの中央に向かった俺たちは、背中合わせになった。

左肩をダブルタップ。

ウィンドウを開き、ガンタイプ最後のパターン、Hを選択する。眼前に《スペルガン》カードが出現。これを手にとり、具現化させると、今度は展開したままになっているウィンドウに、拳銃型魔杖用カートリッジカードが10枚、ウィンドウに収納されたと表示された。

ガンタイプⅡパターンHは、実戦形式のタイムトライアルだ。敵はブラックウーンズ。言ってしまうえば黒いスライムだ。

形状は“大人に黒いビニールシートを被せた”ものに近い。表皮はゼラチン状。一メートルぐらいまで近づくと、軀の一部が隆起する形で殴りかかってくる。これがけっこう痛い。少なくとも、軽く生身を叩かれた時と同じ痛みがある。“痛みを消すと暴力性に対するストッパーが無くなる”とかいう意見が採用された結果らしいが、正直、ゲームなんだから勘弁して欲しいというのが俺の意見だ。

パターンHでは、これが次から次と四方八方でウニウニと生まれ、ヌメヌメと近づき、かと思うとピョンと左右にジャンプする。そんなブラックウーンズを、限られた弾数で、可能な限り多く倒すのがガンタイプⅡパターンHだ。

制限時間は3分。ぶっちゃけ、弾を使い切るだけでもひと苦労だ。だが、100匹倒さなければランクSにならない。ブラックウーンズは2発から6発で倒れるので、理論的には不可能でもないのだが……

「どうしたもんかなあ」

カウントダウンが始まったものの、俺は溜め息混じりでそうばやいていた。

「撃ちまくるしかないんじゃない？」

ばやきを聞いた彼女が背後から言い返してきた。

「それ、やった」

「奇遇ね。わたしもよ」

カウントダウンがゼロになる。

「「GO」」

俺と彼女はほぼ同時に同じ台詞を口にしつつ、前方に向かって走り出した。

昨日の挑戦でわかったことは“近づいて撃ったほうが当たりやすい”という、あまりにも当たり前すぎる真理だった。だが、それを実行するには度胸がいる。いくらトレーニングなのでHPが削られることも、死ぬこともないとわかっていても……相手はヌメヌメと動く不定形生物だ。おまけに殴られるとそこそこ痛い。

それでも、今のところこれ以外の攻略法法が見つからない。

だからこそ――

「痛てっ！」

「きゃっ！」

「ぐぁ！」

「いたっ！」

俺と彼女は殴られ続けた。



挑戦開始から約1時間後――

「またかよ……」

息を切らせた俺は、大の字になって寝そべりながらスコアウィンドウを一瞥した。

―― P o i n t 74 / R a n k C

ランクSは遠そうだ。

「何体いった？」

時間切れした場所がたまたま近かったのだろう、へとへとになった彼女がこっちに近づいてくる。かと思うと、両膝をつき、俺と同じようにゴロンと大の字に寝そべった。

「74。そっちは？」

「勝った。77」

「ベストは79」

「わたしだって」

つまり二人とも、80の壁を越えられずにいるらしい。

スコアウィンドウが消えた。

視界に映るのは、抜けるような夏の青空だけになった。

涼しい微風が吹き抜ける。

真夏の太陽がちりちりと肌を焼いた。その感覚も、どこことなく心地よかった。

「ねえ」と彼女。

「んっ？」と俺。

「名前は？」

「……そっちは？」

「そっちから言いなさいよ」

「レディファースト」

「可愛くないわね」

「可愛いなんて思われたくないね」

「リンよ」彼女が起きあがった。「L、I、NでL^{リン}IN。そっちは？」

「シン」

俺も上体を起こした。

「S、H、I、NでS^{シン}HIN」

互いに見つめ合う。なんだか、初めて彼女の顔を真正面から見た気がする。

と、不意に彼女が笑った。

「なんだよ」

「ううん。そういえば今日まで名乗り合ってもいなかったんだなあって」

「そりゃあ、別に友達でも何でもねーし」

俺は再び寝そべり、両腕を枕にしながら目を閉じた。

「友達か……」

彼女がボンヤリとつぶやく。

「……うん、確かに友達じゃないね、わたしたち。強いて言えば……ライバル？」

「ふーん」

「なによ」

「別に」

「あんたね……通信簿で“協調性がありません”って書かれたくちでしょ」

「まあ」

「やっぱりねえ。暗すぎよ、あんた。もう、ドドメ色って感じ」

「悪かったな」

「悪いと思ってるの？」

「全然」

「喧嘩売ってる？」

「わりと」

なんて答えたものの、実はそうでもない。それ以前に、俺がこんなに気楽に異性と話し合っていること事態、なにか間違っている気がした。

いや、もしかするとリンはネカマなのかもしれない。外装は実像をベースにしているが、調整を加えれば乳房を盛り上がらせることも、逆にへっこませることもできる。男女の違いは、性器か初期装備にスポーツブラが付いているかどうかでしか区別がつかないのだ。

「ひとつ聞いていい？」と彼女。

「ダメ」と俺。

「あんたの外装、どれくらいいいじってんの？」

「さあ」

「ほら、実像に近いほうが動きやすいって話もあるじゃない。あれって本当だと思う？」

「さあ」

「わたしがネカマだって言ったらどうする？」

「別に」

「本物の女だったら？」

「別に」

「張り合いないわね……」

彼女の溜め息が聞こえた。

俺も両目を閉じたまま、溜め息をついた。

「ったく……」

「なによ」

「いいから、俺のことは放っておいてくれ。頼むから。人付き合いつつとか、言葉の駆け引きとか、そういうの面倒でイヤなんだ。俺はリアルなゲームがやりたいからここに来て。それ以外のことに興味無い。OK？」

「わたしもそうよ」

えっ？——と思って目をあけると、俺の右側で横座りになっている彼女が、黄金色の長い髪をかき上げているところだった。

一瞬、ドキッとした。

見惚れるところまでいかなかったのは、ここが作り物の世界だって認識が、頭の片隅にあったからこそだと思う。

「ちょっと街に出たら盛った男が群がってくるし、学校に行ったら学校に行ったで派閥争いとかなんだとかあるし……もうイヤ！ ああ、ストレスたまりまくりよ、もう！」

彼女はバサッと寝そべった。

俺は空を見上げた。

「愚痴かよ」

「愚痴よ。悪かったわね」

「別に」

俺は目を閉じ、ふう、と息を吐いた。

「あんたは？」と彼女。

「んっ？」と俺。

「だから……わたしはストレス解消のためのゲームだけど、あんたは？　なんで？」

「なんでって……」

少しだけ考えてみる。

「まあ……退屈だから、だな」

「暇つぶし？」

「いや、なんて言うか……退屈なんだよ、いろいろと」

それは嘘だ。勉強にしろ、運動にしろ、人付き合いにしろ、なんにしろ——本気になってやるべきことが、俺にはたくさん控えている。だが、どれにも本気になれない。面倒だという思いが先に来ってしまう。

しかし、ゲームだけは、苦労を苦労と思わずに済んでいる。

だから、俺はゲームをやる。

つまり——逃げているだけだ。いろいろなことから。

「ふーん……退屈なんだ………」

彼女が考え込むようにつぶやいた。

俺は応えなかった。

彼女もそのまま黙り込んだ。

風が吹き抜ける。

心地よい。

沈黙さえも、心地よく思える。

不思議な感覚だ。

人嫌いの俺が、あろうことか同世代っぽい女の子と一緒にいても平気である。気まずさはもちろんのこと、息苦しさも感じていない。そのうえ、どういうわけか彼女の質問にも真面目に答えてしまった。俺を知る人間なら「ありえない！」と叫んでるところだろう。

「……よしっ」

俺は両足をあげてから、ヒョイツと上体を起こした。

「そろそろやるか」

「OK」

彼女も立ち上がり、パンパンと躰についた埃を払った。

「念のために聞くけど、攻略方法、なにか見つけた？」

「カートリッジカードの呼び出しと具現。音声操作じゃなく、思考操作でやれば隙が大きく減る」

「うわっ……それってムズすぎない？」

「だろうな」

「あちゃあ……でも、確かにそれぐらいしかないもんね……あとは、バラまくようにするぐらい？」

「バラまく？」

「牽制よ、牽制。索敵とリロードの前に適当に撃ちまくるの」

「弾の減り、速いだろ」

「そりゃあね。でも、思考操作ができれば、問題無いんじゃない？」

「……だな」

こうして俺たちは、再びパターンHにチャレンジした。

結論を言えば、俺たちの選んだ方法は悪くなかったと思う。問題は思考操作が本当に難しいところ。黙唱するだけでもダメ。カードの呼び出し時には呼び出すカードそのものをイメージし、具現化する際には弾倉をイメージしないと反応してくれなかった。

それでも2時間もやれば、それなりにコツも掴めてくる。

先にパターンHをランクSでクリアしたのは彼女のほうだった。

「ほらあ、頑張れえ、若人お」

彼女の無気力な声援を受けながら、遅れること3挑戦後、俺もどうにかSをとった。

「じゃ、明日からグラップルタイプってことで」

「了解」

並んでログインボックスまで戻った俺たちは、リミットタイムの

10分前に、それぞれログアウトした。並んで歩く時の距離が近づいていたと気づいたのは、ログインボックスに入ってからのことだった。

6月3日（テスト10日目）——俺たちはグラップルタイプⅡパターンAで苦戦していた。

「うわっ！」

彼女が転ぶ。だが必死な俺には、笑い飛ばす余裕もなかった。

「きつつ……」

俺はバランスをとるので精一杯だ。

グラップルタイプの魔杖は、鉄板を貼り付けたグローブの形をしている。名前は《アイアンナックル》だ。もはや魔杖とは言えない、通常攻撃であれば弾を消費することがないという便利な武器だが、その扱いは、難しいどころの話ではない。

いや、技を出すだけなら簡単だ。

例えば「コール、ワンド、アイアンナックル」と言えば、自分の視界内に照準が現れる。丸に十字が走った照準は視線に連動していて、攻撃可能な対象に重なると、その対象の輪郭と照準が太い赤へと変わる。その瞬間に技名——「ジャブ」とか「ストレート」とか「ハイキック」とか——を唱えれば、体が勝手に動き、敵を殴るなり、蹴ったりしてくれる。もちろん、敵との間合いが攻撃に即した適したものであるならば、の話だが。

ところで。

格闘技で大切なものはなんだろうか？ 技だろうか？ いや、違う。

答えは“姿勢”だ。

ジャブを放つには、両脇をしっかりと締めている必要がある。

ハイキックの秘訣は軸足と上体の捻りにある。

ゆえにグラップルタイプを使いこなすには、正しい姿勢を覚えておく必要がある。

というわけで、グラップルタイプⅡパターンAの課題は“姿勢の

矯正”そのものだった。やることは、ウィンドウに表示される矢印の方向に移動するだけ、というダンスゲームですらないものだったが、ド素人のゲーマーにすぎない俺やリンには難しいどころの話ではなかった。

それ以前に、選べるスタイルがキックボクシングのみというのは、どうだろう？

他の格闘技は無視か？

それとも、βテストゆえの暫定的な処置か？

理解に苦しむところだ。

とにかくにも。

「前……前……右……後ろ……右……左……前……後ろ……」

再挑戦したリンは、ぶつくさと言いながらステップを踏んでいた。なるほど、その手で行くのか。

「後ろ……左……左……前……右……前……後ろ……」

俺も真似をした。

移動に音声操作は適用されないもの、思考操作を明瞭化させる働きがあるのも事実。

「よしっ！」

さらに2度の挑戦で、俺が先にランクSをとった。

「ほれえ、頑張れえ、若人お」

「むかつくううう！」

俺の無気力な応援を受けたリンは、さらに4度の挑戦の後、ランクSをとった。

6月5日（テスト12日目）——俺たちはグラップルタイプⅡパターンHをクリアした。

「ABCに比べれば楽よねえ」

とはリンの素朴な感想だ。

俺も同感だ。姿勢の矯正が強いられたパターンA、B、Cの3つは、洒落にならないほど辛いものだった。しかし、それなりに思考操作ができる俺たちだからこそ、そう思っただけのような気もする。なにしろ今回のパターンHも実戦形式であり、ガンタイプⅡパターンHで培った思考操作のコツがなければ、かなり苦戦したのは明白なのだ。

「次はソードか……」と俺。

「また矯正だったりして」とリン。

「勘弁しろよお」

矯正は無かったが、俺とリンは、姿勢を気にしながら戦うようになっていた。



6月6日（テスト13日目）——珍しくリンが遅刻したので、先にグラランドに行き、グラップルタイプのパターンAからCの復習をしていた。ランクSを度外視すれば楽にクリアできるものの、やはり歩法や重心の置き方なんかで勉強になった。

「ごめん、帰るの遅くなっちゃって」

「いや」

自分にしか見えない目の前の敵の攻撃を避け続ける。

「グラップル？」

「C。復習を兼ねて」

「ふーん……わたしもちよつとやっていい？」

「今、何時だった？」

「10時半のちよつと前」

「だったら23時に挑戦開始」

「了解」

俺たちはグラップルタイプの復習をしてから、ソードタイプの攻略にかかった。

意外なくらい、楽にパターンHをクリアした。

これで全パターン、ランクSクリアした魔杖は3種になった。

「あとは槍と杖ね」

「杖ってなんだ？」

「先に試してみる？」

「いや、順番でいい。スピア、少し進めとく」

「了解」

スピアタイプはソードタイプとほとんど一緒だった。おかげで苦もなく進んだ。

「楽勝？」とリン。

「楽勝、楽勝」と俺。



6月7日（テスト14日目）——再びリンが遅刻したが、理由は聞かなかった。

「本当にごめん。今度、埋め合わせするから」

「期待しないで覚えとく。じゃ、さっさと槍、クリアすつか」

「了解」

案の定、スピアタイプは軽々と全クリアできた。
問題はそのあとのスタッフタイプだ。

「思考操作？」

「っぽい」

スタッフタイプは“銃口と引き金の無いガンタイプ”というべき
魔杖だった。

操作方法は少し複雑だ。

グラップルタイプ、ソードタイプ、スピアタイプと同様、まず魔杖を起動するところから操作を開始する。起動すると、視界に照準が生まれる。基本的には魔法ごとに定められているコール・コマンドを発すると、魔法に応じた照準が生まれる。これを「セット」で固定し、それぞれの魔法ごとに定められているスタート・コマンドで魔法を起動する。音声操作で扱えばそれなりに楽だが、リンクSを狙うとなると、思考操作をメインにしなければならぬ。

なお、スタッフタイプにもカートリッジカードがある。ガンタイプとの違いは、カードを直接、魔杖に差し込むところだ。このあたりはガンタイプより優れているが、取り扱いの難しさは全タイプ中最大級だ。

「ライトアロー、セット、シューティグ」

しばらく音声操作で挑戦してみる。

パターンCまではどうにかなった。だが、パターンDからはつらくなった。

「シールドの使いどころだな……」

「光った瞬間じゃないの？」

「いや、それだと遅いだろ。こう……光りそうな瞬間？」

「種を割れ、と」

「……………?」

「えっ? 知らない? ガンダム古いやつ。『ガンダムSEED』」

「

「ぜんぜん」

「TVとか、あんまり見ないほう？」

「まあ……見ないな」

「っぼいよねえ」

「悪かったな」

「はいはい、ひがむ前に攻略法よ、攻略法」

「だから、光りそうな瞬間だろ。こう……動きが止まるっていうかさ」

それでもうまくいかなかった。

クリアするだけなら簡単だが、ランクSへの道のりはまだまだ遠そうに思えた。



6月8日（テスト15日目）——ついに蒼都東区の構築が完了した。今日まで引っ張った理由は、そこに“舟で移動する水路だらけの都市”を作っていたためだ。スタッフ日記によると、ゴンドラと呼ばれる小舟をどう扱うで議論が紛糾したらしい。だが、さすがに半月が過ぎても閉鎖しているのは問題があるため、とりあえずは路線バスのように“定められた水路を予定通りに進んでいくNPCのゴンドラ”を配置することが決まった。これに伴い、閉鎖も解除されたそうだ。

「それにしたって……」

「ねえ……」

22時にタイマーログインした俺たちは、グランドの思わぬ光景に苦笑いを浮かべるしかなかった。

クローズドβテストターの総数は約六千名だ。このうち《青》の陣営に所属しているテストターは一割に満たない500と少しらしい。最大陣営は3000名を越える《緑》の陣営。次点が2500前後の《赤》の陣営。そのことは初日の段階から公開されていたが……だが。

「全員いるんじゃない？」とリン。

「半分だろ」と俺。

サッカー場と同程度の広さを持つ闘技場のグラウンドは、呆れるほど多くのテストターで埋め尽くされていたのだ。しかも、それぞれが思い思いに初めてのトレーニングに挑戦しているのだから、雑然とした感じが一層強まっていた。

見たところ、8割方がガンタイプに挑戦しているようだ。

残る2割はソードタイプとスピアタイプ。

スタッフタイプも数名いたが、音声操作で挑んでいた。

グラップルタイプは皆無。まあ、あれはネットでも“使えない魔杖タイプ”と言われているものだ。俺たちのような物好きでもないかぎり、パターンAの段階で挫折しているはずだ。

「それにしたって……」

リンは、最初にぼやいた俺の言葉を真似ながら呆れかえった。

気持ちにはわかる。

人数やレベルの低さもそうだが、それ以上に呆れたのは、皆の外装についてだ。

過半数が、初日にも目撃したトカゲ人間だった。よく見れば、肌の色が濃緑色から黄緑色、藍色や紺色、真っ黒や真っ白など、いろいろなバリエーションがある。頭部の形もいろいろのようだ。鼻が無く、のっぺりと丸まっているように見える者もいれば、東洋の龍のように鼻と口が前に突き出している者もいる。耳が無い者、ヒレのようになっている者、長い尻尾を持つ者、尻尾が無い者……同じトカゲ人間でも、細部は千差万別なのだ。

さらに、全員が初期装備以外の服装を身につけている。

統一性の欠片も無い。

ある者は兜の無い西洋風の全身甲冑を身につけている。

ある者はタキシードっぽい衣装を身につけている。

俺たちのような人間の外装を使っているテスターは、そのほとんどが女性であり、メイド服やら、巫女装束やら、学生服やらを身につけている。

そんな集団が、真夏の青空の下、清々しい芝生の上で、銃や剣や槍を構えながら

「当たれえ！」

「うわあ！」

「ちえすとお！」

と叫んでいる光景。はっきり言って、シニールだ。

「……ねえ、シン」

「んっ？」

「次のログイン、人の少ない時間にしない？」

なるほど。確かにその手があった。

「ナイスだ。で、何時頃が少ない？」

「アイドンノー」

彼女は大げさに肩をすくめて見せた。

「ドゥユー？」

「トゥミー」

そもそも他人のログイン時間なんて、これまで一度も気にかけたことがないのだ。

人数情報のように、公式サイトに載っているなら話は別だが、気にしない情報を調べるはずもない。

「とりあえず……あれだな」

「あれって？」

「だから、これ」

俺は自分のTシャツを軽く摘んだ。それだけでリンは意図を理解してくれた。

「買い物？」

「この調子だと、逆に街のほう、無人だと思わないか？」

「なるほど。さすがシン。陰険なだけあって冴えてるじゃない」

「陰険言うな」

俺たちはグラウンドに背を向け、並んで闘技場^{コロセウム}を後にした。

針葉樹林の中を蛇行する歩道を進み、小川を抜けると、水路に突き出た小さな埠頭のような場所に出た。行き止まりか？——と思うまでもなく、ゆっくりと小振りな舟が一隻、埠頭に近づき、停泊した。

「へえ……」

リンが感心したとばかりに声をあげた。

この舟が例のゴンドラなんだろう。確かにTVで見たイタリアのゴンドラに良く似ている。だが、俺たちが感心したのは、舟尾に立つNPCのほうだ。考えてみると、これが俺とリンが会おう初めてのNPCといえる。

NPCは子供の木製マネキン人形だった。

顔には鼻しかなく、球体関節が剥き出しになっている。そんなマネキン人形が、いっぱしにズボンとシャツを着込み、麦わら帽子を頭に被って、自律的に動いている。それでいて不気味な印象が薄い。人形劇の世界に迷い込んだような微笑ましい感じさえある。

「このふねは“ちゅうおうがいくていりゅうじょ”までいきます。りょうきんはむりょうです。おのりになりますか？」

頭部から響き出る声も、幼い男の子が台詞を棒読みしているような感じだ。

「時間はどれくらいかかるの？」

「ごふんです。とちゅうのていりゅうじょにはとまりません」
どうやら直行便らしい。

「このまま乗ればいいの？」

「はい」

「だってさ」

リンが笑顔で振り返る。俺は苦笑と共に軽くうなずいた。

「お先っ」

間髪入れず、リンはゴンドラにピヨンと乗り込んだ。

「おちついて、ゆっくり、ごじょうせんください。ふねがゆれます。きけんです」

「ゴメン、ゴメン——ほら、シン。速く、速く」

「はいはい」

俺は舟が揺れないよう注意しながら乗り込んだ。

ゴンドラには2席ずつの椅子が5列並んでいた。リンは同乗者が誰もいないことをいいことに、椅子をまたぎ、船首の席に腰を下ろしている。俺が苦笑しつつ、適当なところに腰を下ろした。

「しゅっぱつまで、しようしようおまちください」

舟が出たのは、それから1分後のこと。

その間も、出発してからも、俺たちはどんな服を着るかということばかり話していた。

「絶対似合うって。シンって肩幅もけっこうあるじゃない」

「似合うかどうかより、動きやすさだろ」

「でもさあ、威圧感っていうのも重要なんじゃない？ PVPの時とか」

リンはしきりに黒スーツとサングラスを俺に薦めてきていた。

理由はわかる。

俺は凶相持ちだ。それに痩せだが、身長と肩幅は人並みにある。

これで黒スーツなんか着込んだ日には、誰がどう見ても、その筋の……

いや、そうはいつでも俺は16のガキだ。うまくいってもチンピラが関の山だろう。だとしたら、アロハシャツでも構わない気がする。実際に売っていきそうなので、あえて言わずにおくが。

「俺よりそっちだろ」

「わたし？」

「PVPも考慮に入れるとすれば、いろいろと考えられるだろ？」

「例えば？」

「全裸」

「却下」

「じゃあ、ビキニアーマー」

「大却下」

「お望みとあれば、PVPを前提にしたマニアックな提案、もってやるぞ」

「……はいはい、そういうことね」

リンは溜め息をついた。

「わかったわよ。戦いやすさが第一、見た目は二の次。それでいいんでしょ？」

と言いつ合っているうちに、ゆらりゆらりと進み出していたゴンドラは、中央通りに面した停留所に着いた。

舟を降り、さらに道を西へと進む。

白石の四角い家屋に挟まれた道を進むこと数分——俺たちは閑散とした目抜き通りに出た。右を見ると上り坂の彼方にギリシア風の神殿が、左を見ると海への伸びる石橋と、その先にある大きな円形広場が見えた。

「なんか、妙な感じ」とリン。

「……だな」

半月前、俺たちはあの広場で偶然出会った。あそこから見た街並みと神殿に感動して、すぐ闘技場コロセウムに移動し、ずっと二人っきりでトレーニングの完全制覇に挑み続けた。最初は1日1時間、しばらくして3時間ずつしか仮想現実世界で過ごしていないが……なぜか数年ぶりに“戻ってきた”という感じがある。本当に妙な感じだ。

「さてさて」

リンはパンツと両手を打ち鳴らしてから周囲を見回した。

「服屋さんは……あれ？」

リンが指さしたのは、店先に古代ローマのトーガを着込んだ本物のマネキンを置いている店だった。よく見れば軒下にTシャツを象った看板が下がっている。

「行けばわかるだろ」

「じゃ、早速」

ほとんどの《青》系テスターが“初めてのトレーニング”に勤しんでいる中、俺とリンは“初めての買い物”にチャレンジした。



6月10日（テスト17日目）——午前4時にログインした俺たちは、^{コロセウム}闘技場でスタツフタイプIIパターンFに挑戦していた。

進展状況はまずまずといったところだ。

ランクSには遠いものの、思考操作にも慣れ始めている。このままやり込めば、あと少しで思考操作を会得できるかもしれない。そんな実感が、俺たちをさらなる挑戦に駆り立てていた。さて。

なぜログイン時間を午前4時にしたかといえば——理由は『P H A N T A S I A O N L I N E』における日数の数え方にある。そもそも『P H A N T A S I A O N L I N E』は、1日の区切りを午前9時に置いている。メンテナンス時間が午前7時から午前9時、午後7時から午後9時の2時間ずつであるためだが、これにあわせてテスターたちも、昼組と夜組とに分かれ、それぞれのメンテ終了時間にタイマーログインするのが普通になりつつある。つまり夜で言えば、最も混雑する時間帯は21時から0時ということになる。

では0時にログインすれば誰もいないのか——といえば、そうとも言えない。

メンテ明けにログインしたテスターは、ログイン後、そこで得た情報や今日の感想をネットに書き込む場合が多い。『P H A N T

ASIA ONLINE』はPVの娯楽利用に関するPRも兼ねているため、クローズドβテストでも、テスターが自由に情報を発信して良いとされているためだ。

これを確認してからログインする者も少なくない。午前1時から午前4時にログインする、俗に深夜組と言われるテスターたちだ。

というわけで、俺たちは早朝組——午前4時から朝メンテ時間である午前7時までにログインする面々——になったというわけだ。

実際にはPVベッドの起床機能——誘眠機能の逆で電磁波で神経系をゆつくりと活性化させる機能——で4時の10分前に目覚め、3時55分前にタイマーログインするという方法で、再び“誰もいない闘技場”^{コロセウム}を手にいれたのだ。

「でもさ」とリン。「なんで《青》^{うち}って、こんなに人がいないわけ？」

「知るかよ」

俺は休憩ということで、ゴロツと芝生に寝そべりながら答えた。

「まあ……追加オプションがゲテモノ系だからだろ」

「そういえば《緑》って多いもんね。ブログとか、サイトとかも」

「《赤》もけっこうあるぞ」

「『荒野の奇人』って、《赤》の人だっけ？」

「ガントタイプに詳しいところか？」

「そうそう。あと、『マトメ』の主要メンバー、ほとんど《赤》なんだでしょ？」

「いや、『マトメ』は落選組が多いだろ」

『マトメ』とは世界最大の匿名掲示板群『Xちゃんねる』に書き込まれた『PHANTASIA ONLINE』関連の情報をまとめる『POSレまとめWIKI(仮)』のことだ。すでにテスターの間では、『マトメ』とカタカナで書けば通用するぐらい、有名な場所になっている。当然、俺も情報を集める時は、必ず最初にそこに目を通していろいろいだ。

なお、落選組とは、クローズドβテスターの応募に落ちた人たち

のことであり、ネットではどちらかといえば、落選組がテストの書き込みから妄想を膨らませてワーワーと騒いでいる傾向が強い。

「そうなる……《青》の大手って……うーん、どこかなあ」

「『蜥蜴同盟』だろ？」

「あれかあ……」

『蜥蜴同盟』は《青》の3割にあたる150名ものテストが入する巨大な集団だ。母胎数が少ないため、逆に人数の集まりが良かったらしいのだ。確か《緑》で最大と言われる『猫耳少女団』でさえ、その半分くらいしか加入していないはずだから、どれだけ大きいかわかろうと言うもの。

もっとも、氏族システムが未実装な現段階では、単にトカゲ人間のテストターが名を連ねているだけ、というものにすぎないのだが。「ログインする前にちよつと見てきたけど、服装とか揃えるっぽいよ？」

「揃える？」

「うん。濃紺の修道服みたい。あと、スケイルメールがどうか」

「修道服ねえ……」

足を伸ばし、両手を後ろについて座る俺は、自分の服を見下ろした。

「……まっ、人のことは言えないだろ」

「そうかな？」

「そうだろ？」

「そうかなあ？」

同じ格好で俺の右に座るリンも、自分の服装を見下ろした。

実は俺もリンも初期装備のままだ。

足はサンダル、下は膝丈のショートパンツ、上はTシャツ、下着はボクサーパンツ。リンはこれにスポーツブラが付く。汗ばんだ時うつすらとそれが見えたので間違いない。つまり、こいつが真正正銘の女であり……だからどうした、というわけでもないが。

「今時初期装備のままのテストター、俺たちぐらいだろ」

「うーん」

リンはまだ納得していないらしい。

「あのなあ」

俺は左肘で頭を支えつつ横向きになった。

「考えればわかるだろ。俺たちが全クリ目指してた最中、街のほうでカジノ祭りとか、ショップ祭りとかあっただろ？ やることのない連中が、それでも我慢して買い物控えると思うか？」

「他の陣営だったら？」

「普通、祭りに参加してるだろ。俺みたいなキチガイ以外は」

「シンみたいって？」

「ゲームにしか興味ないヤツ」

バトルジャンキー
「戦鬪狂？」

「ジャンキーってほどじゃないが」俺は立ち上がった。「そろそろ再開するか」

「だね。汗も消えたし」

外装でも疲れたり、息が切れたり、汗をかいたりする。だが、しばらく休めば疲は消え、息も戻り、汗も嘘のように消える。そのあたりは、やっぱり仮想現実だ。汗のニオイもしないのだから、なんだか笑うしかない。

「よしっ——今日の目標、クリアじゃなくて完全思考操作だからな」
「わかってるって」

目標を達成できるまで、さらに2日かかった。

#01-06

6月15日（テスト22日目）——俺たちはとうとう、全メニューのランクSクリアを達成した。

「やったね」

「やったよ」

クタクタになった俺たちは、頭を付き合わせながら大の字になって寝そべっていた。

本当に疲れた。

今度もまた最後のパターンは実戦形式だった。ただ、魔法の使い分けが洒落にならないほど難しい。

直線的に光弾が飛ぶライトアロー。

着弾点で直径3メートルまで球状に炸裂するライトボール。

直径1メートルの青白い円形障壁を生み出すシールド。

この3つを使い分けつつ、魔法が切れたらカードで補充し、接近されたらグラップルタイプで鍛えた歩法で避け、スピアタイプで成らした杖捌きでいなし——それでもギリギリで100体倒せるかどうか、という際どいところだったのだ。

「でもまあ……これで、ハッキリしたな……」

「……なに？」

「メニューの並び」

「ああ、それ……同感」

ガンタイプで戦いそのものに慣れる。

グラップルタイプで動き方の基礎を学ぶ。

ソードタイプとスピアタイプで、段階的に長さの違う得物での戦い方を学ぶ。

そしてスタッフタイプで思考操作を身につける。

実によくできた並びだ。ただ、できることなら、最初からそうだと言って欲しかった。いや、俺たちが“そういうものだ”とネット

に書き込めばいいだけなのだろう。そういえば情報提供って、一度もしたことないな……

「ねえ」とリン。

「んっ？」

「これからどうする？」

「これから？」

「フォールドの実装、まだでしょ？」

「ああ……」

次の目標か。

「そんなもん、決まってるだろ」

「なに？」

「鼻歌まじりで全クリできるようになるまで、やる」

「最初から？」

「ああ」

それが俺の練習方法だ。最近はまったくやっていないが、対戦格闘ゲームをやる時も、俺はひとつの目標を終えたら、同じ課題を繰り返すことが多いのだ。

「だいたい、全クリしたっていても、パーフェクトじゃないだろ」

「パーフェクトって……そこまでやるの？」

「別にいいぞ。付き合わなくても」

俺は目を閉じた。

吹き抜ける潮風が実に心地いい。

（……これで終わりか）

ふと、そんなことを思った。

偶然と惰性で一緒にプレイしてきたが、それも今日までらしい。全クリなんて、俺にしてみれば通過点のひとつにすぎないが、今の話しぶりからすると、リンにとっては到達点なのだから、それも仕方ない。

（終わりか……）

どことなく、寂しい気がする。

この感覚は……そう、あれだ。ゲーム仲間と、縁が切れた時の感覚に似てる。

中学卒業と同時に、ヤツは遠くの高校に進学してしまった。

ネットを使えばいつでも対戦できたが、そこまでして遊ぶような間柄でもなかった。だから、そのまま縁が切れてしまった。多分だが、リンともそんな感じになる気がする。

そうか。リンと、これでお別れなのか……

「こら」

突然、ペシッと額を叩かれた。

ムツとしながら両目を開けると、逆さまになったリンの顔がヌツと出てきた。

「あんた、何様のつもり？」

リンは俺のことを睨んでいた。

テスト5日目のことが思い出された。互いの負けず嫌いに火がついたあの日のことだ。

あの時のリンも、今と同じように俺を睨んでいた。

違うのは距離と姿勢。

あの時は遠くにあったリンの顔が、今は手の届く場所にある。

おまけに長い金髪が数本、サラッと肩をすべり、俺の頬をくすぐっている。

「付き合わなくてもいい？ 冗談じゃないわよ。いつ、誰が、誰に付き合ったわけ？」

「……………」

「わたしはね、ずーっと、自分の意志で、全クリっていう目標を目指してただけよ。それともあんたは違うわけ？ わたしに付き合ってただけとか言うつもり？」

「……………」

「なんとか言いなさいよ」

「なんとか」

ペシッ。

「痛て」

だが、リンの手は俺に触れていない。

装備品を含む外装の周囲にはバリアーが張り巡らされている。痴漢行為などのハラスメント対策を兼ねた、絶対に解除できない厚さ1センチの見えない障壁があるのだ。

つまり。

「……………」

「……………」

俺の額とリンの手の間には、合計2センチの隙間がある。

絶対に埋めることのできない距離だ。

だが、衝撃は貫通する。

叩かれた感覚は、確かにあった。

俺は目を閉じた。

ペシッ。

リンが再び、俺の額を叩いた。

「寝るな」

「寝てねえよ」

「どうだか」

リンはくすくすと笑うと、

「そうだ」

と起きあがった。

「だったら今度は、ルール決めるわよ」

「ルール？」

「先にSクリしたほうがポイント獲得」

「ポイント制かよ」

「ポイント制よ」

俺は目を開き、ニヤツと笑った。

「のった」

「よしっ——あつ、どうせならパターンごとに替えるって、どう？」

Aは1点、Bは2点、順に増えていって、Hだけは10点。これ

だと逆転とかありそうじゃない？」

「無いな。どうせ俺が満点で、そっちが0点だ」

「そうね。決まってるわよね。わたしの勝利で」

「言ったな」

「言ったわよ」

俺たちは立ち上がり、そのまま横に並ぶようにして一方向を向いた。

「全クリ競争……」と俺。

「よーい……」とリン。

「「スタートっ！」」



6月21日（テスト28日目）——俺は激しく落ち込んでいた。

「に、2点差……」

「あーっはははは」

土下座同然の姿勢で落胆している俺の目の前には、両手を腰にあてたリンが、わざとらしい高笑いをあげていた——と言えはわかる通り、全クリ競争は75対77で、俺が負けてしまった。

悔しい。

ちくしょう。

あのライトアローの照準を間違わなければ、間違いなく、ランクSが出ていたはずなのに。なぜ……なぜ最後の最後にランクAなんだ！ 99体なんて……まるで計ったように、99体で終わるだなんて！

「うーん。勝つって気持ちいいなあ♪」

「悪夢だ……」

「そういえば誰かさん、途中から“負けたらなんでも買ってやる”とか言ってたっけ？　そうそう。《パンツァーメイドレス》っていいよねえ。HPにプラス100パーセント？　もう、鬼に金棒？　メイドに《パンツァーメイドレス》？」

「お、鬼……」

2日前、様々なアイテムが新たに実装されている。中でも魔杖と防具は大幅に増え、俺たちも目の色をかえて情報をあさった。

《パンツァーメイドレス》は、その中でも話題を集めた超高級防具だ。なにしろミニスカートタイプのメイド服であるにも関わらず、身につけるだけでHPが2倍になるという馬鹿みたいなアイテムなのだ。

その分、値段も破格だ。

確か200万クリスタルだったはず。

この女は、それが欲しいと言っているのだ。もちろん、俺が買えないことを承知で。

「さあさあ、シン様。いかがなさいますか？」

「……煮るなり焼くなり、好きにしてくれ」

悔しいが、負けは負けだ。

本当に、本当に本当に悔しいが……こればかりは仕方ない。

「じゃあ、メガトン級の貸しをひとつってことで」

「貸し？」

「そう、貸し。あとで必ず返してもらいます。そのつもりで」

あとでむしるってわけか。

「わかった……覚悟しとく」

「よしよし♪」

今日のリンは本当に楽しそうだ。そんなに俺に勝ったのがうれしいのだろうか？

「まっ、この話はこれくらいにして」

リンはその場に内股座りをした。

「これからのことなんだけど」

「もうひと勝負」

「そうじゃなくて——それより、いい加減、普通に座ったら？」

言われるまま、俺はその場にあぐらをかいた。

珍しくもリンと真正面から向き合う形になる。

「シン、今日の公式サイト、見てないでしょ？」

「んっ？ なにか出てたのか？」

「待ちに待ったものが」

俺は目を輝かせた。

「フィールドか？」

「イエース、ザッツライト」

リンは嬉しそうに笑った。

なるほど、それで上機嫌なのか。そういえば合流した時から浮かれていたし……

「……だったら最初から教えろよ。モチベーション、全然違ってたぞ」

「テストはログイン前、必ず公式サイトをチェックするべし」

「……………」

「文句は？」

「無い」

リンの言う通りだ。いくら姉貴の引越しなんかで時間がとられたといっても、公式サイトをチェックする時間くらい捻り出すのは難しくない。それこそ、起床機能で起きる時間を30分前にセットしておけば良かっただけでも言える。でもまあ、見てないものは見てないわけで。

「何時からだ？」

「明日。っていうか、今日」

何度も言うが、『PHANTASIA ONLINE』の1日は午前9時から始まる。さっきウィンドウを見た時に確認した実

在現実の時刻は午前6時10分頃だった。俺たちはあと40分ほどでリミットタイムが訪れるが、それは『PHANTASIA ON LINE』時間という6月21日分のリミットタイムにすぎない。今日22日のログイン時間は、午前9時からカウントされるのだ。

「それと、全リセットするんだって」

「……全部？」

「そう。外装から何から、ゼーんぶ。その代わり、カードから何から、これまで止めていた機能、ゼーんぶ実装されるみたい」

「全部か……」

未実装で大きなところといったら、カードと氏族のふたつだ。このふたつに関する情報は皆無に等しいので、可能な限り早いうちに詳細を知りたいところだ。

「そこで相談」

リンが改まった。見ると正座になり、背筋を伸ばしている。
「んっ？」

俺は正座にはならなかったが、背筋を伸ばした。

「まずは陣営のこと。変えないよね？」

「なにを——ああ」

全リセットということは、登録作業からやり直すことになる。

「当たり前だろ。わざわざ人の多い場所に行く意味がわからん」

「じゃあ、次。外装は？」

「このまんま。変えるのも面倒だし」

「だから……全リセットなんだってば」

質問の意味がよくわからない。

「ほら。外装データ、バックアップとれないようになってるでしょ？ 面倒だっていうなら、実像のまんまってことになるでしょ？」

「いや、俺の変更点って、髪と肌の色ぐらいだし」

リンの目が見開かれた。

「そうなの？」

「そうだけど……」

そこでようやく、俺は意図を理解した。

「そっちは？」

「わたし？ わたしは……」

リンは頬を赤らめながら、言いづらそうに顔を逸らした。

まあ……そういうことなんだろう。

「別に時間がかかるなら、それでもいいけど。まさか何日もかかるとか？」

「そうじゃなくて……えっと……」

リンはうつむきながら、両手で顔を押さえた。

「……笑わない？」

「多分」

「多分じゃダメ。絶対、笑わない？」

「……誓う」

俺は右手をあげながら答えた。

「……よしっ」

リンは背筋を伸ばし、キリッとした表情で俺を見据えた。

俺も身構えた。

ここまでリンが固くなるのだ。「笑わない？」とか言ってきたのが……下手をしたら、とんでもなく重い話が飛び出てくるかもしれない。体中に火傷の痕があるとか、実は不治の病で寝たきりだとか。そうだとしたら、平然とした対応をするのが筋ってものだと思う。もしかすると違うかもしれないが、とにかくにも、俺は眉ひとつ動かさないよう、表情を引き締めることにした。

リンが口を開いた。

「わたし……ね」

「……………」

「実は……………」

「……………」

「胸……小さいのよ……………」

「……………」

——ドガッ！

リンの右ストレートが俺の顔面に炸裂した。痛い。

「笑うな！」

「悪い」

俺は鼻がしらをさすりながら、できるだけ表情を引き締めることにした。

でも、笑いがこみ上げてくる。

なんだ、そういうことか。良かった。あつ、いや、当人がこれほど過剰反応しているんだ。つまり胸の小ささはコンプレックスであつて、それがどんなものであるうとも笑われるとなると傷つくはずだ。うん、そうそう。コンプレックスを笑うだなんて、男として、人として間違つて——

「だから笑うなつて言つてるでしょ！」

再び右ストレート。今度は右手でしっかりと受け止めた。

「悪い」

でも、頬のゆるみがなかなか治らなかった。

「でもな……こっちは最悪の可能性、想定してたんだぞ」

「最悪つてなによ」

「体中に火傷の痕があるとか、実は不治の病だとか」

「……悪かつたわね。大したことなくて」

「いや、俺もこの顔にコンプレックスあるし」

「その顔に？」

リンは少しばかり驚きつつ尋ね返してきた。

「顔っていうか……目だな」

俺は苦笑した。

「黙ってても睨んでる感じするだろ？ だから実在^{オフ}現実だと伊達眼鏡なんかかけて、誤魔化してるわけよ」

「へえ……苦労してんだ」

「苦労つてもんでもないだろ。でもまあ……なるほど……違うわけか……」

俺はリンの胸元をジッと見つめた。

リンは慌てて、身を捻らせながら両手で胸を隠した。

「なによ」

「別に」

これまで意識していなかったが、確かに外装の胸は大きめだ。もつとも、無駄に胸のでかい姉貴を見て育った俺だ。そりゃあ、中学に入った直後あたりは、思うところも無かったわけではないが……まあ、中3の頃には、気にもならなくなった。

「なによ」

「いや……剣の時、だったな。ボヨンボヨンはね回って、動きづらそうだなあって」

「……………」

「変なデッドウェイト残すぐらいなら、小さいほうが戦いやすいんじゃないか？」

「あんたねえ」

リンは溜め息をついた。

溜め息の意味が掴めず、俺は頭上に疑問符を浮かべた。

そんな俺の反応にも、彼女は再び溜め息をついた。

「ホント、脳味噌の99パーセントがゲームのためしか動いてないわけね、あんたは」

「失敬だな。いつでも80パーセントだろ」

——リミットタイムまで残り5分です

警告メッセージが耳元で響いた。

「残り5分」

俺は立ち上がった。

「もう？——あつ、わたしも」

数瞬遅れでリンにも警告が来たらしい。彼女も立ち上がり、一緒に外へと歩き出した。

「じゃ、あとは明日か？」

「それなんだけど……わたし、ちょっとおばあちゃんの家で1泊しなきゃいけないのよ」

「1泊？」

「昼に出て、明日の夜に戻るの。だから定時は無理」

ちなみに俺たちの定時は、午前3時50分から午前6時50分だ。

「でも、わたしとしてはやってみたいわけよ。フィールドでの戦い。1秒でも早く」

「出発、何時だ？」

「午後の1時。いろいろあるから11時には仕度、始めるけど……」

リンはチラッと俺の横顔を盗み見てきた。

なるほど、そういうことか。女の心はまったくわからんが、ゲーマーの心理なら簡単に理解できる。

「だったら、メンテ明けから2時間だけいってみるか？」

「いいの!？」

リンの表情が輝いた。

「いいも悪いも……抜け駆けしたら、あとで殴るだろ。俺のこと」

「当然じゃない」

「だろうと思った」

「じゃあさ、細かい打ち合わせは、外に出てからってことで」

「外？」

「電話かメールかヴォイスチャット。メンテ明けまでの2時間のう

ちに、情報、集めるだけ集めて対策練るべきでしょ？」

「んじゃ、ヴォイスチャット。俺のアドレス、暗記できるか？」

「もちろん」

俺の告げたアドレスを、リンはスラスラと復唱してみせた。



独特の浮遊感と共に世界が暗闇に閉ざされていった。

何かが背中に押し当てられる。

いや、俺が何かに背中を押し当てている。

—— Logout Sequence .. complete
合成音声と共にかすかなモーター音が聞こえてきた。

両目を開けてみる。

まるでワニが口を開けるように、腰のあたりまで覆い被さっていた黒いフードが、ゆっくりと独りでに開いていった。完全に上がるときと、少し汚れた乳白色の天井が見えた。部屋はほのかに明るい。カーテン越しにまぶしい朝日が差し込んでる。

俺は軽く背伸びをしながらベッドから降りた。

正式名称『PVD-B001P』。

通称『PVベッド』。

見た目は、ワニの口のように開閉する半円筒のフードが付いた、シングルサイズのウォーターベッドにすぎない。だが、これでも1台100万以上するらしい。値段を聞いた時にはビビったものだが、試作品のモニターを兼ねているため、たとえ壊しても支払いは発生しないと聞いて安心したものだ。それでも当初は、札束の上に寝ている気がして、妙に落ち着かなかったことを覚えている。まあ、所

詮は庶民の小せがれってところなのだろう。

なお、P V ベッドには専用の枕、毛布、掛け布団、枕カバー、シーツ、布団カバーがセットになっている。金属製品さえなければ通常の布団も使えるそうだが、俺は万が一にそなえ、付属品だけを使っている。つまり、フードさえ度外視すれば、見た目も使い方も普通のベッドと変わらないということだ。

（それにしても……）

俺は閑散とした九畳間を眺めだした。

昨日、姉貴が家（分譲マンション）を出て行った——といっても、暗い話ではない。むしろめでたい話だ。なにしろ4年も付き合った高塚さんと、ようやくゴールインしたのだ。

本当に……惜しい人をなくした。

高塚さんには心からの敬意と弔意を捧げたい。合掌。
ではなく。

そういう次第で、俺はこれまで姉貴が占拠していた9畳間を手に入れた。4畳半の和室から、とうとう抜け出したのだ。とはいっても、昨日は姉貴の荷物を運び出すだけで精一杯だった。引っ越しを手伝ってくれた姉貴の後輩の方々にお願いして、重い荷物だけは運び込んだが……はてさて、どうしたものか。

「……………」

いや、部屋の片づけはあと回しだ。

本棚を外した学習机に向かった。そこには1世代前のノートパソコンが置いてある。

笑いたければ笑え。

俺は次世代情報端末であるP V ベッドを、旧型のノートパソコンを経由してQ ライン（超高速量子暗号回線）につなげているのだ。一応、通信カードとルーターは叔父の好意で新しく買い換えているが……正直、外装の調整なんていう激重な処理をやらせるパワーは無い。俺が途中で外装調整を投げ出した最大の理由が、それだったりする。

「新しいヤツ、欲しいよなあ」

そんなことをぼやきながら、俺は椅子に座り、ノートパソコンを開いた。

最大化しているPVモニタを最小化。続けてIPヴォイスチャット用フリーソフト『SCOP3』を起動。携帯電話充電器の横に投げおかれたインカムを装着、端子を差し込む。と、計ったようなタイミングでSCOP3がアドレスコールを受けたというウインドウを表示した。接続者のHNは“^{ハンドルネーム}LIN”だ。

受話ボタンをクリック。

「もしもし、シン？」

聞こえてきたのは、^{オン}仮想現実と全く同じリンの声だった。

「おっす」

答えると、リンは一瞬沈黙した。

「もしもし？」

「あっ、ううん。聞こえる、聞こえる。ちょっと驚いただけ」

「なにを？」

「別に。それより、まず公式サイト。開ける？」

「ちよい待った」

タブブラウザを起動。ブックマークしてある『PHANTASIA ONLINE』公式サイトを開く。Flashの進化系にあたるF2で制御されたオープニングムービーは速効でスキップ。記録済みのアカウントで会員登録を済ませ、ようやく求めていた公式サイト情報のページに到着する。

「OK、着いた」

「だったら最初に――」

そこから俺たちは、ヴォイスチャットで話し合いながらいろいろなサイトを巡り、情報を集めまくった。もつとも、俺たちが求めるフィールドや戦闘に関する情報は驚くほど少なく、そのほとんどが新たに追加される外装オプションに関するものだった。

「情報無いね……」

「これからの話だからなあ」

それでもわかったことがいくつかある。

まず、解放される最初のフィールドは“試練場”と呼ばれる全五階層の地下迷宮らしい。各都市の神殿にいるNPC大神官に語りかけることで、《赤》の陣営なら“赤の試練場”に、《青》の陣営なら“青の試練場”に、《緑》の陣営なら“緑の試練場”に、それぞれ強制転移されるそうだ。

転移先は“シュートボックス”という、デッド時の復活場所にならないログインボックス。同時参加人数は最大256人まで。デッド以外の方法では最下層にいるボスクリーチャーを倒し、クリアするまで脱出ができない。

これが初フィールドに関連した情報の全てだった。

「どうする？ クリア時間の目安、2時間ってことになってるぞ？」

「うーん……」

今回はリンの都合で2時間しかログインできない。時間が来たら、デッド扱いになるフィールド・ログアウトで抜ければいいだけの話だ。しかし、できることならクリアしたうえで脱出したいところだ。

「やってやれないこと、無いだろ」

「そう……かな？」

「普通のプレイヤーで2時間だろ？ こっちはSラン全クリ（ランクSで全クリア）、2周してんだ。やり方次第で、なんとでもなる」
「……うん、確かに」

「だろ？」

「だね」

「だったら——」

俺たちはさらに、作戦を練りだすのだった。

#01-08

あっという間に時間が過ぎた。

8時30分を過ぎたところで、外装登録が可能になった。俺たちは作戦会議を続けながら外装を再調整。髪を金髪、肌を濃褐色、さらに話の流れから瞳を金色にしたうえで、外装オプションの“竜眼”を選んだ。

「こっちはOK。そっちは？」

「完了。じゃ、向こうで」

〈了解〉

ボイスチャットを終えた俺は、大急ぎでトイレに向かった。実はけっこう、我慢していたのだ。ちなみに親父は出勤済み、母さんは昨日から高槻さんの実家にお泊まり中。そんなわけで、俺は冷たくなっていた昨夜のピザを手早く牛乳で胃に流し込み、部屋に駆け戻った。

不思議と体中に気合いがみなぎっている。

「よしっ、やるか！」

気合い一声。PVベッドに横たわり、枕元のエントリーボタンを押し込んだ。

```
| | Login Account .. 436-332-200
4-9719
| | FAL Check .. . . . OK
| | Bital Check .. . . . OK
| | Login Check .. . . . OK
| | Login Time .. 22, June 20X00
9..00..02
| | Limit Time .. 22, June 20X01
```

2..00..02
| | Contents Code .. PHANTASIA O
| | LINE ver C1.0102
| | Abator Name .. SHIN
| | Login Place .. BLUEPOLIS / C
ENTRAL CIRCLE / LOGIN BOX 24
| | Login Sequence ..
complete

浮遊感が消え、足がしっかりと地面を踏みしめた——と実感する
なり、俺は振り返り、すぐさまドアのオープンボタンを叩いた。外
に出ると、そこは初日しか来たことがない海上にある蒼都の中央広
場だった。

（リンは——？）

他のエントリーボックスからも、初期装備のテスターがぞろぞろ
と出てきていた。

圧倒的にトカゲ人間と美少女が多い。

というか「おまえら小学生だろ」と言いたいぐらい幼い女の子が
たくさんいた。

一瞬、イヤな予感が脳裏をよぎった。

いや、今はそれどころじゃない。

「シiiiiin！」

20メートル先に、後ろに手を振りつつ走っている女性テスター
がいた。

リンだ。

速度を緩めたのか、しばらくすると俺もすぐに追いついた。

「遅い！」

「どこが！」

俺たちはそのままジョギングでもしているかのようなピッチで走

り続けた。

中央街区に入る。

「大神殿で！」とリン。

「買い忘れるなよ！」と俺。

俺たちはそれぞれ、別の店に飛び込んだ。

『マトメ』にあった略図の通り、俺の飛び込んだ先は魔杖屋だった。

「いらっしやいまー」

「《ホーリーバンテージ》2つ！ スペルガンのカートリッジ20枚！」

アラビア商人っぽい扮装をした子供の木製マネキン人形（NPC店員）は、ゆっくりとした動作でカードを出してきた。イライラしながら眼前に現れた精算ウィンドウのOKをタッチ。全カードが自動的に、俺のカードウィンドウに収納された。

「よしっ」

すかさず店を飛び出す。

次は薬屋に飛び込み、《ミドルキュア》カードを4枚、《スモールキュア》カードを20枚購入する。それを終えたら、あとは神殿まで一直線。神殿前に人影が無かったため、少し速度を落としながら振り返ってみる。

いた。

ちょうど数ある服屋のひとつから出てきたところだ。

手を挙げると、リンも手を挙げ返しながら走り寄ってきた。すでに1クリスタルの《ヘアゴム》で、長い金髪をポニーテールに束ね上げていた。

「どうだった？」

「歩きながら交換。の前に、パーティ登録」

「了解」

俺たちは並んで歩きながら、打ち合わせ通りに動いていった。

パーティはこのゲームで一番小さなグループ単位だ。構成人数は

最大6名。メリットはステータス情報の共有、パーティ共有カードウィンドウの利用、パーティ対象のカードの効果対象になる、の3点。

パーティの結成方法は至って簡単。

「コール、パーティメイク。リン」

俺はそう言いながらリンの肩に軽く手を置いた。バリアーがあるので直接触れあわないが、固いくせにウネウネと動くゴムのような触感が右の掌に感じられた。

一方、リンの眼前にはウィンドウが展開している。

リンはウィンドウにタッチした。

俺の眼前にウィンドウが展開する。

——【LIN】がパーティに加わりました。

これで終了だ。

脱退は本人がウィンドウで操作するか、パーティの3分の1の端数切り上げ人が、脱退要請を行うだけで良い。つまり俺たちの場合、互いが自由に、いつでも相手と縁切りできるというわけだ。

「半分ずつよね？」

「いや、俺の分はもうとってるから、全部もってけ」

「了解。わたしのもの、そうするね」

「了解」

共有ウィンドウのカードは、一端、ウィンドウ操作で個人のカードウィンドウに収納しないと呼び出すことができない。それを踏まえ、俺は購入したカードの半分を共有ウィンドウに移した。それはすぐに消え去り、変わって別のカードが共有ウィンドウに現れた。

これを自分のカードウィンドウに移動。

最後にウィンドウ内で装備を指示する。

全身がザワツときた。

次の瞬間、俺の服装は別のものに変わっていた。

足は焦茶色をしたミドルのトレッキングシューズ、下は袴、腰にはガンベルト、右腰に《スペルガン》、左腰にカードホルダー、上

はTシャツのまま、しかし両腕には白い《ホーリーバンテージ》が巻き付いている。

見るとリンも全く同じ格好になっていた。

「……………」

「……………」

お互い、つい黙り込んでしまう。

それというのも――装備を変えた瞬間、俺たちは一瞬だけ下着姿になってしまったのだ。まだ周囲に誰もいないのが不幸中の幸いだっただ、それでも微妙に気まずいものは気まずいわけで。

「あっ……」と俺。

「な、なに？」とリン。

「いや……」

俺は彼女の胸元を見た。

「……しぼんだな」

飛んできた左ジャブを、俺はスウェーでどうにかかわした。



NPC大神官は、神殿の階段を登ってすぐのところにいる。普段は奥の祭壇にいるようだが、今日ばかりは特別に出てきたらしい。

「いかいよりおとずれたものよ。なんじらがしんの《あお》のまじようしであることあかしをもとめるなら、これよりなんじらを“あおのしれんじよう”におくりとどけよう」

店員もそうだったが、NPCの口調は相も変わらず“子供の朗読”だった。

これがまた、ひどく聞き取りづらい。

できることなら、どうかして欲しいところだ。

——ポーン

聞き慣れたSEと共に俺の前にウィンドウが出てきた。

「あっ——」とリン。

「んっ？」と俺。

「読める。シンのウィンドウ」

「……へえ」

どうやらパーティを組むと、メンバーのウィンドウが閲覧可能になるようだ。

だったら——

「操作もできるってことか？」

「やってみていい？」

俺が頷くと、リンは“青の試練場に転移しますか？”の下に表示されている“YES”に触れた。だが、さすがに反応しない。苦笑するリンに変わって、俺がYESボタンにタッチした。

世界が暗転し、あの浮遊感覚が襲いかかってきた。

次の瞬間、俺は見慣れたログインボックスの中に立っていた。

振り返り、ドアを開ける。

ボックスの外は焦茶色の煉瓦で作られた広い部屋の中だった。窓はひとつもなく、天井が蛍光塗料でも塗っているかのように、ボンヤリと橙色の光を放っていた。

「シン」

顔を向けると、リンが《スペルガン》を抜いていた。

「本番よーい」

「すたーと」

俺も《スペルガン》を抜きつつ、遠くにある唯一のドアに向かって歩き出した。

ドアは、あと5メートルほどの距離に近づくと、自動的にフツと消えた。

ドアの奥には、部屋と同じ煉瓦作りの通路がまっすぐ続いている。

ついでに通路の先に、戦い慣れたブラックウーンズが4体、うごめいていた。

「初陣もおまえらか……」

「予想通りってことで」

「だな」

俺たちは普通の速さで歩きつつ、《スペルガン》で4体とも手早く倒した。

——ポーン

SEが聞こえた。

「なに、今の？」

どうやらリンにも聞こえたらしい。

「……アイテムじゃないか？」

歩きながらウィンドウを開き、共有ウィンドウを確かめてみる。

案の定、空っぽだったはずのそこには、スモールキュアカード1枚と4クリスタルが収納されていた。

「うわぁ……100匹倒してもたったの100？」

「雑魚だからな」

「だねえ」

そのまま歩くと、十字路にぶちあった。

「左手？」とリン。

「法則」と俺。

俺たちは左に曲がった。

出てくるブラックウーンズを次々と倒した俺たちは、下へと続く

螺旋階段を見つけた。部屋の中央にポツンと存在する、鉄製の螺旋階段だ。

「ここまで30分か……」

「でも、買い物とか差し引いたら20分くらいでしょ？」

確かにその通りだが、予想以上に、この迷宮は広いのかもしれない。

「ペース、あげるぞ」

「了解」

地下2階に下りると、ブラックウーンズとの遭遇回数が増えた。しかも一度に出てくる数は最低でも10体だ。6人パーティを想定しての配置だろう。もっとも、俺たちに見れば、必ず向かう先から固まって出現するブラックウーンズなど、大した障害にならなかった。

それよりも問題は――

「弾、どうする？」

「温存」

「了解」

ブラックウーンズは、稀にカードを落としてくれる。だが、そのほとんどは《スモールキュア》なのだ。カートリッジ系カードは一枚も落としてくれない。これでは、いずれ弾切れになるのは目に見えていた。

そういうわけで。

「はっ！」

「やっ！」

俺たちは素手で戦いだした。そのための《ホーリーバンテージ》だ。とはいっても、こんな攻略方法、スタツフも想定していなかったと思う。そもそも、徹底的にトレーニングをやりこんだプレイヤーが現れるとは考えていなかっただろう。

「なんか、いい調子？」

リンが笑顔で尋ねてきた。

「でも時間が辛い」

「――うわっ、ホント」

俺たちは走り出した。やはり思った以上に時間がかかっていた。



地下3階に入ると新しい敵が現れた。スタッフタイプのトレーニングに登場した、光弾を放つ黒真珠を埋め込んだウーンズーガンウーンズだ。

しかし。

「甘い甘い甘ああああい！」

こっちは飽きるほどガンウーンズとも戦っている。光弾を放つタイミングも把握済みだ。

「リン！ 無理して急ぐぞ！」

「了解！」

俺たちはもはやクリチャーのことなど二の次になっていた。

すでに時刻は10時15分をすぎている。

俺たちに残された時間は、残りわずか45分なのだ。



「――リン、時間は！？」

「10時43分」

俺たちは螺旋階段の前で呼吸を整えていた。

これで地下四階も終わりだ。残すところは、この階段の下にある地下五階のみ。問題は、俺たちに残されている時間が17分しかないことだ。予想以上に時間が掛かりすぎた。

「決めた」

まだ汗だくのリンが背筋を伸ばした。

「クリアするまでやる」

「おい……」

「だったら聞くけど」

リンは俺を睨んだ。

「あんただったらどう？ 途中でリタイアして、後悔しない？」

「……たく」

俺も背筋を伸ばし、両手で髪をかきあげた。

「だったら、こうだ。5階に下りたらずっと全力疾走。敵に会ったら、止まったうえで銃で応戦。その間に呼吸を整える。で、倒したら出発。敵が多すぎたら、ダメージ無視でとにかく特攻。俺が特攻っていったら特攻だ。それでどうだ」

「素敵じゃない。神風攻略？」

リンは満面の笑みを浮かべた。

「そういうこった」

自然と俺の顔にも笑みが浮かんだ。

「よしっ……行くぞ！」

「了解！」

俺たちは気合いを入れて螺旋階段を飛ぶように降りた。

地下5階——試練場の最下層に到着。

すぐさま、俺たちは競い合うように全力で走り出した。

向かう先に誰かがいた。

いや、違う。

NPCと同じ木製マネキン人形だ。それも全体が黒っぽく、服を

身につけていない。おまけに、それぞれが手に拳銃や剣や杖を持っていた。

「応戦！」

ザザザッと足を滑らせながら、中腰になった俺は《スペルガン》を両手で構えた。

「どれから!？」

答える代わりに杖持ちを狙った。

少し前方で静止したリンも、立ったまましっかりと両手で《スペルガン》を構え、杖持ちに向かって引き金を絞った。

——ピッ

視界に見たこともないものが表示された。

他の杖持ちから自分へと伸びる弧を描いた赤い線だ。しかも、俺を包み込むように、赤い光線で作られたポリゴンのドームが出現していた。

(——ライトボール！)

俺は前に向かって転がり込んだ。

直後、赤い線をたどりながら白い光弾がギュンツと飛んできた。

光弾が着弾。炸裂。

——ドンッ！

SEと共に熱風が感じられた。ライトボールの特殊効果だ。

「シン!？」

驚いたリンがこっちに顔を向ける——が、その頬から、直線的な赤い線が伸びていた。

「よけろ！」

跳ね起きながら、リンの脇腹を押しやる。

——ヒュン！

銃弾が飛び抜けていった。間一髪だった。

だが、無性に腹が立った。

頭に来た。

「……………」

思考がクリアになっていく。

俺は前傾姿勢で走り出しながら、《スペルガン》を敵の銃持ちに向かって撃ちまくった。

赤い光線が俺に集まろうとする。

この線はあそこの、その線はあっちの、そっちの線のあの敵のやつだ。

しっかりと連中の動きを見る。

線のひとつが俺に重なった。そいつの引き金にかけた指が動いた。左に跳ぶ。

銃弾が腹の右横を飛び抜ける。

別の線が重なる。

軀を右に傾ける。

銃弾が左頬の横を飛び抜ける。

3本目の線が迫る。同時にSEを耳にする。杖持ちにロックオンされた音だ。出現した赤線は直線。ライトアローだ。一方、剣持ちの連中が右上段に構えながらドタドタとこっちにむかって走り出していた。

見る。避ける。

見る。避ける。

剣持ちが近づく。《スペルガン》を手放す。右ストレート。そのまま右前に踏み出して右の裏拳。勢いを殺さず軀を沈め、左手から迫る剣持ちの脚に自分の脚を叩き込む。起きあがりざまに左アッパ―。すぐ右に跳んで相手の肩に右肘。がら空きになった側頭部に左ストレート。その向こうのヤツが剣を振り上げる――が、そいつの側頭部で着弾光が輝く。

「援護は任せて！」

見るとリンは、片膝をつきつつ、両手に持った2丁の《スペルガン》を連続して打ち続けていた。

「当てなよ！」

「誰に言ってるのよ！」

もはや当初の目的も忘れ、俺たちは敵を殲滅しにかかっていた。

「――あと3分ちよい！」

「じゃ、ウルトラマンになるか」

あれから2度の戦闘をくぐり抜けた俺たちは、汗だくのまま、いかにも胡散臭い両開きの扉を、一緒になって押し開けた。

扉の奥には、軽く直径50メートルはある広々としたドーム場の空間が広がっていた。

床も天井もすべて煉瓦作り。

上に橙色の巨大な光球があるため、室内は驚くほど明るかった。そんな部屋の中央にいるのは――

「……ドラゴン？」

「……だな」

大きい。動物園で見た象と同じぐらい、あるかもしれない。

全体的なフォルムは恐竜の首長竜に似ている。違いは、全体が鱗に覆われていることと、背中に小さなコウモリの羽根が生えていること、さらに頭部が凶悪だ。巨大な目、突き出た角、鋭い牙、寝息と共に吐き出される炎……

「寝てる？」とリン。

「寝てるな」と俺。

俺たちは顔を見合わせた。

正直なところ……リアルすぎる。ドラゴンが、あまりにもリアルすぎる。

確かに攻撃手段はある。だが、俺もリンも、平和な日本に生きるごく普通の学生にすぎない。巨大生物なんてものは、動物園かTVで見ると相場が決まっている。間違っても、生身で戦いを挑む相手ではない。それこそ、動物園の檻の中で、象やライオンに喧嘩を売ると同じくらい無謀な行為に思えて仕方がない。

「……怖い？」

リンが尋ねてきた。

「そりゃあ……な」

俺は素直に答えた。

「実はわたしも」

リンは小さく舌を出した。

思わず見とれた。

あっ、かわいい——なんて思ってしまった。

不覚だ。

というか、そういう状況じゃないだろ、今は。

「あっ」

リンがつぶやく。

「……時間」

「ああ……」

慌ててウィンドウを開く。左下には無情にも“23, July 20X0 11..00..05”と表示されていた。ビビっているうちに3分が過ぎてしまったのだ。

「どうしよう」

リンは見上げながら尋ねてきた。

「どうするって……」

打ち合わせ通りにやるなら、今日のチャレンジはこれで終了ということになる。いや、地下5階に下りる前の話を優先すれば、クリアするまでリンは付き合う予定になってる。だが、相手が相手だ。正直、俺も腰が引けている。リンもそうだ。だからこそ、俺に尋ねてきたのだ。これからどうするのか、と。

「……………」

俺は目を閉じた。

立ち止まっている間に疲労は回復、汗も消えていた。

「よしっ」

俺は両目を開け、両手に1丁ずつ《スペルガン》を持った。マネキンたちがドロップしたものだ。他にも《ブロードソード》や《ス

ピア》なんかも、カード化した状態でウィンドウに収納してある。
一緒に拾ったカードリッジカードは、他と一緒に、全部呼び出した
上で左腰のカードホルダーに差し込み済みだ。これで呼び出し手順
を経ることなく、いつでも弾倉を具現化できるのだ。

「決めた」

「うん」

「玉砕で終わる。どうだ？」

「……やるの？」

「やる」

「……どうしても？」

「恐いのは最初だけだ——多分」

リンは再び部屋の中を覗き込んだ。

「これって……遊び（ゲーム）だよな？」

「^{ゲーム}仮想現実だな」

「……恐くない？」

「恐い。めっちゃくちゃ」

「恐がってるように見えないけど」

「これでも？」

俺は銃を持つ右手をあげた。かすかに震えている。情けない限り
だが、本当に俺は怯えているのだ。

「………うん」

長い沈黙のあと、リンは頷いた。

リンも両手に《スペルガン》を構えた。俺と同じ2丁拳銃だ。

「途中で逃げるとかないわよね？」

「逃げるわけないだろ」

「絶対？」

「当たり前だろ。相棒置いて、おめおめ逃げられるか」

「……OK、相棒」

ようやくリンの口元に笑みが浮かんだ。

「じゃあ、気合い入れて行くわよ」

「OK、相棒」

俺たちは右手の甲と左手の甲を叩き合わせてから、思いきって部屋に飛び込んでいった。



「なによ！ 弱いくせにデカイ面してんじゃないわよ！ この！ この！」

リンは倒れたドラゴンの軀を蹴りつけていた。

まあ……気持ちはわかる。

戦闘開始から、わずか1分——時計回りに走りながら、二丁拳銃で200発近い弾を撃ち込んでみると、炎を吐きかけていたドラゴンが、突如としてよろめき、あろうことか、そのまま倒れてしまった。しかも今は、尻尾のほうがゆっくりと分解している。

一応、ラスボス扱いなので、雑魚のように一瞬で消えないようだ。つまり。

「これでクリア……か？」

俺は誰にともなく尋ねてみた。

なんと言うか、拍子抜けもいいところだ。

でも、これはゲームなのだから、実際にはこんな感じだろう。というか、そもそもここは初心者用のチュートリアル的なフィールドだ。俺たちでさえ苦戦するような難敵がいたとなれば、それは別の意味で問題になるはずだ。

「ああ、もう！ あんなに恐がってたこっちが馬鹿みたいじゃない！」

リンは濃褐色の頬を真っ赤に染めながら俺のいるところまで戻っ

てきた。

俺はドラゴンの頭の近くに立っている。リンは消滅が始まった尻尾を確認に行った帰りに、八つ当たりとばかりに背中を蹴りつけていた、という次第だ。

とにもかくにも。

「これだと10分オーバーぐらいでおさまるんじゃないか？」

「……だね」

リンもウィンドウを開き、時間を確認した。

現在、11時7分。

もし俺たちが尻込みしていなければ、間違いなく11時前に終わっていたと思う。

「でもさ——これから、どうなるの？」

「知るかよ」

消滅が頭部に達し、とうとうドラゴンの頭も消え去った。その直後だった。

——リーンゴーン、リーンゴーン、リーンゴーン

教会の鐘の音が室内に響き渡った。

俺たちはうろたえながら周囲を見回した。

——よくぞ試練を克服した！

朗々とした壮年男性の声が響き渡った。

——我は至高の魔杖、ファンタジア！ 汝らをこの世界に召喚せしものなり！

「イベント？」

「……っばいな」

——我は最後の十二英雄、エレインの名のもとに、汝らが正当なる《青》の魔杖師であることを、ここに承認する！ ゆえに我は、汝らに道標を示す！ 汝らを召喚せし、真の理由をここに明かすものとする！

真の理由？ 公開されていない裏設定でもあるのか？

——我を求めよ！

ファンタジアは宣言した。

——世界に散らばる十二の鍵を探し出し、我を求めよ！　そこに全てがある！

再び教会の鐘が鳴り響いた。

スーッと周囲が暗くなる。

「シン……」

「ここにいます」

すぐ周囲が明るくなった。室内の様子は、ドラゴンが消えたことを除けば何も変わっていない。傍らにはリンがいるし、俺も《スぺルガン》を握りしめたままだ。

「あつ、扉が……」

見ると、開いていたはずの扉が閉まっていた。

「……あそこから出ろってことか？」

「……かな？」

俺たちは小首を傾げながら、とりあえず片方の《スぺルガン》を収納、片方をホルスターに差し込み、2人一緒に締まっている扉へと近づいてみた。

軽く触れていると、押してもいないのに両開きの扉が勝手に開いていった。

まぶしい光が差し込んだ。

潮の香りがした。

（——潮？）

扉の外は——中央広場だった。

人が集まっていた。

どよめきが起きていた。

「……………」

「……………」

俺とリンは顔を見合わせた。なにがなんだか、サッパリだった。

トカゲ人間と美女・美少女ばかりということとは、蒼都の中央広場で間違いないと思われる。ただ、周囲に集まる100……いや、2

00人近いテスターたちは、どういうわけか扉の周囲10メートルから先に近づけないらしい。

だが、例外もいるようだ。

「おめでとうございます」

真正面に、古代ローマのトーガを身につけた男性が立っていた。距離は3メートルぐらい。壁があるなら、それを越えてやってきたことになる。

「いやあ、それにしてもさすがですね。まさか公開直後に、それも最初の挑戦で、2時間もかからずクリアするとは」

俺はピンときた。

だが、先に尋ねたのはリンのほうだった。

「スタッフの方……ですか？」

「はい。今日から配属になった、蒼都市長のセイリユウです」

ただでさえ細い糸目をさらに細目ながらセイリユウと名乗ったスタッフは、じつくりと俺とリンのを見つめた。

「まあ、あなた方には簡単すぎたかもしれませんね」

「わたしたちのことを……？」

「ええ、スタッフの間では有名ですよ。蒼都のコロセウムに14日間も隔離されただけでなく、スタッフでさえ匙を投じているオールS、2回もやりとげたおふたりですからね」

「覗いてのか」

俺は鋭く睨みながら尋ねた。

「全部ではありませんよ？」

蒼都市長はなだめるように両手を胸元に上げた。

「ご存じかもしれませんが、PVはすべての入出力を脳神経系に依存しています。つまりPVの中の出来事は、PVにログインしていないと把握できないんですよ。そのうえ、ここでの映像や音声を外に持ち出す方法も研究途上です。逆に外から持ち込むのは、とんでもなく簡単なんですけどね。なかなか思うようにいかないものです」

「それで？」と俺。

「ですから」

蒼都市長は穏やかに微笑んだ。

「監視といっても、外部から調べられる情報といったら、ログインとログアウトの時間、フラグのオンオフ、あとはウィンドウで閲覧できるような情報ぐらいでして……まあ、肉眼による監視を行っていたことは認めます。お気づきにならなかったと思いますが、隔離されてからのあなた方には、念のため、監視用の使い魔を貼り付けていました。もし、何かあったら時、困りますから」

「……だったら強制的に移動させれば良かっただろ」

「そう要請されたら、即座に対応するつもりでした。ですが……そうしなかったおかげで、私たちも、とても良い勉強をさせてもらいました」

「どういうことですか？」

どんどん険悪になる俺に変わって、リンが口早に尋ねた。

「トレーニングのメニューです」

蒼都市長は穏やかに答えた。

「それに、なにはおいても、戦い方です。地下5階でのブラックドルとの戦い。あれはお見事でした。うちで最も腕の立つスタッフも、筋がいいと太鼓判をおしたほどです。よろしければこのあと、いろいろと意見をお尋ねしたいところなんです……」

「予定が詰まってる」

俺はリンを見た。リンは市長と俺とを交互に見ている。

「だから、さっさとログアウトさせろ」

「シン……」

「いえ、お気になさらずに。事情は把握しています
やっぱり盗聴もしてたのか。

ってことは、ドラゴンを見てビビってたところも、生中継で見たんだな。

くそっ、なんか腹が立ってきた。

「では手早く終わらせましょう。おっほん」

蒼都市長はわざとらしい咳払いをした。

「えーっ……おめでとうございます。あなた方は“試練場”を、世界で最初に突破した魔杖師です。その栄誉をたたえ、ここに紋章^{クレスト}を授与します」

「んっ」と俺。

「きゃっ」とリン。

不意に胸元が熱くなったのだ。痛みすら伴う熱さだ。見るとリンも胸元を押さえていた。

「おやおや……」

蒼都市長がなにやら意味深に笑っている。

「……てめえ、なにをやった」

「紋章の授与です。熱くなったところを確認してみてください」

言われるままTシャツの襟を引っ張ってみると、確かに首の真下、胸の中央に何か奇妙な青い刺青がついていた。

「それがなんであるか、あなた方が自らの手で解き明かしてください」

蒼都市長は穏やかに語った。

「私からの助言はひとつだけです——答えは彼方にあり」

「どこだよ、彼方って」

「私にもわかりません。現場のスタッフには、グランドイベントの情報、まったく降りてこないんです」

俺は市長を見た。

糸目なせいで、表情が読めない。

なんとなく、掌の上で踊らされている感じがした。ムカつきが強まった。

「これで終わりなんだろう？」

「ええ、終わりです」

「だったらどけよ」

「ああ、ログアウトですよ。お急ぎみたいですから、この場で私。ああ、ログアウト・プレイスは中央広場ってことになりますか

ら」

市長はそう言いながらダブルタップでウィンドウを展開した。

「おい」俺は割り込んだ。「監視、解除しろ」

「ええ、わかりました」

意外なくらい、あっさりとした返事だった。

「私の権限で、ブラックリストから削除しておきます」

「……どうのことだ？」

「対象者だけを監視するんです。そういう取り決めでしたので今回は裏技的に使いましたが……ちゃんとお二人がログアウトしたあとで削除しておきます」

「わかった」

だったら文句はない。

「シン」

傍らのリンは、ホッと安堵の吐息をつきながら俺のことを見上げてきていた。

かと思うと、いつものムツとした睨み顔になった。

「あんた、短気すぎ」

「……悪い」

「でも、今回は許す」

リンはバンツと俺の背中を叩いた。

「では、ログアウトしますよ」

市長がウィンドウに触れた。途端、視界が暗転し、独特の浮遊感が襲いかかってきた。

まだ——と言いたかったが、間に合わなかった。

気が付くと俺はP V ベッドに寝ていた。

フードがあがっていく。

すぐ立ち上がり、机に向かった。机上の目覚まし時計は11時28分を差していた。

「28分も……」

問題はもうひとつ——リンと次の待ち合わせについて話していな

いことだ。

と思っていたら。

——キンコーン

かすかに何か聞こえた。

ふと、開けっ放しにしていたノートパソコンを見ると、立ち上げたままにしているSCOP3のウィンドウが展開していた。アドレスコールだ。接続者のHNは“LIN”。

慌ててインカムを付け、受話ボタンをクリック。

新規ウィンドウが開いた。

画面には、色白で、艶やかな黒髪を背に伸ばした、ライトブルーのパジャマを着込む、同世代の女の子の顔が映っていた。

〈もしもし、シン？〉

「……リン？」

〈質問そのいち。あんたのパソコン、カメラついてる？〉

「ちょい待て」

俺は大急ぎで椅子に座り、透過カメラ——液晶パネル越しに映像を取得するカメラ——の映像取得を始めた。左下の画面に俺が映し出される。俺は迷わず、本番ボタンを押した。

リンは黙り込んだまま、ジッと俺のほうを見ていた。

俺も黙り込んだまま、ジッとリンを見つめた。

〈……ホントに色が違うだけなんだ〉

「そうだって言っただろ」

〈で、リアルなわたしについての感想は？〉

「胸が小さい」

途端、リンは軀を捻りながら、両手で胸を隠した。その仕草が、いつぞやの胸を隠した時とまったく同じだったので、俺はついつい、口元を抑えながら顔を背けてしまった。もちろん、不用意に爆笑しないように、だ。

〈な、なによ！ 小さくて悪かったわね！〉

「悪い。ホント。悪かった。間違いない、おまえはリンだ。うん。

間違いない」

「へそんなの当然じゃない!」

「だから悪かったって。それより、急ぐんだろ」

「そうだけど……」

「文句は次の定時に聞いてやるって」俺は苦笑した。「それでいいだろう?」

リンは一瞬だけ真顔になると、輝くような笑顔を浮かべた。

「OK、相棒。逃げるんじゃないわよ、いい?」

俺は笑いを堪えながら答えた。

「OK、相棒」



斯くしてゲームは始まった。俺はもう、退屈ではなくなっていた。

LOG 01 ” GAME START ”

End

To
Be
Next
Chapter

#01-09 (後書き)

続きは <http://bookshelf.jpn.org/online/online0200.html>

新章の執筆が安定してきたら、暇を見て他の章も転載します。

「気分がすぐれないもので……申し訳ありません」

わたしはハンカチで口元を抑えながら、静かに立ち上がった。

「本当に申し訳ありません」

母が横からわたしのことを支えてくれた。

少し寄りかかりながら、しずしずと廊下に出て行く。

控えていた仲居の人が、一間あけてすぐに座敷にわたしと母を案内してくれた。向かってみると、別の仲居の人が高級そうな布団をすでに広げていた。わたしは母と仲居さんに支えられながら、布団に横たわり、ふう、と苦しげな吐息を漏らした。

「よろしければ馴染みのお医者様を——」

仲居の人が恐る恐る申し出てくる。

「いえ」と母。「月のものですので、席の方々にも内々に……」

「でしたらお薬のほうは……」

「かかりつけの医者処方されたものがございますので。申し訳ありませんが、ぬるめのお湯、いただけませんかでしょうか」

「承知いたしました。取り急ぎ、お持ちいたします」

仲居の人は一礼してから座敷を出て行った。

障子がスウと閉ざされ——完全に閉じた瞬間、母が小さく溜め息をついた。

「やられたわね」

「やられたわよ」

ムカついていたわたしは、ムクツと起きあがり、マ（・）マ（・）を睨みつけた。

「念のために聞いとくけど……ママ、知ってた？」

「知ってるわけないでしょ。それより早く横になるのよ。ここの仲居、仕事が——」

「失礼します」

わたしは慌てて横になった。途端、ママがわたしを逆向きに寝かせ、なにを思ったのか帯を解き始めた。

「ママ——」

「しっ」

小さく口止めされる。

「お飲み物をお持ちしました」

「ありがとうございます。そこに置いていただけますか？ あと、

娘の帯を緩めますので、申し訳ないのですが、人払いのほうを……」

「人払いのほうはすでに……後ほど鮎川様が参られるそうです」

「ありがとうございます。なにかありましたら、手近の方にお声をかけますので……」

「承知致しました。失礼いたします」

しばらくして、襖の閉じる音が聞こえた。

「まずいわね」

ママの口調は元に戻っていた。

わたしは首だけで振り返りつつ、ママに尋ねてみる。

「逃げる？」

「どうやって？」

「ええっと……病院に行くっていうのは？」

「医者と呼ばわるだけよ」

「だったら、島崎のおじいちゃんのところは？」

「遠すぎるじゃない。車で何時間揺られてきたと思うの？」

「3時間半」

苦々しげに即答するわたし。ママは、再び溜め息をつくときと軽く額をおさえた。

「うかつだったわ……生理が重いつて設定、意外と使えないわね」

「設定って……」

「仕方ないわ。ここはママが生け贄になるから——」

襖がガラッと開いた。

わたしは咳き込んでみた。ママはわたしの背中をさすりだした。

「わざとらしい」

絶対零度の鋭い刃がグサツとわたしとママに突き刺さった。

「まったく、恥ずかしいったらありやしない。せっかく将来有望な良家のご子息をご紹介いただいたというのに、仮病で退席するだなんて……鮎川の女のくせに、よくもまあ、人様の顔に泥を塗るようなことを平気でやれるもんね」

確かめるまでもない。そこにいるのは、おばあちゃんだ。

鮎川家は名家だ。それも、いわゆる女系家族だ。なんでも元禄時代のご先祖様が、夢に出てきた観音様にそうするよう言われたとか……そんな逸話が残っているくらい、鮎川の家は歴史が古く、家柄もかなりのものがあつたりする。

そんな鮎川家の現当主が、こちらにいらっしゃる鮎川鈴子、御歳71歳だ。

「鈴美。まさか鈴音も自分と同じようにできると思ってるんじゃないでしょうね」

おばあちゃんの一人娘であるわたしのママ——鮎川鈴美、今年で35歳——は、鮎川の家を半ば飛び出した強者だったりする。

それでも、実の母親であるおばあちゃんを見捨てることもできず、パパと出会い、結婚を決意した時は、婿入りしてくれるようお願いしたそうだ。脳天気だったパパは二つ返事で承諾。ふたりは晴れて夫婦となった。

そんな2人の一人娘がわたし——鮎川鈴音、今年で16歳。私立聖アンヌ女学院高等部の1年生。それも幼年部からのエスカレーター組。どこに出しても恥ずかしくないお嬢様の中のお嬢様なので、男なんて家族以外に見たことありませんわ、おほほほ……な世界の住人だったりする。

できることなら、他の世界に移住したい。切に願う。神様仏様、どうかしてください。

「お母様」

ママが鋭く言い返した。

「この際ですから、ハッキリと言わせていただきます。伝統を大切になされるのもけっこうです。しかし、鈴音は家のために生まれたお人形ではありません。たとえば、いずれ伝統を受け継ぐにしても、16で見合いなど、あまりにも早すぎます」

「私の母親は16で結婚しましたよ」

おばあちゃんはピシヤリと言いつ返した。

「それに私も、御爺様とお見合いしたのは15の夏です」

結婚は18歳の春だ。その話は、吐き気がするほど何度も聞かされている。

「時代が違います」とママ。

「いいえ、違います」とおばあちゃん。

竜虎激突。蚊帳の外のわたしは、横になったまま溜め息をついた。
はあ……シンのやつ、今頃なにしてんのかなあ……………

LOG・02 ” BBS ”

#02-01

高等部に進学したばかりのわたしは塞ぎ込んでいた。

本当は外の高校に行きたかったのだ。

最低条件は共学。共学なら、制服がダサくてもいいと思っていた。
でも……やっぱり、おばあちゃんに逆らいきれなかった。

同じ経験をしているママに言わせれば、

——あんたも鮎川の女なのよ。

ということらしい。

釈然としないが、納得した部分もある。

おばあちゃんを完全に否定することはできない。それは同時に、
家を捨てることを意味しているのだ。そんな、わたしのワガママだ
けで、100年以上続いた鮎川家の伝統を絶やしていいとは、さす
がのわたしも考えていない。

つまり中途半端なのだ。いろいろな意味で。

逆ギレできるほど馬鹿でもないし。

諸々と従えるほど従順でもないし。

ただ……聖アンヌの高等部というのが、わたしを憂鬱にさせた。

なにしろ聖アンヌは“嫉妬の総合デパート”だ。

可愛い子は、それだけで陰口を叩かれる。

成績が良くてもそう。

運動に秀でていてもそう。

婚約者や許嫁が御曹司だったりかっこよかったりしたら、もう最
悪だ。

でも派閥の上位、いわゆる“お茶会”に加わるレベルまで立場を
高めれば話も変わる。もつとも、派閥の順位は親の社会的地位が大
きなものを言うし、それ以上に生家の家柄が決定的な要素として懸
案される。

ちなみに聖アンヌという蜘蛛の巣では、鮎川の家なんて、中流程

度の扱いしか受けない。それなりに伝統があっても、たかが100年程度の家柄だ。旧華族が掃いて捨てるほどいる聖アンヌでは、江戸末期に成り上がった商家の家柄なんて、庶民と紙一重の存在のすぎないのだ。

だからわたしは、できるだけ地味な格好で、目立たないよう気を付けながら日々を過ごすしかなかった。初等部高学年の頃から、わたしはそうやって、毎日をどうにか生きながらえてきたのだ。

そのせいでわたしは、中等部一年の頃、円形脱毛症になった。気づいた時は血の気が引いた。

なにかストレス解消の方法を手に入れないと——そう思っていた時、ゲームで気晴らしができるという話を漫画で読んだ。なんの漫画だったかは覚えていないが、これだ、と思ったわたしは、ママに頼んで、ゲーム機とゲームを買ってもらった。

それからというものの、わたしは学校の鬱憤をゲームで晴らし続けた。それだけでなく、一見してわたしだとわからないよう変装しては、街のゲームセンターに出掛け、対戦格闘ゲームやダンスゲーム、音楽ゲームでうさをはらしまくった。

パパがそんなわたしを見て、

「鈴音、ゲームが好きだろ？」

と持ち出してきたのが、『PHANTASIA ONLINE』クローズドβテストの話だ。

わたしは一も二もなく飛びついた。

こうして5月になり、待ちに待ったクローズドβテストがスタート。

ドキドキしながら初めてログインしたわたしは、記念すべき第一歩を踏み出し——ドキッとした。

すぐ近くに男の子がいたのだ。

背は170センチ代半ば。細身だけと肩幅があって、なにより他を避け付けない、鋭そうな目元がわたし好みだった。おまけに髪と肌の色のチョイスが私と一緒にだ。正直、ものすごく驚いたし、柄に

もなく運命を感じて、胸をときめかせてしまった。

それなのに話し掛けると、軽く頷くだけで流されてしまった。

ちよつとムツときた。

まあ、あとになって思えば、わたしも自惚れていただけなんだと思う。というか、外装の胸を大きくしたことで……なんというか……そういう感じになっていたんだと思う。

だからもう一度、話し掛けてみた。

でも、食いついてくる様子が無かった。

脈無しか——と思ったわたしは、当初の目的を思い出し、気持ち切り替えた。

戦闘訓練。

自分自身がゲームのキャラになって戦いに参加できる——これ以上のストレス解消方法が存在するだろうか！ いや、無い！ 反語

！ 仮想現実、万歳！

そんなわけで、最後とばかりにコロセウムへの行き方を尋ねてみたら、あろうことか、彼は「お先」と言い残して先に行ってしまった。あわてて追い掛けたわたしは、彼を追い掛けるように、闘技場コロセウムに入り、見よう見まねでウィンドウを開き、トレーニングに挑戦してみた……



「でもね、シンってすっごいイジワルで陰険なのよ。だってさ、リンクS、3つとったところで、これみよがしに『3つ……』とか言っ
て、わたしに向かって、ニヤッて笑うんだよ？ もう、なんだこの男おとお——って感じになるじゃない。わたしとしては」

帰りの車の中で、わたしは鬱憤を晴らすように話し続けていた。ハンドルを握るのはパパ。助手席にわたし。後部座席には、途中のコンビニで買った冷えピタを額に乗せたママが寝転がっている。昨夜の遅くまで、おばあちゃんとバトルを繰り返していた疲れがここにきて出てしまったのだ。今は穏やかな寝息をたてているが、少し前まではちよっとうなされていた。もしかすると、夢の中もおばあちゃんと戦っているのかもしれない。合掌。

「なるほどねえ」

のんきなパパは、安全運転で車を走らせ続けた。

「それで、そのあとはどうなったのかな？」

「競争よ。わたしとシンの。でも決着がつかなくて、それで次の日も22時のログインしようってことになって、そのままログアウトしたの」

「仲良くなれたんだ」

「まさか！」

わたしは思わず大声を出してしまった。あわてて両手で口を閉ざす。

ママは起きなかった。

よかったあ……。

「でも、最後には仲良くなれたんだろ？」

「そりゃあ、そうだけど……」

「すぐってわけじゃなかったんだ」

「うーんと……」

確か、ガンタイプⅡパターンHの途中からだ。わたしもシンもなかなかクリアできなくて、休憩している時に初めてまともに話した。

気が付くとわたしは地のままのわたしで彼と話していたのだ。

自分でも不思議だと思う。

あえて理由を言葉にするなら、波長が合ったというか……うーん。「いい友達ができたんだねえ」

脳天気なパパは、そんなことを言い返してきた。

「うーん……友達ってわけじゃないんだけど……戦友っていうか、なんていうか……」

「うん、わかるよ」

パパはニコニコとうなずいた。

「きつとね、運動部とかで一緒に練習した同期生に感じるものと一緒にだよ、それは」

「あつ、そんな感じかも」

「でも……そうか……シンくんか……そうか……」

パパはニコニコと笑いながら、赤信号で一端停車した。

「これは困ったなあ」

「なにが？」

「覚悟はしていたけど、こういう形でボーイフレンドができるだなんてねえ」

「ち、違う違う！ 絶対違うって！」

わたしとシンはそういう関係じゃない。

パパには言っていないけど、わたしたちのことを表す的確な単語がひとつだけある。

相棒、だ。

わたしはシンにだったら無条件で無防備な背中を任せられる。

シンもわたしにだったら、同じように背中を任せってくれるはずだ。

実際、“青の試練場”の地下5階で、シンはわたしの援護射撃に絶対の信頼を置いてくれた。敵集団の中で戦い続けていたのに、一度としてわたしの銃弾を気にしようとしなかったのだ。

それだけわたしは、シンに信用されている。

同じぐらい、わたしはシンのことを信頼している。

そういう間柄なのだ。間違っても、ボーイフレンドなんかじゃ……

帰宅したわたしは、パパと一緒にママを寝室まで運んでから自分の部屋に戻った。

ようやく着物から解放される。

と、思ったけど、少しでも考えてから鏡台に向かい、滅多につけたことのないピンク系の口紅を塗ってみた。
でも、すぐ拭った。

「……」

立ち上がり、帯をほどうとする。

でも、なんとなく手をとめる。

「……………」

わたしはパソコンの前に座った。

ヴォイスチャットツールを起動する。登録一番にアドレスコール。少し緊張しながら、21インチの液晶ディスプレイをジッと見つめた。最新型だから、この中央に透過カメラが仕込まれてある。そこにあるはずの透過カメラをジッと見据えながら、アドレスコールを続けること約1分――

画面が全画面に変わった。つながった証拠だ。

「もしもし？」

つぶやいてすぐ、インカムを忘れていたことを思い出した。

あわてて装着する。

直後、シンの顔が画面に映った。今日は眼鏡をかけていたんで、ちよつとだけいつもと雰囲気違っていた。

へもしもし、聞こえるか？

「聞こえる、聞こえる。暇じゃなかった？」

へまあ、そこそこ。それにしてもおまえ――

わたしは緊張した。

「――七五三か？」

「待てこら」

期待したわたしが馬鹿だった。

「冗談に決まってるだろ」

シンは苦笑しながら、頭にまいていたタオルを外した。後ろの光景を見れば、なにをしていたか一目瞭然だ。部屋の大掃除だ。後ろに見える本棚には、まだ半分も本が入っていない。向かって右の奥には積み上げられた段ボール箱が置きっぱなしになっている。

「それで、今度はなんだ？」

「無事に帰ってきたから連絡したのよ、この陰険根暗ムツリ男」
わたしは通話終了ボタンをクリックした。

画面が暗転。元に戻った。

と思ったら、ウィンドウが開いた。アドレスコールだ。相手は“

SHIN”。

「なによ」

「ネットで面倒になことになってる。公式と『マトメ』と『蜥蜴同盟』、必ず見ろよ。あとのことは定時に。それと着物、似合ってるぞ。じゃあな」

今度は向こうが一方的に切断した。

なんかムカついた。

わたしは手早く着物を脱ぎ、バスルームで熱いシャワーを浴びた。サッパリしてから部屋に戻り、スパッツにTシャツなんていう、おばあちゃんが見たら卒倒しかねない服に着替えてから再び1階に戻った。

リビングでは目を覚ましたママが、着物姿のまま夕食の仕度を始めていた。

ダイニングテーブルに座り、お茶を飲んでいたパパがわたしに声をかけてくる。

「んっ？ どうしたんだ？」

「なにが？」

「顔、にやけてるぞ？」

「うそ」

実際、わたしの口元はにやけっぱなしだった。

#02-02

6月23日（テスト29日目）——とんでもないことが起きていた。

「説明してもらおうか」

「そうよ！」

定時（午前3時50分）にログインしたわたしとシンは、その足でスタッフが詰めているという市庁舎を強襲した。すると、まるで来ることがわかっていたかのように、わたしたちは奥へと案内され、応接間らしき場所で、あのセイリユウとかいう蒼都市長と、ありがたくもない再会を果たしたのだ。

「まあ、とりあえず座って」

蒼都市長はわたしたちをなだめながら、テーブルを挟んだ反対側のソファ―に腰を下ろした。渋々、わたしたちもソファ―に座り直したが、わたしもシンも、不満げに顔をしかめている。

「それで用件は——」

蒼都市長は、考え込むように少しだけ天井を見上げた。

「公式サイトなの？」

「晒されるなんて一言も言ってなかったよな、あんた」
そうなのだ。

公式サイト“イベント・ニュース”に、試練場が解放されたという記事が掲載されていた。それだけなら何も問題はないが、記事の最後には、

——なお、《青》の陣営において、すでに試練場をクリアしたユーザーがいる。クリアタイムは1時間58分。なにより驚くべきは、これをたった2人のパーティで成し遂げたという事実だ。

ということが書かれている上に、わたしとシンの外装名と外装写真がデデンと大きく掲載されていた。これが問題なのだ。

「広場からここまで、わたしたちがどういう目にあっと思ったってん

ですか」

わたしはいつになく強い語調で言い放った。

「ログインするなり人に囲まれたり、パーティ組んでって言われたり、強引にパーティメイク仕掛けられたり、仲間になれとか、抱きつかれかけたり……」

シンが、邪魔だ、と睨まなければ、市庁舎（こく）に來るとさえできなかったかもしれない。

それなのに蒼都市長は、シレっと、こう答えた。

「ええ、窓から見ていましたよ。たいへんでしたねえ」

――ダンッ！

シンが拳をテーブルに振り下ろした。

無言だ。

叩きつけられた拳は、かすかに震えていた。

限界だ。

シンは本当に怒っている。

そもそも、わたしとシンの外装は実像そのままと言ってもいい。

そんなものをネットで晒されたのだ。怒るのも当然だ。今日ばかりは、わたしも全面的に、シンの味方することに決めていた。

「わかりました」

蒼都市長は穏やかに微笑んだまま、ダブルタップでウィンドウを開いた。

慣れた手つきで、何かのコマンドを打ち込みだす。

「確かに早計だったところもあります。今後、公式サイトに顔写真を載せる際は、当人の承諾を求めるよう提案しておきます。現状の公開画像も、私の権限で削除しておきます。ですが……」

蒼都市長はウィンドウを閉じた。

「私としては、あなた方には有名になって欲しかった、と言ったらどうしますか？」

「理由は」とシン。

「ゲームバランスです」

予想していなかった答えに、わたしもシンも、不可解そうに市長を見つめた。

蒼都市長は悠然と微笑んだ。

「単刀直入に言って……あなた方は強すぎます」

市長は苦笑した。

「想定外もいいところです。だいたいですね、試練場は100を超える6人パーティが、同時に各階層で暴れまわくことを前提にしていたんですよ？ それに私たちとしては、まず試練場で失敗して、トレーニングで鍛えて、さらに挑戦して……ということを、何度か繰り返してもらおうつもりで、少し難しめに設定していたんです」

「トレーニングなら！」とわたしは怒鳴った。

「ええ、承知しています」

市長はうなずいた。

「それでも6人パーティ用であることに変わりはありません。もちろん、5人や4人でクリアすることも不可能じゃないでしょう。ですが2人とは……普通なら、途中でタコ殴りにされてるところですよ。それが平均的な強さってものです。それなのにあなた方は、グリップタイプを使いこなすことで突破してしまった。もう、脱帽です。いくら私たちでも、100時間に満たないユーザーが、あそこまで外装を使いこなせるなんて、想定できるわけがない。お手上げです。完敗。降参。参りました」

市長は本当に匙を投げたと言わんばかりに、軽く両手をあげた。

「ですがね」

蒼都市長の目が、一瞬だけ光った気がした。

「このままいくと、あなた方にイベントというイベントを荒らされる危険性があるわけです。それはただだけない。それとも、イベントには一切参加しないと確約できますか？ 手応えのある敵と戦いたくないと、断言できますか？」

これにはわたしもシンも顔をしかめて黙り込んだ。

イベントの定義がハッキリしないけど――もし、挑戦しがいのあ

る敵がいるなら、わたしもシンも、喜んで参戦するだろう。

「もちろん、特定のプレイヤーにスタツフからそういうお願いをするわけにいきません」

市長は手を下げた。

「そもそもあなた方も、お客様であることに代わりはありませんからね。仮に、“突出した強さ”について規制するにしても、今度は“突出”の基準というものを作る必要があります。これがなかなか難しい。“ログインタイム100時間以下で試練場をクリアできるユーザー”という制限を作ったとしても、あなた方のような人が、100時間以上経ってからクリアしたのでは意味が無くなります。これでは規制を設ける意味がない」

「だから晒したのか。俺たちの顔」

「卑怯な方法であることは理解しています」

市長はシンを見つめながら、ゆっくりと語り続けた。

「ですが、有名になれば、あなた方には有名税という足かせがついてまわることになります。さらに言えば、平均的なプレイヤーのためのイベントとは別に、強すぎるプレイヤーを隔離するイベントを用意しても、納得いただける可能性が高まるわけです」

「誰が納得するんだ？」とシン。

「あなた方と、あなた方以外の方々です」と市長。

ふたりはそれっきり黙り込んだ。

わたしはテーブルを見つめながら、今の市長の言葉を、自分なり考えてみた。

言いたいことは理解できる。だが、納得できない。そもそもわたしたちが特殊だとは欠片も思っていないのだ。他と違うところといえば、ずっとトレーニングをやっていたというだけのことだ。

ええっと……最初の8日はリミットタイムが1時間だったから……全部で68時間？ うん。それだけやったからこそその強さのはずだ。

他の人だって、それだけやれば同じぐらい強くなるはずだ。

いや、実戦で強くなっていく人もいるだろう。実際、わたしたちも実戦の中で気づいていったことが幾つもある。

つまり、わたしたちは“習熟するのが早かった”というだけにすぎない。そのはずだ。

「それでも……」

蒼都市長は苦笑を漏らした。

「あなた方がこんなにイヤがるとは……そこも想定外でした。これは正直に謝罪します。申し訳ありません。私たちも、少しばかり浮かれていたのかもしれませんが。いや、面目ありません」

「だったらどうする」

間髪入れず、シンが市長に詰め寄った。

市長は尋ね返した。

「外装を変えらというのは？」

「……………」

シンがわたしを一瞥した。

わたしは渋面になりながら、うなづくことも、首を横にふることもできなかった。

そりゃあ、外装を変えてしまうのが一番早い解決方法だ。でも、できることなら今のままがいい。なんとなくだが、シンの外装も変えて欲しくない。偽物の身体かもしれないけど、この外装は、わたしとシンが試行錯誤を続けてきた身体でもあるのだから。

「他には？」

シンは市長に向き直りながら尋ねた。

「そうですね……陣営を変えれば逆に目立つでしょうし……ここはやはり、75日というやつでしょうね。人の噂も、ってやつです」

別れ際、わたしたちは市長の好意で闘技場のログインボックスに
転移させてもらった。

——なにか度の過ぎた迷惑行為がありましたら、ログアウトしたあとでかまいませんから、メールで知らせてください。知らせがあり次第、すぐにおふたりを保護対象に指定して、監視用の使い魔を派遣しますから。

そんなことを言われたが、できることなら頼りたくない。

「なんだかなあ……」

わたしは溜め息をつきながらログインボックスを出た。

その途端、

「邪魔だ！ どけっ！」

シンの怒声が響いた。

理由はすぐわかった。

コロセウム

闘技場の正門広場に、たくさんのトカゲ人間たちがいたのだ。しかも一部は、わたしたちの前に立ちはだかるように、正門の前に集まってさえた。

でも、その誰もが怯えたように道を譲っていた。

当然だ。

今のシンは、わたしから見ても恐いくらいに怒っている。

中央広場の時と一緒にだ。

いや、あの時よりも凄いかもしれない。正門広場にいたテスターたちは、まるで不可視の壁に追い出されるようにザザッと距離を開いていったのだ。多分、今のシンを前にしたら、ここが仮想現実だろうと、身の危険を感じるのだろう。背中しか見えないわたしでさえ、そう思うのだから、かなりのものだ。

「まったく……」

ガリガリと頭をかいたシンは、大股で歩き出した。

わたしも怒りの表情を見せつつ、小走りでシンの横に向かい、並

んで歩いていった。

闘技場の正門に入る。

前に無かった受付窓口が階段前の左右の壁に出現していた。その前にいたテスターも、シンとわたしが向かうと、自然と横にどいてくれた。

「ころせうむ」にようこそ」

窓口の中にいたのは、駅員っぽい格好をしたNPCだった。

「ここでは、“ばとるろいやる”と“とれーにんぐ”をえらぶことができます。どちらをگریようになりますか？」

シンの前にウィンドウが展開した。

サツと目を走らせたシンは、何かの項目を選択した。

強制的に、わたしもどこかのログインボックスに転送された。パーティーメンバーが転移を選ぶと、他のメンバーも、強制的に転移させられるせいだ。

外に出ると、そこは試練場の最奥にあったドラゴンの間だった。

「……えっ？」

いや、違う。ドラゴンはいないし、扉のあるべき場所にログインボックスが6つ並んでいる。床やドームの煉瓦も赤茶色ではなく、灰色だった。

「なるほどな」

隣のボックスからでてきたシンが、困ったようにガリガリと頭をかいた。

「あの細目が言った通りだ」

そういえば市長が、製品版準拠になったことで、トレーニングのあり方が大幅に変わったとも言っていた。

一番の違いは、専用ルームをパーティー単位で借りるようになった点だ。あと、他人のトレーニングも見えるようになった点も隠れて大きな変更点だ。難易度も微妙に再調整されたい。少し優しくなったというから、わたしたちとしては拍子抜けなのだが。

ちなみにグラントは、立ち入るだけでPVP（プレイヤー対戦）

が可能になる“バトルロイヤル”の場として提供されているそうだ。そこで死亡した場合、ペナルティ無しで正門広場のログインボックスに転送されるとのこと。そこ以外の場所では、たとえばグラッブルタイプの魔杖を装備したうえで殴っても、ダメージを与えることができず、痛みも極端に緩和されるそうだ。

つまり闘技場^{コロセウム}以外のPvP（プレイヤー対戦）は御法度というわけだ。HPは減らなくとも、誰かにダメージを当てる行動を起こせば、すぐにスタッフが跳んできて仲裁や制裁を行うそうだ。

「んじゃ、軽くガンから流しておくか」

「了解」

わたしたちは気晴らしとばかりに、ガンタイプのトレーニングを始めることにした。

初めてすぐ、わたしたちはトレーニングのこと以外、考えなくなった。多分、お互いのトレーニング状況が見えるようになったせいで、対抗心がボウボウに燃え上がったのだろう。しかも、ガンタイプでは、明らかにシンよりわたしのほうが腕前が上だった。それがシンの負けん気に拍車をかけたらしい。

続くグラッブルタイプでは、シンが本領を発揮した。反撃を受ける回数も多かったが、痛みなんか気にせず、思いつき踏み込んでいくシンは、パターンH以外のすべてをパーフェクトでクリアしてみせた。

これにはわたしも呆れてしまった。

「あんた……格闘技の経験とかあるの？」

「んなわけあるか。見ての通りのゲームオタク（ゲーヲタ）だ」

どこが見た目通りなのか、判断に苦しむ。

ただ、そう答えるシン自身も、自分の腕前に驚いているようだ。

それがちよっと、微笑ましかった。

あっという間に3時間が経った。

初挑戦で22日間、2回目でも6日間かかった全クリチャレンジだったが、今日の3時間だけで、ガンタイプとグラッブルタイプ、

さらにソードタイプのパターンCまで進んでしまった。

我ながら呆れるくらいの上達ぶりだ。

「あれだな」

「あれって？」

「実戦」

どうやらシンも、実戦を経たことで腕前が上達したと思っているらしい。

「俺もそうだし、おまえもそうだけど、攻撃の溜めが無くなったただろ。前だったら、反撃くらうだけで微妙にパニックってたけど、そういうのもなくなってる。そのせいだろ」

「わたしはパニックしたことないけど？」

「ふーん」

「なによ」

「別に」

時間がきたので、わたしたちはトレーニングルームのログインボックスでログアウトした。ここでログアウトすると、正門広場でログアウトしたことになる。つまり明日もまた、あの人ゴミが待ちかまえているというわけで……

#02-03

ここで少しでも今回の騒動を整理してみる。なにしろ発端は、わたしがおばちゃんにハメられている間に起きた出来事なのだ。だいたい、まさかこの歳でお見合いなんかさせられるとは……

そっちはなく
閑話休題。

6月22日(テスト29日目)――クローズドβテストのシステムが、一部を除いて製品版準拠になった。それにあわせて、初のフィールドとなる“試練場”が公開された。スタッフが最初の攻略まで1週間はかかるだろうと見ていたフィールドが実装されたのだ。しかしそれは、実装から2時間後にはクリアされてしまった。しかもパーティメンバーは2人だけ。つまりわたしとシンだ。これが騒動の発端となった。

同11時32分、『Xちゃんねる』のPOスレに、わたしたちのことが書き込まれた。どうやら速報を伝えるためだけにログアウトしたテスターがいたらしい。そういうわけで、その日の午後には、わたしたちに関する情報がネット中を飛び交いはじめた。

同20時頃、『マトメ』に試練場関係の情報が載り、最初の攻略者としてシンとわたしのアバターネームが記載された。

同20時20分頃、公式サイトにわたしたちの外装の顔写真を含む例のニュースが掲載された。このあたりから、本格的な試練場祭り(?)が始まった。

土曜の夜ということもあり、試練場祭りは加速しまくった。そして同20時47分、『Xちゃんねる』のPOスレに、わたしの騙りが現れた。

108 名前…LIN 投稿日…X0/06/22 20…47…
20 ID…*****

呼ばれたのできてみました（w

わたしがママと一緒に、おばあちゃんと対決していた時間なのだから、どう考えてもニセモノだ。だが、スレの住人は、これを本物だと考えたらしい。中にはニセモノだと指摘する人もいたが、

――病気でずっと入院しています。

――PVは前から病院で使っていました。

などという書き込みがあり、懷疑派は逆に糾弾され……なんかムカついてきた。

でも、そうやってニセモノがチャホヤされていることを、たまたま情報を集めていたシンが見つけてしまったからさーたいへん。

気になったシンは、真偽を確かめようとわたし宛にアドレスコードをかけたそう。しかし、その時のわたしが応えられるわけがない。なにしろその日は、1学期の定期試験を終えたあとの試験休みの日でもあったし、そうなる前から決まっていたから、おばあちゃんがこの日に合わせて顔を出すようママに命令し、お見合いの段取りをして……うーっ、またムカついてきた。

とにかく。

そういうわけで、シンは、POSレの書き込みをニセモノだと断定した。

そして、書き込んでしまった。

386 名前…SHIN ◆O4TEsrff / 投稿日…X0
/06 / 22 20…57…03 ID…*****

<<364はニセモノ

本物なら二回目の点差を答えろ。そもそも二回目、点差の意味、わかんのか？

すると無名の人たちによる、シンの真偽を疑う書き込みが続いた。
これに、わたしのニセモノも便乗した。

4 1 3 名前… L I N ◆ d T b q R + A J v n 投稿日… X 0 /
0 6 / 2 2 2 1 … 0 2 … 1 2 I D … * * * * *

また、S H I Nの騙りですか？
いいかげんにしてください。あたしの仲間は、あなたでは
ありません。

だが、シンはこれにカチーンと来たらしい。

4 2 1 名前… S H I N ◆ O 4 T E s R f E f / 投稿日… X 0
/ 0 6 / 2 2 2 1 … 0 3 … 5 1 I D … * * * * *

< < 4 1 3

騙るに落ちたな。俺の相棒は自分のことを「あたし」なんて
言わない。

それに前スレの< 1 3 6。

< ごめんなさい。試練場のこと、スタッフから口止めされ
ています。

< あまりにも早く攻略したのが原因です。

<ですから、こちらからの情報の提供はご容赦ください。

嘘だ。そんなこと、一言も言われていない。

その証拠に、これから俺の知ってる情報を全部書き込む。

シンは本物の証明として、試練場に関する情報を次々と書き込んでいった。すでにネットで書き込まれていた地下3階までの情報はもちろんのこと、地下5階にドールと呼ばれる“魔杖で武装した木製マネキン人形”がいることや、ラスボスがドラゴンであることも書き込んでいったのだ。

それでもPOスレでは、シンをニセモノだと断定した。

罵倒した。

馬鹿にした。

荒らし扱いをした。

だからシンは、最後にこう書き込んだ。

634 名前…SHIN ◆O4TEsRfEf / 投稿日…X0
/06 / 22 21…37…13 ID…*****

わかった。俺はもう二度と書き込まない。帰ってきたら、相棒にもそう話しておく。

それと、中で誰かに話し掛けられても、俺は無視する。絶対、俺たちに話し掛けるな。

相棒以外のパーティメンバーもいない。

最低でもトレーニングの全メニュー、ランクSクリアを2回やれるようになってからこい。

話はそれからだ。

最後に、俺が本当に試練場をクリアした証拠を残しておく。

「ファンタジア」は魔杖の名前。十二の鍵を探せば見つかる。それがグランドイベント。

これを最後にシンは寝てしまったらしい。そもそも、定時が4時7時なわたしたちは、21時をすぎれば寝るようにしている。だから、ふて寝というより、もういいや、という感じで普通に寝たんだと思う。あいつは、そういうヤツなのだ。

一方、POスレでは、シンが逃げたとか、なんだとか……：そういう書き込みでさらに加速していた。シンの書き込みに棘があったのも事実だが、それでもこの扱いはひどいと思う。あとになって、当時のログをザッと流し読みしたわたしのほうがムカつかのだから、シンのほうはもっと頭にきていただろう……

その後、わたしのニセモノは最後までシンをニセモノ扱いした上で、21時頃に姿を消した。

スレは一時的に減速した。

再加速したのは0時以降。メンテ明け組が書き込みを始めたあたりからだ。

シンの情報と同じ情報が次々と書き込まれた。

さらに午前1時頃、《緑》の陣営で“試練場”をクリアする者たちが現れた。4つのパーティが一致団結して、クリアを目指した結果らしい。その結果、シンの書き残した証拠の数々が真実であることが証明された。

再び祭りになった。

シンを罵倒した人たちやわたしのニセモノが非難を受けた。それ

ばかりか、シンに対する謝罪専用のスレッドまで作られた。そこは懺悔室と呼ばれ、途中からは「ゲーム中に誰某のオッパイを食い入るように見てしまいました」とか「実はネカマです」とか「実はネナベです」とか……そういうことを懺悔する方向に盛り上がりだした。

なんというか……さすが『Xちゃんねる』。無意味に熱い場所だ。そして同じ頃。

《青》系クランサイト『蜥蜴同盟』の掲示板に、シンとわたしに関する情報が次々と書き込まれていた。もともと《青》はテストターが少ない。それもあって、目撃情報の精度は高く、わたしたちが闘技場に長々と籠もっていたということも書き込まれていた。そればかりか、昼にはいないこと、夜の目撃者もいないこと、いや、一度だけ見た、でも急に見なくなった、なぜか……

そこからわたしたちが早朝組であるとの推測がたてられていた。ビンゴだ。

こうして6月23日（テスト29日目）——ログインしたわたしたちは、待ち伏せを喰らうことになった、という次第だ。



わたしたちは再び時間をずらしてログインすることにした。

今回の土曜日ということもあり、ログイン時間は午前10時半にした。朝組の間隙を縫う作戦だったが、これがうまくはまった。正門広場には、数えるぐらいのプレイヤーしかいなかったのだ。

「狙い通り」

「だね」

わたしたちは誰かに話し掛けられる前に、速効でトレーニングルームに避難した。

2時間後にはソードタイプ、スピアタイプのランクSクリアを達成。

「ふう……休憩するか？」

「つかれたあ」

ログインボックスの前に並んで腰を下ろしたわたしたちは、はあ、と溜め息をつきつつ、そのまま後ろに倒れ込んだ。

見上げる先には灰色の煉瓦しかない。

青空が当たり前のようにあった頃が、懐かしく思えた。

「しまったあ……勘弁して欲しいなあ」

「騒ぎのこと？」

「それしかないだろ」

事態は悪化の一途をたどっている。

といっても、火種はわたしたちと無関係なところにある。

『蜥蜴同盟』だ。

もともと『蜥蜴同盟』は、トカゲ人間の外装を使うテスターが名を連ねるだけの集団だった。しかし、氏族システムが実装されたことで、状況が大きく変わったのだ。

克蘭はパーティの上位に位置する集団単位だ。なんでも“スフイア”という特殊なオブジェクトが存在する建物入手した者だけが開設できるらしい。蒼都にも幾つか、そういう建築物が確認されているが、どれも値段が億単位なため、今のところは、開設うんぬんどころの状態ではないとされている。

そこで『蜥蜴同盟』は、寄与を募りだした。

だが、寄与金の管理を巡って、内紛が起きた。

詳細はわからないし、わかりたくもないけど、たった2日のうちに事態は悪化していったようだ。これに嫌気を差した加盟者が次々と脱退宣言を掲示板に書き込んでいき、今では事実上、崩壊した状態にあるのだ。

それだけなら、別にどうでもいい。問題は、分裂した諸派が、シンとわたしの獲得競争を始めたところにある。

なにそれ——というのが正直なところだ。

だが、あるテスターが

——俺はシンの友達だ！

なんて嘘を言ったことから、妙な騒動が始まってしまったのだ。

つまり、“どの派閥が彼らを迎えるにふさわしいか？”という問題……うん。実際は“俺たちならともかくおまえらを相手にするわけないだろゴルァ！”な罵倒合戦というべきだろう。いずれにせよ、傍迷惑な話だ。

だが、この傍迷惑な事態は、思わぬ形でいろいろなところに飛び火している。

原因は、全リセットに伴うテスターの陣営移動だ。

公式サイトによると、現在の登録外装総数は総勢6027名らしい。内訳は、《赤》の陣営が2014名、《青》の陣営が1749名、《緑》の陣営が2273名。つまり、それなりに三等分されているのだ。

以前は《青》が500名前後しかいなかったことを思うと、かなりの大躍進と言わざるをえない。もつとも、その原動力が、外装オプシヨンの“恐竜の尾”ティラノテイルだったりするのだから、なんだかなあ、と思うしかない。

わたしも騒動の後になって初めて知ったが、VRN社が配布している外装をいじるソフトというのは、これ単体でもけっこう遊べてしまう代物らしい。実際、ネットでは、これを使って様々な有名人のそっくりさんを作ることやアキバ系キャラの再現に執念を燃やしているような人たちもいる。そうした人たちによって、“恐竜の尾”ティラノテイルを使うと、通常よりさらに身体比率を小さくできることが解明され、ちょっとした話題になった。だからこそ全リセット後の蒼都には、妙にスタイルがいい、小学生低学年としか思えない男の子や女の子が増えることになった、というわけだ。

なんというべきか……溜め息しか出てこない。

いずれにせよ。

テイルノテイル

“恐竜の尾”を使ったロリ系外装が選べるようになったことで、全リセットの際、《青》に鞍替えするテスターが現れた。その多くは、外装にこだわりを持っている者が多い《緑》のテスターだった。その結果、どこにでもある古参と新規の問題が蒼都でも起きてしまった。

特に大量移動してきた元《緑》の新規は、古参ぶる『蜥蜴同盟』をとかく毛嫌いした。そのため“青緑”と呼ばれるようになった新参の彼らは、彼らだけで固まるようになり、彼らは彼らで、わたしたちを古参の象徴として毛嫌いし……

「はぁ……」

思い出すだけで、疲れてきた。

「なんか……グダグダだよねえ」

不幸中の幸いは、直接的な争いが起きていないことぐらいだ。

「ほんと、グダグダだよ……んーっ、んっ」

シンは寝転がったまま、背伸びをした。

「ったく……考えてみたら、こういうのがイヤだったから、ネットゲイだけは、遊ばないようになっちゃったっていうのになぁ……」

「そうなの？」

「すぐ終わるやつは別だぞ。格ゲーとか、スポーツ系とか、レース系とか」

シンはゴロンとうつぶせになり、両腕を顎の下に入れた。

「いっそ、やめっかなあ」

「本気？」

「それができれば楽なんだよなあってこと」

ぼやいているということは、できれば辞めたくないと思ってるっぽい。

「こらっ」

わたしは立ち上がり、シンの背中を踏みつけた。

「まだ始まったばかりじゃない。ここでおめおめ引き下がるつもり？」

「おめおめ」

「うりうり」とシンを踏むわたし。

「もうちょい上」

「ここ？」

「ああ、そこ……っか、こりまで再現するってどうよ」

「こってんの？」

「いや。でも、いい感じ」

「どれ」

わたしはシンの背中にまたがり、グツと両拳を背筋に押しつけてみた。

バリアーがあるから直接触れることはできない。わたしの拳に感じる感触は、硬いゴムの感触だけだ。でも、圧力はしっかりと伝わる。殴られた時なんかもそうだ。全リセット前は痛みしか感じなかったが、今ではそういう感覚に変更されているのだ。

ということは……

「あれだな」とシン。

「なに？」

「圧迫系の攻撃。きっとあるぞ」

どうやらシンも同じことを考えていたらしい。

「蛇の巻き付きとか？」

「それだ」

「うー、蛇かあ……ちょっとイヤ、かなっ！」

「痛て。強すぎ」

「そう？　うちのパパだとこれぐらいだけど？」

「俺はパパじゃないっつーの」

「はいはい。で、これからどうする？　しばらくここに籠もる？」

「それしかないだろ」

「だよねえ」

この決断が、さらなるグダグダを呼ぶことになるのだが、それはわたしたちの予想から遙か斜め上にぶっとんだ方向での、グダグダだった。

6月24日(テスト30日目)は、21時にタイマーログインした。考えてみれば、一番早い時間にログインして、そのままトレーニングルームに駆け込めはいいのだ、という結論に達したからだ。そこでわたしたちは、初めてその存在に気が付いた。

ステータス・ウィンドウにある、“TITLE”という項目についてだ。

「シン。これ、なに？」

「さあ？」

開いてみると、すでに6つの称号が書き込まれていた。

上から順に“紋章の継承者(CREST HOLDER)”、“青の魔杖師(BLUE WIZ)”、“銃の達人(MASTER of GUN)”、“拳の達人(MASTER of FIST)”、“剣の達人(MASTER of SWORD)”、“槍の達人(MASTER of SPEAR)”。名前の横には、獲得した日付がついていた。

「ログの一部か？」とシン。

「これ……晒されないわよね？」

「今のところ晒されていないのは確かだぞ」

「なんで？」

「ログイン前に見てきた。公式サイト。何も載ってない」

「明快なお答え、ありがとうございました」

「いえいえ」

雑談はそこで終了。わたしたちは残るスタッフタイプのメニューに挑戦した。

苦戦した。

シンクコマンド
だいたい、思考操作そのものが難しすぎるのだ。コツを掴んだ気になっても、ふとできなくなることがあるのだから質^{たち}が悪い。确实

性を求めるなら、ある程度の音声操作も併用しないと、使い物にならないあたりが特に厄介といえる。もちろん、これはトレーニングである以上、わたしたちは、あえて思考操作のみによるクリアに固執したせいもあるだろう。

おかげでシンでさえ、スタッフタイプⅡパターンHをランクSでクリアするまで2時間かった。

「よしっ！」

小さなガッツポーズをしている。

一方のわたしは。

「さゝきゝこゝさゝれゝたゝあ」

ガツクリと項垂れていた。

ランクAだったのだ。

めっちゃくちゃ悔しい。前はわたしの方が早かったのに、今やガンタイプ以外のすべてで、シンがわたしの上をいつている。これを悔しがらずに何を悔しがれと。というか、なんで99体なわけ！？

ああ……あの照準さえロックできていればっ！！

「……んっ？」

急にシンが渋い声をあげた。

見ると彼の前に、小さなウィンドウが出現していた。

「なにそれ」

気になったわたしはあぐらをかいているシンに駆け寄り、背中側から覗き込んでみた。

—— CONGRATULATIONS !

「おめでとう (CONGRATULATIONS) ?」

「ひつつくな」

シンは顔をしかめつつも、ウィンドウの下にあるOKボタンにタッチした。

ウィンドウが切り替わる。

—— “戦いの達人 (MASTER of BATTLE)” の称号を獲得しました！ ボーナスとして、好きな魔杖をひとつだけ選べ

ます。どれにしますか？

ウィンドウの下には5枚のカードが並んでいた。
右から順に。

銃系の《ガン・オブ・ブルードラゴン》。

拳系の《スケール・オブ・ブルードラゴン》。

剣系の《ブレード・オブ・ブルードラゴン》。

槍系の《グレイブ・オブ・ブルードラゴン》。

杖系の《ロッド・オブ・ブルードラゴン》。

「へえ……全クリのボーナスでドラゴン系アイテム？」

「だな」

シンはガリガリと頭をかいた。

「しっかしまあ、難しい選択だな……おまえなら、どれ選ぶ？」

「銃」

「即答かよ」

「悪かったわね」

悲しいかな、今のところ自信があるのは、ガンタイプだけなのだ。

「だったら俺も銃にするか……」

「もったいなくない？」

「だよなあ」

シンは近接戦闘もけっこういける。おそらく、そういうプレイヤーはこれから先も少ないはずだ。なにしろ殴るということは殴られる確率がめちゃくちゃ高いわけで、そんな思い切った行動を、わざわざこのゲームでやろうという人が少ないはずだからだ。

実際、わたしもちょっと遠慮したい。

だから、こいつの殴り屋な気質はかなり貴重だと思う。

というわけで。

「鱗にしたら？ 前衛はシンに任せるから」
フォワード
バックス

「後衛はおまえか？」

「もちろん」

「人のこと、囹になるとしか考えてないだろ」

シンは苦笑気味にそう告げつつも、

「まあ、グラップルタイプは重複させやすいからな」

と、《スケール・オブ・ブルードラゴン》のカードに触れた。

シンの判断は正しいと思う。なにしろこのゲームでは、なんだかんだといって複数の魔杖を装備しても、同時に使いこなすのは難しいからだ。ただ、グラップルタイプは殴りさえすれば稼働してくれるので、間合いを詰められた時の“奥の手”として有効なのだ。

シンがカードに触れると、ウィンドウが消え、空中にカードが浮かび上がった。

それを左の人差し指と中指とではさみとると、一瞬だけ、目を細めた。

シンクコマンド
思考操作だ。

瞬間、カードは光の粒子と化した。かと思うと、両腕の《ホーリーバンテージ》も粒子と化しながら消え——どういうわけか、両腕と両脚が、ズワツと白い光の殻で覆われてしまった。

殻はすぐに砕けた。

「へえ……」とわたし。

「やっぱり」とシン。

両腕と両脚が青い竜鱗で覆われていた。掌も青く変色している。

「ここからここが固い」

指の付け根と第二関節の間の上半分が、どうやら固くなっているらしい。

よく見れば、肘の内側や脇の下も竜鱗に覆われておらず、掌と同じように、皮膚が青黒く変色していた。

「境界は？」

「待て」

シンはおもむろにTシャツを脱いだ。ドキツとしたが、わたしとしても興味があるので、顔をそむけず、しっかりと確認させてもらった。

むむむ。

けっこう胸板が厚い。肋骨が浮いてるけど、ガリ痩せて感じでもない。腹筋も微妙に割れている。脇毛も胸毛も生えていない。意外とキレイな肌をしてる。それになんだが、逞しい感じも少し……「なるほど」

シンは感心するように自分の身体を確かめていた。

両腕の鱗は、首の付け根まで続いている。ちょうど肩を中心に、首の付け根までの半径で円を描いた感じに鱗が広がっているのだ。名前はわからないけど、時代劇で見た武士の衣装に似たような感じだ。わかるかな？

「こっちはビキニラインだな」

シンはズボンの中に手を入れてから、そう告げてきた。

「うえはここ」

ズボンの外から、脚の付け根を両手で押さえる。

「ここから下が全部鱗」

「コマネチから下？」

「なんだそれ。まあ、その通りだけだな」

シンはTシャツを着込むと、その場でグラップルタイプの構えをし、軽く動いた。

「どう？」とわたし。

「動きに支障無し」

シンは屈伸運動を始める。

「違和感ゼロだな……ちよつと試していいか？」

「もちろん」

シンはグラップルタイプIIパターンHを選択した。ランダムに出現するブラックウーンズを制限時間内に100匹倒すというメニューだ。

その結果は、目を見張るものがあつた。

これまで数発殴ったり蹴ったりしないと倒れなかったブラックウーンズが、すべて一発でロストしていく。まるで触れるだけでウーンズが消えていくような鮮やかさだ。

シンは途中で、ギブアップ、と宣言した。

わたしのほうに戻ってくる。

「いいぞ、これ」

「ちよつと……凄すぎない？」

「そうでもないだろ。ウーンズなんて最下級のモンスターだろ？」

おまえもこれにしとけよ。一応、防御効果もあるっぽいし」

「えーっ」

「我慢しろよ」

シンは微笑んだ。

「俺たち、たった2人なんだぞ？　これから先のこと考えたら、防御も大事だろ」

「……まあ、そうだけどさ」

わたしは口を尖らせながら、渋々といった感じに、シンの申し出を受け入れた。

でも、ちよつと嬉しかった。

少なくともシンは続ける気でいてくれるし、わたしと2人だけで攻略していくつもりでいるとわかったから……あっ、ううん、後者は無い。前者だけ。うん。嬉しかった理由は、前者だけ。

というわけで。

わたしは残り時間で、必死になってスタッフタイプHパターンHをランクSでクリアした。その後、迷うことなく、同じ《スケール・オブ・ブルードラゴン》を選び、竜鱗をまとった自分の外装に、ちよつとだけ感動したりもした。

これがグダグダの決定打になった。

翌朝、目を覚ましたわたしは、欠伸をしながら朝風呂を浴びにいった。

「おはよう、鈴音」

台所には、エプロン姿のパパが立っていた。我が家ではいつものことだ。なにしろうちのママは小説家なのだ。ペンネームは椎名亜璃栖^{りす}。ええっと、まあ、ボーイズラブ小説界では、それなりに売れている名前です。はい。

「ママ、また徹夜？」

「×切が近いらしいよ。お昼、お願いしてもいいかな？」
「了解」

わたしはそのまま朝風呂を浴びさせて貰った。

ちなみにパパはお役所勤めだ。けっこうな高給取りでもある。おばあちゃんがママを強引に連れ戻せない理由も、半分以上が、パパの役職に關係していると断言している。

普通のサラリーマンだったらこうはいかない。

本家の界限は鮎川家の城下町も同然だそう。今でも日本の小さな地方都市には、そういうところが幾つかあるらしい。当然、特殊な自営業の方々とおつきあいがあり、ママやわたしなんか、簡単に拉致監禁できるだけの力も持っている。

でも、おばあちゃんはそのまでの非常手段を使わない。

パパがキャリア官僚だからだ。

それも、文部科学省でけっこう偉い人だったりするし。

おかげでわたしたち家族は、今もこうして東京に住んでいられるのだ。

「勘弁して欲しいよねえ」

思わずそんな言葉をつぶやいていた。

实在^{じじつ}現実でも仮想^{むじよう}現実でも人間関係で苦労させられるなんて……

ホント、シンと2人っきりで隔離されていた頃が1番良かった。

今も悪くないけど、あの頃は闘技場コロセウムを独占していたのだ。

広い芝生も、青い空も、ゼーんぶ2人だけのものだった。

なんだか小さい頃のことを思い出してしまう。

あの頃は男の子とも、どろんこまみれになって遊び回ったものだ。

「はあ……」

わたしは溜め息をつきながらお風呂から出た。

と、パパがちょうど、ママの仕事部屋から出てきた

「ああ、鈴音も食べるよね？」

「食べる！」

朝食を食べ終わると、パパはママに一声かけてから、朝の会議があるとかで早めに出勤した。

後片付けはわたしが引き受けた。といっても、軽く拭ってから食器洗淨機に入れるだけだ。このほうが手洗いより水も洗剤も大して使わないのだから、便利な世の中になったと思う。

「ポチツとな」

スタートボタンを押したわたしは、手を拭きながら壁掛け時計を見てみた。

午前8時3分。

今日は特に予定が無い。習い事はすべて中等部卒業と同時にやめている。ピアノもそう、水泳もそう、バレエダンスもそう、塾通いもそう。ついでに友達と遊ぶ約束も無い。明日になれば茶道部の集まりがあるけど、それだって午後になってからだし、中等部も茶道部だったわたしにすれば、特にこれという準備も必要無い。

「うん」

わたしは部屋に戻り、ネットで情報を集めることにした。もし起きているなら、シンを呼んで別のオンラインゲームをやろう。『Ultimate Word』なら、わたしもやり込んでるから、いい勝負になるはずだ。

そういえばゲームのコントローラー、最近、触れてもいないけど

……指、動くかな？

「——んっ？」

画面にヴォイスチャットのアドレスコールが来ていると表示されていた。

シンだった。

ちよっただけ焦った。風呂上がりのまま、自慢の黒髪にブラシも通していなかったのだ。

鏡台にGO。

少し悩んでから、えいつ、とポニーテイルに——の前に、下着、下着。ノーブラはまずい。いくらAカップでも、ノーブラはちよっ

と。
急いでTシャツを脱ぎ、筆筒から取り出した淡いピンク色のソフ
トブラを装着。ひらめきを感じたわたしは、クローゼットからピン
ク系のキャミソールを取り出し、下は普段着のスパッツを身につけ
た。

鏡台に戻り、髪をポニーテイルにする。

一瞬悩む。

化粧は——やっぱりパス。

パソコンに戻る。

アドレスコールは続いていた。

インカムを付け、カメラ映りを確認。咳払いをひとつ。そのうえ
で、コールに応えた。

「お待たせ」

〈待たされた〉

画面にシンが映し出された。部屋の片付けは、あんまり進んでい
ないらしい。今日は灰色のTシャツを着込み、余計根暗に見えるだ
けの眼鏡をかけ、片手にジュースのペットボトルを持った状態で映
っていた。

〈音声だけでもいいから早くでろよ〉

「女にはいろいろあるのよ」

そこでわたしは違和感を覚えた。シンの映る角度が、以前と少し違うのだ。

「もしかして、新しいモニターに変えた？」

〈わかるか？〉

「なんとなく」

〈昨日、姉貴の旦那から譲ってもらったんだ。古いヤツ〉

「へえ……お姉さん、いるんだ」

〈まあな。最近、結婚して出てったところだけど〉

「へえ」

なるほど。それで人付き合いが苦手そうなのに、女のわたしとい
ても変に緊張しないんだ。なるほどなあ。

「それでなに？ またネットで変なことあったとか？」

〈公式見ろ。名前、また晒されてるぞ〉

「うそっ！ どこに！？」

〈公式の——〉

画面を小さくして、ブラウザを起動させる。公式サイトを表示し、
シンの言う通りの場所を探してみると……本当だった。場所は“ニ
ュース”の中の“グローバルニュース”。“今月の称号獲得者”と
いうところに、わたしたちの名前と獲得した称号、その時間がズラ
ズラと並んでいた。

よく見ると、わたしたち以外の名前もかなり載っている。しかし、
一番上の“紋章の継承者（CREST HOLDER）”にはシン
とわたしの名前しか載っていない。“戦いの達人（MASTER
of BATTLE）”もそう。他の“達人（MASTER）”と
“青の魔杖師（BLUE WIZ）”も、わたしとシンがワンツー
を独占している。名前が無いのは、“赤の魔杖師（RED WIZ）
”と“緑の魔杖師（GREEN WIZ）”のふたつだけだ。

「昨日まで無かったのに……」

〈ちなみにメールでの抗議はもうやった。返信も来た〉
「なんて言ってるの？」

〈アドレス教えろ。転送するから〉

わたしはパソコン用のメールアドレスを教えた。すぐメールがきた。

一読して、溜め息をつく。

「他のユーザーからの要望”ってこと？」

〈ああ。それに名前だけだから、我慢しろだと〉

署名は蒼海市長だった。あの人、いつ寝てるんだろ？

「ってことは……また火に油が注がれちゃったりする？」

〈めばしいリンク、メールにまとめる〉

シンは左下を見ながら、しばらく作業を続けた。

〈送った〉

「どこのリンク？」

〈『Xちゃんねる』の関連スレと『TEOのプレイ日記』と『蜥蜴同盟』と『私立人魚姫学園初等部』と、念のために『荒野の奇人』と『ひつまぶし』。あと、俺のケータイの番号とメルアドもいれていた〉

ちょっと驚いた。

「ケータイって……簡単に教えちゃダメって言われてない？」

〈だったらアドレスコール、さっさと出ろ〉

「はいはい」

直後、パソコン用のメールアドレスに着信があった。

今言われたことが書かれたメールだった。

わたしは充電器のケータイを外し、メールに書かれた電話番号にかけてみた。インカムの向こうから何度も咳払いが聞こえた。どうやら着信音を咳払いにしているらしい。それ、いいかも。わたしもあとで変えようかな。

画面の中で、シンが携帯電話に出た。間髪入れず、わたしは声色を作る。

「もしもし、わたしリカちゃん♪」

〈間に合ってる〉

シンは速効で電話を切った。画面の中では、シンが親指で首をか
つきる仕草をしていた。

わたしもやり返し、ついでに上にあげた親指を、突き下げた。

へいから聞け。順番に説明してやる

こうしてシンが教えてくれた昨夜21時からの騒動は、頭を抱え
たくなるような代物だった。



わたしたちは気づきもしなかったが、昨日の夜メンテ後、グロー
バルニュースが刷新されていたようだ。グローバルニュースは月更
新のページなので、わたしもシンも重視してしなかったのが災いし
たのだ。

ただ、そこからリンクで跳ぶことがきできる“今月の称号獲得者”
はリアルタイム更新だった。これにネットの人々が気づいたのは、
わたしたちがログインしたあとのことだった。だからシンに非はな
い。ということにしておこう。あまりにも可哀想だから。

それはともかく。

祭りは23時をすぎたところから始まった。

キツカケはシンが、“魔法の達人(MASTER of MAGIC)”と“戦いの達人(MASTER of BATTLE)”
を獲得したことにある。それも獲得時刻は秒数まで一緒だった。さ
らにしばらくして、わたしも両方を同じ時刻に獲得した。

これが決定打となった。

かつてシンは、こんなことを書いている。

634 名前…SHIN ◆O4TEsRfEf / 投稿日…X0
/06/22 21…37…13 ID…*****

わかった。俺はもう二度と書き込まない。帰ってきたら、
相棒にもそう話しておく。

それと、中で誰かに話し掛けられても、俺は無視する。絶
対、俺たちに話し掛けるな。

相棒以外のパーティメンバーもいない。

最低でもトレーニングの全メニュー、ランクSクリアを二
回やれるようになってからこい。

話はそれからだ。

最後に、俺が本当に試練場をクリアした証拠を残しておく。

「ファントジア」は魔杖の名前。十二の鍵を探せば見つかる。
それがグランドイベント。

わたしのニセモノが出てきたPOスレへの書き込みだ。いみじく
も称号の公開は、そんなシンの言葉を裏付けてしまった。そこから
“SHINとLIN”——略してSL——が、今の時点での最強コ
ンビであると目されることになった。

問題はそのあとだ。

まず、POスレを荒らす人が続出した。シンを罵倒したPOスレ
の住人を悪者扱いする人たちが、過去の書き込みを転載しまくった
のだ。

ログアウトしたシンは、眠い目をこすりながらザッとPOスレを

読んで……呆れたらしい。ついでに、もうどうにでもなれとばかりに、こんなことを書き込んでから、寝たそうだ。

200 名前…SHIN ◆O4TEsRfEf／ 投稿日…X0
／06／27 00…26…44 ID…*****

勘弁しろよ……こうなったら前言撤回するしかないだろ

Orz

いいか、騒いでるおまえ！ 俺もこの住人だ！ 文句あるか！

それ以前に、人をダシにして他人様に迷惑かけんな（。D
。ゴルア！

眠いから寝る。

あとは好きにしてくれ。

ノシ

シンはすぐ、PVベッドの誘眠機能で眠ってしまったそうだ。
だがしかし。

へとりあえず議論スレのパート2の108、読んでみる

議論スレとは隔離スレの一種だ。本スレで限られた面々が長々とした討論を始めると、そこに行け、と言われる場所であり、普段はそれほど使われていない場所でもある。なにしろパート1の正式名称は『POで幼女やる香具師はロリコンのキモオタ』だったりする。これを廃品利用する形で議論スレが始まり、パート2からは『PO

議論スレ P A R T 0 1』と名を変え、『マトメ』にはパート3が
現行スレだと表示されている。

このうちパート2の108には、非常にわかりやすく事の経緯が
まとめられていた。

108 名前…まとめ子象 ◆w/JOB33333 投稿日…X
0/06/27 07..19..53 ID…*****

まとめちやうぞお まとめちやうぞお

|||||

X0/06/22 20..47 S LのLの偽者がP O本
スレに登場

← X0/06/22 20..57 神ことS LのSの本物が
降臨。でも住人は偽者扱いする

← X0/06/22 21..37 神が試練場攻略者しか知
らない情報を書き込み、モウコネエヨ！（A A r y

← X0/06/24 01..22 本物であることが証明さ
れる。住人が謝罪しまくる ↓ 懺悔スレ爆誕

← X0/06/26 09..18 公式サイトで称号情報公
開。S Lの凄まじさを実証 ナニ アノバケモノブリ・・・

← X0/06/27 ー..ー P O本スレが荒らされる

← X0/06/27 00..26 神の再降臨 御言葉を残
され、就寝する

← X 0 / 0 6 / 2 7 0 1 .. 0 3 青組ばかり目立つこと
を愚痴ったブログが炎上 キモチハ ワカル

← X 0 / 0 6 / 2 7 0 1 .. 2 6 H N から放火魔が『蜥蜴
同盟』であることがわかり、そっちが炎上
←

1 0 9 名前…まとめ子象 ◆ w / J O B 3 3 3 3 投稿日… X
0 / 0 6 / 2 7 0 7 .. 2 0 .. 1 3 I D .. * * * * * * * *

← X 0 / 0 6 / 2 7 0 1 .. 4 5 『私立人魚姫学園初等部』
が宣戦布告、『蜥蜴同盟』の悪事を暴露

← X 0 / 0 6 / 2 7 0 3 .. * * 『蜥蜴同盟』、掲示板消滅

← X 0 / 0 6 / 2 7 0 3 .. * * P O 本スレにアンチよう
いよの粘着くん出現 ドウカンガエテモ・・・

← X 0 / 0 6 / 2 7 0 4 .. 0 3 「P O で幼女やる香具師
はロリコンのキモオタ」スレが立つ

← X 0 / 0 6 / 2 7 0 4 .. 3 7 マトメ管理人からコテハ
ン大動員令が発令される (w

← X 0 / 0 6 / 2 7 0 5 .. 4 0 を最後に粘着くんが消え
る ムチャシヤガッテ (A A r y

← X 0 / 0 6 / 2 7 0 5 .. 5 9 幼女スレがアンチ蜥蜴ス

レと化したあと、「議論スレ」に改名して新スレへ

←

X0/06/27 06..-- 住人、さすがに疲れる

モウダメポ

←

112 名前..まとめ子象 ◆w/JOB33333 投稿日..X
0/06/27 07..20..33 ID..*****

←

X0/06/27 06..57 JUNE ◆gf i82

Tg2.j+ が「仲間にしてあげてもいい」発言 キター！

←

X0/06/27 07..03 JUNE ◆gf i82

Tg2.j+ の「デュエルなら麒麟より私の方が強い」発言 キタ
ー！！

←

X0/06/27 07..-- 住人再起動(w ↑今

ここ

←

X0/06/27 --..-- 神の再降臨？ オマチシ

テオリマス

||||||||||||||||||||

■補足..神の御言葉

<いいか、騒いでるおまえ！ 俺もこの住人だ！ 文句

あるか！

<それ以前に、人をダシにして他人様に迷惑かけんな。

㇏。ゴルー！

http://game10.xch.net/test
/read.cgi/mmo/11190113354/200

そうだぞお 誰かに迷惑をかけるのはいけないんだぞお

118 名前…名も無き冒険家 投稿日…X0／06／27 07..
21…41 ID…*****

<<108, 109, 112

ぞうさん、乙。補足として某所の人名録をどうぞ

||||||||||||||||||||||||||||||||

<■最低でも知っておかないと恥をかく人

<魔王…我がマトメのエロイ人。マトメは自鯖運用です。

アクセスはほどほどに

<妖精…修正や校正をしてくれるマトメの中の妖精さん。

主食はテストの報告

<子象…スレで情報をまとめてくる子象さん。主食はテス

ターの報告

<29…念願の猫耳マツチヨになった赤緑の人。抱腹絶倒

のテスト日記は必読!

<暇人…手段と目的が入れ替わってきた緑の翁。若い者に

は負けないらしい

<荒野…絵筆実装でエロイことをバラした赤い人。速写の

達人なのですよ紳士(語尾

<姉御…赤の魔女。荒野さんの奥さん。このたび名実共に

赤最強の座を獲得(おめ

<SL(神&麒麟)…青の最強コンビ。クレストホルダー。

スタッフ関係者説有り

<鴉…緑の最強剣士。無冠の帝王。犬なのに鴉とはこれい

かに。

121 名前…名も無き冒険家 投稿日…X0／06／27 07..
22…01 ID…*****

＜■時の人・・蜥蜴の乱編

算が苦手

＜高坊…蜥●同盟の青い幹部。閣下のお気に入り。すぐ切れて、すぐ謝る

＜手尾.. 某ブログの赤い人。確かに青ばかり目立つのは寂しいと思います

く先生…某元中学の青緑な管理人。ようし、よく好き。すぐ首を吊る。愚痴がイタイ

主婦

＜黒怒＞某元中学の青緑な人。蜥蜴嫌いの急先鋒。自称、

く蟻巣・・某元中学の青緑な人。1行スレ大杉。自称、リア中

追伸 JUNEを時の人に加えるべきだと思ったのは秘密

「なにこれ」

と言っしかない。時計を見ると8時30分をまわったばかり。駆け足で読み流したが、わたしたちの与り知らぬところで、無関係な争いが始まったと思えない。

だが、

〈ここまでが前振り〉

シンは溜め息混じりにそう告げてきた。

〈本題は、そのあとだ。156、読んでみる〉

156 名前：JUNE ◆ g f i 8 2 T g 2 j + 投稿日：X0
／06／27 07..22..01 ID：*****

挑戦状

SHIN様がこちらの住人であるということはLINという人もここを読んでいると思います

騙されてはいけません

LINというテスターはSHIN様を騙しSHIN様のノウハウを独り占めにすることで

自分も強くなったように見せかけているペテン師です
私がそのことを証明してあげます

闘技場のバトルロワイヤルで戦えばLINなんていうネカマに私が負けるはずがありません

今日10時に闘技場で待っています

ネカマは逃げてもかまいません

SHIN様だけ来てください

必ず私がSHIN様を本当の最強のプレイヤーにしてあげます

私にはそれができます

SHIN様のパートナーに最もふさわしいのは私です

えーっと……………。

「読んだか？」とシン。

「読んだけど……」

どう反応すればいいんだろう。これは挑戦状というより——
「これ、あんた宛のラブレター？」

〈勘弁してくれ〉

シンは小さな画面の中で、ガツクリと項垂れていた。

気持ちはわかる。わたしもこの人と関わりたくない。だいたい“必ず私がSHIN様を本当の最強のプレイヤーにしてあげます”って、どういうことだろう。まさかこの人、わたしがシンを鍛えたと思っているんだろうか？ いや、その前に“LINというテスターはSHIN様を騙しSHIN様のノウハウを独り占めにすることで”と書いているわけだから、シンの強さが独力によるものだって自覚しているはずで……

「……んっ？」

何かが引つかかった。

どういうわけか、わたしは一昨日のことを思い出した。おばあちゃんのことだ。

——まったく、恥ずかしいったらありやしない。せっかく将来有望な良家のご子息をご紹介いただいたというのに、仮病で退席するだなんて……鮎川の女のくせに、よくもまあ、人様の顔に泥を塗るようなことを平気でやれるもんね、

こっちのほうが日本語になっている。

でも、根っこが似ている気がする。

なんというか……謙遜の押しつけ？ 幸福の押し売り？

うん。なんとなくそういう気がする。

おばあちゃんにとっての幸福とは、間違いなく、鮎川の家を継ぐことだ。だからこそ、ママにもそれを押しつけ、わたしにも現在進行形で押しつけようとしている。でも、名家を継いだからといって、必ずしも幸せになれるわけじゃない。そのことを、おばあちゃんは絶対に考えようとしない。それと似ているのだ。

JUNEという人にとっての“幸福”はシンを強くすること……じゃなくて、多分、シンと親しくなることなんだろう。だからこそ、シンにとって唯一のパーティーメンバーであるわたしに、強い敵愾心

を抱いている。

でも、シンと一緒にいるからといって、JUNEという人が幸せになるとは思えない。

だいたい、シンは“友達”として考えると最低の相手だ。

無口だし、根暗だし、ゲームのことしか考えていないし。

仮に。

あくまで仮定の話として。

考えをまとめるために、そういう可能性も検討するとしたなら。

シンは“恋人”としても、どうかと思う。

うん、そう思うことにする。

それで、だ。

だったらわたしは、どうして一緒にいるのかといえ——やっぱ
り“相棒”だからだ。

——きつとね、運動部とかで一緒に練習した同期生に感じるものと
一緒だよ。

とはパパの言葉だが、その通りだと思う。

「なるほどね……」

へんっ？

「あっ、ううん。こっちの話」

わたしはひらひらと手を振ってから、ヴォイスチャットのウィン
ドウを最大化した。

シンは腕をくみつつ、釈然としない様子で小首を傾げていた。

まずいな——と思う。

なにがまずいかといえば……もう少し肉がつけば、けっこうイケ
てることを再認識したからだ。

「ねえ。どうでもいいこと、聞いていい？」

〈どうでもいいなら質問すんな〉

「あんた、どこ住んでんの？」

〈函館。そっちは？〉

「東京の自由が丘」

するとシンは、

〈ああ……近場だったら直に相談できたのか。まったく、最初に気づけよ〉

終わりの言葉は自分に向けて言ったものだろう。

はてさて。

「遠すぎるよね……」

ポツリとつぶやいたわたしは、うん、と軽くうなずいた。

遠距離恋愛は趣味じゃない。よって、そういうことは今後一切、考えないことにする。うん、それでいい。だいたい、恋愛沙汰なんか起こしたら、せつかくのPVも楽しめなくなるし、学校でもたいへんだそうし、おばあちゃんのこともあるし。

〈まあ……別に遠くたって、こうして話せるから、いいか〉

一瞬、ドキツとした。

画面の中のシンは、左下——別のモニター？——を向きつつ、タンタンタンツとリズムカルにキーを叩いていた。

なんだ。見透かされたかと思ったじゃない。

〈とにかく〉

シンはこっちに目だけを向けた。

〈妙なヤツに粘着されるわ、何かするたびにグダグダになるわ……〉
わたしはハツとなった。

「まさか本気で辞めるとか言わないわよね？」

〈言う〉

シンは、まっすぐわたしを見ながら速効で答えを口にした。

〈面倒くせえからもう辞める。でもまあ、辞めたあと、おまえにアレコレ粘着されるのもなんだから、とりあえず状況くらいは——〉

「どあほ！」

わたしはめいっぱい怒鳴った。ついでに21インチの液晶ディスプレイをガシッと掴み、画面に顔を寄せた。驚いたシンはギョツとしながら逃げるようにのけぞっている。この後におよんで、まだ逃げるのか、このアホンダラ！

「つまりなに！？ あたしに全部押しつけてハイサヨウナラって魂胆なわけ！？」

〈だから説明してんだろ〉

シンはムツとしながら言い返したきた。でも、まだのけぞっている。そればかりか、顔を横に向けていた。

「こっち見ろ！」

〈……………〉

「人と話す時は目を見て話せて言われなかった！？」

〈……………〉

シンは渋々といった様子でこっちに顔を戻した。でも、まだのけぞってる。

「あんたね……」

ああ、もう！ なんだってこんなやつにトキメいたりしたのよ！
「いい！？ ここであんたが消えたら、なにがどうなろうと、間違
いなくわたしが粘着されるじゃない！ つまりあんたは、わたしが
どうなろうと知ったこっちゃないっていうわけ！？ だったらなん
でケータイの番号までこっちに教えんのよ！ まさか何かあったら
連絡としろとか言うつもり！？ 北海道にいるあんたに何ができ
るわけ！？ どうなのよ！！」

〈……………〉

「都合悪いからって黙秘すんな！ この根暗の凶悪顔！」

〈っせえな！〉

シンは拳を振り下ろした。

画面がかすかに揺れた。

〈続けようや続けまいが俺の勝手だろ！ この貧乳！〉

「なによムツツリスケベ！」

〈胸なんか姉貴ので見飽きてるんだよ、ペチャパイ！〉

「ああああ！ もう、頭に来た！」

わたしは時計を見た。時刻は午前9時を少しすぎている。

「あっちに来なさい！ 今すぐ！！」

わたしは通信を切った。

「なにが貧乳よ！ ペチャパイよ！ 悪かったわね！ 小さいのは

鮎川の血筋よ！」

怒鳴りながらP Vベッドに寝転がる。

怒り狂っていたが、スイッチを押すと冗談のように意識が遠のいていった。

お馴染みのログインメッセージが耳元で流れる。

両脚がしっかりと地面を踏みしめる。

わたしはバツと顔をあげた。真正面の鏡には黒髪色白の鮎川鈴音ではなく、金髪濃褐色肌のLINが映っていた。

息を胸いっぱい吸い込む。

吐く。

両頬をピシャツと叩く。

「よしっ！」

気合いを入れてログインボックスを出る。

ざわめきが聞こえた。

なぜか正門広場にはたくさんのプレイヤーが集まっていた。それも、まるで不可視の壁があるかのように、ログインボックスから正門までのスペースがポツカリと空いていた。そのうえ、正門の前には4名ほどの、子供にしか見えない外装のプレイヤーが集まっていた。その全員が驚きの目でわたしのほうを見ていた。

――シュッ

左後ろからドアの開く音が聞こえた。

目を向けると、シンが出てきた。

「……………」

「……………」

わたしたちは無言で睨み合った。

わたしは顎で正門を示した。シンはパキポキと指を鳴らした。言わなくても、行くべき場所がトレーニングルームでないことぐらい、伝わっているようだ。

そう、向かう場所はグラウンド——蒼都で唯一、PVP（プレイヤー対戦）が可能な場所だ。

わたしたちは並んで歩き出した。

周囲が静まりかえった。

わたしもシンも、前を睨みながら、黙々と歩いている。

正門に來ると、例の子供外装4人が行く手を邪魔した。ひとりが前に出て、残り3人が後ろで身をすくめている。その先頭にいる子供が、カチコチに緊張しながら、何かを言おうと口をパクパクさせていた。

でも、わたしとシンは、まったく同じタイミングで、同じ言葉を吐きだしていた。

「「どけ」」

互いに睨み合う。

シンは竜眼をギラつかせながら、スッと左手を自分の顔の横まであげた。

「無制限だ」

その指にカードが出現していた。口元が微妙にニヤけている。挑発的な笑い方だ。

ムカついた。

「コール……」

悔しかったが、最初のコマンドを声で出したわたしは、シンと同じカードを思考操作で呼び出した。本当に悔しいが、シンのように手の中に呼び出せないわたしは、デフォルトの位置である眼前にカードを出現させていた。

わたしは両手でカードを挟み込み、

「オープン！」

と怒鳴った。

シンは無言でカードを展開した。

ほぼ同時に、わたしとシンの両腕と両脚が光りに包まれ、パツと光の殻が砕けた。

どよめきが起きた。わたしたちの両腕が、青い竜鱗に覆われたからだ。

スケール・オブ・ブルードラゴン

拳闘系魔杖――“戦いの達人（MASTER of BATTLE）”になると獲得できるボーナスカードのひとつ。下手に付けたまましていると目立ってしまうため、前回のログアウト時、ウィンドウに収納しておいたものだ。

わたしはシンに言い放った。

「絶対、ぶつとばす」

シンはパーンと右拳を左手に叩きつけることで応えた。

わたしたちは同時に前を向いた。

邪魔な子供外装を押し分け、正門に入る。

「“ころせうむ”によるこそ」と窓口のNPC。「ここでは、“ばとるろいやる”と“とれーにんぐ”をえらぶことができます。どちらをよりようになりますか？」

「「バトルロイヤル！」」

わたしたちは、またもや同時に同じ言葉を怒鳴りつけていた。

7回ほどシンを撃ち殺したところで、わたしの鬱憤は随分と解消された。

その隙をつくように、シンがわたしを殴り殺した。

でも、最初にあった怒りのオーラは微塵も感じられなかった。途中からシンも、どこことなく“わたしの2丁拳銃を攻略する”ことに重きを置き始めたのだ。一方、わたしのほうも、射撃補助線すらも避けてみせるシンに“どうすれば当てられるか”を考え続けるようになり……

つまり、わたしたちは似たもの同士だったのだ。

「ふう……」

わたしはログインボックスで復活すると、溜め息をついた。

バトルロイヤルで殺されると、正門広場のログインボックスに戻る。わたしはボックスの鏡に額を押しつけながら、しばらくの間、反省してみた。

悪いのはシンだ。間違いない。

でも、わたしも少し言い過ぎた。

だいたい、先に恐い目つき（コンプレックス）を刺激したのはわたしのほうだ。

だから胸のこと（こっちのコンプレックス）を突いてきたことも、少しは情状酌量の余地があるといえるわけで……

「よしっ」

わたしはボックスを出た。

誰もいない正門広場を抜け、窓口のNPCに近づき、バトルロイヤルに再挑戦した。

広いサッカー場のような芝生の上に転移する。

出現位置はランダムに決まる。今回は北側中央寄りのところに出現した。

後ろからざわめきが聞こえる。観客席の野次馬たちだ。

わたしたちが喧嘩を始めて間もなく、多くのプレイヤーが競うように乱入してきた。頭に血が昇っていたわたしとシンは、邪魔なプレイヤーや攻撃してくるプレイヤーを排除しながら戦い続け――シンが2回目のデッドになる頃には、もうわたしたちしかグラウンドに残っていなかった。

全員、観客席からの見物に切り替えたのだ。

「うざいかも……」

とつぶやいてみたが、グラウンドと観客席の間には不可視の壁がある。無視するしかない。

「……っと」

シンを探す。いた。グラウンドの中央で大の字になって寝そべっている。

わたしは歩き出した。

銃は抜かない。

警戒もしない。

微風が横から吹いた。芝生がザワついた。

「試合放棄？」

近づいたところで、わたしは両腕をくみながらシンに話し掛けてみた。

シンは眠るように目を閉じながら、ピクリとも動こうとしなかった。

「なんとか言いなさいよ」

きつと「なんとか」と言ってくる。

そう思ったのに。

「悪かった」

予想外の言葉が聞こえた。

「謝る」

とも聞こえた。

わたしは頬に張り付く後れ毛を指でかきあげてから、キツイ口調

で言い返した。

「なんについて謝ってんのか、ハッキリ言いなさいよ」

「全部」

シンは目を開けた。黄金色の竜眼は、不思議なほど澄んだ光を放っていた。

「もう、辞めねえよ」

「当たり前でしょ」

「だよな」

シンは再び目を閉じた。

「こんな面白いこと、途中で投げ出すなんて……もったいないよな……」

風が吹いた。

芝生がザワめいた。

「……ねえ」

「んっ？」

「わたしも謝っとく」

風になびく髪を押さえるふりをしながら、わたしは顔を横に向けた。

「ちよつと……言い過ぎた……かも」

「……かも？」

「そ、そっちだって同じでしょ」

「……だな」

「そうよ」

「ああ」

「……………」

「……………」

夏の日差しが心地いい。

吹き抜ける風も最高だ。

野次馬の声も、どういうわけか気にならなくなってきた。

なんとなく、二人だけで隔離されていたことを思い出してしまう。

あの頃は、この広い芝生も、あの青い空も、なにもかも、わたしたち二人だけのものだった……

——ドゴッ！

突如として、後頭部に衝撃が走った。鈍器で強く殴られたような痛みもあった。

どよめきが聞こえた。

前のめりになったわたしは、痛みを堪えつつ、脇の下から後ろを覗いてみた。

遠くに、両手で《スペルガン》を構えている子供外装のプレイヤーがいる。

両脇にもいた。

その後ろにもいた。

全員、魔杖は《スペルガン》だった。服はヒラヒラでロリータチックなピンク色のドレスだった。

どこかで見たことがある気もしたが、すぐに思い出すことはできなかった。

「くるぞ」

寝そべったままのシンがポツリとつぶやいた。

「手伝いなさいよ！」

わたしは自分から前に転がった。

間近を、銃弾が飛び抜けた。

わたしは受け身をとってつつかルツと向き直った。見たところ、左右のふたりは《スペルガン》を持っているだけで構えてもいない。構えているのは中央のひとりだけだ。

片膝をついた姿勢で上半身を捻り、右腰の《スペルガン》をクイックドロ―。

問答無用で中央のひとりを撃つ。

いちいち狙いは定めない。

当たる時は当たる。外れる時は外れる。でも、不思議とわたしは外さない。それだけのことだ。

連射しながら、

「コール」

とつぶやき、思考操作で別の《スペルガン》カードを呼び出す。左手でぐしゃっと握りつぶした。

「オープン」

左手の中で《スペルガン》が具現化する。

その頃には右手の《スペルガン》が弾切れになるが、これをホルスターに戻しながら、前方につきだした左の《スペルガン》で射撃を続ける。さらにカートリッジカードを呼び出し、右手で握りつぶしながら。

「オープン」

《スペルガン》が弾切れを起こすが、間髪入れずに入れ替える。

その頃にはホルスターに差し込んだ《スペルガン》が、同じガンベルトのカードホルダーに差し込んであるカートリッジカードを消費して、自動装填を終えていた。

右手で《スペルガン》を抜く。

二丁の《スペルガン》で同時に撃つ。

両方空になる頃には、中央の子供外装が青白い光の柱に包まれ、消え去った。

他の子供外装があわてて自分の左肩をダブルタップ。展開したウインドウを叩き、次々とグラウンドから消えていった。

風が吹き抜ける。

不意に観客席から、盛大な歓声が轟いてきた。

「お見事」

振り返ると、すでに立ち上がっていたシンが、左手を腰にあて、苦笑まじりに子供外装たちがいた場所を眺めていた。

「あんたねえ……少しは手伝いなさいよ」

右の《スペルガン》をホルスターに戻し、左の《スペルガン》を思考操作でウインドウに収納。収納は楽だからコマンドをつぶやく必要が無い。でも、出すのはまだまだ不得意だ。今度、シンにコッ

を教わらないと……

「おい」とシン。

「なに？」

「なんでこの距離で当たる」

「へっ？」

「狙えば当たる。それはわかる。でも……連射だと無理だろ。普通」
「初弾以外、少し下を狙うだけ……じゃないの？」

シンはガリガリと頭をかきながら、「うーん」とうなりだした。

「……はあ」

やっぱりこいつ、ゲームのことしか頭に無いみたい。

なんだかなあ。

「そうだ」

わたしはシンに向き直った。

「こういうことはハッキリさせておくのがわたしの流儀なわけ」

「んっ？」

「だから、挑戦状のことと、あんたのことと、喧嘩のこと」

「……で？」

「挑戦状は無視。あんたはやめない。喧嘩は手打ち。文句ある？」

シンはジッとわたしを見下ろし、なぜか空を見上げ、再びわたしに視線を戻した。

「拒否していいか？」

「ほお……」

わたしは目を細めながら《スペルガン》に手をかけた。

「いや、だからな」

シンは困ったとばかりに、ガリガリと頭をかいた。

「喧嘩のことだ、喧嘩のこと。こっちは7回も殺されてんだぞ。俺としては納得がいかんわけだ」

わたしは——魂が抜けるほどの盛大な溜め息をついた。

「あんたねえ……」

「んっ？」

「少しは人の気持ちつてもんを考えなさいよ！」
わたしは超至近距離から《スペルガン》を全弾、シンの顔に叩き込んでやった。



例の子供外装こそが、挑戦状を書き込んだJUNEというプレイヤードットらしい。

〈だったら不味いことしたな……〉

「なんで？」

〈いや……俺たちが喧嘩初めてすぐ、大勢が乱入してきたろ？ その時に何度か、あれに似た子供のテスター、殴り殺した記憶がうっすらと〉

「なるほどね。だからアンチに変わったんだ」

そうなのだ。

その日の夜、ネットを覗いてみると、JUNEという人は、シンのことを“乱暴で、強さを鼻に掛けている最低の人間”だとして、悪し様に罵っていたのだ。

かわいさ余って憎さ百倍、ということらしい。

同様に、あのバトルロイヤルを境にして、ネットではSLのアンチシンとわたしが暴れるようになった。でも、アンチの人たちが暴れば暴れるほど、わたしたちを擁護する人たちも増えていった。バトルロイヤルでわたしたちに殺されたプレイヤーの中にも、純粹にわたしたちの腕前を褒める人さえいたのだ。まさに十人十色。人間いろいろ。当たり前の話だが、そのことを痛感される展開だった。

気になるのは——これからのことだ。

間もなく新しいフィールドが追加される。試練場みたいに1日でクリアできるフィールドではなく、攻略まで何日もかかる広大なフィールドだ。当然、わたしたちも挑戦するつもりだが、ネットの現状を考えると、ちょっとだけ不安を覚えずにられない。

それでも。

「なるようになるんじゃない？」

〈……だな〉

というのが、わたしたちの結論だった。

何事もそうなのだ。

悩んでいても仕方がない。重要なのは、わたしたちが何をしたいのか――それだけだ。

「鈴音え、ご飯よお」

階下からママの声が響いてきた。

「はい」

わたしはドアに向かって、大きな声で答えた。

〈へえ……〉とシン。

「んっ？」とわたし。

〈いや……スズネっていうんだ。おまえ〉

「あれ？ 言ってなかった？」

〈ネットで個人情報……とか言ってたの、誰だ？〉

「鈴の音色で鈴音。鮎川鈴音。あんたは？」

〈……クガシンイチ。久しいに、正月の賀正の賀、慎重の慎に数字の一で慎一〉

「久賀慎一か……だからシン？」

〈そっちは鈴だからリンだろ〉

「さあ？」

と答えると、シンは苦笑した。

わたしは笑顔で右拳を画面に押しつけた。

「じゃあね、相棒。定時に」

〈OK、相棒〉

シンも、画面に拳を押しつけてきた。

わたしはそのまま、エスケープキーを押した。通話が終わる。一瞬だけ暗転した画面は、すぐにデスクトップ画面に切り替わった。とはいっても、画面の右半分は、今日になって導入したばかりの匿名掲示板用専用ソフトで埋まっている。

そこには――

648 名前…LIN ◆KM48rimSQ 投稿日…X0/
06/27 14:55:10 ID…*****

みなさん、初めまして。SLのLのほうです。

このたびは私たちのことで何かと騒がせてしまい、申し訳ありません。

いろいろとお声をかけていただけるのは嬉しいのですが、私たちは<569さんのご指摘の通り、

POをMMOとしてではなく、PVのゲームとして遊んでいます。

他の方々との交流を控えているのは、そのためです。

当面は相棒と二人だけで遊ぶつもりですので、できればそっとしたけると助かります。

荒れる原因にもなりますので、私からの書き込みは今回限りにしたいと思います。

重ね重ね、お騒がせしましたこと、この場をかり、お詫び申し上げます。

LIN

<<649

紋章のことは俺たちもわけわかめ。本筋関連だと思われ

更新すると、キターというアスキーアートと猫のキャラクターが祈っているアスキーアートが百近く続いていた。もの凄いパワーだなあーと思うながら、とりあえずわたしはパソコンから離れることにした。

まずは腹ごしらえだ。

「お腹空いたあ。今日、なにに？」

LOG 02 ” BBS ”

End

To Be Next Chapter

岩陰から現れたのは、見上げんばかりの巨体を誇るミノタウロスだった。

全長3メートル。

筋肉質な男性の躰を持ち、巨大な戦斧を肩に担いでいる。

最初に見た時は、試練場でドラゴンを見た時のような恐怖に襲われたが……

「牛タン、いただき！」

今では相棒^{リン}のカモと化している。

——タタタタタタッ！

リンは素早く抜いた左右の拳銃型魔杖を鳴り響かせた。

《スペルガン》の上位版だ。

形状は良く似ているが、銃身が長く、重さも少し増えている。装填弾数はなんと40発。つまり弾倉2つ分だ。物理的に収まるはずがないのだが、そこは魔法ということで、不問に付されている。ちなみに、《バーストガン》用の弾倉は、《スペルガン》用の弾倉を合成することで確保できる。合成はふたつのカードをあわせ、音声操作で命じるだけで終了するので、今のところ弾切れになったことは一度もない。

それにしても。

薄暗い鍾乳洞は、《バーストガン》のフラッシュノズルと着弾光で、少しばかり明るくなかった。この時だけは、俺の頭上で橙色に輝く光球——使用者の頭上で1時間灯る“電灯”ことアイテムカード《ウィル・オー・ウィスプ》——の立場がなくなってしまう。

まあ、そこまでは別にいいのだが。

「固いなあ」

リンは素早く二丁拳銃を両腰のホルスターに戻し。眼前にあるカードが出現させた。

と壊れたレコードのように言っていたものだ。

その意味がようやく理解できた。

俺も結婚したら、給料から自分の小遣いを確保したうえで、生活費を手渡しすることにしよう。いや、別にリアルマネーでもないんだから、今から獲得物の管理、自分もやるようにすれば……

「もお」

すでにバルカンを収納していたリンは、数歩先で立ち止まると、クルツと振り返り、両手を腰にあてながら俺を睨みあげてきた。

「《エナジーショット》の費用なら、ちゃんど確保してるわよ」

「……………」

「なによ、その不審そうな眼差し」

「別に」

俺は槍杖複合型魔杖を肩に担ぎながら、早足にリンの横を追い越していった。

「ちよつと、待ちなさいよ。だいたいね——」

「あーあー聞こえない聞こえない」

「言いたいことがあるならちゃんと言葉に、って、だから聞きなさいって!!」

俺は人差し指で両耳を塞いだ。

直後、後頭部を叩かれた。

「なに子供みたいなことしてんのよ!」

「痛い」

「そんなに《エナジーショット》ばっか集めてどうすんのよ!」

「レベル上げるに決まってるんだろ」

カードの中には融合させることでレベルを上げられるものが存在する。特殊能力を付与するアビリティカードが、それだ。

ただ、レベル上昇には、現在のレベルのカードが2枚必要になる。つまりMAXにあたるレベル10にするには、レベル1の同じカードを1022枚も必要になるということだ。そこにきて《エナジーショット》は。NPCショップで1枚10万クリスタルもする高級

品だ。つまりゼロから育てるとすれば、合計で1億と22万クリスタルもかかる散財カードといえる。

一方、最前線の平均収入は1パーティにつき1日1万だ。弾薬費などを差し引き、ドロップアイテムを全て売り払っても、多くて4万とされている。それを思えば、俺がついつい、金にこだわってしまふ理由も、これでわかってくれると思う。

「レベル上げて……」

リンは自分の額を押さえた。

「あんたにはア（・）レ（・）があるじゃないの」

「ア（・）レ（・）はア（・）レ（・）。波動拳は波動拳」

やはり、リンには理解してもらえないようだ。

波動拳だぞ、波動拳。

俺なんか、初めて使えるようになった時、感動のあまり泣きそうになったんだぞ。ネットでもすごい評判だったし……中には“波動拳のためだけに拳闘系魔杖を買った”とかいうテスターもいるし。どうしてわかってくれないかなあ。

「まったくもう……」

リンはやれやれと言いたげに、さっきも聞いた言葉を口にした。

「レベル3までって約束できる？」

「いいのか？」

今はレベル1だ。ということは……あと30万クリスタル？

「その代わり、馬車馬のように戦ってもらおうよ」

「もちろん！」

「他の買い物も厳禁。欲しいカードが出てきても諦めること」

「無問題っ！」

「それが終わったら家を買うこと」

「OK!!!——んっ？」

家を買う？

「よしっ、決まり。残り10万と2000。しっかり稼ぐわよ！」
リンは大口でズンズンと俺を追い越していった。

俺のほうはというと、つい立ち止まり、今の言葉を考え直していた。

家を買う？

いや、確かに家屋は必要だ。今はキャンプウィンドウを開くために、週単位で宿の部屋を間借りしている状態だし、これからカードが増えていけば、それを保管する場所が必要になってくるのは自明の理だし……

でも、家？

部屋じゃなくて、家？

——いいか、絶対忘れるんじゃないぞ。

ふと、親父の言葉を思い出した。

——財布の紐だけは握られるな。それと、家の話を持ち出した時は、もう終わりだと思え。絶対、その家を買わされる。ローンを組まされる。我々男性に拒否権は無い。そのことだけは覚悟しておくんだ。姉貴の結婚が決まったその日、酔っぱらった親父は、壊れたレコードのように、そんな言葉を何度も繰り返したものだ。

俺は鍾乳洞の天井を見上げた。

親父。俺、生まれて初めて、親父にもものすごい親近感を抱いてる。親父もこんな気持ちだったんだ……わかるよ。うん。ものすごく、よくわかる。

「こら、シン！ なにやってんのよ！ がっちり稼ぐんでしょ！！」
「わーってるよ！」

怒鳴り返した俺は、《トライデント》をぶん回しながら、早足になってリンのあとを追いかけた。

俺の波動拳と俺たちの家を巡る戦いに、半ばやけくそになりつつ身を投じるために。

LOG.
03
”
NEW
STAGE
”

ONLINE
..
The
Automatic
Heart

ガチの喧嘩をくりひろげた翌日、俺たちはしばらくコロセウムから離れることにした。念のため、人が少なそうな午後2時にログインしたうえで、正門広場にいた数名から逃げるように東区に急行、蒼都のあちこちを散策しながら、これからどうするかを話し合ったのだ。

「で、これからどうすんの？」

リンは両手を後ろ組みながら、俺を見上げて尋ねてきた。

ポイニーテイルにした金髪がゆらゆらと揺れている。

なんていうか……こうしていると、本当にこれが、あのリンなのかと疑いたくなるような振る舞いだ。これでガンタイプの魔杖を使わせれば、俺なんか問題にならないほどの命中精度を誇るんだから、PVってやつは空恐ろしい代物だ。

「どうするって……ゲームだろ？」

俺は当たり前の答えを口にした。

リンはムツとした表情になる。

「そうじゃなくて、具体的な目標よ。トレーニング、ちょっと飽きてきた感じしない？」

「……だな」

試練場で実戦を経験した今、トレーニングだけでは物足りないと感じるようになってきたのも事実だ。

「今度は試練場にでも籠もるか？」

「うーん」

リンは悩み込んだ。

「もうちょい、この街のこと歩き回ってからにしない？ ほら、街を舞台にしたイベントも起きるかもしれないって、スタッフ日記に書いてあったでしょ？」

「イベントねえ……まっ、確かに下調べはしとくべきだな」

こうして俺たちは、蒼都のあちこちを歩き回ることにした。

途中、他のテスターと会うこともあったが、ほとんどが手をふつてくる以上のことをしなかったのも、気にならなかった。中には睨んでくる者や、あからさまに無視してくる者もいたが、そういう連中も近づいてこなかったため、俺たちはそれから数日、じつくりと蒼都を見物することができたのだ。

こうして数日後の6月29日（テスト35日目）――『PHANTASIA ONLINE』は夜のメンテ時間が無くなると共に、新フィールドと新機能の追加を持って、名実ともに製品版準拠といえる状態を整えた。中でも、実装が先延ばしにされていたセツトカードシステムの導入は、誰もが心から待ち望んでいた『PHANTASIA ONLINE』の肝ともいえるシステムだった。

『PHANTASIA ONLINE』では、様々なものがカードという形で表現されている。

カードの種類は3種類。

装備品や消費財を表す“アイテムカード”。

セットすることで追加能力を付与する“アビリティカード”。

家屋の権利書などを意味する“エクストラカード”。

このうちアビリティカードは“セットカード・ウィンドウ”に、最大12枚のカードを並べることで効果を発揮してくれる。例えば《ガンナー》を配置すると、銃器系魔杖の攻撃力が上昇する。《デイフェンス》を並べればHPが上昇する。そんな感じだ。

さらにアビリティカードそのものが、効果によって種類が分かれている。

複数のメリットがある“ジョブ職種系”。

単一の効果を発揮する“ブースト増強系”。

特殊能力を使用可能にする“エンチャント付与系”。

特に3つ目の付与系には、銃器系以外の魔杖を用いた必殺技や魔法も含まれている。それこそ、《メイジスタッフ》に組み込まれている《ライトアロー》、《アイアンナックル》に組み込まれている

《ストレート》なんかは、セットカード不要のまま使えるレベル固定の付与系アビリティと言えるのだ。

また、アビリティカードだけは、同じカードを融合させることで、カードレベルを上げられる。同レベルのカード2枚で1レベル上昇。最大レベルは10。大雑把な例えになるが、1レベルにつき5パーセント程度のボーナスがあり、最大レベルにすると、ちょうどレベル1の1.5倍、何も付けない場合の2倍ぐらいの何かが付く、という感じだそうだ。

〈けっこう複雑よねえ〉

「ゲームの肝だからな」

6月30日（テスト36日目）——いつものように午前4時から午前7時にログインしていた俺とリンは、ログアウトした数分後から、お約束となったヴォイスチャットによる反省会を始めていた。話題の中心は、ようやく全容がわかり始めたアビリティカードについてだ。

もっとも、このところそれ以外の雑談をする時間も増えている。

〈そういえばさ。シンの学校、夏休みっていつから？〉

「7月21日」

〈えっ？ そんなに遅い？〉

「北海道はそういうもんなの」

夏休みは短く、冬休みは長い。北国では当たり前のことだ。

「どうせ、そっちは今日とか来週とかだろ」

〈正解。来週の金曜よ。ちなみに2学期の始業式は9月4日〉

「長っ」

〈帰国子女の受け入れとかあるのよ。ほら、欧米だと新学期が9月からってところ、少くないし〉

さすがお嬢様学校。帰国子女とはセレブなことで。

「……なあ。素朴な疑問なんだが」

〈なに？〉

「おまえ、幼稚園からその学校にいるんだよね？」

〈そうだけど？〉

「どうすれば、おまえみたいなのが育つんだ？」
するとリンは、ムツとした様子で俺を睨んだ。

〈悪かったわね。生まれつきの暴力女で〉

「違うっつーの」

俺はガリガリと頭をかいた。

「質問変更。つまりだ。俺の疑問は、純粹培養のお嬢様にしては、
どうもおまえの毛色が違うように思えるってところだ。それとも、
おまえみたいなお嬢様が平均的デフォルトなのか？」

「まさか。わたしは特別よ。中等部出るまで、普通の学習塾に通わ
せてもらってたから」

「普通の、塾？」

「うん。そのお陰よ。こうしてわたしが普通になれたのも」

「んっ？　じゃあ、あれか。おまえの話によく出てくる、友達って
いうのは……」

「うん。塾の友達。そりゃあ、学校にも友達がいらないわけじゃない
けど……でもさ、学校の友達から遊びの誘いがきたとするでしょ？

どこに行くと思う？　クラシックのコンサートよ、クラシックの。
あと美術館とか、博物館とか……そうそう。一昨日も電話があつた
のよ。遊びに来ない、って。でも、その電話、どこからだったと思
う？　ハワイの別荘よ、ハワイ。しかも日曜にパーティがあるから
来ないかって……高1の言う台詞じゃないでしょ、それ」

「ちなみついでに聞くが、どうやって断った？」

途端、リンはシャキッと背筋を伸ばし、両手で電話を持つふりを
しながら、

「ごめんなさい。家のほうでいろいろとあるので、日本を離れるわ
けには……そんな、誘っていただいたのに、こちらこそ………
…こんな感じ」

俺は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「苦労してんだな……」

〈苦労してるのですよ〉

なにはともあれ。

本格始動以降、俺とリンはアビリティカードの情報を漁りながら、ついに実装された新フィールドに挑戦し続けることになった。

追加されたフィールドの名は“地下（UNDERGROUND）”

——各中枢都市の直下に広がる、巨大な地下空間という設定のフィールドだ。

実際には出てくるモンスターが増えたこと以外、“チャレンジ・ラビリンス 試練場”とそれほど大差が無い。強いて言えば、地下1階から地下9階までは煉瓦造りの迷路なのだが、地下10階以下は天然の鍾乳洞に切り替わるというところだろう。この地下10階以下は真っ暗であるため、照明となるアイテムを使わなければ、まともに歩けないというのも大きな特徴だ。

そして問題のモンスターだが。

光弾を吐きだしてくる巨大なコウモリ——ジャイアントバット。

巨大なイソギンチャクとしか言いようがない怪物——ローパー。

チビでがっしりとした緑色の肌をした小鬼——ゴブリン。

とにかく打たれ強い豚顔人間——オーク。

銃使いの天敵というべき動く骸骨——スケルトン。

巨漢から繰り出される棍棒のなぎ払い攻撃が脅威の牛頭人間——ミノタウロス。

さらに《赤》の場合は炎を吐くブラックハウンド、《緑》の場合は毒霧を吹き付けてくるジャイアントクローラー、《青》では巻き付き攻撃を仕掛けてくるジャイアントオクトパスが出現する。

俺とリンは、こうしたモンスターと戦いながら、たまに蒼都に戻って装備を調べ、また潜っていく——ということを繰り返すことにした。

ただ、想像以上に攻略は難航している。

理由は4つある。

第1はリミットタイムの問題。タイムオーバーでログアウトさせ

られると、キャラが死亡扱いになる。デッド そうなればセット中のアビリティカードが消滅するのだから、洒落になっていない。つまりリミットタイムに近づいた時点で、必ずログインボックスの近くにいることが攻略の第1条件となるのだ。これが意外と厄介なのだ。

第2は地図の問題。『PHANTASIA ONLINE』にはオートマッピング機能が無い。そもそも地図が無い。都市内の転移機能が生きていた頃も、そこに描かれていたのは、あくまで概念図だった。一応、中央広場で手書きの地図を売っているテストターもいるそうだが、地下10階以下の地図は出回っていない。これがリミットタイムの問題を、さらに厄介にしている。

第3は帰還の問題。街に戻ると、再び第1階層からのやり直しになる。だったら籠もり続けられただけの話だが、アンダーグラウンド地下には店も無ければ宿屋も無い。装備を調えるためには、どうしても街に戻る必要がある。仕方がないとはいえそれまでだが。

そして最大の問題は。

へ——わたしたちのアンチよね

「だな」

俺たちは画面越しにうなずきあった。アンダーグラウンド

アンダーグラウンド地下に潜るには神殿のNPC神官に話し掛けなければならない。当然、そこには大勢のテストターが集まってくる。あとは……言わずもがな。

街にいる間は、まだ人目もあるからいい。連中にやれることといえば、聞こえるように嫌みを言ったり、揶揄する会話をしてみせたりする程度だ。つまり実害が無いので、今のところは無視の方向で対応している。

だが、地下に潜ると話が変わってくる。

フィールドではPVP（プレイヤー対戦）ができる。状況はバトルロイヤルと一緒だ。違いは、HPがゼロになると死亡デッドすること。つまり……

アンチな連中が、俺たちに攻撃を仕掛けてくるのだ。

それも、わざとらしい方法を使って。

実際、こんなことがあった。

街で装備を整え、再び地下に潜って間もない時だ。曲がり角が近づいたところで、突然現れたパーティに銃撃された。しかも、こっちが反撃すると、そいつらは両手をあげて、

――モンスターだと思った。

と言ってきた。

出会い頭の不幸だと言うのだ。実際、そういうことも珍しくないので、こっちとしても、それ以上の手は出しづらくなる。そうすると、そいつらはヘラヘラと笑いながら立ち去っていき、ログアウト後、アンチが集まる掲示板なんかで、俺たちを撃ったことを誇らしげに書き込む。こんな感じだ。

他にも「流れ弾」とか「よく見えなかった」とか「ドールだと思った」とかいう言い訳を口にする連中もいる。これにはホント、辟^{へき}易^{えき}している。

なお、この手の連中にはトカゲ人間が多い。こっちも顔の区別がつかないので、服装を変えられたり、声色を使われたりするだけで、他人との区別がつかず、なんとも対応のしようがない。そのことが悪用されているのは確かだが、こっちも後味の悪いPK（プレイヤー殺害）はやりたくないの、思い切った対応をとれずにいるところだ。

「表情とかわかればなあ……そうしたら、嘘かホントか、少しは見抜けるのに」

「いっそ、ネットでPK宣言するか？」

「わたしは別にいいけど……あんだ、イヤなんでしょ？」
「まあ……な」

別にPKがイヤなわけじゃない。ただ、初心者というか、実力差のありすぎるヤツをいたぶるのが趣味じゃないだけだ。もちろん、実際に襲われたら、たとえ相手が弱かろうと相手をするのがゲーマーの仁義ってものだと思うているが。

「へだったらどうする？」

「どうするって……超特急で鍾乳洞を目指す、ぐらいだろ」

「へそれだと不十分じゃない？」

画面の中のリンは、少し右側を見た。少し前に買ったという平面ディスプレイを見ているのだらう。俺はS C O P 3を平面ディスプレイで、ブラウザをノートパソコンで開いているが、それと同じことを、リンも2つのディスプレイでやっているそうだ。

「へほら。『マトメ』の地下情報、《青》は12階まで確定になっているでしょ？」

「マジ？」

確かめてみる。

表示された最新地図は、俺の記憶にある地下12階のものと合致していた。

「急に進んだな……」

《青》の地下攻略は1番遅いとされている。最も早いのは、陣営内で積極的な情報交換が行われている《緑》の地下14階だ。次点はバトルロイヤル好きが多いため地下が閑散としていると言われる《赤》の地下13階。一方、《青》は今朝まで地下6階までしか進んでいなかった。『蜥蜴同盟』の内紛と、俺たちに端をなす荒れ模様が、陣営の雰囲気を少なからず悪くしていることが原因だ、と言われている。

だが、俺たちのログイン中に情報提供者が現れたらしい。それも地下12階ともなると、それなりの実力を持っていると言える。

『マトメ』に記載された情報提供者の名は“蒼海騎士団”となっていた。

初耳のグループ名だ。

検索をかけてみたが、該当しそうなヒットは見あたらなかった。

「この人たち、知ってる？」

リンも同じ疑問を抱いたらしい。

「いや……スレでも、新設団体だろうってなってるな……」

〈微妙にイヤな予感がするんだけど〉

「奇遇だな。俺もだ」

その予感は、当たっていた。

#03-02

```

| | Login Account .. 436-332-200
4-9719
| | FAL Check .. . . . OK
| | Bit al Check .. . . . OK
| | Login Check .. . . . OK
| | Login Time .. 8, July 20X0 19 ..
02..34
| | Limit Time .. 8, July 20X0 22 ..
02..34
| | Contents Code .. PHANTASIA O
NLINE ver C1.1201
| | Abator Name .. SHIN
| | Login Place .. BLUEPOLIS / U
NDERGROUND / LOGIN BOX B13-01
| | Login Sequence .. . . . .
. . . . . complete

```

7月8日（テスト44日目）――ログインした俺は、まず鏡に映る自分の姿を確かめてみた。

服装は以前から大きく変わっている。

ベースは競泳水着のような《シャークウェア》。軽くてかさばらないうえに、これだけでHPを50パーセントも高めてくれるという優れたものだ。地下14階で手に入るドロップアイテムであり、腕の立つテストターのほとんどが、最近は《シャークウェア》を身につけているとも言われているような防具でもある。

ちなみに《シャークウェア》には同性能ながらデザイン違いのものが存在する。

頭部、手首から先、足首から下だけが露出している全身型。
両肩から先が露出している腕無し型。

逆に全身型の太股の途中から下が露出しているスパッツ型。

股ぐらから下が露出しているビキニ型。

腕無し型とビキニ型とあわせたワンピースの水着そのままの水着型。

このうち、俺とリンは《スケール・オブ・ブルードラゴン》を装備する関係で、腕無し型を使っている。最初に手にはいったのがそれだった、ということも関係しているが。

さらに俺の場合、黒いバツシュのような《ショックシューズ》を履いている。高所から落下した際の衝撃を吸収してくれる便利な靴だ。これに膝丈の《ハーフパンツ》、丈がへそまでしかない半袖の《ハーフレザージャケット》を身につけるとというのが、今の俺の服装だ。

一応、腰にガンベルトを巻き、拳銃型魔杖バーストガンを下けているが、主武器は今のところ、ギリシア神話のポセイドンが持っていることで知られる槍杖複合型魔杖トライデントであり、銃は念のため、という程度のものでしかない。

俺は外に出ることなく、鏡を軽く二度叩いた。

鏡の表面にウィンドウが浮かび上がった。

蒼都への帰還を選択。

視界が暗転。例の浮遊感覚がおそってくる。

次に目をあけると、同じログインボックスの中だったが、正面の

鏡に“BLUEPOLIS”“CENTRALCIRCLE”
E”という文字が浮かんでいた。

街に戻ったのだ。

「さて……」

俺は苦笑を漏らしながら、《ハーフパンツ》と《ハーフレザージャケット》を収納、3日前に帰還した際、わざわざ買っておいいた数枚のカードを次々と呼び出した。

数瞬後。

「……よしっ」

鏡には、西洋風の全身甲冑を身につけた誰かさんが映っていた。変装用の装備だ。

顔は、頭頂がとんがっているフルフェイスの兜で隠れている。もつとも、装着すると内側からは外が透けて見えるので、視界はまったく阻害されていない。そのくせ鏡には、兜を被った状態で映っている。

「なんだかなあ……」

変装のためだけに余計なカードを5枚——ヘルメット、ガントレット、ボディプレート、ウェストプレート、プレートブーツ——も持つというのは馬鹿馬鹿しい気もする。しかし、今は夜メンテが無くなった本格始動後、一番賑わっている8、9時台だ。そんな時間の中央広場に、普段通りの姿で俺たちが出て行けば、無意味に注目され、余計な騒動が起きるのは明白だ。

かといって、人のいない時間では、NPC店舗しか利用できない。当面の目標が“装備の充実”になりつつある今、トレードに手を出さないわけにはいかないのだから、これくらいの不都合は飲み込むしかないのだ。

そうでなくとも《エナジーショット》レベル3への道は果てしなく遠い。

ああ、俺の波動拳……使える強さになるのは、いったいいつのことやら。

「……行くか」

俺は覚悟を決めてから、ドアのオープンボタンに軽く触れた。シュンとドアが開いた。

潮の香りが流れ込み、賑やかな喧噪が聞こえてきた。

外に出ると、広場は様々なユーザーで埋め尽くされていた。ちょうどログインボックスを中心とした中央広場の外周には、フリーマーケットさながらに露天を開いているユーザーが増えているのだ。

さらに談笑する連中や、パーティを募集するユーザーの姿もそこらかしこにある。

神殿に向かう目抜き通りも同様だ。

どれほどのユーザーがログインしているのだろう。《青》は2000名に満たないはずだが、今はその半分がログインしているように思える。

「こら」

ガンツと背中を叩かれた。

叩かれた感触は無かったが、甲冑の震えと音で、すぐにそうだと気が付いた。

振り返ると――

「遅い」

肩に銃器系魔杖アサルトライフルを引っかけた、丸眼鏡のメイドが立っていた。

目が点になった。

「……なに黙ってんのよ」

「いや……」

少し悩んだが、随分前に姉貴から言われた言葉を思い出した。

――女の子がいつもと違う格好してたら、理屈抜きで必ず褒めなさい。それが礼儀よ。

というわけで。

「驚いた。似合ってる」

これで褒めたことになるのかわからないが、思った通りのことを口にしてみた。

リンがさらにムツとなった。

失敗したらしい。

でも……実際、似合っている。

小振りな足を包む革靴、黒のストッキング、肩がもりあがった黒いドレスも悪くない。フリルがたくさんついた白いエプロンもそう。きつちりと結い上げた金髪、ワンポイントの黒い髪飾り、縁のない丸眼鏡、両耳で揺れる十字架のイヤリング……

「んっ？ おまえの装備……カード、何枚分だ？」

「10枚」

「おい」

「なにか問題でも？」

「……いや」

ここで「無駄なことを」とか言ったら、間違いなく殴られるだろう。それで余計な注目を浴びるわけにはいかない。

でも……本当に似合ってる。見違えた。

普段のリンは、俺とまったく同じ格好をしている。違いは《ダブルガンベルト》を装備しているところ。服装まで同じなのは、効率重視で装備を選んだ結果だが……今のメイド姿を見ると、こっちこそが本当の装備に思えてしまう。それくらい似合っているのだ。

「なあ」

「なによ」

「今度から、それで冒険するか？」

「……………」

リンはムツとした顔で俺を睨みあげた。いったい何に対して不満を抱いているのか、俺にはサッパリわからない。

「とにかく」とリンは溜め息をついた。「お店、回るわよ」

「了解」

俺が右拳を前に出すと、リンは少し笑ってからガンツと拳を叩き返してきた。



NPC店舗の下取り価格は標準価格の10分の1だ。そのうえ、たとえレアカードを売っても、店舗の売り物が変わることはない。つまり下取り品は市場に流れないのだ。

——それはもったいない。

という面々が、直接、他のユーザーを相手に商売を始めた。
これが青空市場の始まりだ。

最初は、試練場で手に入る標準価格10クリスタルの《スモール
キュアポーション》を、半値にあたる5クリスタルで売るところか
ら始まったらしい。

その後、少しずつ取り扱う商品が増えていき、地下が実装されて
からは、売買を専門とするユーザーまで現れた。

それに伴う揉め事も起きたそうだが、市街地でのPVPは禁止さ
れているため、大きな騒動には至っていない。その分、口論が絶え
ないようだが、それもまた青空市場の味、という割り切りが生まれ
ているとのことだ。

というわけで。

「もうちょいまけろよ!」

「あきまへんなあ」

「《アサルトライフル》5キロお、5キロで《アサルトライフル》、
いりませんかあ!」

「さあさあ! らっしやいらっしやい!」

「パーティメンバああああ、募集してまああああす!」

「あゝるゝはれたゝひゝるゝさがりい♪」

「安いよ安いよ!」

「てめえがぶつかってきたんだろ!」

「うぜえんだよこのロリペドネカマ野郎!」

「《アサルトライフル》5キロでええええ!」

「らっしやいらっしやい!」

客を含めて2、300名ぐらいしかいないであろう青空市場なの
に、その賑わいぶりはかなりのものだった。おそらくトカゲ人間が
ゾロゾロというえに、コスプレ会場さながらに多様な服装をした
連中がいるせいだろう。

仮想現実ということ、多少なりとも理性のタガが外れているせ

いもあるかもしれない。

いずれにせよ、《青》の市場は並はずれたにぎわいを見せている。「ダメダメ。その値段じゃ、6人分の弾薬代にもなんないじゃない」ふと見下ろせば、しゃがみこんだリン（メイド）とトカゲ人間の露天商が値段交渉を続けていた。

今のリンは“久しぶりに地下から戻った6人パーティの会計係”という役を演じている。俺はその付き添い。荷物持ちならぬカード持ちだ。見れば客の大半が、俺たちと同様、2、3名で動いている。やはり6人パーティでも、これだけ賑わう市場を有効活用するには、少人数で動くほうが得策だと考えられているのだろう。

「仕方ないなあ……じゃあ、おまけにこいつを付けるっていうのは？」

「これとこれもよ」

リンが指さしたのは杖型魔杖用カートリッジカード《manaカード》だ。

露天商は、服屋で売っているマントやストールなどを地面に敷き、その上にカードを並べて商いをするのが一般的だ。おかげで市場では万引きも起きているが、ほとんどの店が、客の近くに安い消耗品を置き、店主の手近に客寄せの高級品を並べるという形で対応している。中には見張り役の仲間を客側に立たせている露天もあるが、今のところ、数では少数派に属するようだ。

いやはや。ゲーム通貨とはいえ、金が絡むだけに、誰もが無い知恵を絞っているらしい。

遅いことで。

「参ったなあ……うーん……わかった！こいつでどうだ！」

「OK！商談成立」

指を鳴らしたリンは、手にしていたカードの一部を店主に差し出した。

受け取った店主はカードを確認してから、ウィンドウを開き、数字を入力。眼前に呼び出したクリスタルカードを手にとり、カード

の下、3分の1をうめるワードスペースの表示が正しいことを確認したうえで、リンに差し出した。

リンも、ワードスペースに記された値段を確認してから、手の届くところにあったオマケを拾った。

「まいどさまあ♪」

「10時までいるから、残りが売れなかったらよろしく」

リンが店先から離れた。俺はそのあとをガシャガシャと追った。かと思うと、リンは少し離れた別の露天の前にしゃがみこんだ。

「まいどさまあ、“ミノタウロスの肉（牛タン）” 売りたいんだけど、買い取り幾ら？」

「牛タンなら30だねえ」

3万（30）！？ そんなにするのか、あんなものが！？

「えーっ、それって昨日の相場でしょ？ それに《青》だと少ないっていうじゃない。こっちも6人が6人とも、死にかけながら手にいれたんだからさあ、少しぐらい上乗せしてよお」

「んじゃ、35」

「50」

「あははは、いくらなんでも無理無理」

「じゃあ、45。こっちだってアビリティカードで強化しないと、次も鍾乳洞まで潜れるのかどうか、わかんないじゃない」

「うーん……36」

「45」

「……40！ これ以上は無理！」

「プラスして、その“エナジーショット”は？」

なんだって！？——あわてて確認してみると、確かに店主の目の前にレベル1の波動拳が置いてあった。NPC店舗で10万クリスタルもする高級カードだが、それが並んでいるということは、地下で手に入る可能性もあるということだろうか。それとも単なる客寄せ用か……

「ダメダメ」

店主は首を横にふった。

「こいつはレアアイテムとの交換専用。最低でも100以上してくれないと、こっちの商売、あがったりさ」

「だったら……」

リンは周囲を伺いながら、エプロンのポケットから1枚のカードを取り出した。それも、皮っぽいプリントに、『PHANTASIA ONLINE』のロゴは入っている裏面だけが見える状態で取り出し、両手で隠すように挟んでから、そーっと店主のほうに差し出した。

店主はその手に注目する。

リンは一瞬だけ、指を開いてカードの絵柄を見せた。

《シャークウェア》だ。

レアと言うには微妙だが、俺たちは余分なこれを6枚も持っている。今月上旬に生まれた『Xちゃんねる』の市場スレでも、確か万単位で取り引きされていたはずだ。今日の相場は確かめる時間がなかったのわからないが、仮に1枚1万だとすれば、牛タンとあわせて10万になる……と、俺は考えたのだが。

「レアでしょ」

リンはニヤツと笑た。

店主は両目を見開き、きよろきよと周囲を伺うように目を泳がせた。

不思議に思った。

売れ筋のカードだが、ここまで驚かれるほど出回っていないカードではない。

リンは言った。

「牛タン1枚とこれ1枚。どう？」

「乗った」

「……えっ？」とは俺のつぶやきだ。

喧噪のおかげで俺にしか聞こえなかったようだが……それにしたって、どうしてこんな取り引きが成立するのか、俺にはサッパリだ。

仮に牛タンが4万だとしたら、《シャークウェア》は6万に相当しないと交換が成立しない。だが、いくらなんでも6万なんて高値になるはずがない。鍾乳洞で2日戦えば、必ず1枚か2枚は手に入るぐらいのレアリティなのだし。

「よしっ、じゃあ次ね」

立ち上がったリンは、驚く俺に気づかず、歩き出した。

追い掛けると、リンは前の露天が少し離れた別の露天の前でしゃがみこんだ。

今度の売り物も《シャークウェア》だった。

5万3000で売れた。

最終的に6枚の《シャークウェア》は《ミノタウロスの肉》2枚と込みで、《エナジーショット》2枚と21万クリスタルになった。どうやら俺の知らないうちに、市場が大きく動いたらしい……

売買を終えた俺たちは、すぐ路地へと入り、念のため尾行を気にしながら、目的地へと急ぐことにした。

向かったのは海沿いにある細長い2階建ての建物——隠れ宿屋“老人の隠れ家”亭だ。

一見すると、陸側に階段と廊下、海側に部屋がある古びたアパートにしか見えない。だが、階段の下にあるドア無しの部屋に入ると、揺り椅子に座るNPCがおり、これに話し掛けることで、普通の宿のように部屋を週単位でレンタルできる。そういう場所だ。

今のところ入居者は俺たちしかない。

他は目抜き通り沿いか、そこから一本奥に入った程度のところにある宿屋で部屋を借りている。もちろん、隠れ宿屋の存在はネットでも取りざたされているが、“老人の隠れ家”亭の存在は、今のところ俺たちしか知らないらしい。

「コール」

2階西端の——海と中央広場が見える——角部屋に向かった俺たちは、リンが呼び出したルームカードを差し込んだ上で、部屋の中に入ってしまった。

部屋の広さは横長の9畳。家具は丸いテーブルと椅子4脚、ドアから見て正面と右の壁に、板を棒で押し上げるタイプの窓がある。右手前の隅には、着替え用スペースとして、半円状に閉じるカーテンがついている。床は板間。壁と天井は乳白色の石造り。天井にはゆっくりと回る大きなプロペラがあり、その中央には橙色に輝く光球照明が灯っている。

今日で入るのは3回目だが、簡素ながら趣味のいい部屋だと思う。

「はぁ、疲れたぁ」

リンはそういいながら、着替えスペースに向かい、シャツとカーテンを閉じた。

俺も今のうちに装備を収納。初期装備のサンダルとTシャツ、下はハーフパンツという格好でくつろがせてもらうことにした。

椅子に座ると、長い金髪をすべて下ろしたリンが出てきた。

服はサンダルと白いワンピース。初めて見る服装だ。

「買ったのか？」

「心配ご無用。ちゃんとわたしの取り分の中でやりくりしてるわよ」

リンは俺の右斜め迎えの椅子に座った。

「おっほん」

と咳払いをひとつする。

「コール、キャンプイン」

リンが告げると、テーブルの上、俺とリンの手前とテーブルの真ん中にカードの束が出現する。順に俺、リン、パーティ共用のカードウィンドウに収納してあったカードだ。

「じゃ、まずはアイテム？」

リンはひときわ多い自分のカードとパーティ共用のカードを手にとり、ババ抜きでもするかのように、サササッとカードを分けていった。

「はい、これがシンの分」

「波動拳は？」

「先にアイテム。次にmanaカード。ちゃんと《トライデント》に装填しといてよ？」

「了解」

俺は差し出されたカードをまとめ、中からmanaカードを取り出した上で、今度は自分の山札をとり、《トライデント》カードを探し、すべてを重ねていった。

「コール、フュージョン」

音声操作——キャンプ中は思考操作がきかない——で《トライデント》にmanaカードを装填する。《トライデント》の最大装填数は200manaポイントだが、銃器系のように連射することができないが、装填量の多さが特徴の魔杖だ。

消耗品の補充を終えたあとは、アイテムの区分に入る。

装備、戦闘消耗品、変装用、その他のキープするカード、不要なカードの5つに分ける。といっても、不要なカードは昨日のログアウト前、パーティ共用ウィンドウに移動させてある。つまり今回は山を4つ、作るだけでいい。このうち最初の3つを、さらにひとつにまとめ、その他のカードを手にした状態でヴォイスコマンドを告げる。

「コール、セットカード」

体から30センチほど離れたテーブル上に、カードが並ぶ藍色の板が出現した。

これがセットカード・ウィンドウだ。

6枚が2列並んでいるのが、今現在、俺がセットしているアビリティカードだ。左上から順に職種系の《グラップラーLv4》、《ランサーLv3》、《キャスターLv3》。増強系のパンチダメージが上昇する《アイアンフィストLv1》、キックダメージをあげる《アイアンレックLv1》、HP上昇の《ディフェンスLv2》が2枚、外装軽量化の《ダイエットLv1》。付与系は槍技《パワーラストIIスピアLv1》と《パワーシングIIスピアLv1》、拳闘技の《ライジングフィストLv1》と《エナジーショットLv1》。以上が俺のセット構成だ。

「はい」

まだアイテム整理中だったリンが、今日買ってきたばかりのアビリティカードを差し出してきた。

「んっ」

受け取った俺は、ヴォイスコマンドでそれぞれのカードをレベルアップさせていった。

ライジングフィストIIショット

昇竜拳と波動拳がレベル2になる。さらに、使い勝手の良かった《パワーシングIIスピア》と《アイアンフィスト》を、それぞれ一気に買い込んだカードを融合させていき、レベル5まで上昇させた。

これでダメージは2割増しだ。

ついでに、《ディフェンスLv2》の片方と手持ちの《ディフェンスLv1》4枚を使い、もう1枚の《ディフェンスLv2》を《ディフェンスLv4》にする。余ったスペースには、レベル1の付^{ラッシュビル}与系拳闘技を配置。昇竜拳^{ライジングフィスト}に続く2枚目となる自動的に体が動くアビリティ（オートモーション・アビリティ）だ。

オートモーションはどれも高価なため、あとでもいいと思っていた1枚なのだが、今回は随分と実入りが良かったことと、たまたま売りに出されていたので購入できたので、試しにセットしてみることにしたのだ。

「そうだ——なあ、リン」

リンは眉間に皺を寄せながら、今もアイテムの選別を続けていた。
「なに？」

「いや、大したことじゃないんだが——《シャークウェア》、なんであんなに高値だったんだ？」

手を止めたリンが、不思議そうに俺を見返した。

「市場スレ、読んでないの？」

「最近は」

「ああ、それで……あれよ、あれ。例の騎士団」

俺は一瞬、考え込んだ。

「……地図の？」

「そう、それ。蒼海……だったけ？　そこが買い占めに走ってるみたなの。他にも、ドロップオンリーの魔杖とかも買い占めてるみたい。もう手当たり次第みたいよ」

「買い占め？」

「ほら、もともと品薄でしょ、ドロップオンリーのアイテムって。だから一時は信じられないくらい高騰したみたい。《シャークウェア》も1枚10万（100K）になったこと、あったみたいよ。今は5万（50K）から6万（60K）に落ち着いたみたいけど」
「で、その買い占めたやつが……」

「市場スレにね。騎士団の関係者じゃないかって。あくまで噂だけだ」

「へえ」

これまたすごい集団が現れたものだ。

どれだけの枚数を買いたったか知らないが、相場の数倍を軽々と支払うのだから、並みの資金力ではない。おまけに地下12階までの情報も提供している。『蜥蜴同盟』の内紛以降、『青』には陣営の中心となる氏族が出てこないだろうと言われている中、昨日今日の2日でここまで動くとは……もう少し本スレをよく読んでおくべきだったかもしれない。

と、リンは再び眉間に皺を寄せながら、手にするカードを睨んでいた。

「なに悩んでんだ？」

「いいじゃない」

よく見ると、変装用と思われる衣服のカードが、数枚ずつ、まとめられた状態でリンの手前に置かれていた。

「……変装用、何枚だ？」

「悪い？」

答えより先に、ムツとしか表情でにらんできた。

「そうじゃないって」

俺は決定ボタンを押してセットカード・ウィンドウの閉じた。

「姉貴がいるからイヤでもわかってる。半分、俺が持ってもいいぞ」

「……………」

「じゃあ、共有使え、共有」

「……遠慮するわ」

服はたくさん欲しいが、俺に見られたくない——ということらしい。まあ、俺としても女の筆笥をのぞき見る趣味なんて持ち合わせていない。

「ああ……それでか」

「なによ」

「いや、家のこと」

通常、カードは3時間放置しておくで自動的に消滅する。装備以外の具現化したアイテムも同様だ。ただそこが、個人所有の不動産の中であるなら、例外的に自動消滅しないらしい。さらに家具扱いの《カードブック》というアイテムに入れておけば、具現化できないアビリティカードやエクストラカードも保管可能らしい。

宿屋はキャンプ機能を使うだけの場所だが、リンのようにたくさんの衣装が欲しければ、部屋なり家屋なりを購入する必要があるというわけだ。

だからリンは、家屋が欲しがっている。
なるほど。そういうことか。

「だったら波動拳の前に、どっかの分譲ルーム、買うってことにするか？」

「部屋なんか買ってどうすんのよ」

「へっ？」

「まさかあんた、わたしと同じ部屋を使うとか言うつもり？」

「まあ……そうだけど？」

何が問題なのかわからない。家屋は1000万単位、部屋は安いものになると100万と少しで購入できる。だったら安い部屋を確保するのが賢いはずだ。だいたい、リミットタイムは最大3時間だし、俺たちはゲームの大半を冒険に費やしている。つまり家屋といっても――

「こっちでの家なんて、倉庫みたいなもんだろ？」

「あんたって人は……」

リンはがっくりと項垂れ、溜め息をついた。
わけがわからない。

「とにかく！」

顔をあげたリンは、再び俺を睨んだ。

「あんたが良くても、わたしはイヤ！ わかった！？」

「……OK、相棒」

ドアがノックされたのは、俺がそう答えた直後だった。

最初、俺もリンも、ノックを聞き流していた。だがコンコンツという音と共に、

――すみませーん。ちょっとお話しがあるんですがー。

という声がドアの外から聞こえてくると、俺たちはすぐ、顔を見合わせた。

「アンチ？」とリン。

「わからん」と俺。

リンはすぐにカードをまとめだした。セットカードも後回しだ。

「とにかく変装」

席を立った俺は、そう告げつつリンに背中を向け、その場で変装用の装備を身につけていった。変更の瞬間、下着姿が見られたかもしれないが、俺は男なのでそれほど気にならない。

背後ではヴォイスコマンドでカードを収納したリンが、キャンプ機能も終了させていた。

リンも席を立ち、「コール」とつぶやきながら変装を開始する。数秒待つ。

「いいか？」

「もうすぐ。応対して」

「了解」

全身甲冑姿になった俺は、なおもノックが続いているドアに歩み寄った。

ちなみに居留守は使えない。カウンターにいれば、空室の有無はもちろんのこと、入室しているかどうかも確認できるのだ。

「すみませーん」

近づくと声がハッキリと聞こえた。俺と同世代っぽい男の声に聞こえた。

「はい」

俺はドアを閉じたまま、声をあげた。

すると謎の訪問者は、安堵の声を返してきた。

「よかった……あつ、すみません。今日からこの宿を借りることに
なった者です」

「すみません」

と俺は苦笑まじりに言い返した。

「ちよつとたて込んでいるんで、挨拶はまたの機会にしてもらえま
せんか？」

「お忙しいところ申し訳ありません。少しご相談したいこともあり
ますんで、お時間ができましたら、お声をかけていただけませんか
？」

おい。俺の話、来てるのか？

「いつでもかまいません。仲間が外にいますから、誰かに声をかけ
てください」

相談？ 仲間？

「……わかりました。では後ほど」

「どうもすみません」

訪問者はそう言い残してドアから離れた。

「どいて」

メイド服に着替えたリンが、俺を押しわけ、ドアに耳を貼り付け
た。

一歩下がった俺は、しばらく待った。

「大勢いるわ」

「人数は？」

「わかるわけないでしょ。階段の音と……あつ、建物の前で誰か笑
ってる。けっこういるみたい」

ドアから耳を離れたリンは、俺を見上げてきた。

と、リンは顔をしかめた。

「その兜、なんとかかない？」

「んっ？ 選んだの、おまえだろ？」

俺の変装衣装はすべてリンが選んだものだ。だが、選んだ本人はご不満らしい。

「あんたがどこ見てるのかわかんないのよ。なに考えるのかもわからないし」

「……変装用だぞ？」

「いいから、今は兜ぐらい脱いでよ」

わけがわからなかったが、俺は言われた通り、兜を収納した。

「これでいいか？」

「うん。で、どうする？」

リンは真顔で尋ねてきた。

「どうするもこうするも……」

俺はガチャガチャと腕を――組むことができず、左手を腰にあてた。

「面倒だ。別の宿、探したほうが早いだろう？」

「そりゃあ……でもさ」

リンは窓に目を向けた。

「ここから見る夕焼け、最高なんだけどなあ」

本格始動以降、各中枢都市では昼夜も再現されるようになった。ゲーム内の1日は8時間でひと巡り。メンテを終えた午前9時が日の出、4時間後の13時（午後1時）が日没、17時（午後5時）が2回目の日の出で、21時（午後9時）に2度目の日没を迎え、翌日の午前1時に3度目の日の出、午前5時に日没を迎え、ゲーム内で夜のうちにメンテ時間に入る――そんな感じだ。

「そっかあ……あれも見納めかあ」

俺も西側を窓を眺めてみた。

あの窓から見える光景が最高になる時間は、もうまもなくやってくる。

夕暮れ時だ。

偶然見つけた宿だったが、リンが適当に選んだ2階の角部屋は、夕陽を見るには格別の場所だったのだ。もう、その光景はキレイな

んてものじゃない。

茜色の世界。

キラキラと輝く海。

彼方には岩礁が数個、波間から顔を覗かせている。

空には本格始動後に実装された、決して地上に降りてこないカモメが優雅に飛んでいる。

海に半分突き出ている広場には、蟻のようなユーザーたちの姿も見えた。

それは夢のような景色だ。

街に戻るなら、必ずこの時間にしようと話し合ったくらい、この部屋からの景色は格別だったのだ。

「……やるか」

と、俺はつぶやいた。

「なにを？」

「だから……面倒なこと」

俺は兜を呼び出し、装備しなおした。

リンは目を見開いて、兜を被った俺をマジマジと見上げた。

「芝居、本気でやるつもり？」

「もったいないだろ、この部屋」

「それはそうだけど……でも、そういうの苦手なんですよ？」

「交渉は任せた」

「あんたねえ……」

リンは両手を腰にあてながら、呆れたとばかりに顔をしかめてきた。

それでも口元が微妙にほころんでいる。

これなら、まあ、なんとかしてくれるだろう。多分。

部屋を出ると、宿の前に集まっていたユーザーたちが一斉にこっちを見上げてきた。

トカゲ人間もいれば子供外装もいる。

普通の男性外装もいれば、女性外装もいる。

雑多な集団だ。

少なくとも俺が知る有名どころの《青》系グループではないらしい。といっても、俺の知っている集団といえば、トカゲ人間が多い『蜥蜴同盟』とか、貝殻ブラジャー必須という珍妙な掟を掲げている『私立人魚姫学園』だとかのキワモノ系(?)ばかりなのだが。

「いくわよ」とリン。

「OK、相棒」と俺。

設定は随分前に作り上げている。雑談がてら、冗談半分に話していたものだが、とうとうそれを実際に使う時が来たのだ。

「はじめまして」

階段を降りた俺たちの前に、グループの代表者らしい女性外装ユーザーがやってきた。

もう、引き返すことはできない。

「さきほどはすみませんでした」

メイド姿のリンが会釈した。

「こちらこそ。リユーネです」

代表者はそう応えた。

ヴェトナムのアオザイを着た、スタイル抜群の女性だ。

背の中程まで伸びる癖のない藍色の髪。肌は褐色。パツチリとした両目はサファイアのような蒼。珊瑚にも見える外装オプションの《竜角》ドラゴンホーンが、額から2本、小さく突き出ている。それ以上に目を引くのは、全リセット前のリンよりも大きい、しっかりとした胸のふくらみだ。

今回ばかりは、兜を被っていて良かったと本気で思った。さもない、胸に注目する俺に、リンがどういう反応を示していたものか

わかったもんじゃない。

「今日からこちらの宿で一緒にさせていただくことになります。そちらは……」

「わたし、ランです。こっちはカミュっていいいます」

俺は軽く頭を下げた。

言うまでもなく、偽名だ。

それでも、リユーネと名乗った人は、当然のように、ある疑問を口にしてきた。

「おふたりだけ……ですか？」

当然だろう。パーティは6人というのが常識なのだし。

だがラン（リン）は即座に、

「はい」

と答えた。

「わたしたち、幼馴染みなんです。ただ、カミュがちょっと人見知りするんで……」

ラン（リン）とリユーネが俺に視線を向けてきた。

俺は顔を背けた。

「もう……」

ラン（リン）の肘鉄が、鎧の腹部を震わせた。

兜の下で視線だけをリユーネに向けると、彼女は困惑気味に微笑んでいた。

どうやら今の話を信じてくれたらしい。

悪い人では無いのかもしれない。

「ところで……なんていうグループですか？」

ラン（リン）はチラッと、周囲に視線を向けた。全部で十数名いるリユーネの仲間らしきユーザーたちは、俺たちの会話に注目しているところだった。

「いえ、名前はまだ……グループというより、たまたま知り合った人たちが集まってるだけなんです」

「何人いるんですか？」

「今日は30と……ねえ、何人？」

「36。ロイドさんたちとハチコウさんたちが潜ったまんまだし」

「8パーティですか？」とラン（リン）。

「ううん。パーティは9つ。5人と4人のパーティもいるの」

ラン（リン）を年下と判断したらしい。リユーネは口調を変えながら、落ち着いた物腰で、さらにこう言ってきた。

「それもあって、相談したいと思っていたの」

「部屋のことですか？」

ラン（リン）はすぐ察したらしい。

“老人の隠れ家” 亭は1階が4部屋、2階が5部屋の計9部屋構成だ。しかも部屋のレンタルはパーティ単位。キャンプ機能のことも考えると、いちいち再編成するよりは、というところなのだろう。「後から来たのに、こういうお願いをするのもどうかと思うんだけど……」

「すみません。あの部屋、わたしたちも気に入っているので……」

「もちろん、ただとは言わないわよ？ 迷惑料込みで、100万（1M）まで出せるわ。どう？」

ラン（リン）は目を丸くした。俺もだ。

俺たちも随分稼いでいるつもりだが、それでもリンが言うには今回の分も計算にいれて、ようやく1日平均が5万を突破した程度にすぎない。それなのに彼女たちは、たかが宿屋の一室を手にいれるために100万も出すと言ってきた。

俺はリンの背中をこずいた。

振り返るラン（リン）の顔に、兜を近づける。

「……なに？」

リンが小声で尋ねてきた。

「……いくらなんでも変だ」

「……わかってるわよ」

「……いざとなったら俺が暴れる」

「……そんなにやばい？」

「……わからん」

「……OK、その時は任せるから」

「……任せる」

俺たちは内緒話を終え、再びリユーネに向き直った。

リユーネは両腕を組みつつ、苦笑を漏らし、小首を傾げていた。

「質問があります」とラン（リン）。

「そうよね」とリユーネ。

「100万クリスタルなんて大金、本当に持ってるんですか？」

「これでどう？」

すでに準備していたのだろう、リユーネはアオザイの袖からカードを引き出した。

それを見えるように差し出す。

クリスタルカードだ。

それも、ワードスペースに“1,000,000c”と記されたクリスタルカードだった。

「まだ信用できない？」

「できません」

ラン（リン）は即答した。後ろにいる俺には表情が読みとれない。だが、なんとなく笑顔で言い返した気がした。こいつはそういうヤツなのだ。

「わたし、ゲームのことは詳しくないんですが、アンダーグラウンドの地下10階より深いところに潜ってるプレイヤーでも、1日に稼げる量は1万クリスタルから2万クリスタル、いっても4万クリスタルぐらいと聞いています。違いますか？」

「9パーティもいるんだもの。1日で36万ぐらい、稼げるでしょ？」

「もしくは9万ですね」

「そうね」

リユーネは組んでいた右手を頬にあてつつ斜め下を見下ろした。

「あなた方が納得できる答え、簡単に教えるわけにはいかないのよ」

「それでしたら交渉決裂ですね」

ラン（リン）の一言に、リユーネの背後にいる面々が戸惑いの表情を浮かべた。それもそうだろう。いくら胡散臭くても100万が手に入るのだ。仮に彼女たちが後ろ暗い連中だとしたら、関わりにならないのが得策といえる。だったら、素直に受け取り、宿を引き払うのが最善のはずだ。

実際、俺もそう考え出している。リンもそうだろう。

しかし、まだリユーネの目はしっかりとラン（リン）を捕らえている。交渉が決裂するはずがない。

「交渉上手ね」

リユーネのその一言が、すべてを物語っていた。

「やっぱり最初から100万にしたのがいけなかったのかしら？」

「さあ？」

ラン（リン）とリユーネは微笑みあっている。和やかに見えるのは、あくまで表面だけだが。

「どうすれば譲ってもらえるかしら？」

「どうすればわたしたちが譲ると思います？」

リンは一步の引かない。それどころか、攻めに転じている。

いや、向こうが条件を出した時点で、すでにこっちが攻め手になっているようだ。

向こうはこちらの要求が何であるかを把握していない。

仮に焦れた相手が暴力を臭わせてきたら、その時点で向こうの負けだ。

不幸中の幸いというべきか、俺たちは蒼海市長から“何かあったら連絡して良い”という免罪符を貰っている。いざという時は、これに頼ればいいだけなのだ。スタッフサイドできればやりたくないが、大金をちらつかせる胡散臭さを思うと、公権力も手持ちのカードとして数えておくべきだと思わずにいられない。

「困ったわね……」

リユーネは溜め息をついた。

「団長。聞いてるんでしょ？ 降りてきてくださらない？」

「ああ」

声は上から聞こえた。見上げると、2階東端の角部屋の前に人影があった。

紺色の着流しを着込んだ、長身の青年だ。巻き毛がかった短い金髪、白い肌、赤い瞳——よく見ると額から細長い5センチほどの一本角が伸びている。こちらも外装オプションは《ドラゴンホーン竜角》らしい。なんとなく、和服に挑戦した西洋人といった感じのする人だ。

「まったく……ここではゼノンって呼べって言ったろ？」

「団長は団長です」

リューネはニヤツと笑っていた。

ゼノンと呼ばれた着流しの人は、

「いやあ、すまんすまん」

と俺たちに笑いかけながら階段を降りてきた。

「君らが本物なら、きつところなるだろうと思ってね。いや、試すみたいで申し訳ない。お互い様ってところで、どうかな？」

俺はリンの背中をこずいてから、少しだけ階段から離れた。

こいつらの仲間はリューネの向こう側にいる。俺の背後には誰もいない。

「おっと、やりあうつもりはないよ。勝てない喧嘩はしない主義なんだ」

ゼノンは階段を降りると、腕を組みつつ、俺のほうに苦笑を投げかけてきた。

「どういう意味ですか？」

俺と共に退いていたリンは、警戒しながらゼノンに言い返した。
ゼノンは苦笑まじりに、片手で顎を撫でだした。

「どういう意味もなにも……なあ」

「私に振らないでくださいね」

ゼノンの問いかけを、リューネはクスクスと笑いながら軽く受け流した。

「……たく」

俺は悪態をついた。

「ねえ……」

リンは前を向いたまま、俺に向かって囁きかけてきた。

「ちよつと……ヤバくない？」

「ちよつとどころじゃないだろ。ただ……逃げても、無意味かもな」

「やっぱり？」

「ああ。だいたい、どう考えても……」

俺は溜め息をついた。

「バレてる」

「だね」

ゼノンは「君らが本物なら」と言った。さらにリユーネはゼノンのことを「団長」と呼び、ゼノンはゼノンで「お互い様」なんて言っている。

なにがお互い様なのか？——正体を偽っていることだ。

では連中の正体は？——考えるまでもない。

見せ金にしても100万は大金だ。それほどの資金力を持つグループといえば、今日になって《シャークウェア》の買い占めを行った連中以外に考えられない。

つまりこいつらは——

「『蒼海騎士団』？」

「だな」

思いつく名前は、それしかない。

「いやあ、偶然というのは恐ろしいものだよ」

ゼノンは小さく笑いながら、語り続けた。

「市場で鍾乳洞のドロップアイテム、いろいろと売却してる2人組がいることに気づいてね。しかも、尾行してみたら、こっちが拠点候補にしてるところに、2人だけで入っていくんだから……そこまですごい、ピンと来たよ。この2人こそが、あの……ってね」

「それで？」とリンが冷ややかに尋ね返した。

「まあまあ」

ゼノンはそう告げると、リユーネに顔を向けた。

「悪いけど、軽食3人分、誰かに買ってこさせてくれないかな？」

「タケル、キオ、全員プラス2人分のAセット、お願いできる？」

「おい、全員って――」

「団長のおごりだから、急ぐのよ」

すぐに「はい」という返事が2つ響いた。トカゲ人間と男性外装が目抜き通りに向かって走り始めた。

「立ち話もなんですから、あちらで」

リユーネが1階西端の部屋を指し示した。

「お断りします」

リンが即答した。俺もうなずいた。

これは予想外だったらしく、ゼノンとリユーネは、顔を見合わせた。

「いや……それだと、まとまる話もまとまらんだろ？」

「だったらここで言うてください。それと、なにか勘違いされているようですが、わたしたちはSLじゃありません。前にも勘違いした人に因縁つけられて、スタッフのお世話になったことがあります。必要と判断すれば、今回もそうします」

リンはスラスラと言い放つと、最後に半歩踏み出しながら鋭く言い放った。

「お話しは以上です。そこをどいてください」

ゼノンとリユーネは、再び顔を見合わせていた。

部屋に戻った俺たちは、わずか十数分で終わる夕暮れの光景を堪能した。

「じゃ、行くか」

「了解」

西の空が赤紫色に変わったところで部屋を出発。宿の前にはゼノンの仲間たちがたむろしていたが、俺たちはそれを無視して中央広場に向かった。それぞれログインボックスに入り、アンダーグラウンドへの転移を選ぶ。

残り時間は1時間を切っていたが、俺たちは変装したままの状態です、迷うことなく地下4階まで降りていった。使った魔杖は共に《バーストガン》だけだったが、煉瓦階層の段階では、これだけで充分すぎるほど対応可能なのだ。

「時間だな」

「じゃ、後で」

9時51分、リミットタイムが間近に迫っていた俺たちは、地下4階のアップパーボックス―上の階層に通じているログインボックス―でログアウトすることにした。

PVベッドを出た俺は、一端、冷蔵庫のミネラルウォーターを取りに部屋を出て行った。

リビングで洗濯物を畳んでいた母さんが俺を見ると、壁掛け時計を見上げた。

「あら、もうそんな時間？」

「親父は？」

「脇坂さんとコレよ、コレ」

母さんは釣りの手真似をした。

「好きだな……」

「あんたのゲーム好きといい勝負よ」

「はいはい」

俺は冷蔵庫をあけ、ミネラルウォーターのペットボトルを取り出した。

「慎一。母さん、そろそろお風呂入って寝るけど、あんたもほどほどこにするのよ。来週、期末試験なんでしょ」

「へーい。じゃ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

俺はミネラルウォーターのペットボトルを持ったまま、部屋に戻った。

机に向かい、勉強を――するはずもなく、ノートパソコンのモニターを覗き込む。

モニターには『Xちゃんねる』専用ブラウザで、PO関連スレが表示されたままだ。

俺は最新データを全部読み込み、情報をあさりだした。

読んでいなかった市場スレが次スレに移動していた。懺悔スレ、ヲチスレ、『マトメ』に作られた雑談、紅都、蒼都、翠都の各スレは読まずに放置しておく。本スレも次スレに移動していたので、市場スレともども、新スレを開いてみる。

最後に、展開中の全スレを「騎士団」で検索。

と、平面ディスプレイのSCOP3が、アドレスコール有りのウインドウを開いた。

リンだ。

そのままエンターキーを押すと、長い黒髪をすべて降ろした、Tシャツ姿のリンが画面に映し出された。

〈お待たせ〉

「いや。それより騎士団の下調べだ」

〈だよね〉

俺たちはそれぞれのパソコンで、蒼海騎士団に関する情報を集めまくった。

だが、大した情報が見つからない。少なくともクグル（C o o g

le)でヒットする情報は、前に見たことがある不確かなものばかりだ。

それでも『マトメ』の蒼都スレには、“金持ち集団”がアイテムを買い占めているという書き込みがポツポツと寄せられていた。

時刻は20時頃だ。夕方にログインした面々が書き込んだものらしい。

〈こっちも同じ話ばっか〉

「どこにあった？」

〈市場スレ。魔杖も買いあさってるみたい〉

確かめると、《スペルガン》の上位にあたる《ブラストガン》や《バーストガン》、《アサルトライフル》、《グレネードバズーカ》、《ブラストバルカン》などが、朝の6時台から品薄になっていることがわかった。

「金がありあまつてるってところは、確かっぽいな」

〈でも、変じゃない？〉

「変に決まってるだろ」

〈なんだろう……簡単にお金が稼げる手段………〉

「そんなのがあったら、すぐネットで流れるだろ」

〈あいつらが稼ぎ方を隠しているっていうのは？〉

「どうやって」

〈さあ？〉

「稼ぐ……稼ぐ……金を稼ぐ……その方法といえど？」

〈モンスターを倒すとか、カードを売るとか、カジノで——〉

俺たちはハツとなり、

「「カジノ!？」」

と同時に声をあげた。

〈でも、大当たりしたらニュースになるでしょ!？〉

「だったら大当たり以外の方法があるんだろ。とにかく、カジノ関連で調べるぞ」

〈OK〉

俺たちは再びネットの情報をあさりだした。

すると『Xちゃんねる』の過去スレに、それっぽい情報が点在していることに気づいた。全リセット前から、カジノに入り浸っているテスターが何名かいるというものだ。外装に関する情報は無かったが、居る時は仲間うちで固まり、カジノの奥にあるハイ&ローばかりやっているという書き込みがあった。

「これだな。きつと」

〈どれ？〉

教えると、リンも同じ結論に達したらしい。

〈そっか……わたしたちのギャンブル版だったわけ？〉

「かもな。それにしても……どれくらい溜め込んでるんだ？」

〈どれだけやり込んでるかによるんじゃない？〉

「やり込んだ程度でどうにかなるのか？」

〈イカサマしてるとか？〉

「ありえるな……でも、荒稼ぎしてることでぐらい、市長も気づいて……いや、待てよ。気づくのが遅れたとしたら？」

〈どうということ？〉

「そうか……そうだ。カードだ。クリスタルカード」

〈だから、どうということよ〉

「仮にだ。あるテスターが1000万なんて大金を持っていたとしたら、スタッフもエラーかと思って、確認するだろ。仮にイカサマじゃなくても、それだけ稼ぐユーザーがいたとしたら、あの市長が――」

俺は苦笑した。

「見過ごすわけないだろ。違う意味で」

〈名前を晒すぐらいはするわよね、あの人なら〉

リンも同感らしい。

「だが、ゼノンなんて名前は聞いた記憶が無い。リユーネもそう。だったら連中は、あまり正当とは言えない方法、つまり不正な手段で荒稼ぎしてたと見るべきだろ」

「へでも、大金稼いだら、スタッフも気づくんじゃないの？」

「だから、カードにするんだよ。クリスタルカードなら、カードウインドウに収納しておくこともできるだろ？」

ちなみに稼いだ金は、通常、キャッシュデータとして保存される。ただ、キャッシュはカード化することが可能だ。リンが青空市場でやってみせたように。

「1万稼いではカード、1万稼いではカード……それを続ければ、キャッシュデータを少なくしたまま、ウインドウに1万のクリスタルカードを最大100枚、溜めることができる。それなら、アイテムデータを覗かれない限り、スタッフも気づかないだろ」

「へそっか……」

リンは顔をしかめながら補足してきた。

「2人でパーティ組むと共有込みで300枚ももてるもんね。それに1万のカード2枚を融合させれば2万のカードになるし……これを繰り返せば、いくらでもスタッフに気づかれないまま溜めることができるわ。うん」

「ところがスタッフも勘付いた」

「それが昨日？」

「いや、もう少し前だろ。しかも、金は取り上げられなかった。だから、金はあるが、力の無い連中が、まず装備を調えることから初めた。そして俺たちに接触してきた。どうだ、俺の戯れ言」

「筋立てはいいけど、証拠も無いし、そもそもわたしたちに接触する理由は？」

「勧誘だろ」

「へだったら、あの100万は？」

「釣り餌って可能性は？」

「へそうじゃなかったとしたら？ そりゃあ、あくまで可能性の問題だけど、最初からわたしたちがSLだって確信してたとも言えないんじゃない？ 違った場合のリスクは？」

「冗談の一言で済ませる」

へそして見知らぬプレイヤーに不信感を抱かれて、ネットに書き込まれる?」

「それだ」

俺は指を鳴らし、画面のリンを指さした。

「それって?」

「だから、不信感を抱いたプレイヤーは、ネットに書き込むだろ」
「呆れた……ニセモノのふりして書き込みするつもり?」

リンは表情を曇らせた。以前の騒動を思い出したからだろう。
しかし俺は、楽しげにいい返した。

「いや、SLで書き込む」

「それ、矛盾してない?」

「つまりだな——」



344 名前…LIN ◆KM48rimSQ 投稿日…X0/
07/08 01…56…42 ID…*****

みなさん、お久しぶりです。SLのLのほうです。

今回は少しお尋ねしたいことがあります、ご迷惑になるとは承知のうえで

お邪魔させていただきました。ご不快に思われたら、お許し下さい。

お尋ねしたいことというのは、ある青陣営の集団についてです。

実は本日、地下で私たちと同じ二人組のプレイヤーと会いました。

々は、
私たちは普段通り、逃げるつもりだったのですが、その方

・私たち（SLのことです）に間違えられて困っている
・相談に載って欲しい
と言ってきたため、話だけは聞こうということになりました。
た。

内容を列挙すると、次のようになります

・相談者二人は路地裏の宿屋を拠点にする攻略パーティ（
コンビ）

・火力重視により、鍾乳洞でギリギリ戦えるぐらいになった
・宿に戻ると、不審な集団（計8PT）から立ち退くよう
要求された

・代償として100万クリスを定時された（クリスカード
も見たそうです）

・完全に自分たちをSLの変装だと勘違いしている
・どうすればいいのか

以上が相談内容の全てです。

相棒はやる気ゼロなのですが、私としては少なからず気にかかっています。

（すみません。長いので続きます）

348 名前…LIN ◆KM48rimMSQ 投稿日…X0/
07/08 01…57…02 ID…*****

お尋ねしたい点は、次のものです。

1）宿の立ち退き料として100万クリスは妥当な金額なのか？

2）宿を全室占拠すると特別なメリットが生じるのか？

3）問題の不審な集団は安全そうなのか？

得に3番目が不安に思っています。

私は戦闘狂な相棒の代わりに仕入れや売却も行っているのですが、

市場スレにおける、ここ数日の蒼都の価格変動は異常というしかありません。

相棒は「カジノで一発当てたヤツがなにかしてるんじゃないか?」と言っていますが、

そのような話は寡聞にして知らないもので、薄気味悪いものを感じています。

知ったからどうする、というわけでもありませんが、何か情報がありましたら関連スレで提供していただけると助かります。

謝礼は市場に鍾乳洞のドロップアイテムを積極的に流すということで、

ご勘弁頂ければ幸いです(他の陣営の皆様、申し訳ありません)。

以上、よろしく願います。

追伸 相棒が波動拳中毒です。なんとかしてください(涙

403 名前:SHIN ◆O4TEsRfEf / 投稿日:X0
/07/08 02:00:17 ID:*****

波動拳は漢の浪漫なんだよ!、(ㄟ)ノ ウワアアア

ン!

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

■ミノタウロスのおいしい食べ方

・遠々距離(十メートル以上)だと特攻を仕掛けてくるの

で攻撃は我慢

・遠距離（五メートル）で拳or剣or槍を構えると
防御姿勢をとるので静止する

・そこを銃or杖（属性アロー）で攻撃

・当たり所に寄るが三秒で特攻してくる

・斧を真上に振り上げたら向かって左に、横に振りかぶったら後ろに退避

・近接攻撃は太股を狙えば当たりやすい（腕の振り回しに注意）

・一番簡単なのはバルカンによる二万円攻撃（全弾斉射のこと。命名者はL）

||||||||||||||||||||

どうやらこれでガチっぽい。青以外では違いかもしれないので検証必須。

<<謎の集団

正直、俺はどうでもよかったり。

俺の対応はいつもの通り、貴重なログイン時間を食いつぶすヤツをぬっころすだけ。

PKはコロシアムでしか経験してないから、いい機会かも——とすら思ってる。

<<巻きこれた二人

俺は全然話していないので、よーわからん。

418 名前…SHIN ◆O4TESRfEf／ 投稿日…X0
／07／08 02…01…43 ID…*****

<<392

刀剣型のコツは腰を使うこと。試しにパターンAで素振り

だけやってみれ。

腕は使うな。手首を使うのも、もつと後。まずは足腰の力を意識するとOK

<<398

よーわからんが、宿を占拠するつもりだったらしい。

宿屋って占拠したら何かあるのか？　っていうか、占拠の基準ってなによ。

街は専門外だから、市民派の諸氏に任せる。

ブツは相棒が約束したから、ちゃんど市場に流すので安心してくれ。

次の帰りはもうちょい先になると思うけど。

<<同志諸君

そう、波動拳こそ漢の浪漫！　使い勝手の悪さなど些末な問題！

でも昇竜は勘弁。今の時点で対空技いわれても……　or

Z　モッテルケドサ

以上。おやすみ。

ノシ

7月10日（テスト46日目）早朝——俺とリンは、2日近くかけて集めた情報を、ひとつずつ整理していった。

これで新たにわかったこともある。

たとえば、『PHANTASIA ONLINE』にけっこのバグが残っているということ。代表的なものは、翠都市庁舎東側階段にある“ユーザーの姿を映さない大きな鏡”だ。もともと幽霊イベント用に組み上げた設定が、なにかの拍子に固定化されてしまったらしい。今のところ、これはこれで面白いということで放置されているというか、一種の観光名所化しているようだが。

同様に、様々なバグが各地に残っている。

蒼都に限定すると、

——5回に1回の割合で中辛が激辛になるNPCカフェレストランのカレーライス

——自分の足音が1秒後に再生されるフレチカット通り

——下から見ると12段なのに上から見ると14段ある宿屋“虹色の珊瑚”亭の階段

この3つは有名な固定バグだそうだ。

さらに試練場にも細かいバグがいろいろとあり、スタッフはそちらの修正に手をとられているところらしい。

他にも“いつもログインしている白髪の少女”とか“存在しないはずのストリート”とか“魂が吸い取られる家”とか……オカルトめいた噂もいろいろとあり、最近は、こういう噂を収拾することに熱中している落選組のブログまで登場している。

さて。

本命と言うべき騎士団絡みの情報もあった。本格始動後、カジノの隅でハイ&ローばかりやっている集団がいたこと、彼らは仲間以外が近づこうとすると散っていくか、イヤそうな顔をするなど、

何かをしていたと判断できる複数の証言が寄せられたのだ。

なにより大きな収穫は、7月5日頃から、その集団が急に姿を消したという情報だ。

「へビンゴ？」

「だな」

半袖Yシャツと濃紺のスラックスを身につけ、朝食を終えて部屋に戻ってきた俺は、通信料が掛からないということのでつなぎっぱなしにしているIPヴィジフォンの向こう側にうなずき返した。

「でも、まだ何かあるかもしれないからな。頼むぞ」

「OK、相棒。あんたは真面目に試験受けてきなさい」

「やなこった」

俺はSCOP3を閉じ、鞆を小脇に抱えながら部屋を出ていた。

「じゃ、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

洗い物をしている母さんが、のんびりとした声で、いつも通りの声を返してきた。

外に出ると蒸し暑かった。

「夏か……」

首にまいた濃紺のネクタイをさらに緩める。

他の男子生徒同様、俺はYシャツの裾をベルトの外に垂らしている。最近の下に着るTシャツも外に出すのが流行しているそうだが、腹を下しやすい俺は、そこまではやらないことにしている。

こう見えても繊細なのだ。俺の身体は。

「あつーっ」

俺は朝からガラガラと輝く太陽を恨めしげに睨み上げると、トボトボと歩いて30分のところにある道立五稜郭高校へと向かった。

近所にあり、推薦で入学できる学校だった——というのが、そこを選んだ一番の動機だ。

学校の偏差値は、道内だと少し上だが、全国平均だと中の下ぐらい。しかも函館には、国立の高専や私立の名門校が幾つもある。そ

のため五稜郭高校は道立なのだが、今ひとつ目立っていないところでもある。そんな、可もなく不可もないところも、進学の動機のひとつ……なのだろうか？ 自分でもよくわからない。

「ふわぁああ……んっ」

欠伸をしながら校門を抜け、生徒玄関で踵を潰した上履きに履き替え、ノベーツと1年B組の教室を目指す。

「おーっす」

たまに馬鹿話をする程度の男子クラスメートを見かけたので、軽く手をあげて挨拶しながら、教室後方の引き戸から教室に入る。

向かうは窓際最後列の席。窓は西向きなので、午前中はまだ涼しいほうだが、午後になるとブラインドを下ろしていても地獄を見るという、あまりよろしくない場所だ。しかも、すぐ後ろに、掃除用具の入ったロッカーがあるため、夏場になると臭う。すでに最近も臭っているのだから、これからが地獄だ。こりゃあ、自費で消臭剤のひとつかふたつ、仕入れてくるしかなさそうだ。

「ふわぁああ……んっ」

鞆を机の横にかけた俺は、欠伸をしながら椅子に座った。

ケータイを取り出し、リンにメールを送る。

――学校到着。そっちの調子は？

送信すると、担任が姿を現した。

クラスメートたちが席に戻る。クラス委員の号令のもと、おきまりの儀式が行われた。

着席すると、ケータイが震えた。

――学校終わるまでメール禁止！ P.S. 朗報ヲ期待セヨ

なにか情報を仕入れたらしい。

俺は苦笑しつつ、ケータイを鞆に押し込んだ。

と、隣の席の女子と目があった。

おかつぱ頭の色黒な女子だ。名前は……名前は………なんだっけ？

まっ、いいか。

俺は軽く、片手で拝む仕草をして謝ると、頬杖をつきつつ、担任の話に耳を傾けた。

担任の話は、今日から期末試験だから気を引き締めるように、という当たり障りのないものだった。

ホームルームが終わると、またダラケきった空気が漂いだす。一応、これから期末試験が始まるので無駄な抵抗をしている連中も多いが、あまりせっぱ詰まった感じはない。まあ、1年生だし、偏差値もそれほど高くない高校だから、勉強に血眼をあげるようなヤツが少ないせいだろう。

俺も席の近い、よくダベる男子連中と適当に雑談をしながら時間を潰した。

その際に言われたことがある。

「久賀、なんかあったのか？」

「そうそう。前はギスギスしてたのに、最近、なまら柔らかくなったろ」

「まさかコレか、コレ」

ひとりが、これみよがしに小指を立ててきた。

「あほ。んな暇あったら、ゲームやってるよ」

俺は呆れたように言い返した。

でもまあ、リンの薦めで、毎晩、柔軟体操をするようになったのも事実だ。そうすることで交感神経を刺激すれば、外装をよりうまく扱えるかもしれない——なんていう与太話に付き合っているのだ。もともと小中と体育の盛んな学校にいていたこともあり、最近では随分と体も柔らかくなってきている。両足を後頭部に引っかけられるリンとは比べものにならないものの、この1ヶ月で、かなり変わったはずだ。

そういう意味では、確かに俺は、柔らかくなっていた。それは、事実だった。

ようやく昼休みになった。

「んーんっ、んっ！」

俺は大きく背伸びをした。どうにか3科目の試験が終わったわけだが。

まあ、あれだな。

可もなく不可もなく。真面目に勉強すれば、もう少し上を目指せるような気もするが、やっても無駄な気もするし……

「よお、久賀！」

不意にドンツと肩を叩かれた。

それなりに痛い、ミノタウロスにぶん殴られた時に比べれば大したことが無い。いや、あれもシステマ的に抑制されているから、本当であれば、もっと痛いのだろう。

ではなく。

「つっ——なんだあ？」

振り返ると、見上げんばかりの巨漢を誇る坊主頭の眼鏡野郎が立っていた。

クラスで一番の巨漢で困ったちゃんの代表格——おおやま・のりよし大山憲義だ。

キレると暴れるとかで、同じ中学の出身者も近づかないのは、見ているだけでわかる。しかも、実はアニメ好きのアキバ系であるらしく、暇さえあればエロいイラストをノートなどに描いていては、それをわざと女子にも見えるように置いていくとか、かと思うと見たことを詰なるとか、そういう話が俺でも小耳に挟むような困ったちゃんだ。

ある意味、うちのクラスにおいて、俺以上の異端児と言っている。一応、俺の一般評価は“寝てばかりいる怠け者のゲームオタク”というものだ。言い換えれば“毒にも薬にもならぬ”といったところだと思う。クラスでの影も薄く、同じ中学の出身者もないので、

席の近い男子とたまに馬鹿話をするものを除けば、ひとりで携帯電話のゲームをやっているか、寝ているか、ボーツとしているか……という存在だったりもする。

だから当然、俺と大山に接点はない。

同じオタクでも分野が違うせいもあって、話したことすらない。

そんな大山が、俺に、こんなことを尋ねてきた。

「おまえ、ゲーム好きだよな？」

イヤな予感がした。

不思議な話だが、『PHANTASIA ONLINE』をやるようになってから、この手の感覚が鋭敏になってきた気がする。脳が刺激されているせいかもしれない。

それとも、妄想とは思えない危険を体験していることで、第六感がとぎすまされてきたのだろうか。

「……なんだよ。藪から棒に」

俺は咄嗟に、リンの交渉術を真似てみた。

質問されても答えない。

質問には質問で返す。

引き出せるだけのものはすべて引き出し、こちらからは、なんにも出さない。

交渉は持ちかけたほうが、すでに立場が弱い。こっちは強い。なぜならこっちは損得無しでも問題は無いが、交渉を持ちかけた以上向こうはこっちから何かを引き出したいことを、すでに示しているのだ。ゆえに交渉を持ちかけられたら、強気に接してもかまわない。もちろん、向こうが感情的になったら話は別なので、その時は別の対応を考えなければならぬ……

以上が、リンから聞いた交渉術のイロハだ。

——なんでそんなこと知ってんだ？

——決まってるじゃない。あの地獄で生き延びるためよ。

地獄とはあいつが通うお嬢様学校のことらしい。だとしても……おまえ、いったい何歳だよ。

閑話休題。

「答えろよ」と大山。「おまえ、ゲームのこと詳しいだろ？」

「だから……」

俺は溜め息をつきつつ、再び尋ね返した。

「どうしてそんなこと、俺に聞くんだ？」

「『PHANTASIA ONLINE』は知ってるよな？」

俺はドキッとした。

大山がニヤッと笑う。気色の悪い笑みだ。

「やっぱりな」

「やっぱりって……そりゃあ、知ってるだろ。普通は」

「嘘だ」

「嘘って……『PHANTASIA ONLINE』って、あ

れだろ。PVのゲーム。今、クローズβテストだよな。ゲームの

情報、ネットで探せば、絶対に目するタイトルだぞ。知らないわけ

ないだろ」

「やってるだろ」

「……はあ？」

これには素で反応できた。

「おまえ、やってるだろ。『PHANTASIA ONLINE

』」

大山は勝ち誇った様子で言い放ってきた。

俺は脳味噌をフル回転させた。

（なぜだ……？）

ふと思いつ出したのは、一度だけ晒された公式サイトでのSHIN

のフェイス画像だ。

（それか……）

とりあえず、そう考えておこう。だとしたら、マズイことになっ

た。

こいつはSHINの正体が俺であることを察している。

考えてみれば、難しい話じゃない。髪と肌と目の色を変え、瞳孔

を元に戻せば、今の俺になるのだ。それもあって、晒された直後は、いつ正体がばれるのかと思ってビクビクしていた。しかし、意外と世の中、気付かないようにできているものらしい。というか、POの暴れん坊であるSHINと、常にぬぼーっとしている俺のイメージがかけ離れているため気付かれづらかったようだ。

それでもいずれは、と思っていたが……こいつが……ねえ。

「ち、違うのか？」

急に大山は焦った様子で早口に言った。

「どうやら俺の沈黙を“困惑している”と勘違いしたらしい。

まあ……的中されて驚いていただけなんだが。

ついでに、まさか最初に、大山が指摘してくるとは予想外だったわけ。

「で、でも、これ、おまえだろ」

大山は半袖Yシャツの胸ポケットから、折り畳んだ紙を取り出した。

案の定、晒された時の画像をカラープリントしたものだった。

ただ、折り目だらけであり、発色が今ひとつなせいで、画面で見た時と印象が違っていた。なんというか……凶悪さが数百倍に増しているというか。

「そうだろ！　これ、おまえだろ！」

大山は急に興奮しだした。

まだ教室に残っていた面々は、大山と俺のやりとり注目した。それでも、わざわざ近づいて仲裁しようとする者はいない。大山と関わり合いたくないからだろう。俺だって向こう側にいたら、そうしたはずだ。というか、俺は誰とも積極的に関わり合いたくない。久賀慎一という男は、本質的に、“寝てばかりいる面倒くさがり屋”なのだ。

「まあ、俺に似てる気もするが……」

「だろ!？」

俺が同意したせいだろう、大山はグッと両拳を握りながら断言した。

しかし俺は、間髪入れず、大山に尋ねた。

「でも、これどうしたんだ？ ネットに出てたやつか？」

「出てただろ！ サイトに！」

「どこの？」

「だから、『PHANTASIA ONLINE』のサイトに！」

「……公式サイトか？」

急に大山が黙り込んだ。

俺は気づかないふりをして、「うーん」と言いつつカラープリントを見つめ続けた。

「しっかしまあ、よくできてんなあ……」

これはけっこう、正直な感想だ。ログインするたびに見ているとは言え、こうして印刷されたものを見ると、いつもと違う感じがするのだ。

「さすがPVというか……無意味に高性能だな」

「嘘だ！」

大山が叫んだ。俺を含む大山以外の全員がギョツとなった。

「嘘だ嘘だ嘘だ！」

大山は顔を真っ赤にしながら、右足でダンダンと床を踏んだ。
「おまえだろ！ シンだろ！ だから、おまえがシンだ！ 絶対にシンだ！」

「いや、だから——」

「うるさい黙れ！ 権利譲れよ！ 俺のだ！ 俺のほうが！ おまえなんかより！ だから！ 早く寄越せよ！ 横取りしやがって！

泥棒！ 泥棒泥棒泥棒泥棒お！」

はい？

ええっと……泥棒？ 誰が？ 俺が？ なんで？ どうして？

「ああああああああああ！」

大山が叫んだ。

直後、大きく振りかぶる大山の右拳が、見えた。

体が勝手に動きだした。

だが、遅い。まるで全身が鉛になったかのように、思うとおりに動いてくれない。

湿り気のある空気が、重い粘液となって体にまとわりついてくる。全てがスローモーションになっていた。

唾をまき散らしながら殴りかかってくる大山も、椅子から立ち上がりかけた俺も、何もかも、呆れるほどゆっくりと動いていた。

大山の拳が迫る。

踏み出しかけていた俺の左足が、床に触れた。

そのまま左膝の力を抜いた。

だが、避けるには、もう遅すぎる。

俺は右手で後ろの机を掴み、おもっきり後ろへと押し込めようとした。

一緒に上体も捻る。

拳は俺の右目のそばをかすめるようにして通過した。

目の前に大山の脇腹が見えた。

ガラ空きだった。

俺の姿勢はどうしようもないレベルまで崩れている。それなのに、俺はヤツの脇腹をしっかりと見据えながら、ねじり込むように、左の拳を――

瞬間、時間が元に戻った。

いろんなことが一斉に起こり、何がなんだかわからなくなった。

「きゃああああ！」

女子陣の悲鳴が聞こえた。

「久賀くん！」「久賀！？」「馬鹿野郎！」「押さえろ！」「誰か先生を！」

いろいろな声も聞こえた。

どうやら俺は、周辺の椅子や机を巻き込みつつ、大山の下敷きになって痛みをこらえているところらしい。意外と冷静なのは、痛みになれているからだろう。

だが、痛いものは痛い。

あおむけなのかうつぶせなのか、怪我があるのか無いのか、なにを言っているのか、言えずにいるのか、そういうことすら把握できない。とにかく痛いのだ。痛いということだけで頭がいっぱいになり、それ以外のことが考えつかないのだ。

なるほど、これが本物の激痛か。

これは緻密に再現したら、苦情ものだな。

などと思ってるうちに、俺の意識は、ストーンと暗闇の中に落ちてしまった。



病院で目を覚ました。呆れ顔の母さんの話によると、俺は頭から血を流しつつ失神していたようだ。

ついでに伊達眼鏡も割れてしまった。目を怪我せずにすんだのは

不幸中の幸いというべきだろうが……いやはや。

いずれにしろ、学校は大騒ぎになった。

俺は救急車で近くの病院に運び込まれた。

傷の手当てと簡単な脳の検査が行われたあと、目覚めた俺に、

——私の息子だもの。絶対大丈夫だってわかってたわよ。

なんて母さんが言ってきた。青ざめた顔で。

まったく……謝ればいいのか、強がればいいのか。どうすりゃいいんだか。

まあ、検査の結果は異常無しだったから、強がることにしておく。怪我も頭部の裂傷と、左手首の軽い捻挫ねんざのみ。ちなみに手首の捻挫は、不用意に殴った結果だと思う。我ながら情けない。もう少し頑丈だと思っていたが……こりゃあ、もう少し本気になって体を鍛えるべきかもしれない。

などとボンヤリ考えていると、白衣の医師が病室にやってきた。

「ようやく目覚めかね。お母さんにも話してあるけど、何も心配することは——」

「すみません、先生」

俺は医者話に割りこんだ。

「俺、P Vのテスターやってるんですけど、このままやって大丈夫ですか？」

「P Vの？」

医者は少し驚いていた。

「ああ、うーん……どうだろう。ちょっと待ってなさい。専門の人に聞いてみるから」

医者はどこかに内線電話をかけた。

会話は数分で終わった。

「大丈夫だそうだ。仮に異変があれば、ログインそのものができなくなるそうだよ。ただ、念のために毎日検査をさせてもらいたいそうだ。なにかあった場合、君の体だけじゃなく、P Vにも大きな社会的ダメージを与えてしまうからね」

「はい。わかってます」

「うん、そうか。しかし、P Vとは……そういえば、一般テストも始まってるんだねえ」

医者は何やら感慨深げに頷いていた。

その後、駆けつけた担任と教頭が、母さんとお辞儀合戦を開始。俺はP Vの専門医とかいう人と顔合わせをしたうえで、とにもかくにも、家に帰らせてもらった。

ところで大山だが。

まず俺を下敷きにした時、脇腹を押さえながら、俺の上をゴロゴロと転がり、ワンワンと泣きだしたらしい。そんな大山をクラスの男子が引き起こすと、今度は引き起こしたヤツに殴りかかったそう

だ。
さらなる悲鳴があがったのは直後のこと。俺が頭から血を流し、気絶していたことに気づいた女子がいたのだ。そこから女子が連続失神。大山暴走。窓ガラスが椅子で割られ、他の男子も軽い怪我を負った。

この時点でようやく教師陣が到着。体育教師が中心となって大山を押さえ込み、廊下に連れ出し、落ち着くまで――再び泣きだして暴れなくなるまで――押さえ込んだそう

だ。
一方、教室では怪我人の手当が行われ、到着した救急隊員によって俺は搬送された。

他の怪我人は傷が浅いこともあり、保健室で手当をしたうえで家に帰したそう

だ。
大山はその後、駆けつけた母親につれられて一時帰宅した。

事情聴取は明日以降。

俺と大山は、しばらく特別休講扱いで自宅待機を言いつけられた。もう、何かなんだか……疲れ果ててしまった俺は、夕食を食べたあと、早々と部屋に戻らせてもらった。

ふと鞆に押し込まれたケータイを見る。

リンから、何度もメールや電話がかかってきていた。

「……………」

俺は机に向かい、アドレスコールでリンを読んでみた。
ワンコールでリンが画面に出た。

リンは怒気で燃え上がりそうなほど怒っていた――が、俺を見る
なり、目を丸くした。

「ちょっと、頭のそれ、どうしたのよ!？」

頭に被っているネットのことを言っているらしい。

「悪い。詳しい話、定時でいいか？」

「う、うん……でも、大丈夫？　P Vやれんの？」

「医者が言うには平気らしい」

俺は頭のネットに触れながら苦笑した。

「念のため、あとで再検査するとか言ってたけど」

「無理することないわよ。話はあとでもいいから、今日のログイン
は――」

「いや」

俺は溜め息をついた。

「今は無性に、仮想現実^{むじょう}で暴りたい」

「……………」

リンは珍しく素直に応じた。

「わかった。付き合う。じゃ、定時に」

「ああ。定時に」

俺はヴォイスチャットを切り、タイマーを定時にセットしてから
ベッドに倒れ込んだ。

誘眠機能を使うまでもなく、俺は速攻で眠りの世界に落ち込んで
いった。

7月10日（テスト46日目）の28時（翌午前4時）——ログインしてみると、痛みは嘘のように消えていた。さすがは無薬麻酔の開発から生まれた技術だ。こうしてログインできた以上は、脳味噌も致命的な状態に無いと言って良さそうだ。

「よしっ」

俺はログインボックスを出た。

外に出ると、心配そうな顔立ちのリンが待ちかまえていた。

「おっす」

俺は片手をあげた。少しだけリンの表情が緩んだ。

「ホントに大丈夫？」

「ああ。脳味噌がやばいと、システムがログインを弾く仕様らしいぞ」

「街に戻ってゆっくり話す？」

「いや、気晴らしに暴れたい。あと、愚痴りたい」

「……ホントに大丈夫？」

「頭はちよっと切っただけだって。縫ってもいないし、脳にも異常無し」

「……ホントにホント？」

「ったく……絡むなよ。おまえ相手に強がっても意味ないだろ」

不意にリンは黙り込んだ。

ジッと俺の顔を見上げてくる——と思うと、急に表情を和らげ、微笑んできた。

「うん、大丈夫って言葉、信じてあげる」

「最初から信じろ」

「日頃の行いが悪いせいじゃない？」

「あーあー聞こえない聞こえない」

こんな調子で、俺たちは鍾乳洞での狩りを開始した。

装備は普段通りの《シャークスーツ》、《ショックシューズ》、《ハーフパンツ》、《ハーフレザージャケット》というものだが、魔杖だけは、今日だけ《バーストガン》を使った。なんとなく、殴るよりも撃ちたい気分だったのだ。

そのうえで、俺は学校であつた出来事を愚痴りまくつた。

「――とまあ、そういうわけよ」

「うわあ……その大山ってヤツ、最低え」

「ヤツにはヤツの理屈があるんだろ？ ヤツにしか理解できない理屈だろうけど」

「でもさ、落選組だからって、やっていいことと悪いことぐらいあるじゃない」

「それがわからないヤツなんだよ」

今回のクローズドβテストは、半数を社内選考、半数を一般公募で集めている。俺は叔父経由の社内選考、リンも親父さん経由の社内選考で入った口だ。これが全部で3000名。残る一般公募枠も3000名だが、そこには18万通を越える応募が殺到したそうだ。その結果、《赤》の荒野さんと姉御のように夫婦で受かった人もいれば、ハズれて涙を飲みつつも違うところに楽しみを見出している『マトメ』の魔王さんのような人もいる。

大山も、そうした涙を飲んだ応募者のひとりだったのかもしれない。

そしてヤツは、公式サイトでSHINの顔画像を見つけてしまい、俺とソックリであることに気づいてしまった。

「つまり、あれだ。大山のヤツ、俺のこと、格下だと思ってたんだろ」

「格下？　なんで？」

「理由までは。でも、そうだとすれば、一応の理屈は通るだろ？ 自分が落選したテスト資格を、格下だと思ってた俺が持っている。そんなことは許せない。本当なら自分のものだった。だから取り戻そうとした」

「なにそれ」

「だよな。ホント、なにそれって感じた」

俺たちは普段より遅いペースで、1体ずつ、確実にモンスターを倒していった。

「まあ、俺のことはそれくらいにして、そっちは？」

「蒼海騎士団のこと？」

「情報は？」

「シンの推測、大当たりだったみたい」

「どれのことだ？」

「市長にメールしたのよ。嘘抜きにシンの推測を付け加えたメール。あと、下手したら衝突するかもしれないから、その時には相談に乗って欲しいってことも」

「返信は？」

「転送しといたけど――カジノの話は的中よ。イカサマに限りなく近いバグ技があったんだって」

話をまとめると、こういうことになる。

カードゲームをやる時、最低でもカードが1枚出ていれば、枚数が足りなくてもゲームが進んでしまうというバグがあったそう。しかもNPCディーラーは、全カードを使い終わると、手許に（・）あ（・）る（・）カ（・）ー（・）ド（・）を全消去し、ジョーカーを含む53枚の状態に戻したうえでゲームを再開していたらしい。そのうえ、カジノのトランプカードは家具扱いであり、カジノに置く限り、いつまでもそこに残すことができたそう。

つまり、こういうことだ。

ゼノンたちはポーカーのカードを少しずつ抜いていき、カジノ内の特定の場所――観葉植物など――に隠しながら溜めていった。そのうえで、より確実に勝利を収めやすいハイ&ローで荒稼ぎをした。「スタッフもなんで気づかないかな……」

「うん、それについてはね」

連勝記録のようなログが残らなかったことが、発見が遅れた理由

のひとつだったらしい。また、スタッフはキャッシュデータこそチェックしていたが、アイテムデータまでは目を通している暇が無かったそうだ。

それでも、あるバグのチェックで、たまたま目視でアバターデータの総チェックが行われることになった。この時、ゼノンたちのアイテムの異常さに気づいたという。

その時は、全24名による12PTのアイテムウィンドウとパーティ共有ウィンドウが、上限額のクリスカードで埋め尽くされていたそうだ。

ちなみにクリスカードは1億3421万7728クリスタル以上は融合できないそうだ。

つまり総額は……4831億8382万8000クリスタル？

丸めて約5000億ってことにしておこう。

どちらにしろ、さすがにあり得ない——そう判断した蒼都市長は、すぐゼノン以下24名を招聘し、詰問したそうだ。しかしゼノンは、臆することなく自分の手口を語り聞かせると、

——まだβテストの段階じゃないですか。これくらいの大金を手にいれたユーザーが現れた時、どうなるかテストしておく必要、あるんじゃないですか？

などと言い放ったそうだ。

最悪だったのは、本社からまったく同じことを要求されていた点にある。RMTの実装を見据え、ゲーム内通貨のバブルが起きた時の状況をテストして欲しいと言われていたのだ。

結果、ゼノンたちは莫大な資金を確保することに成功した。

ただ、スタッフはせめてもの意趣返しとして、徹底的なカジノのバグ取りをしたそうだ。

するとゼノンたちは、混沌とした《青》の陣営を掌握することを目的とした『蒼海騎士団』の旗揚げ準備を始めた。

「合言葉は“天下統一”だって。市長が本人からそう聞いたみたい」

呆れたとばかりにリンが溜め息をついている。

俺は苦虫をかみつぶしたような表情になった。

『PHANTASIA ONLINE』のウリのひとつに陣営抗争があげられている。まだ実際に起きてはいないが、いずれウオーフィールドが登場すれば、激しいバトルが展開されるはずだ。そこに戦国時代の武将を思わせるモットーを掲げた集団がいれば――肯定的に受け止めるユーザーが多いだろう。多分、それが狙いだ。

「やってくれるな……」

「あ、それと隠れ宿屋の件だけど」

「そっちもバグ絡みか？」

「ううん。氏族デビューまでの仮の拠点ってことみたい」

「仮の拠点か……」

「うん。メールにもそう書いてた。それより、頭のほう、痛まない？」

「だから、信じろよ」

「日頃の行い」

「おまえに嘘言ったこと、無かったつもりなんだがな」

俺は《バーストガン》をホルスターにしまい、次に出てきたオーク3匹を《スケール・オブ・ブルードラゴン》で倒させて貰った。最初に殴る時は手首が気になったが、さすがにこっちで手首を痛めるようなことはなかった。

「ざっとこんなもんだ」

「相変わらずデタラメというか、無謀というか」

リンはため息をつきつつ、具現化したヒールポーション――瓶の形状といい味といい、細いほうのオロナミソCとうりふたつ――を投げ渡してきた。

受け取った俺は蓋を開き、ゴクゴクと飲み干す。

炭酸が流れ込む感覚は格別だ。味覚やこうした感覚まで再現しているのだから、ホント、PVの再現性は常軌を逸しているとしたか言いようがない。

「ふう……でも、そうになると面倒なことになったな」

「なにが？」

「宿だよ、宿」

俺は思考操作で空瓶を収納消却——使用済みアイテムはカード化しようとするのと自動消滅する——で片付け、ジャケットの袖で口元を拭った。

「これまでの話を総合すると……連中、朝から晩まで、誰かを貼り付けておくぐらいやりかねないだろ」

「暇人すぎない？」

「夏休みって可能性は？」

「……あの人たち、全員学生？」

「どうかな……いや、ありえるな」

テストーの人数比は若年層に偏っている。なにしろU18（17歳以下）が全体の1割、U20（18歳〜19歳）とU25（20歳〜24歳）がそれぞれ2割だ。合計すると5割に達する。これにニートが多いとされるU30（25歳〜29歳）の2割を足せば、7割という数字になる。つまり暇人の比率もおそろしく高いというわけだ。

ちなみに残りは、U40（30歳〜39歳）が2割、O40（40歳以上）が1割らしい。

「どうする？」

俺はリンに尋ねてみた。

「引越す」

リンは即答した。

「いいのか、それで」

「いいも悪いも、居残ってもメリット無さそうじゃない。相手が相手だし」

「でもなあ……」

あの部屋から見る夕暮れ時の景色を思うと、もったいない気がする。

「シンは死守したいわけ？」

「死守ってほどじゃ……でも、気に入ってたろ、おまえだって」

「そりゃあね。でも、それとこれとは別よ」

「別か？」

「そうよ。景色の良さそうな別の物件、今度は意図的に探してみればいいだけじゃない」

「まあ……そういうなら」

リンがいいなら、俺としても異存はない。

「じゃあ、解約になるまで、ここに潜ってる？」

「そうだな……あ、今ならどのカードも高値で売れるんだよね？」

「そうそう。それなんだけど」

「んっ？」

「蒼都スレで『武装商人』ってアイデアが出てるの」

「なんだそりゃ」

「あたしたちみたいな潜ってるパーティからカードを買い取ることを専門にした人たち」

「……はあ？」

「だから、いちいちわたしたちが戻っては潜り、戻っては潜り……なんてやってたら、回るカードも回らなくなるでしょ？ それならいっそ、仕入れ専門のパーティを派遣しようか、なんて話が出てきたのよ。あっ、もちろん、なにも仕入れ先はわたしたちだけじゃないわよ。相手は地下にいる全員。けっこう面白いアイデアだと思うない？」

「悪くないけど……利益でるのか、それ」

「もちろん、わたしたちの売値も少し安めよ。ほら、出発前に注文しておけば、戻らなくても回復系のアイテムとか、アビリティカードとか手に入れられるでしょ？ 特にわたしたちの場合、戦闘過多やりすぎでカードがあまりそうになることもあるし、それを考えればね」

「ああ、そういう意味でのギブ・アンド・テイクか」

それなら納得もいく。

「だから結論が出るまでは潜ってるほうがいいみたい」

「了解。じゃあ、少し気張って狩りでもしますか」

「OK、相棒」

俺たちは鍾乳洞のさらに奥に向かって歩いていった。

同日（7月11日）昼過ぎ、担任と学年主任が我が家を訪れた。

仕事を有給にした親父と母さんを相手に、事情の説明を行うためだ。遅れて俺も部屋から呼ばれ、いろんなことを尋ねられた。そのほとんどはP Vに関することだったが、俺は包み隠さず、自分がテストであることや、妬まれるのがイヤだから隠していたことも話した。担任は俺の話を信じた。

問題は学年主任だ。

「しかし、大山くんは君が人を小馬鹿にするように傲慢だと言っていたぞ？」

「……えっ？」

「だいたい、ゲームばかりしているから、無意識のうちに攻撃的な言葉使いをしてしまうんだ。お父さん、お母さんにも責任がありますよ。今回はたまたま久賀くんだけが怪我をしたからいいものの、もし大山くんが怪我をしてれば、傷害事件扱いされたかもしれないんです。わかりますか？」

どうやら完全に俺が悪者らしい。

「なるほど、おっしゃりたいことはよくわかりました」

親父は普段通りの静かな口調でそう答えた。

だが、目が笑っていない。学年主任は気づいていないようだが、俺と母さんはそのことに気づき、微妙に引いていた。なにしろ怒った親父は、洒落にならないほど手がつけられないのだ。まあ、滅多なことでは怒る人でもないのだが。

「そうです。反省文を提出していただきさえすれば――」

「ご忠告の通り、傷害事件として警察に届けさせていただきます」

「そうですか。けいさ……警察!？」

学年主任がソファから立ち上がった。

「ええ」

親父は落ち着いた物腰のまま、ギロッと学年主任を睨みあげた。

「今回、怪我をしたのはうちの息子です。どうやら大山という加害者が怪我をしていれば、刑事告発されても当然であると、学校側はお考えのようですから、それと同じように、うちの息子が怪我をした以上、刑事告発させていただきます」

「な、なんでそうなるんですか！ だいたい加害者は――」

「大山という生徒ですね？」

「違います！ おたくの息子さんが大山くんを侮辱したせいで――」

「わかりました。侮辱されれば暴力をふるってもいい、というのが学校側の考えですね」

「あなたは――」

「違います！」

担任が声を荒らげた。

気さくで少し気弱なうちの担任は、30代前半でありながら、童顔で、かつ頭髮が少し薄かったりする。ついでに名前は若狭恒彦^{わかさ・つねひこ}。だからあだ名は“ワカさん”だったりする。

その、ワカさんが、珍しいことに激しい怒り顔を見せていた。そればかりか、学年主任を無視するかのように、俺たち家族に向かって深々と頭を下げてきた。

「学校関係者として、不適切な発言がありましたことをお詫びします」

「若狭先生！」

「増岡先生、理由がどのようなものであっても先に暴力をふるったのは大山です」

「どうだか！」

学年主任は大げさに両腕を広げた。

「大方、見えないところで足を蹴ったりしてたんだろ！ ええ、そうだろ！ 正直に言え！ 今なら謹慎処分で勘弁してやる！ それとも停学くらって、経歴に傷でもつけるか！？ どうなんだ！」

親父は黙っていた。

母さんも黙っていた。

俺も黙っていた。

ワカさんも黙っていた。

あきれ果てた——というのが正しい。これでも学年主任をつとめる教師なのかと、現実を疑うしかない。というか、これはいったいなんなんだ？　ここまで非常識な人間が身近にいていいのか？　これ、現実なのか？　まさかP Vの中にいるんじゃないのか？

「わかりました」

親父は静かに答えてから、背広の胸ポケットに手を入れた。

「今のこと、後ほどしかるべきところにご相談させていただきます」
取り出したのは細長いケータイのような機械だった。

学年主任が顔から、サーツと血の気が引いていく。

「失礼ながら……」

親父はコトツと、その細長い機械——ICレコーダーをテーブルに置いた。

「年を取ると物忘れが激しいものですから、重要な話し合いの時には、必ず記録を残させていただいております。ところで増岡先生。今日は学校の代表として訪問なされたと最初におっしゃったはずですが……間違いありませんか？」

「し、失礼する！」

学年主任はソファアの足下に置いていた自分の鞆を、奪うように拾い上げるが早いか玄関まで早足で逃げていった。しばらくすると玄関から物音から聞こえ、出て行ったらしい物音も聞こえた。

「本当に申し訳ありません」

残されたワカさんは深々と頭を下げた。

「いえ、顔をあげてください」

「そうですよ」と母さん。「先生には本当によくしていただいて……」

「本当に……本当に申し訳ありません」

ワカさんはそれから十数分、肩を震わせながら頭を下げ続けた。

落ち着いたところで改めて事情を説明してもらった。

昨日、大山は生徒指導室に引っ張られていったそうだが、連絡を受けた母親は、息子がイジメられたものと勘違いして先生方を責めあげたらしい。大山は泣きじゃくり、母親はヒステリックに怒鳴り散らす……これではラチがあかないと判断した教頭は、大山と母親を家に帰し、明日、改めて事情をうかがうということにしたのだそう。

こうして校長、教頭、学年主任、担任、保険医、カウンセラーの6人で事後策を相談することになった。まだ保健室にいた怪我人や、教室に残っていた生徒なども呼び、事情を尋ね、おおよそ何が起きたのか把握できたのは午後4時をすぎたあたりのことらしい。

ちょうどその時、俺の意識が回復したという知らせがあった。

教頭と担任が病院に向かうことになった。

入れ違うように、大山の父親が学校に乗り込んできた。

父親もまた、母親と一緒に大山がイジメられたと勘違いしていたらしい。

いや、本気で信じていたようだ。

最悪だったのは、大山の父がそれなりに大きな会社の取締役だったことだ。つまり、それなりの社会的地位を持っていたのだ。ワカさんも不在だったので詳細は知らないそうだが、どうやら教育委員会やら警察やらにも知り合いがいるとかで、そこに話を持っていくと脅されたとか、なんだとか……

少子化による学校余りと教師余りが叫ばれる昨今、不祥事を理由に解雇なんてされた日には再就職もままならない。それもあって、学年主任は必死になったのかもしれない、とワカさんはフォローし

ていた。

別にフォローせんでも……と思ったが、そこはあえて口にしなかった。

ワカさんもワカさんで苦勞しているのだ。

午前中、大山の家を訪れた時には、大山父と大山母と学年主任の電波トライアングルに囲まれて泣きたくなったとか言っていたし。いや、そういう何でも抱え込む性格だから、ストレスが余計に頭のほうを……という言葉も飲み込んだ。武士の情けだ。

いずれにせよ。

あとのことは親父に任せることにした。これでも市役所勤めの地方公務員。石橋を叩いて渡らないような人だが、やると決めたらどこまでもやる人でもある。伊達や酔狂で、二十代前半で分譲マンションを婚約指輪代わりに購入したわけではない。その苦勞話を、姉貴の旦那に延々と愚痴るのだけはどうかと思うが。

「とにかく、あとのことは大人に任せて。な」

「了解。子供は子供らしくゲームして待ってるから」

「ほどほどにしとけよ」

ワカさんは笑いながら言い返すと、親父と母さんに頭を下げ、帰っていった。

「戸締まりに注意しろ」

親父もそう言い残して出て行った。

その後、俺と母さんはタクシーで病院に向かい、念のための検査を受け、頭に異常が無いことを確かめた。裂傷の治りも順調。左手首の捻挫だけは、少しばかり長引きそうだと言われた。

へあああああ！ 聞いてるだけで頭にくるうううう！

「いいから、時間なんだろ。急ぐぞ」

「へわかってるわよ!」

ヴォイスチャットで事情を説明した俺は、母さんにログインすることを告げてからP Vベッドにゴロンと寝そべった。時刻は22時(午後8時)。7月11日(テスト47日目)のログインをするには、普段に比べると早すぎる時間だ。しかし、リンが段取りをつけた取り引きがあるので、今日ばかりは急がなくてはいけない。

「よしっ」

地下14階のアップパーボックスから出た俺は、ポキポキと指を鳴らした。

「約束は22時(午後8時)でいいんだな?」

「そうよ!」

ボックスを出てきたリンは、まだ憤慨していた。

「ああ、もう!! この怒り、おもつきりぶちまけてやる!!」

「おまえがキレてどうする」

そこから1時間半、俺たちは地下14階でモンスターを狩りまくった。そこから30分で地下12階のダウンボックスまで駆け上がり、ドロップアイテムを整理しながら、取引相手の到着を待った。

「来たみたい」

鍾乳洞の向こうから明かりが近づいてきていた。

姿を現したのは子供外装の6人パーティだ。半分が兜の無い甲冑を身につけ、大きな盾を両手に持っていた。残り半分は俺たち同様の軽装で、2人が《アサルトライフル》を脇にさげ、ひとりが《パシファーズ》を肩に担いでいた。

全員が、一見してわかるほど緊張している。

と、甲冑子供のひとりが頭を下げた。

「は、はじめまして!」

続けて残る5人も一斉に頭をさげた。

「「はじめまして!」」

まるで学校の挨拶だ。両腕を組んで立っていた俺は、ポカーンと

口を開けるしかない。

「ばか」

リンが俺の後頭部に、ガンツとハイキックを決めた。

「なんだよ」

「恐がってるじゃない。あんた、子供恐がらせて面白いわけ？」

「いえ！ 俺たち、中は子供ってわけでも……」

言葉を割り込ませたのは、リーダー格らしい甲冑子供だった。

それにしても——冗談としか思えない格好だ。

確かにすべての装備アイテムは、具現化すると、それを行ったユーザーの外装を基準にリサイズされる。同じ《グレートソード》でも、身長130センチの外装で具現化すれば2メートルもいかず、逆に200センチを越える外装なら3メートルに楽々達するほど大きくなるのだ。だから、ガキにしか見えない連中が甲冑を身につけていても、なにもおかしくはない。

しかし、リサイズにも限界というものがあるらしい。

目の前の甲冑子供は、3頭身にデフォルメされた騎士っぽい感じさえあった。頭も半分埋まってる状態だ。これで両手に方形のタワ―シールドをひとつずつ持っているのだから、児童会の演劇舞台に迷い込んだ気分にはせられる。

「……あーっ、悪い」

俺は額を抑えながら、少しだけうつむいた。

「詳しい話は相棒にしてくれ」

「は、はい！」

「じゃあ、こっちで。明るいですし」

リンが誘ったのは、ダウンボックスの周辺だ。地下ではボックスの上にだけ、俺の頭上で輝く電灯ウィル・オー・ウィスプと同じものが永続的に輝いているのだ。

ちなみに、ボックスのある場所は部屋であることが多く、必ずといっていいほど6基が横1列に並んでいる。ここにある地下12階のダウンボックスもそうだ。ここの場合、ボックスの手前に広い空

間があり、向かって正面と右斜め奥に道が続いている。子供外装のパーティが通ってきたのは、このうち右斜め奥の通路だ。

「うわぁ……こんなのもあるんですか？」

「拾ったことない？ 上でもたまに出るけど」

「いえ、始めてみました」

「すっげえ」

「こんなに拾うとなったら……」

全員、リンが広げたカードに魅入っている。

聞くとところによると、普通のパーティの戦闘頻度は20分に1回ぐらいだそうだ。ところが俺たちは、平均すると5分に1回は戦っている。というか、戦闘後の休憩もブラ歩きながらしているの
で、気が付くともそういう感じになっている、という程度の話にすぎない。

「それにしても……武装商人とはねえ」

面白いものが出てきたものだ、と苦笑するしかないところだ。

#03-10

アーチャンこと武装商人は、アームド・マーチャント市場スレのこんな書き込みから見切り
発車することになった。

233 名前…BERUN ◆dLPo6M19XW 投稿日…X
0/07/11 05:11:12 ID…*****

<<武装商人ネタ

自分たち、ちょうど地下12階にいるけど、
できることなら鮫衣とか、SLから買いたいかも

※当方、10Mのキャッシュ有り

※興味がありましたらメルアド宛にご連絡下さい>SL様

直後の市場スレは議論場と化した。ただ、今回は取引相手がSL
だから、という理由で、話を進めても問題は無いだろうという意見
に落ち着いたのだから、苦笑するしかない。むしろ、俺が暴走して
PKに走ることのほうが懸念されていた。一応、リンが止めるとい
うことで話は決まったのだが……俺っていったい……………
ともかく。

こうして俺たちは商品を集め、12階まで駆け上がり、商談に応
じた——という次第だ。

話によると、こうした《青》の混迷ぶりを、他の陣営は笑ってい
るらしい。なによりグループごとの結束力が強い《緑》のほうでは
呆れかえっているようだ。

《緑》のホームタウンである翠都では、信用があって当たり前なのだという。平均10パーティからなる様々なグループが、情報や物資の面で相互に助け合いながら、合同での狩りだとか、コスプレ大会だとか、鬼ごっこだとか、かくれんぼだとか……そういうユーザイベントも行っているのだ。

その団結力は賞賛に値する。だが、こうした集団主義的な傾向を嫌うプレイヤーもいるらしい。そういうソロプレイヤーがアンチになったり、ソロで固まって問題を起こしたりしているそう。

《赤》のホームタウンである紅都も《緑》と似ている。こちらは、宿のある地域ごとに小さなコミュニティが作られ、相互不可侵が暗黙の了解となったことで、それなりの秩序を形成するようになったそう。横のつながりでは《緑》に劣るものの、問題の少なさでは全陣営随一という声もある。

一方、《青》は荒れまくりだ。今や“蜥蜴の乱”と呼ばれる『蜥蜴同盟』の解散騒動や、陣営を代表する有名人が唯我独尊の俺と爆裂お嬢様のリンであることを考えれば、荒れるのも当然と言えるべきだろう。

ただ、荒れているだけに活気は一番ある。

スレの進行速度も速い。

蒼都でもネットでも議論や口論は日常茶飯事。パーティ単位の喧嘩も当たり前のように起きており、一部の連中は、喧嘩するためにコロセウムに行くのが面倒なので、広場でもPVPができるようにして欲しいと要望しているそう。

大賛成だ。

というか、馴れ合いたければ、リアルでやればいいのだ。

ここは『PHANTASIA ONLINE』。魔杖師が戦いを繰り広げる戦場なのだから。

「あっ、敵！」

誰かが叫んだ。

うつむかせていた顔をあげてみると、正面の通路から何かが姿を

現した。

豚鼻で肥満体のハゲ頭な怪物——オークだ。

数は全部で4体。いずれもワンピースを思わせる鱗板を革に貼り付けた鎧を着込んでいる。足にはサンダル。左手に丸い盾を持ち、右手に棍棒を握りしめている。この棍棒は、魔杖ですらない武器だ。データ上の区分は、あくまでモンスターの外装の一部という扱いになっている。

「シン！」

相棒がニヤツと笑いながら声を張り上げた。

「了解」

子供外装パーティはお客様だ。大した敵でもないし、ひとりで充分だ。

「む、無茶です！」

「ひとりなんて——」

「で、でも——」

お客様方は思い思いの言葉を口にしていた。なんというか……調子が狂う。なによりギャラリーがいる以上、ア（・）レ（・）は封印しなければならぬ。まあ、そうでなくとも使わないようにしているわけだが。なにしろ俺たちにとっての切り札だ。下手に使っているところを見られるだけでも、切り札の意味が無くなる。

「さーて」

俺は素手のまま、肩を回しつつ、気軽に近づいていった。

距離は6メートル。

オーク4体は立ち止まり、雄叫びをあげながら両腕をバンザイさせている。オークのお約束ともいえるべき初期行動だ。プレイヤーには、この隙に銃撃する機会が与えられる。だが、それで倒せるとは限らない。なにしろオークはタフなのだ。

オーク4体が俺に向かってきた。

棍棒を振り上げている。まるで迫る肉の壁だ。

「……っと」

タイミングを見計らって、俺はトンと後ろに飛び退いた。

正面の2体が棍棒を振り下ろしたが、空を切り、地面を叩いた。残る2体は俺を挟み込もうと、少しだけ左右に膨らむ動きを見せた。

だが、甘い。

「よっ」

正面のオークが体勢を棍棒を振り上げ直すよりも先に、俺は思考操作で拳闘系付与アビリティ《クラッシュヒール》を発動させる。

途端、全身がグンツと何かに引っ張られた。俺の意志から離れた外装は、前のめりに飛び込んだかと思うと、正面のオークの間に割り込む形で青白く輝く踵を叩き込んだ。

つまり、浴びせ蹴りをかましたのだ。

実際には前方宙返り蹴りと言うべきかもしれない。

右足を前に突き出したまま、左足だけで着地した俺は、さらに体を前に押しだし、《クラッシュヒール》の衝撃で左右に弾かれたオークの間に割り込んでいった。

すかさず左右にジャブを放つ。

それぞれの側頭部に命中。

ダメージではなくフラッシュ——動きを止めること——を目的にした1撃だ。ただ、職種アビリティ《グラップラー》、増強アビリティ《アイアンフィスト》、さらに《スケイル・オブ・ブルードラゴン》で強化されている俺の拳は、ジャブといえどもセットカード無しの《スペルガン》数発分の威力を持つ。

俺はさらに踏みだし、左足を軸に体を反転。

まず、右側のやつの背中に左ボディ、右ボディ、頭部への左フック、右のストレートのコンビネーションを叩き込む。巨漢のオークは、それで軽く吹き飛んだ。

続けざま、左側の背中には右ボディ、左ボディ、頭部への右フック、左のストレートのコンビネーション。当然、こちらでも軽く吹き飛ぶ。

思考制御で《トライデント》を呼び出し、具現化。

右足を軸に一転しながら、《パワースイング》で吹き飛び中のオーク2体の頭部をなぎ払う。

即座に《トライデント》を収納。

2体のオークは倒れる前にカシヤンと碎け、光の粒子と化した。これで半分終了。

左右にふくらんだ残る2体が、それぞれ斜め前から駆け寄ってくる。

俺は右脇で、見えないボールを両手で掴んでいるような姿勢をとった。

シンクコマンド
思考操作、開始——両手の間に光弾が出現した。

「波っ！」

左足を踏み出しながら、左側のオークに向かって両手を前へと突き出した。

ドンツと、波動拳ならぬ《エナジーショット》が撃ち出される。

光弾はオークの腹部を直撃。

いや、頭を狙ったつもりなんだが……杖系と違って照準が出現しないだけ、接近戦系の技ってやつは、どれも感覚頼りで不確かなところが大きい。おかげで使い勝手も今ひとつという意見も少なくない。でもまあ、今は当たっただけ良しとしよう。

——ガアアアアアアア！

右のやつが棍棒を横に振ってきた。

避けられない。

ガードした両腕の上から強打された。

少しだけ足がザザッと滑る。

痛い。竜鱗で覆われていようとも、やっぱり両腕が痛い。

「——なる！」

と思ったら、左側のやつも迫ってきた。

やばっ。やっぱり波動拳エナジーショットなんか使えんじゃなかった。

——ドドッ！

不意にオーク2体の後頭部に着弾光が輝いた。

見ると座ったままのリンが、左右の手に《バーストガン》を構え、ものすごく冷ややかな眼差しを俺に向けていた。

遊ぶな、と言いたいらしい。

言われなくてもわかつてる。

でもな、レベルがあがれば今の波動拳、エナジーショット悪くない選択肢のはずだぞ？

赤い光線がふたつ、俺の顔に重なりかけた。

マズイ。違う意味で、非常にマズイ。

俺は本気になって、まず片方に両拳の連打をあげせた。足を止めてのパンチの連打だ。7発目でオークは消滅。気配を頼りに前に転がりながら、もう1体の攻撃をよける。立ち上がりざまに向きをかえ、さらに左に跳んで棍棒の振り下ろしを避ける。

最後のオークの足にローキック。

ぐらついたところをパンチの連打。

最後に俺は、超至近距離からエナジーショット波動拳を腹部に叩き込んだ。

オークが消滅した。

「よしっ」

エナジーショット波動拳は使える。間違いない。威力の問題は、レベルをあげれば解決する。きつとそうだ。間違っても、趣味で使っただけじゃないと、反論しておこう。撃たれる前に。

「遊ぶな」

みんなのところに戻ると、開口一番、リンが冷ややかに言い放った。

「遊びだろ」

売り言葉に買い言葉で、俺はつい、そんなことを言い返した。

リンが銃を抜いた。

俺は首を左に傾けた。

銃弾が真横を飛んでいく。

「待て」と俺。

「なによ」とリン。

俺は横を指さした。

「怯えてるぞ」

子供外装の面々は、あきらかにリンを見ながらガクガクブルブルと震えていた。



蒼都スレは、俺たちとの取り引きを望むプレイヤーでいっぱいになった。だが、条件を地下14階のアップボックスにたどり着けるパーティのみとすると、その数は一気に減っていった。

なんだかんだといっても、モンスターが多様化する鍾乳洞は難易度が高いのだ。

1日3時間という時間制限。

地下迷宮という閉鎖空間からくる圧迫感。

攻撃された時の痛み。

ダウンボックスごとに都市への帰還の是非を尋ねられるという誘惑。

フィールドの中では、俺たちも最初に感じていた様々なプレッシャーが、浸蝕するようにのしかかってくる。これに勝ち抜いた者だけが、鍾乳洞に足を踏み入れられるのだ。ゆえに、鍾乳洞まで降りられるパーティは、全体でも100PTパーティぐらいしかない。本スレの分析によると、《緑》が30PT、《赤》が50PT、《青》が20PTぐらいだそうだ。もちろん、そのほとんどが6人パーティ。俺たちのようにコンビ（2人パーティ）で鍾乳洞まで降りているユーザーは、他にいないそうだ。

いずれにせよ。

希望者が自然淘汰された結果、俺とリンは、地下14階のアップ

ーボックスまで降りてこられる3PTと取り引きを交わすことになった。

ひとつは例の子供外装のPT——BERUNベルンをリーダーとする青緑だけのPT。珍しいことに俺たちを毛嫌いしていない青緑であり、話によると、かなりチームワークも良いらしく、《フルプレートアイマー》と《タワーシールド》で身を固めながらの《アサルトライフル》による一斉射撃、なんて固い戦法で、そこそこ強いと見られているPTでもあるそうだ。

残り2PTとの取引はまだ先なので、どういう連中かは知らない。ちなみに。

最近のPO関連スレのうち、最も理性的なスレは市場スレになりつつある。《青》の青空市場の相場を報告しあうところから始めたせいもあるのだろう。経済に感情は不要とばかりに、今では本スレ以上に大人の住人が多い。

ただ、活気という点では蒼都スレに軍配があがる。というか、荒れている。荒れているのだが、行き着くところまで行くと、コロシムでの“出入り”になり、その結果を踏まえた手打ちが必ず行われるため、違う意味で秩序が生まれている。

静かなのは翠都スレだ。そもそも《緑》のユーザーは、『Xちゃんねる』ではなく、SNSやブログを中心に活動しているせいもある。しかも、書かれていることといえば、普通の日記と大差が無いので、俺はいつしか見向きもしないようになった。まあ、住む世界が違うのだ。互いに距離を置いたほうが正解だろう。

《赤》は《青》ほど騒がしくもなく、《緑》ほどマツタリもしていない。

そういう意味では、没個性的になってきている。

一応、最近は地下に潜っているユーザーが一番多いんじゃないかと言われている陣営なのだが、宿を中心としたコミュニティが安定してしまった結果、ネットでの活動が落ち着いてしまった観が強いらしい。

それでも、データ解析では全陣営の最先端を走っている。さらに、解析したデータを惜しげもなくネット上で曝している。『マトメ』が好例だろう。アビリティカードの関する情報の提供者は、その7割以上が《赤》のユーザーだ。ただ、その手のユーザーは陣営ごとのカラーを出そうとしないため、《赤》が目立たない傾向に拍車がかかっているようだ。まあ、そういった玄人的な匂いをよしとする風潮が《赤》にあるとも言えるのだが。

話は戻る。

俺とリンは、地下14階で狩り続けつつ、地下15階に通じるダウンボックスを探し続けた。

だが、どういうわけか見つからなかった。これは他の陣営も同様だ。

早くから地下14階に到達していた《赤》でさえ、足踏み状態を続けている。

なお、『マトメ』では、《青》の地図情報だけ地下12階で止まっている。ゼノンたちも何かで戸惑っているらしい。もちろん、俺や取引に応じる連中なんかは地下13階と地下14階を知っているわけだが……俺たちは暗黙の了解で、地図情報の提供を渋り続けていた。そのことを責める連中もいるが、そもそも鍾乳洞（地下10階以下）にたどり着けるPTが少ないため、それほど問題視されていない。むしろ、情報を独占してもいいから、アイテムの供給量を増やして欲しいという意見のほうが多いくらいだ。

というわけで、俺とリンは地下15階のダウンボックスを探しながら、とにかく戦いまくった。

7月14日（テスト50日目）には第2の武装商人PTとも接触。蒼都では珍しいガンマンファクションで身を固めたトカゲ人間4名のPTだったが、リンの話では、いずれも中身は女性だとのこと。つまりまあ、リンに匹敵する変わり者の女性テスターたちということだ。

「あんたがSHIN^{シン}？」

トカゲというより蛇というべき頭をしているユーザーが声をかけてきた。

「あたしはSERIA^{セリア}。このPTのリーダーだから、一応、あんたにも挨拶しておこうと思ってね」

「話は相棒としてくれ」

「そうするよ」

セリアと名乗ったトカゲ女——というより蛇女？——は、目を細めつつチロチロツと舌を出し、離れていった。

後で聞いた話では、このPTは4名とも、リンと同じ拳銃使いらしい。また、浅い階層では強盗の役割演技をしているそうだが、負けを認めれば、適当なカートリッジカードを奪うだけらしい。

利益を求めるのではなく、強盗を演じることを面白がる連中——そういう“ナリキリ”と呼ばれる遊びは、意外なことに《赤》のほうが盛んだったりするが、海が好き、という理由で《青》を最初に選び、全リセット後も、《蜥蜴人》^{リザードマン}の外装オプションが面白いという理由で残ったという変人たちがいる。それがセリアたちだ。

なんというか……類は友を呼ぶ？

一方。

実在現実^{リアル}のほうでは、俺の立場がなにか微妙になっていた。親父がいろいろと動いているようだが、大山父もアチコチで騒いでいるらしく、俺は当面の間、自宅静養しろ、ということになったのだ。まあ、期末試験をスルーできたのは嬉しいが、どうせ追試が待っているだろうし……

4日後の7月15日（テスト51日目）正午——といっても、リンは私用で外出中。俺は前日の夜にワカさんが持ってきた課題に取り組んでいた。期末試験も終わり、普通の授業が始まっているのだが、もう怪我也痛まないし、頭のネットもウザイだけなのだから、普通に登校させてくれたほうが気持ち的に楽だよなあ……なんて思っていた、その時だった。

「……んっ？」

玄関先が急に騒がしくなった。

何事かと思い、部屋から出てみると、半開きの玄関先で、母さんと背広姿の大柄な男が、なにやら押し問答を続けていた。

どこかで見たことがある——と思ったのも当然だ。

大山に似ているのだ。

顔つきといい、体つきといい、髪の短さや眼鏡をかけているところといい、本当はクロンなんじゃないかってくらい、大山とうりふたつなのだ。違いは、少しだけ顔が老けているところと、全体の比率が一割増しぐらいありそうなところだ。

「貴様か！」

急に大山父が俺に怒鳴ってきた。

「貴様が憲義を！ 謝れ！ 土下座して謝れ！」

「帰ってください！ 警察を呼びますよ！」

「警察に捕まるのはおまえらのほうだ！ この犯罪者！ 貧乏人のくせに妬みやがって！ なにが公務員だ！ こっちは社長だ！ この低脳！ クズ！ ゴミ！ 貴様のような、人にこき使われるだけの奴隷と、うちの憲義を一緒にするな！ 憲義のために死ね！ 死んで詫びろ！ 光栄だろ！ 憲義のためにさっさと死ね！」

よく見れば背後から誰かに押さえ込まれているらしい。

押さええているのは同じマンションの人。いや、よく見れば警察官

らしい人もいる。いつの間に来たんだろう。その前に、いつから騒いでたんだ？ 急に騒がしくなったのはついさっきだし……なんなんだ、いったい？

状況を整理しよう。

母さんは少し遅めのゴミ出しで1階に下りた。そこで、すでに事情を説明しておいたマンションの人たちと会い、立ち話をしていた。かと思うと、背広姿の大山父が登場し、あろうことか、問答無用で母さんの頬にビンタを喰らわせた。

なんでも朝から車を近くに停め、見張っていたらしい。それも、立ち話が聞ける距離に車が停まっていたそうだ。しかも、立ち話の内容から母さんを俺の母親だと断定した大山父はカッとなつてしまい、怒りのあまり、母さんにビンタを喰らわせた——と、警察で証言している。

呆れるしかない。

だいたい、怒りのあまりカーツとなった人間が、母さんのエプロンに手を突っ込んで、家の鍵を奪い取るだろうか。しかも母さんを足蹴にして階段を駆け上がり、うちの玄関の鍵を開けるだろうか。開いたところで母さんが体当たりしていなければ、先に家に上がり込んでいたのは大山父だったはずだ。もしそうなら……下手をすると、ログイン中の俺は殺されていたかもしれない。なんとなくだが、そう思う。

だが、母さんが身を挺して俺を守ってくれた。そのおかげで、他の人たちが集まり、話を通してある近所の交番から警官が駆けつけ、大山父は叫き散らしながらも御用となった、という次第だ。

しかし、話はそこで終わらない。

「そっちが挑発したんでしょ！」

今度は警察署で、大山母が大暴れした。

俺と親父はゲンナリしていた。

母さんは念のため、管理人のおばさんと一緒に病院に行っている。そのかわりとして、事情を説明するべく親父と俺が警察署に出向いたのだが、そこで待ちかまえていたのが、夫の無実を訴え続ける大山母だった、という次第だ。

「……慎重」と親父。

「んっ？」と俺。

「最悪、引越してもかまわんか？」

「OK。未練も無い」

ふと、関東に引越せば、リンに会えるかも——なんてことを考えてしまった。

「あくまでも最悪の場合だ。最悪の」

親父は立ち上がった。

「それと、少し運動しとけ」

「生兵法はなんとやら」

「鍛えるのは逃げ足だ」

「なるほど」

こりゃあ、柔軟体操だけでなく、ちょっとした筋トレも始める必要があるかもしれない。

実在現実では、カードをセットするだけで超人になれるわけでも無いのだから……

同日夜、21時（午後9時）にログインした俺は、憂さ晴らしの戦いをしつつリンに愚痴った。俺以上に憤慨したリンは、最近は実

入りもいいということもあって2万円アタックを2回やった。ついでに俺も1回やらせてもらった。

「なるほどな……こりゃ、癖になるわ」

銃撃の振動と超破壊力がすこぶる爽快なのだ。

「でしょ？」

「だからって、散財しすぎだろ、これ」

《ブラストバルカン》は専用弾頭を必要とする。これは今のところ、ドロップアイテムとして手に入らないため、都市のNPC商人から買うしかない。それでもカード1枚で全段装填状態になるのだから、まあ、便利といえれば便利だし、破壊力もあるわけで……でもなあ、2万クリスタルもするもんなあ。

「いいじゃない少しくらい」

「それにしても……あれだな」

下手に突っ込むと、俺の波動拳が矢面に立ちそうなので、話題をかえることにした。

「ダウンボックス。これだけ歩き回って、なんで見つからないんだ？」

「だよね……」

リンは周囲を見回した。

「歩いてない場所、もう無いはずなんだけど……なんでだろ？」

「配置されていないとか？」

俺がそう告げた直後。

「それはありません」

不意に背後から声が響いた。

ギョツとした俺たちが身構えながら振り返ると、

「お久しぶりです」

トーガをまとう細目の男——蒼都市長セイリュウの姿があった。

「なんだ、あんたか……」

「えっ？　でも……なんで？」とリン。

「なに言ってるんですか。それでも私、スタッフなんですよ？」

確かに地下も『PHANTASIA ONLINE』の一部だ。別に蒼都市長だからといって、蒼都の外に出てはいけない、なんて規則があるわけでもないだろう。

だとすると問題は――

「今度はなんだ」

俺は《ブラストバルカン》をカードに戻しながら尋ねてみた。

「謝罪と相談です」

市長はそう告げると、ゆっくり、俺に向かって頭を下げてきた。

「私たちの浅はかな行動で、お客様に多大な迷惑をおかけしました。関係者一同を代表しまして、この場を借り、深く謝罪致します」

「あっ……」とリン。

俺もピンときた。

「大山のことか？」

「うちのユーザーサポートに激しい抗議がありました」

市長は背筋を正しながら答えた。

「支離滅裂でしたが、話を総合すると、テストー応募に落選した方が、本来であれば自分に与えられるテストーの権利を、騙されて盗まれてしまったと主張している、と我々は理解しました」

「それで？」

「証拠がない以上、そのような抗議にはお答えしかねるというのが、我々の立場です。仮に詐欺が行われたとしても、それは警察の手で委ねるべき問題です。こう言うのもどうかと思いますが、善意の第三者というのが我々の立場なんです」

「そうでしょうね」

リンは腕を組みつつ、少し冷ややかな口調で告げた。

「でも“はい、そうですか”で済むとも思えないわ」

「まったくもって、その通りです」

市長は苦々しげに頷いた。

「抗議が何度も続いたため、我々も念のため、彼の主張を調べてみました。すると、騙したというテストーがシンくんであるというこ

とがわかりました。その時点で、私たちマネージメントチームに話が来たのですが……あなたは応募枠ではなく、選考枠での登録です。しかも、あなたを推薦したのは我が社の社員でした」

「叔父だ。父方の」

「ええ、承知しております。そこで失礼とは思いましたが、あなたのお父上にご連絡させていただきました」

「親父に？ いつ？」

「つい先ほどです。大方の事情は、そこで知りました」

「じゃあ、原因が例の顔晒しだったことも？」

「はい」

市長は沈痛な面持ちで、小さく吐息を漏らした。

「言い訳に聞こえるでしょうが、私たちにあって、実像そのままの外装を使うユーザーというのは想定外でした。私たちにあっての外装は、いかに倫理的な規範を守らせつつ、どこまで別人にカスタマイズできるか……それを追求したものだったんです。まったく、我ながら情けない限りです」

市長は顔をあげた。

「ご存じ無いでしょうが、マネージメントチームのほとんどは、あなたの方の親にあたる世代です。外装は若くしていますが、本物は更年期のおじさんとおばさんばかりなんです。そして……ほとんどのマネージメントスタッフが、10代の頃に、サポート体制が劣悪だった頃のMMORPGで遊んでいます。今でも語りぐさになっていますが、当時のMMOは、まだ商売として、サービスを追求できるようなレベルに到達していませんでした。安かろう拙^{まじす}かろうの世界です。サービス業の本職が入り出したのはここ10年のこと。その分、あまり凝ったゲームを運営できなくなり、ご存じの通り、メタバース系のコンテンツが増えたわけですが……」

市長は溜め息をついた。

「本当に情けない限りです。サービスの行き届いたMMORPGを実現しよう。それが私たちの目標でした。それなのに、こんな初歩

的なミスを犯してしまいました。シンくんには、どう詫びれば良いのか……本当に申し訳ありません」

市長は再び頭を下げてきた。これには逆に、俺のほうが悪かった。まいった。

今の話が本当だというなら、俺は40代の大人に謝られていることになる。それに顔を晒されたにしろ、外装をたいしていじらずに使っているのは俺自身だ。ある意味、本名に良く似た名前でネットに書き込むのと大差がない。

「……………」

そうか。今さらかもしれないが——そうなのか。

「……シン？」

「いや……」

俺は額を軽く押さえ、溜め息をついた。

「市長……頭、上げてください。俺にも迂闊なところがあったのは事実なんですし」

「いや、やはり私たちの——」

「だから、俺もリンも、PVだからって甘えてたところがあったんです」

リンが驚きながら俺を見上げた。

「顔だ、顔」

俺はガリガリと頭をかきながらリンに言った。

「例えばな、どこかの掲示板に、本名そっくりのハンドルで書き込んだとするだろ。それで、書き込みの内容から、本人が特定された場合……悪いのは誰だと思う？」

「あっ……」

リンは口を手を当て、両目を見開いた。

俺はうなずきつつ、顔をあげていた市長に視線を戻した。

「どうせ、そういう話もあったんでしょ？」

「ええ、法務の者からは、だから責任に問われることはない、と。ですが——」

「いいよ、もう」

俺はさらにガリガリと頭をかいた。

「起きたことは仕方ない。今さら外装を変えたところで、どうなるもんでもない。というか、俺としては、いちいち別の外装に変えるの面倒なんだ。リンはどうだ？」

「わたし？ わたしは……」

「む——」

——カチャッ

瞬きの瞬間で、銃口が俺の顔に突きつけられていた。

なんだ、この早抜き。

俺は両手をあげながら、

「——ずかしく考えるな……と、言いたかったわけだが？」

と弁明した。本当だ。胸がどうとか言うつもりは、ちょっとしかなかったぞ。ホントに。

「——りやり言い訳と作った気がするんだけど？」

リンは冷ややかに尋ね返してきた。

「OK。続きはあとで」

「OK。覚悟しなさい」

リンは銃をホルスターに戻した。

二人で市長に向き直ると——市長は俺たちに背中を向け、肩を震わせていた。

「「笑うな」」

俺とリンは同時にそう告げた。それが市長のツボにはまった。

十数秒後。

「いや、すみません。本当にすみません。笑うつもりはなかったんですが、こうまで凄いスペックのプレイヤーが、揃いも揃って夫婦漫ざ——いえいえ、とにかく落ち着いて。銃はホルスターに、槍も下ろして。ね？」

「とにかく」

俺はジト目で市長を睨んだ。

「別に晒されたことを訴えるつもりもないし、事件のこと、ネットに書き込むつもりもない。それにプレイヤーの自由意志を尊重する、今のスタッフに不満もない。微妙に騎士団の連中はどうかしてほしかったが、それでも所詮はゲームの中でのことだし、俺が直接、連中絡みで実害を被ったわけでもない。つまり俺は、別に気にしてない。それでどうだ」

「騎士団……ああ、彼らの。ええ、本来なら取り上げるべきなんですよけどね……」

市長は小さく溜め息をついた。

「無理なんですか？」とリンが尋ねた。

「実は一度、取り上げているんです」

市長のその言葉には、少なからず驚かされた。

「そもそもβテストはデバックを兼ねています。バグを見つけたら、スタッフに通告するのも義務です。それを考えれば、バグの悪用なんて、本来であれば、やってはいけないことの筆頭ですよ」

「だったらどうして？」と俺が尋ねた。

「上です」

市長は苦笑した。

「かなり上のほうからの意見なもので……」

瞬間、俺はひらめくものを感じた。

「まさか、ゼノンも選考枠で？」

「お答えしかねます」

市長は意味ありげに、ゆっくりと答えた。

「ですが、あなた方は選考枠でしたね。もしかすると、その関係で多少の内部事情を知っているかもしれない。いやあ、これは困った話です。例えば我々が“本社”といったら“NEUROジャパン”を意味するとか、『アニマランド』のRMTが好調なことから強気になっている本社の幹部がいるとか、その幹部の推薦で8人も選考されたとか……いやあ、どこからどう話が漏れるか、わかったものじゃありません。本当に困った話です」

「困りすぎる話だな」と俺。

「ホント、困りものよねえ」とリン。

「そうそう」

市長は地面に転がる石を拾った。

「先にお断りしておきますが、詳細は私も知りません。前にも話したと思いますが、シナリオチームが持つ情報、マネージメントチームにはなかなか降りてこないんです。我々にわかることといえ、実装されたフィールドの地形ぐらいです」

市長はヒョイツと無造作に石を投げた。

ここは鍾乳洞だ。カランコロンと転がった石は、鍾乳洞に点在している澄み切った水たまりのひとつにポチャンと入った。

「深いですねえ」と市長。

リンは小首を傾げた。

俺は……次第に両目を見開いていった。

「市長！」

思わず怒鳴りつけてしまった。

市長は微笑みながら、

「トラブルの件でなにかありましたら、全面的に協力します。ご連絡ください。では」

言うだけ言って、スーッと消えてしまった。

「シン？」

わけがわからないとばかりに、リンが俺のことを見上げた。

俺は……ああ、くそ！ 頭にくる！

「ったく！」

転がっている石を蹴り飛ばした。

「そういうことか！ ったく、お詫びにヒントって、なんなんだよ！ プレイヤーから考える楽しみ奪うつもりか！？ ああ、もう、頭にくる！」

「ちょ、ちょっと！ だからなんなのよ！」

「ダウンボックスに決まってるんだろ！」

「決まってるって――ダウンボックス？」
リンはキョトンとした顔で尋ね返してきた。

「ここに潜れば……？」とリン。

「多分な」と俺。

地下14階のアップーボックスから遠く離れたところには、鍾乳洞にありがちな大きな池——俺たちは、そこへと移動していた。

ちょうど細い道から大きく膨らんだところの右側にある、細長い水溜まりだ。

ウィル・オー・ウィスプ

電灯が頭上にあるので真下を見るのは難しいが、透明度の高い水たまりは、奥行きが約1メートル、左右の長さが約10メートルほどあった。深さは軽く3メートル近くあるだろう。

「ビンゴ」

端から調べていくと、ちょうど真ん中のあたりに、奥に向かって続く穴が空いていた。

水底から直径2メートルほどの穴が空いているのだ。

それも、自然洞窟ではありえない、まるで鋭利に切り取られたかのような丸い穴が。

「潜る気？」

「当然」

俺はジャケットとハーフパンツを収納。ガンベルトや《トライデント》も収納した。

「すぐ戻る」

「ちょっと!」

まだ躊躇していたリンを残し、俺は思いきって水たまりに飛び込んでみた。

ザブんと、冷たい水の中に落ちた感触がある。

やはりPVだ。息苦しさまで再現している。これから先端技術嫌いになりそうだ。

(どれ……)

目を開けてみると、目の前に問題の穴が空いていた。

ウィル・オー・ウイスプ

水中でも電灯が輝いているおかげで、穴の中はバッチリ見えていた。材質は金属。リベット撃ちされている。だが、10メートルほど先で行き止まりになっているらしい。その上からは、柔らかな明かりが差し込んでいる。

（ビンゴ）

俺は水底を蹴り、上にあがった。

角が丸まっている縁に両手をつき、顔を水上に突き出した。

「ぷはあ！」

「どうだった？」

そこでは、ショックシューズに肩無しシャークウエアという俺と同じ格好になったリンが、金髪のパニーテイルを揺らしながら、準備体操をしているところだった。

「ビンゴ。あと、けっこう冷たい」

「やっぱり？」

リンは縁に腰掛け、両足を入れてから水の中に入った。

「なによ。けっこう温いじゃない」

「ウエアのせいだろ」

リンは軽く潜り、すぐ上にあがってきた。

「ふう——けっこう気持ちいいかも。それよりどいてよ。穴、見るんだから」

俺が横にずれると、再びリンはスッと潜り、少したってから顔を出した。

「楽勝じゃない？」

「そりゃあ、そんな遠くに設定できないだろ。ゲームなんだし」

「ところでさ——息、どれくらい止めていられると思う？」

「……試すか」

ウィンドウの時間表示を使い、ひとりずつやってみたところ、俺は約40秒、リンはなんと1分10秒ほど我慢できた。

「さすが経験者」

「はあ、はあ、はあ——なんで仮想現実なのに息苦しいわけ？」

「脳がそう判断してるんだろ？」

「じゃあ、あんたも鍛えなさいよ。水泳、筋力付けるのに最適なんだし」

「はいはい。じゃあ、行ってみるか」

「OK」

俺たちは、俺、リンの順番で穴の奥に向かってみた。

10メートルほどの横穴を進むと、リベット打ちされた鉄板で囲まれたプールのような場所に出る。

深さは水たまりと同じ約3メートル。よく見ると、もう少し進んだところに段差があった。

とりあえず水面に顔を出してみた。

広い鉄板の壁に囲まれた部屋だ。横幅は約3メートル、天井が高く、進行方向には横幅いっぱいなのだからかな上り階段があった。

その奥は、水面からだど、よく見えない。

「ふう」

すぐ横にリンの顔がでてきた。

「雰囲気、違うね」

「だな」

俺たちは階段のあるところまで進み、水からあがった。

警戒しながらも、そのまま階段をあがってみる。

案の定、すぐ奥にログインボックスがあった。俺が無言で右拳を横に出すと、リンも無言のまま、左拳をガンツと重ねてきた。

あまり知られていないが、『PHANTASIA ONLINE』には2分ルールというものがある。汗や息の乱れなんかは2分ほどで消えてしまうという仕様のことだ。

濡れた体も同様らしい。

装備を調えながら、2分ほど水面を眺めていると、体はすっかり乾いてしまった。

「ねえ」とリン。

「んっ？」と俺。

「海に突き出たテラスのある宿って、無いのかな？」

「さすがに宿は厳しいんじゃないか？」

「だよねえ」

ここ最近、急に蒼都の探索が進んでいる。といっても、紅都や翠都に比べれば、かなり遅れての展開でもある。それでも、どこそこになにがあった、あそこになにがあったという報告が、蒼都スレに次々と寄せられているようだ。

今ではほとんどの宿、購入可能な分譲部屋と家屋、東区のゴンドラ時刻表まで『マトメ』に載っている。隠れ宿屋もほとんど見付けられており、安い物件は、すでに投資の対象として買いあさられているようだ。

「んじゃ、軽く見回ったら、新しい宿、探しに戻るか」

「たまには戻らないとねえ」

俺たちは誰も見たことがない地下15階へと向かってみることにした。



今度の迷宮は、一言で言えば“秘密基地”だった。

構造素材はリベット撃ちの鉄板。通路は碁盤の目のように均等だが、ところどころがぶ厚い隔壁で阻まれていた。ためしに攻撃してみたが、壊れるどころか傷ついても、2分でどこからともなく現れた粒子で修復されてしまった。

敵も新しくなった。

地上1メートルを浮遊する円筒状のロボット——セキュリティポール。

高速で動くバスケットボールサイズの涙滴型ロボット——ルーケ

サイト。

蜘蛛の頭部に人の腰から上がっているようなドール―アルケドール。

いずれも遠距離から銃器系で攻撃してくる厄介な敵ばかりだ。しかもあえて接近戦を挑んでも、固くてなかなかダメージが通らない。俺にとっては天敵とも言える連中だ。

おまけに、上へ戻ることができなかった。
最悪だ。

予定では22時半頃に取り引きがあったのだが、物理的(?)に不可能になってしまったのだ。

「ねえ、シン。カートリッジ、全然落としてくれないけど、どうする?」

「今度は兵糧責めかよ」

新しいカードも手に入るが、回復系と弾薬系のカードだけが手に入らない。かといって近接で挑んでも時間がかかるだけだ。

なるほど、なかなか考えられている。

「こうなったら意地でも近接で乗り切るしかないってところか……」

「わたしも?」

「当然」

「ぶーぶー、女性虐待はんたーい」

「男女平等お、さんせい」

俺たちは戦い続け、時間も無かったため上がれないアッパーボックスでログアウトすることにした。ダウンボックスを探すだけでも、かなり苦勞しそうだったのだ。



PVベッドのフードがあがると、開きっぱなしになっていた部屋

のドアから、背広姿の親父が入ってきた。

「――あれ？」

「着替えろ。戦いだ」

それだけ言い残し、親父は部屋の電気を付け、ドアをボタンと閉ざした。

しばらく呆然としたままドアを見つめる。

「……待ってたのかよ」

ベッドを降りた俺は、そのまま机のケータイを手にした。

登録してあるリンの番号にかける。

耳にあてながら部屋着を脱ぎ捨て、クローゼットから制服を取り出す。

「へもしもし、何かあった？」

さすが相棒。察しが早い。

「よくわからん。でも、親父から『戦いだ』って言われた」

「怪我の具合は？」

「左手がまだ。頭は平気」

「P Oのほうはわたしに任せて。いい。無茶してあんたがこれになつたら、わたし、北海道まで乗り込むからね。わかった」

「勘弁しろよ。生身は外装ほど頑丈じゃないんだ」

「殴るだけよ。撃つわけじゃないから平気でしょ？」

「せめて平手にしろ、平手に」

「OK。今日は起きてるから、愚痴りたくなつたらいつでも連絡して」

「OK、相棒。じゃあな」

電話を切った俺は手早く半袖Yシャツを着込み、ネクタイを持って部屋を出た。

リビングには、親父と母さんが座っていた。今すぐ外出可能な格好で、だ。

「何事？」

俺はネクタイを結びながら尋ねた。

「おそらく今夜でおしまいだ」

親父が溜め息混じりに応えた。

「終わりつて――」

尋ね返すより先に、家の固定電話が鳴った。

子機を手にした親父が、ワンコール目が鳴り出すが早いか電話に出た。

「もしもし、久賀です……はい、そうです。お疲れ様です。それで、大山憲義くんの状態は……ええ………はい………はい………はい………はい………はい………はい………」

「だと思ひ、準備してしました。今からでも大丈夫です。先方も、そのようにお望みだと思いますが………いえ、責任はあくまで先方にあります。なにも先生が気に掛けることはありません。では、これから伺わせていただきます」

親父は電話をきった。

険しい表情の母さんが、スクツと立ち上がった。

左頬の湿布が痛々しい。おまけに首に見える青痣も見ただけで胸が痛んだ。

大山父を止めた時、母さんは大山父に首をしめられたのだ。そればかりか、左頬を何度も叩かれている。執拗に左頬ばかり叩かれた母さんは、今もひと目でわかるほど、頬を腫らしている。

「母さんは――」と親父がいいかけた。

「お父さん」

母さんはジロツと親父を睨んだ。

しばらく二人は黙り込んだ。

負けたのは親父だ。

重い溜め息をつきつつソファから立ち上がり、俺をジロツと見た。

「慎」

「あいよ」

「父さんはおまえと母さんを天秤にかける状態になったら、真っ先

に母さんを助ける」

「俺が親父と母さんを天秤をかけたら、やっぱり母さんが先だな」
俺は頭のネットをむしりとった。

「あら、私は二人とも助けますからね。どんなに嫌がっても」
母さんが断言した。

俺と親父は顔を見合わせ、こりゃ勝てないわ、と苦笑しあった。
「よしっ」と俺。

調子が出てきた。

なにがなんだかわからないが、このイベント、なにがなんでも乗り切ってやる！

親父が運転する車で学校に向かう中、ようやく俺は事の子細を聞くことができた。

なんでも自宅に籠もっていたはずの大山が、家を飛び出し、我が家を強襲しようとしたそうだ。しかし、大山の家からうちのマンションまでは随分離れている。その間、パジャマ姿で金属バッドを片手に持った巨漢の坊主頭が、もの凄い勢いで自転車をカッ飛ばしていた——職質されるのは当然だ。

だが大山は、職質してきた警官を殴打して逃亡した。

斜め上すぎる展開だ。

結果、警察はパトカーも繰り出しての大搜索に踏み切った。

こうして午後11時過ぎ——我が家に非通知の悪戯電話がかかってきた。

無言電話だ。

帰宅していた親父は、これが大山だと勘付き、まず自分のケータイでワカさんに連絡した。さらに親父は、学校の理事のひとりに電話した。学年主任が暴言を吐きまくった翌日、連絡をとり、録音を聞かせ、協力を要請していたらしい。その理事はふたつ返事で協力を約束。今回もまた、理事にあることをお願いし、これまたふたつ返事で了承してもらった。

学校には、その理事とワカさん、校長、教頭が呼び出された。

さらに警察からの応援も駆けつけた。

病院からも応援が来た。

その上で母さんが無言電話を受けている間、俺がログイン中であることを確認したうえで、玄関先まで向かい、大きな声でこう告げたそうだ。

「慎一い！ 早くしろお！ 学校に行くぞお！ 犯人を退学にするんだろお！」

同じ言葉を2度繰り返した。

2度目の途中で電話が切れた。

その10分後——俺がログアウトして間もなく、学校にやってきた大山を、警察が確保したそうだ。電話によると、最初は暴れていたが、手錠をかけられてからは急に大人しくなったらしい。

罪状は警官に対する傷害と公務執行妨害。あと、凶器で頭部を狙ったことを考えれば殺人未遂にも問えるらしい。つまり、いくら未成年でも、手錠をかけられて当然のことをしでかしているというわけだ。

学校に着くと、妙に立派な外車が駐車場に止まっていた。

警官が出迎えに来た。

「久賀さん、言われた通りに周りも見てきました。今なら大丈夫です」

「悪いな、無理言ってる」

そんな会話のあと、俺たちは車から降りた。

ええっと……？

「親父。もしかして——」

「んっ？ まあ……」

「慎一くんと会うのは初めてだったね」

先を歩く若い警官は、振り返りながら笑いかけてきた。

「コレだよ。コレ」

警官は釣り竿をクイクイツとさせる仕草を試みせた。

「よく会った。特の週末の朝釣りなんかで」

恐るべし、釣り人ネットワーク。

話によると、少し離れた交番に詰める若手の警官らしい。今回は、釣り仲間（！）である暑の人の声掛けで、緊急の招集を受けたという形をとっているらしい。さらに、職員用玄関から校舎へ入ると、校長室の前に親父の釣り仲間である脇坂の爺さんが、住職の格好のまま俺たちのことを待っていた。

「ああ、ご隠居。すみません、こんな夜遅くに」

「なんのなんの。夜釣りは思わぬ大物があがりますからなあ。あつはははは」

なに、この釣りつながり。

それにしても脇坂の爺さん、坊主なのに釣りなんかしてもいいんだろうか？ あれって殺生にあたるんじゃないのか？ 釣った魚は、全部食べているって話だし。

「おお、慎一くん。随分と大きくなったねえ」

「先月も会った記憶があるんですが」

「男子3日会わざれば活目して見よ、じゃよ。あつはははは」

寺を息子に譲り、楽隠居の身の上になっているんだが――ボケているのか、天然なのか、その判断が実に難しい爺様だ。なんだか車の中で高めていたやる気が削がれていく。

「しっかしまあ、いい顔になったもんじゃのお」

「おかげさまで」

「いやいや、世辞じゃないぞ？ 先月会った時もあったことじゃが、なかなかどうして、いい男の顔になってきたと思ったもんじゃ。あれじゃな。キムタクには遠いが、織田裕二とはいい勝負じゃ」

爺さん……キムタクと織田裕二も、渋い爺様なんですが。

そうですか。

俺、ロマンスグレーの爺様ですか。老けてますか。はいはい。

「それで、中の様子は？」

親父が本題に戻そうと爺さんに話をふった。

「あれも地獄といえるかもしれんの」

爺さんは目を細目ながら校長室を見つめた。

「久賀くんの予想通りじゃよ。母親が弁護士と一緒に現れおった。今は杉本さんと校長と担任とで相手をしてもらっているところじゃよ。ああ、あの子は保健室で寝ておる。収監するのも忍びないので、悪いが一端、休ませることにしたんじゃ。なに、署長にはあとでわしが詫びを入れておく。これでも民生委員じゃからの」

わからん単語が飛びかっているが、今は黙っておくことにした。

「ご隠居、私たちが入っても……」

「かまわんだろ。ああ……慎一くん。どうするね。行けば地獄。おまえさんは、間違いなく罵倒され、侮辱され、最悪の場合、暴力をふるわれ、傷つくことになる。それでも行くかね？」

「選択できるんですか？」

「できる」

爺さんは、ゆっくりと頷いた。

「なぜなら、おまえさんが、まだ未成年だからじゃよ。しかし、わしはおまえさんの子供扱いして良いとは思わん。どうするかは、おまえさんが決めるべきなんじゃ。もつとも、同席したところで、おまえさんの出る幕は何もない。おまえさんに出来ることは、黙って座っているだけじゃ。それでもよければ、一緒に行けばいい」

俺は一瞬だけうつむいた。

考えるまでもない。

「親父」

「んっ？」

「俺のことは全部横に置いて——親父の狙ってる結果を導き出すには、俺がいたほうが有利か？ それとも不利か？」

主役は親父。つまり親父がプレイヤーだ。

俺はリソース。投入することでも有利になるなら、投入すればいい。不利になるなら、引っ込めればいい。決断するのは、親父だ。^{プレイヤー}

親父はジッと俺を見つめた。

母さんは何も言わない。

爺さんも、警官も、黙って俺と親父を見ている。

不意に親父の口元が緩んだ。

「歳をとるわけだ……」

親父は俺の頭に手を置き、クシャクシャと髪をかき乱した。

「痛てっ」

「あっ——悪い」

「お父さん」

母さんがたしなめる。親父はガリガリと自分の頭をかいた――まるで俺のように。

俺は小さく吹き出した。

「親を笑うな」と親父。

「ごめん」と俺。

しかしまあ……俺ってやっぱ、親父の息子なんだな。趣味人なところとか、ちよつとした仕草とかが同じだし。

「……じゃあ、さっさと片付けるか」

まるで新しい階層に挑もうとする俺のように、親父は背広の内ポケットに手を差し込みながら、校長室の扉に向き直った。

一瞬、緊張が走る。

親父が扉をノックした。

「失礼します」

返答も待たず、親父は扉を開けた。

中は静かだった。

向かって奥のソファーに、校長とワカさんと初めて見る初老の爺さんが座っていた。手前には見知らぬお婆さんと壮年男性が座っている。いずれも押し黙っていたが、親父が部屋に入ると、バツとこちのほうに視線を向けた。

「ああ、お待ちしていおりました」

立ち上がった校長が親父に声をかける。同様にワカさんも立ち上がった。初老の爺さんは、杖に手をかけつつ立ち上がりかけたが、親父が手で制した。一方。お婆さんとおっさんも立ち上がり、振り返ったおっさんは素早く親父に歩み寄ってきた。

「初めまして。弁護士の方田正男と申します」

慣れた動作で内ポケットから名刺入れを取り出し、スルツと一枚の名刺を両手で持ちつつ親父に差し出してきた。

「これはどうも。函館市役所“あかるいまちづくり課”の久賀優一です」

親父はゆっくりとした動作で、弁護士と同じように名刺を差し出し

た。

「ああ、あの“あかるいまちづくり課”の……ご活躍はかねがね」「とんでもありません。市民の皆様のご協力あってこそ」「あかるいまちづくり課」ですのぞ」

「どの面を下げてそんなことおっしゃるのかしら！」

独白というにはあまりにも大きな声だった。

言ったのはおばさんだ。

あれが大山の母親なんだろう。それにしても、化粧がこすぎる。ヒョウ柄の服がピッチピチで破けそうだ。俺の母さんも太めだが、このおばさんに比べれば充分すぎるほど痩せているように……いや、母さんって実は普通なのか？ 姉貴といい、リンといい、俺のよく知る女性がスリムすぎるからそう思えるだけなのか？

なににせよ、香水のニオイがすごい。

鼻が曲がりそうさだ。

勘弁して欲しい。

「夜分遅くにお疲れ様です」

ワカさんも俺たちのそばにやってきた。

「久賀くんのお父さん、お母さん、どうぞあちらに――」

促されたのは向かってテーブルの左手に並ぶ1人用ソファ――ふたつだ。

「久賀くん」

と、ワカさんが声をかけてくる。

「怪我のほうは？ どうせなら他の場所ですわ待っていたほうが――」

「とんでもありませんわ！」

俺が答えるより先に、大山母が声を張り上げた。

「うちの憲義ばかりかうちの人まで犯罪者に仕立ててあげた張本人を外してなにを話しあうとおっしゃるつもりですの！？」 校長先生

！ 早くこの悪魔を処分してください！ PTAも承諾済みですわ

！ 早くご決断下さい！ さあ、早く！」

「大山さん」

なだめたのは、早足で近づいた弁護士だった。

「どうか落ち着いてください。すべてを私に任せるという約束でしたよね？」

途端、おばさんは弁護士の手首をつかみながら、弱々しげにソファーに寄りかかった。

「先生……先生だけが頼りなんです！ このままだと私は……………」

「わかっています。わかっていますから、どうか落ち着いて」

なんというか……あの弁護士、実は被害者なんじゃないか？

と、背中をこづかれた。

母さんだ。

椅子に向かえ、と言っているらしい。

俺は親父のあとに続き、ソファーの後ろに立とうとした。

「おい」

親父が声と共に一瞥してきた。

何事かと思ったが、親父の目の動きで意味を理解できた。

ソファーに座れ、ということだ。俺は先生方に近いほうのソファ

ーに座った。親父は弁護士に近いほうのソファーに座る。母さん

はワカさんが用意したパイプ椅子に腰を下ろした。

「脇坂さんや」

それまで黙っていた白髪の老人が爺さんに声をかけた。

「悪いんだが、見届け人として同席してくれんか？」

「わかりました。民生委員として、見届けましょう」

爺さんは自分でパイプ椅子を用意し、白髪の爺さんの隣に腰を降ろした。

戦場が完成した。

開戦の狼煙は、校長があげた。

「はて、どこからどう話せばよいのか……」

おばさんが立ち上がりかけたが、弁護士がそれを制した。

「こちらと致しましては、再三に申し上げている通り、学校側の管理不行き届きについての釈明と正当なる対応を求めているだけです」

「ですからそのような事実はい——」と校長。
だが弁護士はとまらない。

「憲義くんは精神的かつ物理的にもイジメを受けていたと証言しています。実際、彼はクラスでも孤立していたと、他の誰でもない、担任の先生が証言しています。そうですね、若狭先生。先ほど、そう言われましたよね？」

「孤立というか……私が見る限り、ひとりでいることが多かったというだけでして……」

ワカさんは理論整然とした弁護士の問いつめにしどろもどろになっていた。

「ではなぜ、指導なされなかったのですか？ 孤立していることを知りつつ、放置していたというのは、教育者として、いえ、クラスを預かる担任として、不充分なところがあつたという証明ではありませんか？」

「失礼ながら」

親父が割って入った。

「物理的にもイジメられていたと仰いましたが、具体的には？」

「この——！」

また大山母が激昂しかけた。しかし、弁護士がおばさんの手を握り、すかさず親父の顔を見返した。

「あなたの息子さんに日常的な暴力をふるわれていたそうです」

「どのように？」

「聞けば、あなたの息子さんも孤立していたようです。クラスに親しい友人がいなかったとか」

弁護士は俺を一瞥した。

少しムツとした。

「なるほど。それで？」

親父は話の先を促した。

「ええ。あなたの息子さんもイジメられていたわけです。それに関する学校への責任追及という点では、私どもと共闘できるものと信

じております。ただ、腹いせとして、憲義くんに暴力をふるうのはいただけません。無論、謝罪さえしていただければ、不問に処するというのがこちらの言い分です」

「なるほど、腹いせに……」

親父は俺を横目で見た。

「どうなんだ？」

「……なにが？」

親父は無言だ。

俺は小さく溜め息をついた。

「じゃあ、言わせてもらいます」

俺はジッと見つめてくる弁護士の目をにらみ返した。少しだけ気が必要だったが、右に親父、左に母さん、脳裏になぜかリンがいるおかげで、勇気を振り絞ることができた。

「俺にとつてのストレス解消法はゲームです。イジメなんて後味の悪いことをするぐらいなら、ゲームに熱中することで憂さを晴らします」

大山母が何か言いかけたが、弁護士が俺を見据えたまま、添え置いた手を握ることで制した。だが……なんだよ、その値踏みするような目。ムカつく。わかったよ。言いたいこと、言わせてもらうからな。

「それに俺は、人間関係ってやつが面倒臭くて嫌いなんです。愛想笑いもそう。話を合わせるのもそう。イジメなんかに関わったら、イジメ続けなきゃならないわけでしょ？ 冗談じゃない。イジメる余力があるなら、ゲームやりますよ、ゲーム。だいたい、俺がいつから大山をイジメたて言うんですか？ 中学も別ですよ？ 高校に入ってから俺は、格ゲーの練習と対戦で時間が足りなかったぐらいんじゃないんですけどね。5月からは、仮想現実のゲームのテストにも参加していて――」

「それです」

間髪入れず、弁護士が話に割り込んできた。

「お尋ねしますが、慎一くんはどのようなして『PHANTASIA ONLINE』のクロードβテスターになったのですか？」

イヤな予感がした。

俺は親父に視線を向けてみた。親父は弁護士を見つめたまま、微動だにしていなない。

助け船は無しか。

「答えられないのですか？」

弁護士の低い声が脳に響く。

落ち着け。とりあえず落ち着け。

ええっと……そう、あれだ。リンに教わった交渉のイロハ。教わったっていうより、雑談の中で出てきた話だが、あれを今回も利用させてもらおう。

「答える必要があるんですか？」

俺は質問に質問で答えた。弁護士はピクツと眉を動かした。

「とても大事なことです。答えていただけませんか？」

「どうして大事なんですか？」

「やはり答えられないんですか？」

「どうして、そんなにP Vの……」

あっ——と思い、一瞬だけ言いよどんだが、

「P Vのことに固執するんですか？」

俺は慌てて、最後まで言い切った。

落ち着け、俺。

いや、それより今は……考えろ。

なんでだ？

弁護士は正式名称を使った。『PHANTASIA ONLY NE』のクローズドβテストと。俺はわかりやすさを優先して、仮想現実のゲームのテストと言ったのに……

なぜだ？

なぜ、そんなことで、あっ、とか思ったんだ？

太股の上に置いた両手の拳が、汗でじつとりと濡れてきた。

「たいへん、重要な、こと、だからです」

弁護士はゆっくりとした口調で、俺に語りかけてきた。

一瞬たりとも視線を離そうとしなかった。

とんでもないプレッシャーだ。目を合わせているだけで、つい目を逸らしたくなるほどだ。襟元で輝く弁護士バッチも、威圧感をさらに強める特殊アイテムに思えて仕方がない。高1の小僧にすぎない俺にとって、このプレッシャーは、今まで経験したことのない種類のものだった。

正直、今すぐ逃げ出したい——情けないが、かなり本気でそう思った。

負けそうな気がする。

なにか、とんでもない失敗をしでかしてしまいそうな……

「どうなんですか？ やはり答えられないんですか？」

弁護士が言葉を重ねた。

親父は動かない。

母さんも黙っている。

先生方も、爺さんも、事の成り行きを見守っている。

リン——俺、どうすばいい？

いや、そうじゃない。考えろ。考えるんだ。

なぜだ？

うん、そうだ……なぜ、こうもP Vのことに固執してくるんだ？

確かに大山が俺に絡んできた最初の動機は、俺がテスターで、あいつが応募に落ちたことだったかもしれない。だとしたら、俺が選考枠であることを話さえすれば、そこで話は終了のはずだ。

それでいいのか？

いや、待て。

俺がそう答えると、弁護士は予測しているのでは？

だったらなぜ、弁護士は俺に、答えを言わせたいんだ？

俺から引き出せる言質？

大山にとって有利になる言質？

いや、そうじゃない。俺から引き出しやすい言葉だ。それを引き出すだけで、弁護士は次の一手がうてる。それも、決定打になるような言葉のはずだ。そうでもなければ、ここまで執拗に尋ねてこないはずだ。

考えろ。

普通ならどう答える？

叔父のことを話す。間違いない。叔父の推薦で……

んっ？ 叔父？

身内にVRNの社員がいる――そのことか？

だが、どうしてそんなものが決定打になるんだ？

いや、待て。決定打とは限らない。

向こうの意図を考えろ。

相手は弁護士。依頼人に随行してきた弁護士。依頼人は誰だ？

大山父？ いや、まだ収監されている。なにより母さんの件は現行犯だ。目撃者もいる。防犯カメラの映像もある。言い逃れは無理だ。だから、母さん絡みの大山父の件は除外しよう。

だとしたら……大山？

こっちも言い逃れは無理だ。職質してきた警官の頭に、金属バツドで殴りかかったのだ。幸い、受け止めた右腕の骨にヒビが入った程度で済んだそうだが、明確な公務執行妨害だ。この件でどうこうするのは、もはや不可能だ。

だったら、なんだ？

俺に関係する問題？

俺に対する傷害？ いや、何か違う気がする。だいたい、俺にイジメられていたと言っていたが、やってもいないのだから……ああ、時間が足りない。考える時間が……

「……………」

俺は気が付いた。

時間だ。

弁護士が必要としているのは、時間なのだ。

叔父はVRNの社員。俺は選考枠。大山は応募枠で落選。例えば、例えばだが、そこから“俺が叔父に頼んで大山を落選させた”と難癖をつけることもできる。もちろん、あり得ない話だが、確かめるには時間が必要になる。少なくともVRNに問い合わせ、答えを貰うだけでも1日や2日はかかるはずだ。仮に返答が速くても、今すぐなんてことは無理のはずだ。

俺は弁護士の目を見た。

静かに威圧してくる目だ。ただ、どこことなく嘲るような輝きもあった。

（こいつ……俺のこと、侮ってる!?!）

稲妻が脳裏を駆けめぐった。

わかった。

この弁護士の意図がわかった。

俺だ。

時間を手にいれることで、俺を丸め込もうとしているのだ。

俺を丸め込むことで“大山に情状酌量の余地がある”ことにしようとしているのだ!

「どうなんですか? どうやってテスターになったんですか?」

「叔父がVRNの社員で、選考枠で入れてもらいました」

俺は背筋を正しながら答えた。

親父が一瞬だけ視線を向けてくる。

目が細められていた。

背筋に悪寒が走る。

この判断が正しいのか、間違っているのか――そこまではわからない。

もしかすると、俺は暴走しようとしているのかもしれない。

だが、向こうは俺を侮っている。それは間違いない。

だったら、思い知らせてやればいい。俺が決して侮っていい相手ではないことを。

「なるほど」

弁護士がうなずいた。

「憲義くんはテスターに応募していました。しかし、イジメの加害者の身内に、ヴァーチャル・リアリティ・ネットワークス社の社員がいたとなれば、落選させることも不可能ではありませんね」

やっぱりそうきたか。

弁護士は意味ありげに微笑んでいる。間違いない。俺から今の発言を引き出し、そこから俺を切り崩していこうというのが、こいつの作戦だ。この予想しえない弁護士の言葉は、実際に親父を驚かせている。少し目を見開いた程度だったが、なぜそういう話に、と言いたげな顔をしている。

俺も突然言われたら、同様の反応を見せただろう。

しかし——俺には切り（・）札がある。

「聞いてみますか？」

俺はズボンのポケットからケータイを取り出そうとした。

「いえ、当事者である君の叔父さんに尋ねても——」

弁護士の顔には勝ち誇ったかのような笑みが張りついていたが、

「叔父では不適切です」

俺は短縮に記録しておいた番号のひとつに、その場で電話をかけた。

弁護士が顔をしかめている。

親父も俺を一瞥した。

まかせろ、親父。本番はこれからだ。

「どうだった？」

電話口から聞こえてきたのは、リンの声だった。

「悪い。今すぐ市長に（・）メ（・）ー（・）ル（・）し（・）て（・）く（・）れ（・）」

俺はワカさんに目を向けた。

「先生。この部屋の電話、ハンズフリーになりますか？」

ワカさんは驚きながら校長に顔を向け、校長はキョトンとしなが

ら頷いて見せた。

校長室の電話番号を伝えて待つこと3分――電話が鳴り、まず俺がでた。

「もしもし？」

「シンくん、どうしたんだい？」

聞こえてきたのは蒼都市長セイリユウの声だった。

「悪い。今からハンズフリーにする。声もスピーカーで周りに流す」俺はハンズフリーボタンを押し、受話器をテーブルに置きながら、話を続けた。

「今、例のトラブルの件でもめてる最中なんだ」

「……なるほど、そうでしたか」

一瞬だけ黙り込んだのは、予想外の展開だったからだろ。

「想定した中で最悪の展開ですね。ということは、近くに相手側の弁護士も同席しているということですか？」

「いる」

俺は弁護士を見た。

弁護士は表情を変えず、顔をしかめながら卓上の子機を見つめていた。

「でしたら、この会話も記録しているものと考えてかまわないわけですね？」

「どうかな」

「君に尋ねたわけじゃありませんよ、久賀慎一くん」

市長は穏やかに告げてきた。

「そちらにいらっしゃる法曹関係の方、よろしければお名前と登録番号をお教えいただけますか？」

「金田正男といえます。登録番号は――」

弁護士はIDのようなものを暗唱した。

「ありがとうございます。時間も時間ですので、弁護士会への確認の問い合わせは後ほどにさせていただきます。なお、これは弊社の内部規定に沿った確認手続きですので、ご気分を害されないよう、お願いします」

市長はそこで、咳払いをした。

「ご挨拶が遅れました。私は株式会社ヴァーチャル・リアリティ・ネットワークス、コンテンツ事業部、ファンタジア・オンライン・マネージメントチームでチーフを勤めさせて頂いている森下健司もりした・けんじと申します。そこにいる久賀慎一くんが参加している弊社の完全仮想現実技術を用いた娯楽コンテンツ、『PHANTASIA ONLINE』のクローズドβテストでは、現場の総指揮を執らせていただいている者です」

弁護士は目を見開いた。

親父も目を見開きながら俺を見ている。

俺は――同じように目を見開いていた。

おいおい、市長。そんなに偉かったのか？ 嘘だろ？

「今回は弊社の不手際で久賀慎一くんの仮想現実における肖像権を犯すという多大な迷惑をかけてしまいました。口頭ではありますが、そのことで何かあれば、協力することを確約しております。それもあって、このような形で対面になってしまいました。ご査収いただけますと、助かります」

「不手際をお認めになられるんですね？」

弁護士が口早に尋ねた。

「はい。6月22日午後8時19分に弊社の公式サイトに掲載いたしましたJPEG画像は、久賀慎一くんともう一人の当事者の許可を取らずに掲載した、本人のAvatarボディの頭部の平面画像でした。プレイヤーとAvatarボディの見た目が近い場合を想定しなかった私どもの不手際というしかありません。久賀慎一くともう一

人の当事者のご指摘を受け、画像はすぐに撤去し、謝罪を致しましたが、これが発端となり、お客様にご迷惑をかけてしまいましたことは、たいへん申し訳なく思っております

市長はスラスラと言いつつ放った。

「へところで金田さん……とお呼びしますが、金田さんが問題になされている不手際というのは、いかなるものでしょうか？」

「……いえ、それは後ほど書面で、正式にお尋ねいたします」

弁護士は顔をしかめながら、苦々しげに答えた。

「いえ、そうはいきません」

市長が切り返した。

「不祥事といわれては、引き下がるわけにいかないのです。私どもに手ばかりがあったという主張は、場合によっては法的な問題に発展します。そのような事案を何も聞かずに終わることなど、現場を預かる者としては到底許されません。黙秘されるのであれば、こちらといたしましても、相応の法的な対応を行うしかありませんが、いかがでしょうか」

弁護士は口を閉ざした。

顔はうつすらと汗ばんでいる。

「市長……じゃなかった、森下さん」

俺が割って入った。

弁護士から睨まれたが、気にせず、話し続けた。

「俺はさっき、この人……じゃなくて、弁護士の金田さんから、こう言われました。ある人物がテスターに応募していた。しかし、俺の身内に、ヴァーチャル・リアリティ・ネットワークス社の社員がいたとなれば、落選させることも不可能ではない。そうですね、金田さん」

睨み返すと、弁護士は一瞬だけ視線を逸らし、すぐ俺をにらみ返した。

反論は無い。

だが、今はそれで充分だ。

へなるほど。しかし、そのようなことはありえないと断言できます」
市長はスラスラと言いつ返してきた。

「金田さん。応募の選考は弊社ではなく、弊社の親会社にあたるNEUROジャパン社が行っております。しかし、そちらにいる久賀慎一さんの叔父にあたる久賀優二さんは、弊社にこそ所属していますが、所属は弊社静岡工場総務部です。その点だけを見ても、久賀慎一さんの身内の人に、誰かを意図的に落選させることなど、できないと断言できます。それともうひとつ。久賀慎一くん。お客様であるあなたにお尋ねしたいのですが、今現在、あなたが関係しているトラブルの中の、弊社の名前がでてきている事案において、いったい誰が、弊社で不正が行われたという虚偽の主張を行っているのでしょうか。これは弊社の名誉を守るための質問ですから、テストー規約第二十九条において、あなたには答える義務が生じています。お答え下さい」

「大山憲義」

俺は弁護士を目を見つめながら答えた。弁護士は俺を一瞥したが、すぐに目が泳ぎだした。表情が変わっていないところを見ると、大急ぎで対策を考えているのかもしれない。

「ありがとうございます」

市長が応えた。

「調べたところ、確かに北海道函館市にお住いの大山憲義という人物から、20X0年3月7日付けで『PHANTASIA ONLINE』クローズドβテストの一般選考に対する応募登録が行われています。しかしながら、同年4月1日に行われた第1次抽選会で外れています。その結果は、登録されている“hiro@oyama.p11.2x.com”というメールアドレス宛に、財団法人電子文章認証機構の認証付き電子メールという形で送付しています。なお、久賀慎一くんの特別選考枠への申請が行われたのは4月29日、さらに言えば、叔父の久賀優二さんが弊社の静岡工場に採用されたのは4月9日です。この日付を見ても久賀慎一くんの

選考合格と、大山憲義くんの応募落選の間に相互関係は無いと断言できます。それとも金田弁護士は――

「もう、結構です」

弁護士は両目を閉じながら、吐き出すように告げた。

「貴社が無関係であることは疑う余地が無いと判断します」
〈それはなによりです〉

市長の言葉に、俺は心の中でガッツポーズを作っていた。

帰宅すると午前2時を回っていた。

「それで、どうなったの？」

インカム越しにリンが尋ねてきた。

「どうもこうも……」

あのあと、弁護士は大山母と共に、一時的に廊下に出た。

戻ってきたのは弁護士だけだった。

——お母様は、息子さんが心配ということで、そちらに向かいました。

そう説明していたが、大山母の怒鳴り声が校長室の中にまで聞こえていたのだ。なんとか説得して、ここから追い払ったのは間違いない。

——では本題に入りましょう。

親父がそう切り出したすと、もう俺に出番は無かった。

「その場でいろんなことの念書を作って……まあ、それが終わったから、こうして帰ってきた」

ネクタイを外しただけの格好で学習机に向かう俺は、メインディスプレイに映るリンに向かって苦笑を投げかけた。

「そっか……でも、ひと段落付いたんじゃないの？」

「知るかよ」

なんとなくだが、大山一家に常識は通用しない気がする。また遠からず、何かしでかしてくれのような気して、正直、憂鬱だ。

「じゃあさ。気分転換に、面白い話、聞いてみる？」

「気分転換？」

「正確にはいい話と悪い話、かな？」

ようやく俺にもピンときた。

ゲームの話だ。

「騎士団、動いたのか？」

〈動いたものにも、ホテルをかうって宣言してるみたいよ〉

「ホテルを？ そりゃまた派手なこと……」

蒼都にあるスフィア付き物件は、全部で48戸ある。そのすべてが中央広場と中央通りに面しており、営業していない商店っぽい建造物は、すべてスフィア付き物件であることが、すでにわかっている。

だが、1戸だけ例外がある。

それが蒼都の中で最も高額な物件、蒼都西区の外れにある通称“ホテル”だ。

俺たちも散策した時に一度だけ見たが、古城を思わせる立派な建物だった。周囲が高い壁に囲まれているため、内部の様子まではハッキリと見えなかったものの、正門から正面玄関までの間に大きな噴水まで付いていたのだから、かなりのものだと思う。

ただ、値段が尋常じゃない。

なんと1000億クリスタルだ。

買えるのかよ！——という感じだが、蒼海騎士団なら買えない金額じゃないだろう。

〈今のところ、吹かして意見もあるから、そんなに注目されてないけどね〉

「どこで宣伝してんだ？」

〈主に蒼都の中で関係者が行ってるみたい。ネット上では、本人たち、出てこないつもりみたいよ〉

「それがいい話か？」

〈まさか！〉

リンはニヤツと笑いながら、画面に顔を近づけてきた。

〈今のはどうでもいい話。いい話と悪い話、どっちから聞きたい？〉

「悪い話」

〈全部の中枢都市がバージョンアップされるんだって〉

「……はあ？」

それのどこが、悪い話なんだ？

へえっとね。まず、万単位のNPC市民を配置。なんでもケンブリッジ大学と京大が協力してるとかで、NPC市民はそれぞれが独自の生活アルゴリズムってものを持ってて、都市の経済活動にも参加する……みたい」

「へえ……」

「でね。これにあわせて職人系のアビリティも大量に追加するんだって。しかも、ドロップアイテムも搾るみたい」

「えっ!？」

これは確かにバットニュースだ。

「あと、都市部限定のお使いイベントと人探しイベントを大量実装。つまり、都市だけでも充分すぎるほど遊べるようにするって感じね」
「待て待て待て。それじゃ、何か？ 俺たちの収入源、かなり限定されるってことか？」

「そんなあんに、いい話がひとつ」

リンは悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべた。

「また新しいフィールドが実装されるわよ」

「なに!？」

ここまで言われれば、リンの情報源にも察しがつく。

俺はノートパソコンのモニターにブラウザを立ち上げ、公式サイトを表示した。

——大型アップデート第1弾！ コードネーム『NEW STA
GE』!!

公式サイトに、そんなバナーが新たに置かれていた。

クリックすると特設ページへと跳んだ。

「おお……」

俺はおもわず感嘆の声をあげる。

7月22日（日曜日）（テスト60日目）午前9時に予定されている今回の大型アップデートは、大きくわけると3つあった。

ひとつは都市の充実——これはリンが話した通りだ。

もうひとつは新フィールドの追加。無数の島々が存在する“百諸

イランズ

ハンドレッド・ア

島”、廃墟と化した近代都市“倒壊都”、古代遺跡が点在する広大な“大森林”——ここには、様々な新要素が盛り込まれてあるものの、凶悪なモンスターが数多く設置されており、上級者向けの場所だと明言されている。

さらに陣営抗争用フィールド“水晶山”と陣営抗争そのものが、とうとう実装されるらしい。舞台となるフィールドは、莫大なクリスタル鉱床が存在する山岳地帯だそう。普段は“ブロック”と呼ばれる空間単位ごとに、外装を覆うバリアーと同じ不可視の障壁が張り巡らされるが、毎日21時（午後9時）から23時（午後11時）までの2時間だけこれが解除、その間に地上に露出している3つの小鉱床と3つの中鉱床、地下坑道の先にある3つの中鉱床と1つの大鉱床の所有権を巡り、陣営抗争を繰り広げることができるという仕様になっているようだ。

「どうする？」

リンが尋ねてきた。

「そっちは？」

俺は尋ね返した。だが、リンは楽しげに微笑むだけで、何も言わない。

まあ、答えは最初から決まっている。

「へどう？ 気分転換になった？」

「知るかよ」

そう答えつつも、俺の顔は自然とニヤけていった。



翌朝というか翌日というか——いずれにせよ、夏休み前最後の月曜日にあたる7月16日、俺は久しぶりに登校した。

「なんだよ。おまえ、テスターだったんだって？」

「しかし災難だよなあ」

「俺でも隠すぞ。バレたせいでこれなんだからなあ」

案の定、馬鹿話をするクラスの男子からは、その話題が出てきた。ただ、適当に答えているうちに、どうやら俺（久賀慎一）が俺（SHIN）であることまではバレていないことに気が付いた。

不幸中の幸いだ。

最悪だったのは、その日の放課後から特別追試があったことだ。

「ちゃんと勉強してたんだろ？ だったら、今からやっても問題無いはずだ。違うか？」

ワカさんの意地の悪い言葉に、俺を含んだ“大山の暴走で怪我をした連中”全員がうなり声を上げたのは言うまでもない。まあ、どうせ俺の成績なんてたかがしれているので、どうでもいいか、と思っただけの秘密だが。

さて。

「おまえは当事者なんだから聞いておけ」

帰宅した俺を待っていたのは、一連の騒動に関する結末めいたことについてだ。

まず大山。

今は警察病院に収監されているが、初犯であることと、精神面に問題を抱えていることから、起訴は猶予され、今後、本州（内地）の専門施設で治療にあたることになったそうだ。学校のほうは今学期末をもって自主退学。念書によると、俺の周囲100メートル以内に近づくこと、電話をかけること、ネットで個人情報特定しえる書き込みをしないこと、これらに反した場合は危害を加える意志があるときみなし、違反金を支払うこと……なども決まったらしい。まあ、二度と俺の前に姿を現さなければ、あとのことはどうでもいいや、というのが正直なところなのだが。

次に大山父。

とりあえず当人は保釈され、現在は家にいるそうだ。諸々の警官に対する抵抗は嚴重注意に止まり、母さんへの暴行も示談に応じる

方向で話を進めているらしい。ただ、念書をとったため、“次”があったら民事で莫大な慰謝料を請求できるそうだ。いっそ、そう言ったほうが金持ちになれるかも、とは母さんの軽口だが、そんな母さんはあれ以来、朝のゴミ捨てに行けなくなっている。玄関先まで行くと、足がすくんでしまうのだ。空気を振りまいているが、今回の事件で一番ショックを受けたのは、他の誰でもない、俺の母さんだったのだ……

最後に大山母。

事情はよくわからないが、大山父と離婚するらしい。あと、息子が収監される施設の近所に引っ越すそうだ。とにかくまあ、俺たち家族の近くから遠ざかってくれるというなら、別にどうしようとかまわない。

「じゃあ、本当のひと段落ついたんじゃない？」

翌朝の定時（午前4時）にログインした俺は、リンと地下を歩きながら雑談に興じていた。

アンダーグラウンド

「まあ……な」

俺は《ハルバード》を肩に担ぎながら、ガリガリと頭をかいた。

「しっかし……あれだよな」

「なに？」

「あまりにもリアルだから忘れかけてるんだが……これって、ネットなんだよな？」

「そう……かな？」

「そうだろ。生身の俺は函館にいて、生身のおまえは東京にいるわけだし」

「うん、まあ……そういえばそうかも。それがどうかした？」

「いや、普通さ、ネットでリアルの話ってしないもんだろ」

「そう？」

「ゲームだとそうだろ。そりゃあ、オフ会とかする奴らは別だろうけど」

「別にどっちでもいいじゃない」

俺と同じく《ハルバード》を両手で担いでいるリンが苦笑した。

「だいたい、わたしたちって普通じゃないし」

「なんだそれ」

そう言い返したが、まあ、リンの言いたいこともわからないではない。

PVとはいえ『PHANTASIA ONLINE』はMMORPGの一種だ。それなのに俺たちは、半ば勝手に2Pプレイだけで遊んでいる。それこそ、ネットゲーム黎明期に遊ばれていた『Diablo』に近いかもしれない。俺も復刻無料版を少しだけ遊んでみたが、もしあそこに、リンみたいな付き合いやすいプレイヤーがいたら、きっと今のように遊び倒していたかもしれない……

「それよりさ——」

「待った。片付けてからだ」

遠くにモンスターを見付けたので、会話は一時中断。

しばらくしてモンスターを撃破した俺たちは、再び歩きながら雑談を再開した。

「で、なに話してた？」

「ああ、そうそう。家の話よ、家の話」

「……家ですか」

俺は思わず、遠くを眺めそうになった。

「なに韜晦とうかいしてんのよ」

「トウカイ？」

「今のアんたみたいな感じのこと」

「……まあ、とにかく。家ってことは……めばしい物件の情報でも仕入れたのか？」

「不確定情報なんだけど、ちょっと面白い噂が流れてんの。翠都スレ、読んでる？」

「いや。最近の本スレだけ」

昨日の今日だ。特別追試は終業式まで続く。多少は一夜漬けでもしておかないと、貴重な夏休みが補習で潰れかねない。

「で、どんな噂だ？」

「それがさ、今度の新しいフィールドにも物件があるらしいって噂があるのよ」

「……レッドゾーンなの？」

なんて無茶なことを——と思った直後、俺はハッとなった。

「まさか、俺たちを隔離するために……？」

「えっ？ なに？」

「だから、新しいフィールドって、陣営抗争のやつ以外は上級者向けって書いてあったろ。つまり、棲み分けだ。俺たちが都市のイベントを荒らさないように——」

「それは穿ち^{うが}すぎですよ」

不意の声は真後ろから響いた。

もつとも、さすがに何度も喰らっている不意打ちなだけに、声を聞くだけで、俺たちはげっそりとしながら顔を見合わせ、溜め息をついた。

「いいかげんにしてよお……」

「ホントはノゾキが趣味なんじゃないのか？」

2人同時に振り返ると、案の定、そこにはトীগ姿の市長が立っていた。

「おはようございます、シンくん、リンさん」

「市長」

俺は市長に向き直ると、これも礼儀だ、と思いながら軽く頭を下げた。

「そのせつは世話になった。感謝する」

「いえいえ、元を正せば私どもの不手際が発端ですからね。お気になさらないください。それより、あの件は片づきましたか？」

市長はチラッとリンを一瞥しながら尋ねてきた。

「ああ、だいたい片は付いた。あと、リンには全部話してある」

「そうでしたか。それはなによりです」

市長は安堵の吐息をつきながら、口元に笑みを浮かべた。

「後ほど正式に、弊社の者が伺わせていただきます。日時についてはお父上にご連絡しますので」

するとリンが、不思議そうに小首を傾げた。

「会社の人間が直接行くの？」

「はい。少し物騒な事件でしたので、今後のために詳しい経緯を」

「それより市長。穿ちすぎってのは、どういうことだ？」

俺は話を本題に戻した。

「隔離するつもりなんだろう、俺たちのこと」

「ですから、それは穿ちすぎです。そもそもホームを……あつ、宿や不動産物件のことですけど、それをフィールドに置くことは、最初から決まっていたことなんです」

「最初から？」とリン。

「ええ。確かにシンくんの言う通り、住み分けしてもらうことが目的といえれば目的なんですけど、分かれる根拠は比喩世界として楽しむユーザーと、アクションゲームとして遊ぶユーザー、という感じなんです。そうですね……ほら、ネットでは市民派と冒険派とか言ってます、今でも大きく分けられていますよね？」

確かに。

ただ、ひとくちに××派と言っても、活動場所がそうだというだけで、実際にはさらに細かく系統が分かれている。たとえば同じ市民派でも、トレードに熱心な市場系、アキンド広場などで歌や踊りを披露することに時間を費やす舞台系、とにかくゆったりとした時間を過ごしたがる観光系マターリなどがあり、冒険派もPVPに執着している喧嘩系、俺たちのような攻略系、モグラ自分の思い描いたキャラクターになりきることを重視する演技系ナリキリなどがある。

ちなみに。

蒼都では市場系市民派が著しく多い。アキンド

紅都では喧嘩系冒険派と演技系冒険派が多勢を占めている。ヤンキー

翠都では半分が観光系市民派、残り半分が舞台系市民派と演技系冒険派ナリのどちらかだと、相場が決まっているらしい。むしろ、それ

以外のユーザーは空気の読めない困ったちゃん扱いを受けているとか。それこそ、俺たちがいたら、まっさきに疎まれていたはずの状況らしい。

「ただ……」

市長は苦笑交じりに告げてきた。

「個人的な見解を言わせていただければ、あなた方にはしばらくここに潜り続けていてほしいですね。まあ、無理な相談だと思いますが」

「わかってるじゃない」

リンがニパツと笑い、俺もニヤツと笑った。

市長は苦笑したまま、それでは、と一礼して姿を消す。

「というわけで、家の話なんだけど」

なにがどう“というわけ”なのか問いつめたいところだが――無駄だろう。

どうせ親父の言う通りだ。

家の話は持ち出されたが最後。男に決定権など無い。俺に許されるのは、リンの話を黙って聞くことだけなのだ……

LOG 03 ” NEW STAGE ”

End

T
o

B
e

N
e
x
t

C
h
a
p
t
e
r

気怠い授業と地獄の特別追試、ついでに憂さ晴らしの地下攻略を続けること数日――ようやく五稜郭高校は終業式を向、俺にも夏休みがやってきた。もともと、例の事件で特別追試を受けることになった面子は、終業式後に答案用紙の返却が待っていたため、今もこうして教室に残っているわけだが。

「じゃあ、返すぞお」

全部の答案を預かってきたワカさんが地獄の窯を開けた。

「まず藍沢^{あいざわ}あ」

「はい……ぐわぼっ！」

「よし、次は宇喜田^{うきた}あ」

「ういーっす……あぼっ！」

出席番号順に名前を呼ばれた連中は、ひとりずつあまりの点数に悶死していく。

というのは冗談で。

「次は……久賀^{くが}あ」

「へーい」

俺は少し痛む左手首をさすりながら席を立った。

教壇に立つジャージ姿のワカさんは、苦笑まじりに答案用紙の束を突き出してくる。

「中間の時も言ったが……おまえ、まともに勉強してないだろ？」

「してますよ」

「嘘言うな」

俺の伸ばした右手を、ワカさんは答案用紙でペシッと叩いた。

「やればできるんだから、少しやったらどうだ？　今回も全部、赤点ギリギリだぞ」

「えっ!？」

ギリギリってことは……赤点がひとつも無い!？

驚きながら答案用紙を受け取った俺は、その場で全部の点数を確認した。

どれも50点以上。

ちなみに最高得点は数学の61点。最低得点は現国の53点だった。

「よしっ、赤無しっ！」

「喜ぶポイントが違う」

ワカさんは身を乗り出しながら、俺の頭をペシッと叩いた。笑いが起きる。

ふん、笑いたければ笑え。今なら許す。これで俺は、夏休み中の補習を受けずにすむんだからな！

「おーっ、すげーっ。見事すぎるギリギリだな」

「なんだよ久賀あ。おまえも補習仲間だろお」

「補習はいいぞー」

「こっちゃんこーい、こっちゃんこーい」

席に戻る途中、妖怪“補習生徒”がまとわりついてきたが、軽くあしらっておく。

という感じで。

ようやく俺にも夏休みが訪れた——はずだったのだが。

ONLINE .. The Automatic Heart

LOG.
04
”
BUCCANER
”

それは夏期補習が確定（妖怪化）した雑談仲間を慰めながら、生徒玄関へと向かっている途中のことだった。

「久賀慎一！」

不意に俺を呼ぶ声が背後から響いた。

すでに終業式も終わり、学校には運動部の連中と俺たち特別追試組しか残っていないような時間帯である。校舎は意外なほど静かだったため、その声は嫌になるほど大きく響いてきた。

おかげで俺たちは全員、なんとなく立ち止まってしまった。

こうなると無視するわけにもいかない。

「んあ？」

面倒くさそうに振り返ると、几帳面そうなガリ痩せ眼鏡の見知らぬ男子生徒が廊下の先に立っていた。

癖っ毛の無い短い髪は真っ黒なまま。

肌は青白く、頬は痩せこけている。

ぶ厚い縁なし眼鏡にキチツと結んだ濃紺のネクタイ。

半袖Yシャツの裾は、濃紺のスラックスの中にしっかりと入れられている。

当然、上履きを履きつぶすようなこともない。

小脇に抱える鞆も、新品同様のキチツとしたものだ。

なんというか……教師受けが良い優等生って感じの奴だ。

しかもそいつは、俺を値踏みするように眺めると、

「……ふんっ」

と、なぜか小馬鹿にするように鼻で笑い飛ばしてきた。

「どんな人間かと思えば……単なるラッキーボーイか」

その物言いに、俺はムツとしたものを感じた。

すると傍らにいる雑談仲間が、ぼそっ、とつぶやた。

「あれ……A組の五十嵐^{いがらし}？」

他の連中も不機嫌そうにつぶやきだした。

「ああ、あの電算部の……」

「テストだったよな……」

「なんだよ……また事件か？」

「いい根性してんな……」

どうでもいいことだが、俺の雑談仲間、あまり素行のよろしくない連中が多かったりする。こいつらの中にいると、俺のほうが優等生に見えてしまうぐらいの連中だ。仲間と言えるほど親しくもないのだが、馬鹿話をする程度の間柄ではある。

なんというか……不思議と俺は、この手の連中に好かれやすいようだ。連中に言わせると、俺が聞き上手であることが原因らしい。あと、無意味に恐がらないとか、無駄に踏み込んでこないとか、そういうところが気に入られる要因なのだとか。

それはそれとして。

「ふっ……僕は電算部の五十嵐いがらし誠美」

優等生様は、見下すように名乗りをあげた。

「君のような人間を誘うのは、正直、どうかと思うんだけどさ。部長が君を呼んでるんだ。来いよ。君に、選ばれた人間になるチャンスを与えてやるから」

「遠慮する」

俺はゲンナリとしながら即答した。

「って言うか……おまえ、馬鹿だろ？」

俺の言葉に、五十嵐とかいう優等生様はキョトンとした目で俺を見返してきた。

一瞬の静寂。

遠くから蝉時雨と汗を流す運動部のかけ声が聞こえてくる。

「……ぷっ」

「ぷぷっ……ぷははははははははは！」

「さ、さすが久賀！」

「そうそう！ これでこそ久賀だよな！」

「やべえ！ あはははは！ ストレートだ！ さすが久賀、直球ど真ん中！！」

悪友どもが笑い転げた。

優等生様は顔を真っ赤にしてプルプルと震え出すが、俺は笑いまくる悪友どもへの対応で忙しい。

「おい……今の、笑うところかよ」

「いや、でも、普通、言わないだろ、そういうこと！」

「ひーひゃっはははは！」

「あはははは！」

「く、苦しいーっ！」

悪友どもは笑い続けた。

優等生様はクルツときびすを返し、スタスタと立ち去ってしまう。俺は溜め息をつくとき、悪友のひとりの背中を軽くこずいた。

「なあ、電算部ってどんな連中だ？」

「なんだよ、興味あんのか？」

「やめとけ、やめとけ。最近は優等生様の溜まり場らしいぞ」

「そうそう。医者の子供しか入れないって話だぜ」

そこから生徒玄関に到着するまでの間、俺は電算部の現状に関する意外な話をいろいろと聞くことになった。

一応、俺は入学時に電算部を見学している。その頃の電算部は、部室に持ち込んだコンピュータを使い、ストラテジー系のLANゲームで遊びまわるといふゲーム同好会的なところだった。アクション系が好きな俺は今ひとつ肌があわないと思い、入部しなかったわけだが、その頃の人たちは、どこにでもいる普通のゲームオタクで、特にどうこうという感じは無かったと記憶している。

だが、この2ヶ月ほどで状況は一変したらしい。そのキツカケとなったのが、異例ともいえる早期の幹部交代だ。新部長は幽霊部員だった2年生。どうやらこいつがテスターであるばかりか、医者の子で、しかも金持ちの優等生様らしい。さらに、あと2人いる1年のテスターもそれぞれ入部。それまでの部員は次々と退部届けを

出し、逆にこの3人と親しい、親族に医者がいる生徒たちが次々と入部届けを出していったそうだ。

「ったく……」

生徒玄関に到着したところで、俺はガリガリと頭をかき、皆に背を向けた。

「どうした、久賀」

「野暮用」

俺はそのまま生徒玄関から離れていった。

その背中に、察した悪友どもが声をかけてくる。

「加勢、必要かぁ!？」

「いらん! 夏休みをボケーツとすごしたいだけだ!」

「なにかあったら電話しろよぉ!」

「俺たち、公園の近くでぶらついてっからなぁ!」

俺は右手を軽くあげながら、気怠そうに廊下を歩いていった。



うちの高校（五稜郭高校）には本校舎の隣りに図書館と呼ばれる建物が隣接している。正式名称は『総合文化会館』だが、1階部分が図書館として機能していることから、一般的には『図書館』と呼ばれている。

電算部を始めとする文系部活動の部室は、そんな図書館の2階に押し込められている。

部室の広さは教室の半分程度。中の様子は部室ごとにまちまちだ。廊下にまで様々な備品が溢れ出ていることから“文系魔境”と呼ばれることもある。それだけディープな連中が立て籠もっている場所ともいえるが、世代を重ねるうちに、捨てていいもの悪いものの区別が曖昧になり、そのまま少しずつ物が増え、ついには魔境と

化してしまった、というのが正しいと思う。

まあ、あれだ。

ゴミ屋敷と一緒だ。

キレイにするには、誰かが強制的に全部捨てるしかないっていう、例の。

「……さて」

校舎同様、図書館も静かだった。聞こえてくる物音と言え、うるさいまでの蝉時雨と、校庭で頑張っている真面目な運動部員たちのかけ声ぐらいだ。

とりあえず、目の前にあるドアの向こう側からは、物音が聞こえない。

洋ゲーのポスターがベタベタと張られたロッカーに挟まれているドアには、薄茶けた紙が一枚、剥がれ掛けているセロハンテープで貼られている。書かれている文字は言うまでもなく『電算部』の3文字だ。

（鬼が出るか蛇が出るか……）

俺はさっさと面倒ごとを済ませてしまおうと、ダンダンダン、とドアの曇り硝子部分を叩いた。

「すみませーん。1年の久賀でーす」

直後、ドアの向こうに人の気配を感じた。

何か話し合ったようだが、さすがに聞き取ることはできない。だが、焦った様子で物音をたてただけは、俺にも把握できた。

しばらく待ってみる。

誰かがドアに近づいてきた。

ドアを開けたのは、三つ編みに黒縁眼鏡という、どこことなく目つきの悪い女子生徒だった。もちろん、制服は校則通りだ。他人を見下すような感じこそ無かったが、優等生であるのは間違いないように思える。

「どうぞ……」

彼女は消え入りそうな声でそう告げると、ドアを開けたまま、自

分は横へと退いた。

部室の中が見える。

以前と様子が変わっていた。以前は部室の左右に長机が置かれ、無数の中古デスクトップパソコンと古めかしいブラウン管モニターが並んでいたものだが、その全てが撤去されている。代わりに今は、向かって右手にホワイトボードが置かれ、左手には長机こそあるが、最新式の平面モニターと新品同様のモニターが並んでいた。さらに部屋の奥にもホワイトボードが置かれ、その前にはゆったりとした1人用のソファアが置かれている。ソファアの前にはパイプ椅子が並び、まるで講習でも受けるかのように、幾人もの優等生たちが着席していた。

部員は上座(?)のソファアの1人、その傍らに1人、パイプ椅子に座りつつ身を捻って振り返っている者が6人の計8人――いや、ドアの横に退いた女子も含めると、全部で9名いる。その中には五十嵐の姿もあったが、どういうわけか、五十嵐はソファアの横に立ち、俺を睨み付けてきていた。

いや、まあ……さっきがさっきなんだから、これも当然か。

「まさか君から来てくれるなんて、意外だよ」

王様気取りで椅子に座っていた男子生徒が立ち上がった。

他が全員、校則通りの優等生様としか言いようのない格好をしているというのに、そいっだけは巻き毛がかった髪を脱色し、ネクタイを外してある襟元には銀のチェーンをぶら下げている。よく見ると、左右の手には無数のシルバーアクセサリを付けている。

「さあ、どうぞ中へ。歓迎するよ」

「遠慮する」

俺は廊下に立ったまま、両腕を組んだ。

「別にあんたらのお仲間になるつもりで来たんだじゃない。釘を刺しに来ただけだ」

「困るなあ……この部屋はエアコンが入ってるんだ。開けっ放しにされると、熱気が入り込むだろ? 僕は……」

偉そうなシルバーアクセサリーの男子は軽く髪をかきあげた。

「こう見えても暑いのが苦手なんだ」

なんだそりゃ——と思ったが、電気を無駄に浪費するわけにもいかない。俺は渋々だったが部室の中に入り、後ろ手にドアを閉じた。ドアを開けてくれた女子は、少し狼狽えた様子で横に立ったまままだだったが、俺は構わず、話を続けさせてもらうことにした。

「見たところ、あんたが噂の新しい部長様でいいのか？」

「ああ、そうだよ。僕は南原輝彦^{なんばら・てるひこ}。それでも2年生だよ。先輩に対する礼節ぐらいは守ってもらえるかな？」

「先輩を自認するなら、後輩の躰ぐらいちゃんとしたらどうだ？」

俺はチラッと五十嵐を見た。

「おまえ——！」

五十嵐が激昂しかけるが、南原と名乗った部長様が、バツと手を横に出し、制した。

「躰と言ったね？ どういう意味かな？」

「初対面同然の相手を見るなり、鼻で笑い飛ばして人を小馬鹿にする、という意味だな」

俺は右手を腰に当てつつ、小さく笑った。

「あれで電算部^{えんさんぶ}の第一印象、最悪になった。そういうことだ」

「なるほど……礼に欠けたことは謝罪するよ」

「部長！」

五十嵐が抗議の声をあげるが、部長様が目を向けると、五十嵐は畏まった。

「席に戻りたまえ」

「で、でも……」

「いいから戻るんだ。ああ、新島^{にいじま}くん。椅子の用意を。他も左右に分かれてくれ。僕は彼と話がしたいんだ」

するとパイプ椅子に座っていた6人は、ガタガタと椅子を持ちながら左右に分かれた。ちょうど壁を背にしながら椅子に座る形になったのだ。さらにドアを開けてくれた女子生徒が新しいパイプ椅子

を、ソファーと対面する位置に置いた。

「あの……どうぞ………」

「……ったく」

俺はガリガリと頭をかきつつ、その椅子にドカッと腰を降ろした。五十嵐と新島も左右に分かれた部員に混じる。部長様もソファーに座り、これで俺と部長様が対面する形が整った。

「さて……」

部長様は足を組みつつ、優雅に微笑んだ。

「第一印象が最悪だと言ったね？ それなのに、どうしてここを訪れたのかな？」

「言ったら。釘を刺しに来ただけだって」

俺は大きく股を開いた両膝のうえに、身を乗り出すように肘をおきつつ部長様を睨んだ。

「物わかりが悪そうだから、ハッキリ言ってやる。第1に、俺はP Vのテスターだってバレることで起きる、余計な騒動に巻き込まれたくない。第2に、案の定、バレた結果として事件に巻き込まれた。第3に、俺はあんたらと人種が違う。どこかの馬鹿が、選ばれた人間がどのと言ったが……そんなもん、興味の欠片もない。よって、今後、^{オフ}実在現実だろうと^{オン}仮想現実だろうと、俺に関わろうっていうなら相応の対応をさせてもらう。以上だ」

「なるほど」

部長様は余裕げに微笑んだ。

「さすがは《青》のSHIN……と言ったところかな？」
静寂。

最初、俺はなにも反応できなかった。

「やはりね」

部長様は楽しげに笑みを浮かべた。

「君のクラスメートは気付かなかったようだけど、僕らにはすぐわかったよ。でも、それも当然だね。なんだったかな……そうだ。“おまえはシンだ”、だったね。POのことを知らなければ、生き死にの意味で、“おまえは死んだ”と叫んでいたように聞こえたかもしれない。でも……」

部長様は左手を無造作にあげた。

五十嵐が大急ぎでホワイトボードに張られていた紙を取り、部長様に渡した。

「これを見ていたからね。ピンときたよ」

部長様が手にしているのは、大山の時にも突き出された、例の外装顔写真だ。

「決定打は君の名前だよ、久賀慎一くん」

「……なんのことだ？」

俺は目を細めながら部長様を睨み付けた。

「とぼけることないだろう？」

部長様は、俺（SHIN）の外装顔写真がプリントされた紙をヒラヒラとさせながらいやらしい笑みを顔に浮かべていた。

「それにしても迂闊なことをしたね。これじゃあ、ネットで実名と顔をさらしてるようなものじゃないか」

「……ったく」

俺はガリガリと頭をかきつつ、体を起こし、背もたれに寄り掛かった。

「だったらどうする」

「おっ、やっと白状してくれるのかな？」

「言っとくが、これで電算部の人間全員が、要注意人物になったん

だからな」

俺は機先を制し、新たな釘を刺しておいた。

「大山の件でわかってんだろ？ 下手なことしたら、一生を棒にふることになるってことぐらい。言っとくが、自分たちならうまくやれるなんて、そんな勘違いだけはやめとけ。今の時代、高校生レベルで可能な欺瞞工作なんて、プロの手にかかれれば全部モロバレだ。だいたい、個人情報の意図的な漏洩、1000万円単位の賠償金になる時代だぞ。もちろん、部内の誰かがそんなことをしてかしたら、部員全員が連帯責任ってことになる。俺がそう証言するからな。被害者の証言ってやつは、こういう時、物証以上の効果を持つてんだ。知ってたか？」

ちなみに俺は知らなかった。今の話は、全部、親父からの受け売りだ。大山の一件がなければ、俺も知らないまま生きていったかもしれない。

「饒舌じょうぜつだね」

部長様は——いや、もう南原と呼ぼう——は、余裕綽々（しゃくしゃく）に微笑んでいた。

「どうやら君は交渉のイロハを知らないようだね。ああ、だから戦闘狂なのかな？ 《青》での君の評判、あまり良くないらしいね」

「へえ……あんたの陣営でも俺のこと、話題になってんのか？」

「そりゃあね。君のせいで《青》のコミュニティは崩壊寸前だって話じゃないか」

「なるほど。あんた、《緑》か」

カマをかけてみた。特に根拠は無い。なんとなく、連帯感みたいなものを重視しているように思えた、というだけのことだ。それなら《赤》より《緑》だろう。さあ、どうだ？

「驚いたな……」

的中らしい。

「名乗りぐらいあげろよ」

俺はふんぞりかえりながら、南原をジッと見つめた。

「陣営対抗で出会ったら、手加減のひとつぐらいしてやる」

ひとつだけな——と心の中でつぶやいたのは秘密だ。

「ふむ……まあ、いいだろう。五十嵐くん、新島くん。立ちなさい」

あの五十嵐とドアを開けてくれた女子、さらに南原自身が立ちあがった。

「改めて自己紹介といこうか。まず彼は1年A組の五十嵐誠美くん。いがらし・まさみ外装名はSUSANO-OH。スサノオ彼女は1年A組の新島朋美くん。にいじま・ともみ外装名はTUKUYOMI。ツクヨミそして僕、2年A組の南原輝彦。なんばら・てるひこ外装名は——」

南原は笑った。

「——AMATERAS。《緑》の三貴神さ」
アマテラス

・ ・ ・ ・ ・

はい？

いや、なんていうか。

まあ……世の中には“中二病”ちゅううにと呼ばれるものがある。思春期のガキが抱きやすい特徴的な妄想癖、または特徴的なセンスのことだ。俺の人間嫌いも中二病の一種だから、他人のことをどうこう言う資格は無いだろうが……。

「こんな……近くに………」

俺は額を抑えながら、ガツクリと項垂れていた。

神様の名前を外装名アバターネームにするのは、まあ、いい。パツと思いつく架空の名前なんて、神話を含めた“それまで見知った物語”から引張ってくるのが普通だっていうし。

ただ……それを誇らしげに宣言するのはどうだ？

あまつさえ、“《緑》の三貴神”なんて自分から言い出すか？

そりゃあ、俺たちも“SL”エスエルって呼ばれているが、こっちはネットエスエルで自然発生した通称だ。間違っても自分から名乗っているわけではない。

というかさ。

いったい俺の周りで何がおきてるんだ？　なんでこうもマンガ的な展開ばかり起きるんだ？　ここ、実在現実オフだよな？　仮想現実オンじゃないよな？

「まったく……残念だよ」

南原——いや、もう、部長様に戻す——は、両手で2人のテストーを左右に呼びつけながら、なぜか勝ち誇った笑みを浮かべていた。「最初からテストーであることを明かしていれば、僕らの仲間になれたかもしれないのに」

遠慮する。

誠心誠意、御免被らせてもらう。

そんな俺の心境などお構いなしに、部長様はさらに語り続けた。

「そうだな……君だったら、“タケミカヅチ”か“ホノカグヅチ”になれただろうに。本当に残念だよ」

「部長っ！」と部員のひとりが立ち上がる。「タケミカヅチは僕の名前じゃ……」

「落ち着きたまえ」

部長様は芝居っ気たっぷりに手で制した。

「たとえば、という仮定の話だよ。そもそも彼はもう、僕たちとは違う陣営にいるんだ。僕たち『AMATU』アマツの一員にはなれないんだよ。まったく……これでは、いくらRSN指数が高かろうと、“ウィザード”になるのは不可能だろうね」

んっ？ R S N 指数？ ウィザード？？？

「やっぱりね」

俺が不可解そうに顔をあげると、部長様は待ってましたとばかりに鼻で笑った。

「君は本当に何も知らないようだね……ああ、なるほど。だから僕たちのことも理解できないのか」

「……なんのことだ？」

「君は P V を、なんだと思ってる？」
不意打ちの質問だ。

「なについて…… P V は P V だろ」

すると部長様の隣りにいる五十嵐が、あからさまな嘲りの笑みを浮かべた。

「はんっ、やっぱり馬鹿はそっちなんだな。そんなことも知らないなんて」

「仕方ないさ」

部長様は五十嵐の肩をポンと叩く。

「彼の御両親は医者じゃないからね。一般応募枠のテスターだと、選考基準がなんだったのかさえ、知らないのが普通なんだ」

「選考基準？」

俺は即座に尋ね返した。

「そう、基準があるんだよ」

部長様はニヤニヤと笑いながら得意げに答えた。

「P V がアンデルフィアⅡローカル現象を利用し、脳神経系の情報で欺瞞していることは、君でも知っているだろ？ ただ、システムとの共感率は、子供でも最大 70%、成人すると 40% にまで落ち込んでしまう。技術が進歩したおかげで、今は 20% 以上あれば、誰でもログインできるところまで来ているんけどね。そこまではわかるかな？」

「……ああ」

実はチンプンカンプンだったが、適当に相づちをうっておいた。

「本題はここからだよ」

部長様は2人のテストをソファアの左右に残し、俺のほうへと歩き出した。

「臨床試験を繰り返した結果、稀に90%以上の共感率を出す人間もいることがわかった。P Vの操作性は共感率と比例するから、当然、そうした人間のほうがうまくP Vをオペレーションできる。研究者たちは、そうした人間を“柔軟な脳神経系”ラバー・シナプス・ネットワークを持つていると表現。さらに、何度もログインを繰り返していくことで、人は誰でもある程度の“柔軟な脳神経系”ラバー・シナプス・ネットワークを構築できることも解明された」

「つまり……」

俺は一瞬だけ床を見つめ、目の前に立った部長様を見上げた。

「R N S指数ってやつは、その、“柔軟な脳神経系”ラバー・シナプス・ネットワークの度合いの強さってことか」

「ご名答。でも、話はまだ続くんだよ」

部長様は両手を腰にあて、俺を見下しながら語り続けた。

「ところで君、脳がどういうふう^にに形作られるか、最新の学説を知ってるかい？」

「いや」

「だろうね。じゃあ、教えてあげるよ。人間の脳は3つの段階を経て完成する。まず最初が受精時。すなわち、遺伝的要因だ。次が胎児期。脳がカリフラワームたいな形をしているのは、この頃に起きる熱対流による羊水の動きと関係しているんだ。胎教として音楽を聴かせると発育がいいなんて俗説も、f分の1の揺らぎを持つクラシックの振動が、羊水に理想的な振動を与えることで、脳神経系の発達を促進するからなんだ」

偉そうに言っているが、多分、何かの受け売りだろう。

しかも、どれも仮説の域を出ていないはずだ。

だいたい、脳の発展段階なんてものが解明されていたら、それを利用した医療だとか何だとか、そういうものが話題になったはずだ。「最後の3つ目は幼児期」

部長様は偉そうに講釈を続けた。

「人間の脳は成人するまで成長していく……とはいえ、そのほとんどは生後40ヶ月未満のうちにできあがってしまうんだ。“3つ子の魂、100まで”なんて言葉もあるけど、昔の人は経験則として、そうであることを知っていたんだろうね」

「それで？」

「もちろん、完成といっても固定化するわけじゃない。なにしろ脳には、自ら神経網を再構築する力がある。例えば右腕を失うと、右腕の知覚や運動を担っていた脳細胞は死滅していくけど、これで空いた脳の隙間には、周辺の脳細胞がニューロン回路を張り巡らせていく。その結果、別の部位に触れるだけで、あたかも失った右腕があるかのような錯覚を抱く場合がある。幻肢と言われるものだよ。知ってるかい？」

「TVで見た」

ような気がする。よく覚えていないが。

「じゃあ、話は早いね」

部長様はクルッと背を向け、ソファアーに戻っていった。

こいつ……いったい、なにをしたいんだ？

「つまり、何度もログインすることでRSN指数が上昇するという臨床データは、脳の再構築がもたらしたものだと言えるわけだよ。しかし、これには限界がある。まだ臨床例が不充分だけど、こうして伸ばせる共感率は、いっても＋10%ぐらいにすぎない。ところが……」

部長様はボフツと1人用のソファアーに座った。

「生まれつき高いRNS指数を誇る人間もいる。一種の才能だよ。絶対音感なんかと同じ種類の才能だね。持っている者は持っているけど、持っていない者はどんなに努力しようと絶対手に入らない。研究者たちは、そうした生まれつきの天才たちを“妖精^{エルフ}”と呼んでいる」

「……エル、フ？」

おい、待て。まさかP Vの研究者も中二病なのか？

「そう、エルフだよ。今のところ日本人なら10人に1人がエルフだろうと試算されているんだ」

「10人に1人……」

ということは、1年B組にも最低4人はいるってことか。
うちのクラス

「そう、10人に1人だよ。でもね」

部長様はいやらしい笑みを浮かべた。

「そこからさらに共感率を高めるには、特別な訓練が必要なんだ。特に共感率100%以上を叩き出せる“魔術師”ウィザードと呼ばれるユーザーになれるのは、エルフの中でも特別な訓練を受けた者だけなんだよ」

「待った」

俺は手を出し、部長様を制した。

えっと……今の話を総合すると……んっ？ 待て待て待て。まさか……

「これって……選考基準の話だったよな」

「まだわからないのかい？」

部長様は足を組みながら悠然と微笑んだ。

「VRN社はクローズドβテストを成功させるために、遺伝的エルフの若者を選んだんだ。つまり君も、僕も、五十嵐くんも、新島くんも、VRN社お墨付きのエルフなんだよ」

なんだそりゃ。

つまりあれか？ P Vに適合しやすい応募者を優先的に選んだってことか？

「でも、残念だよ」

部長様は同情の眼差しを向けてきた。

「僕たちの仲間になれば、ウィザードになるトレーニングも積めたはずなのに……本当に残念だよ」

「謝るなら今のうちだぞ」

五十嵐がここぞとばかりにニヤニヤと笑ってきた。

「ここで土下座すれば、部長も許してくれる——そうですね？」
「そうだねえ。僕もそこまで鬼じゃないよ」
直後、他の部員たちもニヤニヤと笑い出した。

まるで俺の土下座が確定事項であるかのように、それを待っているといった感じだ。

例外は新島とかいう女子生徒だけ。彼女はさっきから、足下をずっと見つめていて、今も俺のことをまったく見ようとしない。内気なだけなのか、それとも俺に興味が無いのか、判断に苦しむところだ。

「……じゃあ、あれか」

俺はガリガリと頭をかいた。

「ここで俺が断れば、俺は一生、おまえらとの縁が切れて、ウィザードになるトレーニングとやらを知る機会もない……そういうことか？」

「その通り」と部長様。

「ほら、さっさと謝れよ」と五十嵐。

俺は溜め息をついた。

「わかった」

俺は立ち上がった。

そして。

「じゃ、二度と俺に関わるな。いいな。忠告したぞ」

俺はそう宣言しながら、半袖Yシャツの胸ポケットに入れていたものを取り出した。

皆がキョトンとする。部長様や五十嵐も、意味が分からないとばかりに目を細め、俺の取り出したものを見ていた。だが、部員のひとりだけが正体に気付き、声を張り上げた。

「あっ——ICレコーダー!？」

「正解っ」

俺はスラックスの後ろポケットに突っ込んでいた携帯電話を取り出すと、時刻表示を見ながら、親父から“念のために”と渡されて

いたICレコーダーに向かって語りかけた。

「以上、今日は7月21日、土曜日。時刻は午後2時57分。録音終了」

絶句する一同の前で、俺は停止ボタンをピッと押した。

「教えとく。俺がここに来てるってこと、うちの担任に話してある。つまりこれから先、俺になにかあった場合、真っ先に疑われるのは、ここにいるおまえら全員ってことだ。トレーニングか何か知らんが、勝手にやってろ。とにかく、俺に関わるな。じゃあな」

俺は絶句する部長様方御一行に背を向け、強い疲労感を抱きながら部室を出て行った。

文系魔境の廊下を歩きつつ、とりあえず携帯電話である人物にメールを送ってみる。

図書館1階に降りると、その人物から電話がかかってきた。

「もしもし、市長か？」

〈君はトラブルホイホイですね〉

電話の相手は蒼都市長セイリウこと森下健司だ。

――市長へ　トラブル発生　至急連絡乞う　SHIN

そんなメールをダメもとでユーザーサポートに投げてみたのだが、意外なほど早く対応してくれたわけだ。

「有名税がどうのとか言ったの、どこのどいつだ？」

〈それを言われると弱いですね……それより、今度はなんですか？〉

「うちの高校にいるテスターが接触してきた。ただ、どうもまともじゃない。“柔軟な脳神経系”ラバー・シナプス・ネットワークがどうのとか、エルフがどうのとか、

ウィザードがどうのとか。思い当たることは？」

市長はしばらく黙り込んだ。

「あるんだな？」

俺は念を押した。

溜め息が聞こえてきた。

〈その前に、あなたに接触してきたというユーザーの本名か外装名、わかりますか？〉

「アマテラスとツクヨミとスサノオ。陣営は《緑》」

「ちよっと待ってください……」

俺はその間に、ポケットからインカムを取り出し、ブルートウース送受信端子を携帯電話のソケットに差し込んだ。付けるとちょうど、インカムから市長の声が聞こえてきた。

「なるほど、そっち方面ですか」

「どっち方面だ？」

「医療方面です」

市長は溜め息まじりといった様子で、包み隠さず答えてくれた。

「PVは医療利用から生まれた技術なんですが、その時に協力してくれた病院が日本各地にあるんです。北海道では札幌と函館で……以前、教えたことありませんでしたか？」

「さあ。それより、話からすると連中の親が？」

「ええ、親族が協賛病院の関係者です。確認しますが、^{アマテラス}AMATERASこと南原輝彦、^{ツクヨミ}TUKUYOMIこと新島朋美、^{スサノオ}SUSANO-OHこと五十嵐誠美……この3名のことですよね？」

「ああ、間違いない」

「いずれも函館班の御家族が推薦する形で、特別選考枠からテスト1になっています」

「なるほど」

俺は本校舎に戻りつつ、溜め息交じりに告げてみた。

「連中、ちよっとやばいぞ」

「具体的には？」

「選民思想。自分たちはエルフとかいうやつで、特別なトレーニング方法を知っているから、いずれウィザードとかいうものになれるって信じ切ってる。なんか、新興宗教の集会に紛れ込んだ感じだった」

市長の溜め息が聞こえてきた。

「いずれそういうユーザーが出てくるとは思っていましたが……」

「じゃあ、連中の言ったこと、本当なのか？」

「へなにを言われました？」

「ちょっと待ってくれ」

俺はある部屋の前で立ち止まった。表札に“社会科資料室”と書かれている部屋だ。

ノックを3回。

「はい、開いてるよお」

中からワカさんの声が聞こえた。

「久賀です。失礼します」

型どおりの言葉を口にしながら社会科資料室に入った俺は、後ろ手に引き戸を閉めながら、雑然した部屋の奥で振り返ってきたワカさんをお願いした。

「ワカさん、悪い。ハンズフリーになる電話、ここにある？」



約30分後——学内LAN経由のIPフォンで市長とつながってもらったまま、俺は電算部の部室で録音したものを、すべてワカさんと市長に聞いて貰った。

「以上、今日は7月21日、土曜日。時刻は午後2時57分。録音終了」

俺のその言葉を最後に、音声は途絶えた。

ワカさんと市長が同時に溜め息をついた。

「なんと言えいいのか……」

「先生、申し訳ありません。やはりPVのせいとしか……」

「いえ、ここまで歪む前に指導することもできたはずです」

その後もワカさんと市長は謝罪合戦を繰り返した。

一方の俺は——ぐったりと椅子に座り込み、脱力している。あの会話、2度も聞くと、かなり来るものがあるのだ。

当事者だからだろう。こんなマンガみたいな連中がリアルに実在し、しかも間近にいるというのは……やはりショックというか、なにそれというか。

（ああ……またモノが増えてんなあ）

俺は室内を見渡すことで軽く現実逃避してみた。

社会科資料室は理科準備室の隣りにあるホームルーム半分程の物置部屋だ。広さという意味では文系魔境の部室と同じだが、こちらにはスチール棚が所狭しと並べられ、そこに様々な段ボール箱や何やらが積み上げられている。

ただ、荷物の半分以上はワカさんの私物だ。

こう見えてもワカさんは、いわゆる縄文・弥生時代の研究者として、その筋では名の通っている人物だったりする。専門はアイヌ民族成立以前の北海道における遺物の研究。記紀に語られる蝦夷えみしの実体解明が最終目標なのだと前に言っていた。それもあって、休みともなると北海道や東北の各地に自費で出向いたり、いろいろな学会に参加しているそうだ。

学校選別時代と言われる昨今、こうした特色のある教師を抱えていれば、それだけで学校としての売りになる——ということで、社会科資料室の私物化を、学校側は黙認しているのだが、これを快く思わない教師もいる。筆頭は、俺を罵倒しまくった学年主任の糞野郎。ちなみに生徒の間では、ワカさんの若禿げは奴のせいだともっぱらの噂だ。

「しかし電算部とは……よりにもよってというか……」

ワカさんは溜め息をついていた。

へなにかあるのですか？

「ええ……身内の恥をさらすようで恐縮ですが、顧問が少し頑固な人で……」

「まさか」

思わず俺がそうつぶやくと、ワカさんは苦笑まじりに頷き返してきた。

やっぱり、あの糞野郎か。

1年の学年主任して古文を担当する増岡祐三――おそらく、うちの学校で一番嫌われている教師だ。それも生徒だけではなく、同僚の教師からも。

へでは……学校側としては、手のうちようが無いのですか？

市長が苦々しげに尋ねてきた。

ワカさんが社会科資料室に持ち込んでいるノートパソコンでは、IPヴィジフォン用ソフトを立ち上げるのはキツかったため、IPフォン用ソフト『SCOP』を使つての会話という形になっているが、それでも市長の苦々しげが顔が見えそうだ……あつ、いや、あれは外装か。そういえばリアル顔は見たことないから、思い浮かばないな。

「いえ、この録音を使えば、どうにかなるかもしれません」

ワカさんはノートパソコンのUSB端子から伸びるマイクに語りかけた。

「まず校長に相談します。久賀の件もあって、PVに関する問題は相談しやすい立場にあるのは不幸中の幸いというべきか……」

へお願いします

市長は即座に嘆願してきた。

へエルフやウィザード……“柔軟な脳神経系”の件にしても、まだ

仮説の段階ですし、名称にいたっては研究スタッフのジョークとい
いますか、暗号名といえますか……

「市長」と俺。「仮説でもいいから、発表したらどうだ？」

へ“柔軟な脳神経系”の件を？

ラバー・シナプス・ネットワーク

「そのほうがいろいろと手っ取り早いかもしれないってことだよ。あと、会社の見解として、素養の優劣による差別や偏見は許さないとか……そういうこと、先に出しておけばいいんじゃないのか？」

へ逆に才能差別が助長される可能性がありますよ？

「そうか？」

「そうですね」とワカさん。「決して褒められないことだとわ

かっけていても、学歴や出自による差別はありますからね……」

「だったら尚更だろ」

俺は腕を組みつつ憤慨した。

「だいたい隠してどうすんだ？　もう電算部の連中は“柔軟な脳神ラバー・シナプス・ネットワーク”のこと、知ってんだぞ？」

2人の大人は黙り込んだ。

まあ……責任が一切無い俺とは置かれている立場が違うからだろう。俺だって、これがなんとなくやばい問題だと思ったからこそ、こうしてワカさんと市長に話をもっていったのだ。

「とにかく」

俺は立ち上がった。

「あとのことは大人に任せる」

へええ、そうしてください」

市長が苦笑交じりに答えてきた。

へじゃあ、先生。ご面倒だとは思いますが、まずICレコーダーの音声データ、認証付きメールで転送していただけませんか？　やり方は私の方でお教えしますのです」

「あ、はい。でしたら職員室に移動します」

「先生」と俺。「そのICレコーダー、親父のだから、あとで断りの電話とか入れといってくれないか。そうしたら、そのまま預けておけるから」

「わかった。久賀、気を付けて帰るんだぞ」

「言われなくても」

俺は手をあげつつ、社会科資料室を出て行った。

そして少し離れたところで、ふう、と溜め息をつく。

「というわけだ」

へまったくもお……あんたって、ホントにトラブルホイホイなんじゃないの？」

付けっぱなしにしているインカムからリンの声が響いてくる。

市長との電話を切った直後から、俺はそれとなくリンにメールを

送り、黙って今の話を聞いてもらっていたのだ。どうせこいつにはあとで話すことになるだろうし、だったら話し合いを聞いてもらったほうが早いと思ったのだ。

それにしても、リンも暇な奴だ。

たまに予定が入っている場合もあるが、俺が連絡すると、まず間違いない時間に余裕があり、話に付き合ってくれるのだ。かといって、家に閉じこもっているわけでもないらしい。少なくとも昨日の昼間は、友達と遊びに出掛けていたようだし。

「俺の責任かよ」

「あんた、まだ学校よね？ 家に付くまでどれくらいかかる？」

「んっ？ なんでだ？」

「言ってなかった？ わたし、新宿のマックにいるの。昼過ぎまで友達と遊んでたから」

「ああ……もしかしてタイミング、悪かったか？」

「逆よ。ちょうど別れたところであんたの電話があったってわけ。これから帰るんだけど、ちょっと寄るところもあるから1時間ぐらいかかる……かな？」

「了解。帰ったらそっちから“SCOPで連絡（掘る）”ってことにするか？」

「OK。じゃあ、あとで」

電話が切れた。

俺はインカムを外し、教室に鞆を取りに戻ったうえで、生徒玄関に向かった。

靴を履き替え、外に出る。

ジリジリとした真夏の日差しが肌に突き刺さった。

「あつーっ」

それほど蒸さないものの、あまりにも強い日差しに、全身が一気に汗ばんできた。

校庭では運動部の連中が汗を流していた。

空はどこまでも青い。

白い雲はハッキリとした輪郭を持ちながら、ゆったりと漂っている。

(……んっ?)

校庭を横切りつつ校門へと向かう途中、校門横の自転車置き場に2、3人の女子生徒の姿を見付けた。いつもなら無視するところだが、いずれもどこかで見たことのある女子だったせいで、なんとなく気になった。

(あれ……?)

ひとりは髪をベリーショートにした細身で長身の女子。

ひとりはパーマのかかった髪を束ね上げている眼鏡の女子。

ひとりはおかっぱ頭の小柄な女子。

3人とも見覚えがあったが、特に最後のおかっぱ頭とは、どこかで会った記憶が……って、それもそうか。あの女子、俺の隣の席の女子だ。名前は……名前は……ええっと……まあ、あれだ。とにかくにも、クラスメートということだ。

(ああ、そういえば連中も特別追試組か)

他の2人もクラスメートだ。名前はど忘れしているというか、最初から覚えていないというか……まあ、思い出せないわけだが、それでもクラスメートであることに代わりはない。つまり連中も試験結果を返してもらったあと、何かの用事があって学校に居残り、今

し方、帰ろうとしているところらしい。

校門に近づいていくと、向こうも俺の存在に気付いたようだ。
何かを言いあっている。

どこことなく、パーマ頭が喋り、おかっぱ頭を困り、坊主頭が呆れる、という構図に見える。多分、それがこの3人の力関係なんだろう。俺にはどうでもいいことだが。

「あ、あのっ！」

突然、声をかけられた。

それも後ろから。

しかも、声は女子のものだった。

「んっ？」

背後から不意打ち受けることが多いな——と思いながら振り返ると、そこには三つ編みお下げの真面目そうな女子が立っていた。

電算部にいたテストターのひとりだ。

名前は確か……新島なんとか？ よく覚えていないが、そんな感じのヤツだ。

「ったく……」

俺はガリガリと頭をかきつつ振り返った。

「忠告したはずだぞ。俺に関わるなって——」

「違うんですっ！」

彼女は必死な様子で声をあげた。どこことなく周囲を気にするように怯えているようにも見える。ふと気付くと、生徒玄関から男子生徒の集団が出てきた。部長様を始めとする電算部の連中だ。

「ったく、まだ懲りないのか……」

俺が呆れていると、彼女は慌てて振り返り——硬直した。
首を傾げるしかない。なんでそんなに驚いてるんだ？

「新島くん……」

部長様が他の連中を引きつれ、こっちに近づいてくる。

「彼のことは放っておけと言ったはずだぞ？ それよりこれから——」

「私、電算部辞めますっ！」

突然、彼女は声を張り上げた。

俺を含め、全員がギョツとした。運動部の連中も、何かとこっちを見ている。

彼女は俺に向き直り、涙目で見上げてきた。

「あのっ！ 相談に、のってくれませんか!？」

俺は溜め息をつき、空を見上げてみた。

空はどこまでも青い。

白い雲はハッキリとした輪郭を持ちながら、ゆったりと漂っている。

そっかあ……俺って、トラブルホイホイかあ……。

今年の夏は、本当に暑そうだなあ……。

「……ふん、負け犬が」

五十嵐が吐き捨てるようにつぶやいた。

部長様も同様だ。

「辞めたければ辞めればいい。ただし、秘密をバラせば……」

「秘密もクソも無いだろ」

俺はガリガリと頭をかきつつ、呆れ顔で割り込んだ。

「だいたい、そういう情報は社外秘のはずだぞ。それともなにか？

おまえらを推薦した協賛病院の関係者……だったな？ そいつら

が機密漏洩したってこと、本社にバレてもかまわないのか？」

これには部長様がギョツとした。

他の連中は、意味が分からないとばかりに部長様を見ている。五

十嵐もそうだ。

「……なるほど」

俺は携帯電話を取り出し、ブルートゥース送受信端子を外したうえで、着信履歴に残っている番号へ電話をかけてみた。

コール3回。

〈はい、VRNコンテンツ事業部です〉

見知らぬ女性の声が聞こえてきた。

「たびたびすみません。久賀慎一という者ですが、ファンタジア・オンライン・マネージメントチームの森下さんをお願いできますか？」

「へどのようなご用件でしょうか？」

「先ほどお知らせしたトラブルに関連してお伝えしたいことと、ご相談したいことができました。取り次ぎ、お願いできませんか？」

「少々お待ち下さい」

保留音が響く。

部長様は絶句していた。他の部員もそうだ。新島も俺のことを驚きの目で見上げている。

保留音が途切れた。

「今度はなんだい？」

「トラブルホイホイにまた1匹。ところで、ウィザードになるためのトレーニングメニューって、なんだ？」

「フィジカルトレーニングとしてはヨガ、メンタルトレーニングとしては禅が最適だろうって仮説がある程度だよ」

「ヨガと禅か……ありがちな」

「あとはログイン中の思考操作についてだね。これについては、君の方が詳しいんじゃないかな？」

「思考操作？ ああ、あれね。確かに訓練が必要だな、あれは」

ヴォイスコマンド

モーションコマンド

PVの操作体系は音声操作と動作操作をベースにしている。だが、声を出すという行為にしろ、体を動かすという行為にしろ、実体が存在しないPVでは、結局のところ、思考を感知していると言える。つまり、理論的にはすべてのことを思考操作で肩代わりできると言うわけだ。

俺とリンは、ガンタイプのトレーニングを積んでいる時、弾倉を手早く取り出すためにこれを会得しようとかかなり苦労した。さらにスタッフタイプでは、いろいろと試行錯誤も繰り返した。

トリガー

その結果、思考をクリアにする引き金となる何かがあれば、意外とできることに気が付いた。とはいえ、問題は何をトリガーにする

のか、というところなのだが……

いや、今はそれどころではない。

「ちなみに聞くんだが……俺って、ウィザードなのか？」

「まさか」

市長は即答した。

「君たちがエルフであることは間違いないけどね。それでも最初の共感率は78%、現在は最大86、最小81、平均83。リンくんは初期79、今は最大85、最小80、平均82。ウィザードは100%を越えるユーザーのことだから、君はまだまだだよ」

「へえ……試練場のあと、妙に外装が動くようになったけど、そのあたりは？」

「なんだ、気付いていたのかい？ うん、そうだね。あのあたりから、君もリンくんもコンスタンスに80越えができるようになってるよ。もつとも、共感率だけで言えば、君たち以上のユーザーはたくさんいるんだ。だからこそ、君たちの強さは別格だなあと呆れているんだけどね」

「じゃあ、アマテラスの共感率は？」

「それは個人情報に関わることだから答えられないね」

「いいだろ、教えてくれたって」

「……それが新しいトラブルかい？」

「新しいもなにも……」

俺は驚いたままの新島を見下ろした。

「例の3人のうち、ツクヨミのプレイヤーが電算部を辞めるって言うてきた上に、相談に乗って欲しいって、押しかけてきてる。で、アマテラスとスサノオは、辞めるなら辞めろ、だが秘密をばらせばごによごによ、なんて言ってる。そんなとこだ」

見ると五十嵐が俺に食ってかかろうとしていたが、部長様が、異様なほど冷静に五十嵐を止め、冷ややかな目で俺を見つめてきていた。

俺はその眼差しを苦笑で受け止めつつ、電話越しに市長に報告し

た。

「ついでにアマテラスのプレイヤーに睨まれてる。現在進行形で」
「やれやれ……本当に君はトラブルホイホイですね」

「俺もそう思う」

ほんと、溜め息をつくしかない。

「そういうわけだから、トレーニングメニューの一般公開、マジで早めに頼めないか？」

「前向きに検討するよ」

「政治家みたいなこと言うなよ……」

「決定権は本社にあるからね。早くても、対応できるのは来週なんだ」

「だったらもうひとつ、頼みがある」

俺は、今になっても目をまん丸にして俺を見上げている新島を見下ろした。

「ツクヨミのプレイヤーが困ってる。で、相談に乗るにしても、俺はガキだから、できることなんざ、限られてる。いざとなったら、またあんたに相談していいか？」

「ええ、かまいません。トラブルシュートも私の職分ですからね」

「ありがとう。じゃ、また何かあったら——」

「ああ、待った待った。ところでトレーニングメニューの話、出所は？」

「アマテラス」

「ありがとうございます。こっちでも確かめてみます。じゃあ、また何かあったら」

「ああ。また」

俺は電話を切り、溜め息を漏らしつつ部長様に向き直った。

「あんたも馬鹿じゃないなら、わかるだろ。大山が起こした事件のせいで、俺はVRNのスタッフと、こうして相談できる立場にあるんだ」

「——ちっ」

部長様が舌打ちをした。

それまでの偉そうな態度から一転、どこかチンピラめいた印象すら漂わせている。

「行くぞっ！」

部長様はそう告げると、俺を避けるように通りすぎていった。部員たちは困惑しながらも、そんな部長様を追い掛けていく。ただひとりだけ、五十嵐だけは憎々しげに俺を睨み付けながら通り過ぎていった。

「つたく……」

校門を出て行く連中を見送った俺は、改めて振り返り、まだ呆然としている新島に声をかけた。

「とりあえずワカさん……っと、うちのクラスの担任な。日本史の知ってるか？」

「……あつ、はい。知ってます」

新島は緊張した様子で姿勢を正しつつ答えた。

俺は頷きつつ、携帯電話をポケットに戻した。

「じゃあ、ワカさんのところに行く。それでいいな」

「はいっ」

なにやら尊敬の眼差しを向けられている気もするが、俺はそのことを無視しながら、再び校舎へと戻っていった。

途中、背中に視線を感じて振り返ってみると、駐輪場にいたクラスメートの女子3人がこっちを見ていた。まあ……目の前であんなことがあったんだ。そりゃあ、見るよな。普通なら。

同日28時（翌午前4時）——蒼都地下17階。

「呆れた……下手したらその子、襲われてたかもしれないわけ？」
「らしい」

いろいろと行き違いがあり、結果的に定時（午前4時～午前7時）のログイン中に話すことになった俺とリンは、いつものように地下で戦いながら雑談に興じていた。

話題はもちろん、電算部の一件だ。

思い出すだけでも腹立たしい。

そもそも彼女は電算部の部員ではなかった。ただ、医師である母親からの勧めでテスターになり、友達の前でそのことをポロッと話したせいで、部長様に強い勧誘を受け、気が引けたものの断り切れず……という形で、連中の仲間入りを果たしていたそうだった。

最初は普通だったが、次第に部活動としてヨガや禅をやりはじめ、精神の解放だとか、選ばれた人間だとか……そんな調子で新興宗教的になっていくと、さすがの彼女も退部を考え始めた。

そして今月上旬あたりから、部長に迫られるようになった。

応えればさらなる秘密を明かすとか、セックスは副交感神経を活性化させるからウィザードを目指すなら必須だとか……それを新島は、家の厳しさを理由に断り続けていたそうだが、内容が内容のため、誰にも相談できず、困り果てていたらしい。

だが、ちょうど俺が立ち去ったあと、

——さあ、今日の本題を話し合おうか。夏合宿の件だよ。

部長様は電算部の合宿を行うことを突然発表。しかも場所が、部長様の親が所有する別荘であると語られた時、これに参加したら最後だ、と彼女は本気で怯えたそうだった。

その時に思い出したのが、部長様と真っ向から対峙した俺のことだった。

俺に相談すればなんとかなる——彼女はそう考え、実行した。

というわけで、校庭での一件になったという次第だ。

「それからどうしたの？」

「ワカさんのところで事情聴取。さすがに内容が内容だからな、話を聞き出すだけでも時間がかかった。で、気が付いたら夜だったんで、あとはワカさんが車で家まで送った。そんなところ」

「その子の親には？」

「まだ話してない。母子家庭らしいんだ、そいつの家。だからまあ、日を改めて、ワカさんのほうから話をするってことになってる。性的なところは伏せるらしいけど」

「なんでよ。そこが一番重要じゃない」

「俺に言うなよ。それにまあ……いろいろあるんだろ」

なんとなくだが、新島は母親に余計な心配をさせたくないのだと思う。母子家庭がどういうものか、俺には想像することしかできないが、電算部に残り続けたのも、部長様や五十嵐の親族が母親と同じ職場にいることを考えた結果だと思う。

「それより時間のほう、いいのか？」

「えっ？ あっ……」

リンはダブルタップし、ウィンドウを展開して時刻を確認した。

「あと30分とちょっと」

「だったら今から戻らないとマズイだろ」

「だね。じゃあ、方向転換っ。まわれーみぎっ！」

俺たちは場所がわかつている地下17階のアップパーボックスへと大急ぎで戻った。

明日は大型アップデート。午前7時から午前9時の定期メンテナンス

ンスが終了すれば、新フィールドも実装され、何もかもが大きく様変わりする。

中でも大きいのは、職人系アビリティの登場と、それに伴うドロップアイテムの縮小だ。実際にどうなるかは不明だが、ネット上では、職人系アビリティの意味を強めるためにも、ドロップアイテムの種類と数が減るだろうと予測されている。

さて問題。

今、ドロップオンリーアイテムを買うべきか、買わざるべきか？市場スレでは、意見が真っ二つに分かれている。

職人系アビリティの全容が不明なのだから、仕方のないところだろう。

ただ、アップデート直後から高品質のアイテムを作れる職人が現れるはずがない、というところでは皆の意見も一致していた。そのため蒼都の青空市場では、ドロップオンリーの貴重なアイテムが、とんでもない高値で取り引きされている。他都市では買え控えすら起きているが、市場系市民派が多い蒼都においては、転売目的の投資が相次ぎ、今や《シャークウェア》1着に20万（200K）もの値が付いている。おそらく蒼海騎士団が裏で暗躍しているのだろうが……ご苦労なこった。

というわけで、俺とリンは、限界ギリギリまで地下で戦いまくり、リミットタイム1時間前に蒼都へと帰還。これまで取り引きのある武装商人PTと接触し、安値でアイテムを売ることになっていた。

もちろん、俺が決めた話ではない。商談を任せているリンが取り決めたことだ。

今のところリンは、信頼できる3PTのリーダーにのみ、商談用のフリーメールアドレスを教えている。3PTに制限しているのは、それ以上になると、自分の手に負えなくなるためだ。そのあたりの基準、俺には正直サッパリなのだが、本人がそう言っているのだから、そういうものなのだろうと納得している。

そんなわけで……

「時間は？」

「バッチリ」

あれから約30分後——ウィンドウを展開させたまま、リングがアップボックスへと入っていった。直後、周囲が白い光に包まれていき、エレベーターが降る時のような軽い浮遊感があった。

次の瞬間、俺はボックスの中に立っていた。

目の前の鏡には“BLUE POLICE”、“CENTRAL CIRCLE”と表示されている。

俺は普段通りの装備——《シャークウェア》、《ショックシューズ》、《ハーフパンツ》、《ハーフレザージャケット》、《ガンベルト》に《バーストガン》、両腕両脚に《スケール・オブ・ブルードラゴン》——のままで外に出た。

濃密な潮の香りが漂ってくる。

函館にも海はあるが、それとは明らかに違う南国の潮風が頬を撫でていく。

俺はそれを胸いっぱい吸い込んだ。

気持ちいい。

夏の香りだが、ただ暑いだけの実在^{オフ}現実とは何か違う気がする。

「おい、あれって……」

「うわあ、SLだよ……」

「うそっ!？」

「ほれほら、SLが来てる! SLが!」

早朝ということもあり、人もまばらな蒼都の中央広場の方々からざわめきが起きていた。

「んーっ……んっ!」

見ると隣りのログインボックスから、背伸びをしつつ、俺と同じ冒険装備のままのリンが出てくるところだった。

「やっぱり外はいいよねえ。地下ってちょっと、圧迫感があるし」
「だな」

俺は苦笑しつつ、もう一度、蒼都の潮風を胸いっぱい吸い込んでみた。

「シンさん！ リンさん！ おはようございますっ！！」

ゲーム内時刻は間もなく夕方なのだが、实在現実の時刻ではまだ午前4時30分といったところだ。それもあって挨拶が“おはようございます”なのだろうが、駆け寄ってきたのが、まるで学芸会の登場人物のような甲冑姿の子供外装だったりするあたり、苦笑するしかない。

俺たちと最初取引をして武装商人PTのリーダー、ベルンだ。

「遅いじゃないの」

「おーっす、大将」

その後ろからガンマンスタイルの蛇頭人と、純和風な大鎧を身につけた巨漢のトカゲ人間が歩いてくる。いずれも俺たちと取引がある、武装商人PTのリーダーだ。もともと、蛇頭人のセリアとは面識があったものの、トカゲ武者とはこれが初対面だ。

「シン。ドランさんとは初めてじゃない？」

「ああ」

どうやらトカゲ武者は、ドランという名前らしい。

「オッスっ！ 初めてお目に掛かりますっ！」

トカゲ武者は俺の前に立つと、空手家のように、曲げた腕を左右に振りつつ、頭を下げてきた。

「拙者、『蒼都抜刀隊』なるPTを率いるDRANドランと申しますっ！」

「……あんたも演技系冒険派か」
ナリキリ

少し呆れながら俺が告げると、頭をあげたドランは、

「左様っ！」

と胸を張った。

「なに威張ってんだか」

同じ演技系冒険派のセリアは、両手を腰にあてつつ呆れている。
これには俺も、リンも、ベルンも、笑うしかなかった。

「まあ、いい。それより商談は相棒としてくれ」

「掘り出し物もあるわよ」

そこから先は商談タイムだ。場所はベルンたちが確保していた市場の片隅が使われた。俺は少し離れたところで壁に背を預けつつボンヤリとさせてもらったが、その間にも石畳に座り込んだリンは、次々とカードを広げ、ベルンたちとの商談を進めていった。

周囲にはベルンたち3PT18名だけが集まり、他は遠くから眺めている。

俺が目光らせているせいか、野次馬が近づいてくる気配も無い……いや、近づいてくる者がいた。

白いトーガに人の良さそうな糸目の青年外装——言わずと知れた蒼都市長セイリュウだ。

「いやあ、シンくん」

「よお。アップデート前の見回りか？」

「メンテに入るまで暇だね。少し、いいかな？」

「ああ」

俺は、商談を止め、俺たちのほうを見ているリンに目を向けた。

「あとは任せた」

「OK。あとで報告しなさいよ」

「わかってる」

俺は壁際を離れ、促すように歩き出した市長の横に並んだ。

さすがに市長がいるとあって、野次馬が近づいてくる気配はなかった。もっとも、早朝ということもあり、中央広場が閑散としているせいもあるだろうが。

「ツクヨミさんの件、先生から聞きました」
声を潜めながら市長が語り出した。

「まったくもって嘆かわしいというか……」

「あんたの責任なのか？」

「無関係とは言えません。その……これは社外秘にあたるので、内密に」

「相棒には話す」

「ええ、わかってます。ですから、彼女にも口外無用を」

「約束する」

俺は真顔でうなずいた。

市長もうなずく。

「そこに入りましょう」

市長が向かったのは、中央広場から中央通りに入ってすぐのところにあるレストランだった。別にP V内では食事を摂らなくともペナルティを受けないのだが、古今東西、美味しい料理は最高の娯楽とされている。そこで『PHANTASIA ONLINE』でも、こうした料理を食べられる店がデフォルトで設置されているのだ。

ただ、市長が向かったのはレストランの2階にある個室だった。

NPC店員は、何も言わず市長と俺をそこまで案内し、一礼の後、部屋を出て行った。

「彼女が尋ねてきた時だけ、通すように設定しておきました」

「……思考操作で？」

「ええ。ウィザードですから」

ログハウスの一室を思わせる質素な個室の中央、中華飯店にありそうな、台座が回る円形のテーブルに市長は腰掛け……んっ？

「ウィザード？ あんたが？」

「意外ですか？ さあ、軽く摘みながら話しましょう。なにがいいですか？」

「……えっ、あっ……えっと……マジで？」

「ええ、本当なんです。さあ、どうぞ」

「あっ……ども……」

俺は促されるまま、市長の隣りの席に腰を降ろした。

「なにがいいですか？ 最近入力したばかりの飲茶^{ヤムチャ}がオススメなんです
すが」

「なんでも」

「じゃあ、それにしましょう」

直後、テーブルにフワツと白い光体が出現し、次の瞬間には多種多様な中華料理がテーブルに並んでいた。

思考操作だ。

市長が思考操作で、これ呼び出したのだ。

「意外ですか？」

もう一度、市長は同じ言葉を投げかけてきた。

「そりゃあ……意外といえば意外だろ」

俺はマジマジと市長を見た。

「ウィザードってやつ、もっとすごいもんだと思うのが普通だろ。

それを……あんたがそうだって言われても……」

「こんな外装ですからね。もちろん、意図的にそうしてるわけですけど」

市長は苦笑した。

「VRNには、全部で11人のウィザードがいるんです。『PHANTASIA ONLINE』に関わっているのは、そのうち6人。私も、その1人です」

「へえ……」

「あと、社外にも4人いますから、確認されているウィザードは全部で15人ですね。ですから、珍しいといえば珍しいのも確かですが、しかし、だからといってどうというわけでもありません」

「それを連中は、さも特別なものとして崇めてたわけか……」

「特別といえば特別なですよ？」

「選民思想を抱けるぐらいに、か？」

「それは言い過ぎですね。聡い子供は、そういう妄想を抱きやすいものですが」

「俺も子供なんだが？」

「君は少し老成してますから」

「悪かったな、老けてて」

「まあまあ。それより食べましょう。なかなか美味しいですよ？」

実際、食べてみるとけっこう美味かった。悔しいことに。

しばらくすると、リンが姿を現した。

「おっどろいたあ……NPC^{マネキン}が話し掛けてくるんだもん。あつ、市長さん。御馳走になります♪」

「はい、どうぞ」

市長は思考操作で減ったメニューを全て新品に切り替えた。

リンは物怖じすることなく、俺の隣りに腰掛け、小皿に中華料理ととっていった。

「どうだった？」

「んっ？ トレードのこと？ バッチリ。問題なし」

リンがそう告げると、市長がコホンと咳払いをした。

「おふたりとも揃いましたから、昨日の顛末、ご説明します」

「なんだよ。リンのこと、待ってたのか？」

「どうせ話しますよね？ それなら、一度に済ませたほうがいいと思いますして」

なるほど。正しい判断だ。

「まず……《緑》の陣営に登録している外装名“AMATERAS^{アマテラス}”と、その推薦者である御尊父には、認証付きメールで厳重注意の文章を送りました。ただ、今のところ私のレベルで対応してあります。本社が動くと、シンくんが逆恨みされる可能性も出てきますから」

「それはどうも。で、仮説の発表は？」

「結論が出るのは週明けです。今は努力してみるとしか言いようが無いんです」

「あつ、そうだ」

リンが大急ぎでエビシューマイを飲み込み、俺越しに市長を見た。
「わたしとシンって、エルフなの？」

「ええ、テスターは全員エルフです。もっとも、初期共感率が70

%を越えていれば、そう呼んでもいいだろうっていう曖昧な基準に基づけば、という話ですよ？」

「でも、シンはウィザードじゃないんですよ？」

「はい。あなたもシンくんも、まだ共感率100%を超えていません。それなのにどうして、こうもうまく外装を操るのか……そっこのほうが不思議ですよ」

俺は苦笑した。

「トレーニングしまくったせいだろ？」

「やはりそう思いますか？」

逆に市長が尋ね返してきた。

リンを見ると、苦笑まじりにうなずいていた。相棒もまた、同感らしい。

「それ以外に考えられない。そりゃあ、俺たちがとんでもない天才だって可能性もあるけど……でも、なあ？」

「だよねえ」

そうは思えない。俺たちは今の強さを、1ヶ月近いトレーニングと、さらに1ヶ月ほど続けた実戦を通じて手にいれたもののはずだ。「なるほど。そうなる……」

市長は少し考え込み、改めて俺たちに目を向けてきた。

「これはまだ内定もしていない話なんですが……おふたりとも、一緒に筑波まで来てみませんか？」

「……えっ？」

「筑波に？」

俺たちは顔を見合わせた。

「公表は控えています、P.Vの研究中枢が筑波に置かれているんです。それに研究チームも、あなた方に興味を持っています……どうでしょう。経費はすべて、弊社が肩代わりします。1週間ほど、筑波で弊社のテストに協力していただませんか？」

「まあ……俺は別にいいけど……」

俺は相棒を見てみた。

「わたしも別にいいわよ。筑波なら、すぐ近くだし」

東京在住のリンは、軽い調子で、そう答えた。

「そうですか。良かった」

市長は嬉しそうに微笑んだ。

「もちろん、今後ともテスターとして遊べることは保証します。あ、それと、時期については、まだ未定です。できれば、おふたりが長く休める間に済ませておきたいところなんです、オープンβの準備もあるので……うーん、冬になるかもしれませんがねえ」

「オープン？」

俺はキラッと目を輝かせた。

「いつからやるか、もう決まってんのか？」

「ノーコメントです」

市長はサラリとはぐらかしてきた。

「もちろん、オープンβテスト開始に応じ、さらに実装される要素についても答えられませんか？ その前に、あなた方のために用意したものを、どう料理するか見せていただけませんか？」

「んっ？ 俺たちのために？」

市長はうなずいた。

「これはオフレコということ……まず、できればあなた方には、最初の陣営抗争に参加しないでいただきたいんです」

これには少し驚いた。そういう申し出はしたくないと言っていたのは、他でもない、市長本人だったはずだ。それなのに言ってくるということは、なにか事情があるのかもしれない。

「一応、《緑》にあなた方と拮抗できそうなユーザーがいるにはいるんですが、それ以外は、あなた方が相手だと齒が立たないこと、間違いありませんからね……」

「ネットで“鴉”って呼ばれているヤツか？」

「おっと」

市長は口を塞いだ。

「今のは無しで。いずれ出会える機会もあるでしょうから、その時

までのお楽しみということに」

俺はリンに顔を向けた。

相棒は楽しげに微笑みながら、俺に頷き返してきた。

俺たちに匹敵するユーザーがいる——これは楽しみなんてものじゃない！

「そしてもうひとつ」

市長は右の人差し指を立てた。

「百諸島^{ハンドレッド・アイランズ}」の東の果てに、あなた方でも簡単には倒せないはずの強いモンスターを配置しておきました。言っておきますが、いかなるイベントとも無関係です。倒したところで得るものはただの記念品のみ。そういう設定にしています」

「なんだよそれ」

思わずツツコミながらも、俺の顔をニヤケまくっていた。

「ええ、本当に、なんだよそれ、としか言いようがないモンスターです。ただ、他の陣営フィールドにも同じモンスターを配置してあります。《緑》はあの人挑むことになるでしょうが……《赤》は、難しいですね」

「“姉御”は？ 《赤》の最強なんだろう？」

「彼女はPVPのスペシャリストなんです。心理戦に長けているというべきですね。そういう意味では、君たちとの対戦が楽しみな人でもあります……やはり君と互角となれば、《緑》のCROW^{クロウ}さんでしょうねえ」

なるほど。外装名はクロウって言うのか。

「そっか……1回でいいから、手合わせしたくなるな……」

「向こうも同じことを言ってますよ。ANE5（アネゴ）さんも、君との対戦を希望してるみたいです……まあ、そういうドリームマッチは、それに相応しい場をいずれ用意しますから、その時まで他のところで遊んでください」

「相応しい場？」とリン。「なんのこと？」

「……オフレコですよ？」

市長は口に指をたてつつ、声を潜めた。

「オープンβテストを始める時に、開始記念のイベントを開く予定なんです。その時に、陣営の枠を越えたトーナメントを開こうって話がありまして……」

「マジ？」と俺。

「ええ、マジです」

市長は苦笑した。

「先にお断りしておきますが……その時は、ログイン中の映像をリアルタイムでネットに流す予定です。技術的に難しいところなんです。ログインユーザー数を制限すれば、どうにか映像と音声を外部に出力することが可能だとわかってきたんです」

「「げっ……」」

俺とリンは、同時に顔をしかめた。

実体と外装がほぼ同じ俺たちにとって、それはできるだけ避けた
い対応だ。

「まあ、まだ先の話です」

市長は声量を元に戻した。

「それまでに顔を隠すアイテムに慣れればいいだけです。ええつ
と……うん、これなんかどうですか？」

市長はどこからともなく2枚のカードを取り出し、回る台座に乗
せ、俺たちの前に来るよう、台座を回してくれた。

「《アイマスク・オブ・アサシン》？」

「目隠しってこと？」

俺とリンはカードを手にとりながら確かめてみた。
アンダーグラウンド

「地下の15階以下で手に入るレアアイテムです。次のアップデート
で入手は不可能になりますが、おふたりには……シンくんには、
というのが正しいですね。シンくんには、顔写真の件でご迷惑をお
かけしますから、今回は“ドロップアイテムとして手にいれた”
ということ、どうですか？」

「へえ、こんなカードも手に入るんだあ」

「だな……」

俺たちはテキストの部分をつくりと読み込んでみた。

《アイマスク・オブ・アサシン》は、細長い黒布に白抜きで目玉模様が描かれているだけのアイテムらしい。ただ、装着すると《ヘルメット》がそうであるように、装着者にはアイマスクが透けて見えるようだ。さらにパーティメンバーにも、ワイヤーフレームが見えるだけで、透けているように見えるらしい。そればかりか、闇闇の中にいると、目玉模様のところから光が放射されているような状態で、光源が無くとも見通すことができる。つまり今後は地下迷宮^{アンダーグラウンド}でも照明いらずで戦えるってことだ。

「ねえ、シン。どう？」

見るとリンは、すでに装着していた。

確かに白い線のワイヤーフレームが見えている。だが、それもよく見ないとわからないレベルだ。ほとんど何も付けていないのと同じっていいだろう。

俺も思考操作で装着してみた。

目元に布を巻いている感触はある。

だが、視界は塞がれない。

「……うん、透けて見える」

リンが俺を見ながら告げてきた。

「でも鏡で見ると、違いますよ？」

市長がそう告げると、テーブルの台座上に大きな鏡が出現する。

そこには、目玉模様が白く染め抜かれている黒い目隠しを付けた俺たちが映し出されている。

なんともまあ、奇妙な感じだ。

でも、そんなに悪くない。

なにより目元を隠せるというのは、それだけで正体を隠すには何かと有効だ。

ただ。

「自力で手にいれたわけじゃないってところが……ちよつとなあ」

「そう？ 別にいいんじゃない？」

「そうですよ。もし気に入らないというなら、“大型アップデート前までに地下の一番深いところまで潜ったユーザーに対するボーナス”とを考えてください」

「んっ？ そうなのか？」

「ええ。《赤》は地下16階、《緑》は地下15階です。あなた方が一番深いところまで潜っていることになります。そのボーナスということで、どうですか？」

もちろん、断るつもりなんてサラサラ無い。

俺たちはありがたく、市長の好意を受け取ることにした。



ログアウト後、俺とリンは朝飯や朝の洗顔なんかを済ませた上で、IPヴィジフォンで話し合いながら、大型アップデート直前のネット情報をあさりまくった。

へねえ。蒼都スレ、見てへ

「見てる。騎士団のことだろ」

俺たちはほぼ同時に、その書き込みに気が付いた。

509 名前…RYUNE@蒼海騎士団 ◆VDkL0rJnWq
投稿日…X0/07/21 07:00:01 ID…*****

<<《青》陣営の皆様へ

蒼都スレの皆様、こちらでは初めましてになります。

私は今回旗揚げする新氏族「蒼海騎士団」の広報担当官、

リユーネと申します。

今回は皆様に以下のことを告知いたしたく、書き込ませていただきました。

1) 氏族結成式の開催

・本日20時45分、蒼都の通称「ホテル」において氏族結成式を執り行います。

・その場において氏族メンバーの募集も行います。

2) 陣営抗争への参加

・本日21時以降に開催される初の陣営抗争に氏族として参加します。

・目標は初抗争における《青》の完全勝利です。
・非メンバーでも抗争時の協力者は大歓迎です

なお、本日より以下のURLにして氏族サイトを開設致しました。

皆様のご来訪、お待ちしております。

http://blue sea.**.jp

へとうとう表だって動き出したんだ……

「おーっ、サイトも凝ってんなあ」

氏族サイトとやらの跳んでみると、Flash2を使った本格的なものが表示された。もつとも、訪問者が何か書き込めるようなところはどこにも無い。掲示板も無ければ連絡手段もサイト内のフォームからやるという徹底ぶりだ。

興味深いのは設立主旨のところ。

——氏族目標は世界征服（笑）

——当面は陣営を代表する氏族を目指し、都市活動と陣営抗争を中心に活動する

つまり、この2つを避ければかち合わないということだ。

へへえ、シン。わたしたちのことも書き込まれてるけど、どうする？
✓

「んっ？ どこだ？」

〈本スレと紅都スレと翠都スレ。SL（私たち）が出てくるなら抗争には参加しないってユーザーがいるみたい〉

「ああ……なるほど」

俺もザッと本スレを眺めた上で、書き込みをしておくことにした。

107 名前…SHIN ◆O4TESRfEf 投稿日…X0/
07/21 08:41:33 ID…*****

おはよう、おまえら

なんか俺のことが話題になってるから書き込んでおくわ

- ・SLは陣営抗争に参加しない
- ・SLは都市イベントも華麗にスルー
- ・青だから百諸島に逝ってくる

とりあえず地下の攻略も途中だから、

いずれそっちに戻れると思うわ

んじゃ、そういうことで

〈うわあ……キターの嵐？〉

「時間が時間だから、暇してる連中が多いんだろ」

〈でも、宣言しちゃっていいの？ 百諸島に行くこと〉

「んっ？　なんかまずいか？」

〈アンチが追い掛けてこない？〉

「……じゃあ、潰すことも宣言しとくか」

〈あんたねえ……〉

呆れるリンを余所に、俺はさらに書き込んだ。

183 名前…SHIN ◆O4TEsRfEf 投稿日…X0/
07/21 08:44:47 ID…*****

追伸

百諸島で俺たちにちょっかいかけてきた奴は、
たとえそれが偶発的な出来事だろうと、

問答無用で全員ぬっころすので注意するように

以上

ノシ

「まっ、こんなもんだろ」

〈あんたらしいというか……〉

「それより、そろそろだろ」

〈あっ、もう45分か……うん、じゃあ、向こうで〉

「装備はいつも通りのままだよな？」

〈目隠し、忘れないでね〉

リンはそう言い残すと通信を切った。俺もノートパソコンを閉ざし、念のためリビングにいる母さんに声をかける。

「俺、昼過ぎまでPVやってるから」

「はいはい。ほどほどにしなさいよ」

「3時間だけだって」
俺は苦笑しつつ部屋に戻り、P V ベッドに寝転がった。

#04-07

```

| | Login Account .. 436-332-200
4-9719
| | FAL Check .. . . . OK
| | Vital Check .. . . . OK
| | Login Check .. . . . OK
| | Login Time .. 22, July 20X0
9..00..01
| | Limit Time .. 22, July 20X0
2..00..01
| | Contents Code .. PHANTASIA O
NLINE ver C2.0103
| | Abator Name .. SHIN
| | Login Place .. BLUEPOLIS / C
ENTRAL CIRCLE / LOGIN BOX 03
| | Login Sequence .. . . . .
. . . . . complete

```

目覚めるといつものログインボックスの中だった。

金髪に浅黒い肌、瞳孔が縦長になっていることを除けば、実体そのままでの外装――身につけているものは《シャークウェア》、《シヨックシューズ》、《ハーフパンツ》、《ハーフレザージャケット》、《ガンベルト》に《バーストガン》、両腕両脚に《スケール・オブ・ブルードラゴン》という冒険装備。さらに俺は、思考操作で《アイマスク・オブ・アサシン》を取り出し、これを装備した。

鏡には目隠しをつけた自分（SHIN）が映り込んでいる。

だが、視界は塞がれていない。

やはり妙な感じだ。

「慣れるまで時間かかるかなあ」

俺はそんなことをつぶやきながら、ボックスの外へと出ていった。
「遅いっ」

すでにリンは、外で待っていた。

傍目にはいつもの同じ冒険装備に見えるが、目を凝らすと、顔の周囲に白いワイヤーフレームが浮かび上がっている。《アイマスク・オブ・アサシン》を付けている証拠だ。

「ほら、行くわよ」

「うーしっ、行きますかっ」

俺たちは無人に近い中央広場から神殿へと向かった。

「でも意外よねえ。こんなに誰もいないなんて」

「全員、抗争に参加するつもりなんだろ」

「だよねえ。騎士団のせいで盛り上がって……あつ、NPC」
マネキン

中央通りに無数のNPCがワラワラと姿を現し始めた。大きさも様々なら服装も様々。開店準備を始めているNPCもいれば、手をつなぎながら歩く母子らしきNPCもいる。荷物を運んでいるNPCも多い。

「へえ……こんな感じになるんだあ」

リンも驚いているらしく、感嘆の声をあげていた。

「なんか、ワクワクしてこない？」

「そうか？」

「なによ、あんただって、顔、にやけてるじゃない」

「そうか？」

顔に触れてみると、確かに締まりがなかった。

ワクワクしないと言えば嘘になる。これから、誰も踏み込んだことのない新しいフィールドに行こうというのだ。しかもその果てには、スタッフが俺たちのために用意した最強の敵が待ち構えている。これで盛り上がりずに、なにで盛り上げれいいのか。

俺たちは神殿に到着すると、いつものようにNPC神官に近づき、
転移先選択ウィンドウに増えていた新しいフィールド――“百諸島”
ハンドレッド・アイランズ

”を選んだ。

さあ、新しい冒険の始まりだ。



転移した俺は“ H A N D R E D I S L A N D S — P A N
T E O N I S L A N D ”のログインボックスを出た。
蒼都と同じ、濃密で爽やかな潮風が吹き付けてきた。

「おーっ」

「うわぁ」

隣りのボックスから出てきたリンも声をあげている。

バンテオン・アイランド

ボックス所在地は神殿島と名付けられているが、そこにあるのは
朽ち果てた古代ギリシア風の古代遺跡だけだ。しかも小高いところ
に建っているらしく、周囲の光景を一望することができる。これだ
けでも見応えがあるのだが、それ以上に周囲の光景がすごい。

丘上にある古代遺跡の外側には、緩やかに降っていく針葉樹林が
広がっている。その外周には砂浜が広がり、さらにその先には無数
の島影と共に、キラキラと輝く美しい南国の海が彼方まで続いてい
る。

ゲーム内時刻と影の位置から類推すると、どうやら島の東西には
石組みの港が広がっているらしい。ただ、建物はすべて倒壊してお
り、沖合いまで伸びる防波堤にも、時の流れを感じさせる数々の残
骸が転がっている。

神殿島というより遺跡島といった感じのところだ。

「なんかすごーい……」

「だな」

俺は《ハルバード》を具現化させ、右肩に担ぎながら、改めて周
囲を眺めてみた。

「よくもまあ、これだけのもの、作り上げたもんだ……」

「ねえ、どうする？」

「どうするって……とりあえず、適当に歩くしかないだろう？」

「だね」

リンも具現化させた《ハルバード》を肩に担いだ。

俺たちは景色に見とれながら、とりあえず真っ直ぐ降る半ば壊れた石の階段を伝い、真正面の砂浜へと降りていった。

「なんか、泳ぎたくなってこない？」

砂浜に降り立つなり、リンが両目を輝かせながら俺を見上げてきた。

「泳ぐのかよ」

そう言い返したが、気持ちはわかる。

ゴミひとつ無い白い砂浜。海はどこまでも透明で、小波はとても静かに寄せては返し、また寄せては返しと続けている。ここが仮想現実ヴァーチャルの中であることを忘れてしまいうるほど、すごい光景だ。

「だってほら、海だし。ビーチだし」

「いずれ、な。とりあえずここはフィールドだってこと、忘れんなよ。ゲームだとたいてい、砂浜に近づけば、魚のモンスターが襲ってくるもんだし」

「……違うみたいだけど？」

「んっ？」

俺はリンが見ている方向を眺めてみた。

しばらく、目が点になった。

「ええっと……」

俺は額を抑えつつ、少しだけ考えてみた。

「ここ、海だよな？」

「巨大な淡水湖かも」

「……かもな」

そう思わずにいられない原因は——巨大な蛙が、げこつ、と座っていたからだ。それも1匹や2匹ではない。ちやうど砂浜と針葉樹

林の間、わずかに芝生が生い茂っているところに、これでもかとい
うくらい大量の巨大蛙が群れていたのだ。

なかなかシニールだ。というか、不気味だ。

――バンッ！

リンが問答無用で、《バーストガン》を抜き撃ちした。

1匹に炸裂。巨大蛙の頭上に“ジャイアントフロッグ GIANT FLOG”という文字
とHPバーが出現した。この手のシステム情報は、攻撃を仕掛けた
場合のみ、攻撃者と攻撃者のPTメンバーだけが視認できる仕組み
になっている。

「やっぱりカエルみたい」

リンはもう2発撃ち込み、3発目でジャイアントフロッグを倒し
た。

他の巨大蛙は動かない。

ということは、遠距離から狙えば、こいつらは単なる標的になっ
てくれるようだ。

とりあえず思考操作でウィンドウを展開。

パーティウィンドウを見てみたが、ドロップアイテムは無かった。

「ドロップは無しか……」

「蹴散らす？」

リンは、左手に持っていた《ハルバード》を持ち上げてくる。

「だな」

俺は苦笑しつつ、無造作に巨大蛙へと近づいていった。

リンも銃を収め、俺に続く。

相対距離が10メートルほどになったところで、巨大蛙はようや
くピョンと飛び跳ね、俺たちに向かって突進してきた。それほど速
くもないので、近づいてくるそばからリンとふたりで蹴散らしてい
く。

「やっぱり生物系って刃物に弱いんじゃない？」

「っぽいな」

秘密基地（地下15階以下）で機械系モンスターとさんざん戦い

まくったせいもあるが、ようやく俺たちは、武器によるダメージの差というものを実感できるようになってきていた。

『PHANTASIA ONLINE』では倫理的な配慮から、実際に何かを切り裂いたり、何かを突き刺したりする手応えを感じないようになっていた。具体的には、ユーザーだけではなく、モンスターにも厚さ1センチほどの不可視のバリアーが張り巡らされているのだ。

つまり剣で戦っても、実感としては木刀や竹刀で殴り合っている感じに近い。

まあ、実際に肉を斬ったり刺したりする感覚というのは、娯楽として提供するには不完全すぎる代物だ。特にPVPでそんなものを経験すれば、トラウマだけではすまない事態が起きる可能性もある。誰かがネットで書き込んでいたが、

——居合の達人より剣道の達人が強いゲーム。

というのが、『PHANTASIA ONLINE』における接近戦の扱いだというわけだ。

もともと、根本的な問題として、接近戦を好むユーザーはごく一部だ。というより、ほとんどのユーザーがガンタイプを愛用している。当初はそうでもなかったようだが、今では全体の5%ぐらいしか、接近戦魔杖を使っていないらしい。俺が得意とする拳闘型にいたっては、実戦で使っている者は俺ひとりというのが実情っぽい……。

それはともかく。

接近戦には接近戦のメリットがある。

最大のメリットは、弾薬のたぐいをまったく消費しないこと。さらに。

「ねえ。もしかして攻撃の種類、刃物と鈍器と魔法の3つ？」

「刃物、鈍器、銃器、魔法の4種類じゃないか？」

俺たちは《ハルバード》の斧部でドカドカと巨大蛙を消し去りながら、のんびりとした会話を続けていた。

ここまでくると間違いないだろう。

生物系のモンスターは、刃物で攻撃したほうが、より多くのダメージを与えられる。逆に機械や骸骨などの非生物系は、ハンマーのようなもので殴ったほうが効果的だ。ただ、銃器はどちらかというと刃物に近い武器にも思える。

「銃器って刃物系と一緒にじゃないの？」

リンも同様に感じているらしく、そんなことを言ってきた。

「かもな」

俺も無造作に《ハルバード》を振り回しながら、最後の巨大蛙も殴り消していった。

収入はクリスタルのみ。

ドロップアイテムは無し。

「ちょっと渋りすぎじゃない？」

「でも金のほうは少し緩んでんじゃないのか？」

俺たちはパーティウィンドウの取得物を確認しながら、なんとなくそのまま島の東へと歩いていった。砂浜が大きく左へと曲がっていくと、途中から砂に半ばまで埋まった煉瓦敷きの道路が姿を現した。その先には、煉瓦敷きの倒壊した港湾施設が広がっている。

「遺跡って言うより、戦後って感じ？」

「だな」

TVでよくやる第二次関東大震災の被災映像を思い出した。俺たちが生まれた時には、もう東京は半ばまで復興していたものの、毎年8月になると、決まって第二次世界大戦の話とセットで特集が組まれるので、なんだかなあ、と思わずにいられない。

「あっ」

と、リンが声をあげたのは、なんとなく近づいてみた廃屋の中に入ろうとした時だった。

リンの前に1枚のウィンドウが展開している。

「んっ？」

気になって後ろから覗き込んでみる。

ショップウィンドウだった。それも、売り物はカード1枚――目の前の廃屋とは似てもつかない、蒼都にありそうな一軒家が描かれているエクストラカード《4LDKⅡ2F+1B》だった。

「まさか売り物？」

俺は呆れ声をあげながら廃屋を眺めてみた。

屋根は無く、壁は崩れ、垣間見える家の中は瓦礫を隠すように雑草が伸び放題といったところだ。間取り的には確かにガールタイプと呼ばれる中世ヨーロッパの都市にありそうな奥に向かって細長い家屋の形をしているが……

「その“まさか”みたい。バリアー張られてて、入れないし」「えっ？」

見るとリンは、何もない空間を右手で押していた。

俺も手を伸ばしてみる。

バリアーの感触がある。例の固いゴムの感触だ。どうやら不可視の壁は廃屋全体を取り囲んでいるらしい。蒼都の未購入物件や非売物件と同じように、ユーザーが余計な悪戯をしないよう、ガードしているという証拠だ。

でも、こんな廃屋を？

「あ、そういうこと……」

「んっ？」

「ほら」

リンはショップウィンドウのヘルプを使い、カードの詳細を表示させた。

カードがウィンドウを半分埋め尽くすように拡大されている。値段はたったの1万クリスタル。4LDKの地下付き2階建てとなれば、蒼都でも普通は100万近くしたはずだ。それを思えば、破格どころではない値段に思えるが、ひとつだけ気になるパラメーターが表示されていた。

HPだ。

家屋なのにHP。それが意味するところは、ひとつしかない。

「まさか……この家、ぶっ壊せるのか？」

「買ったらそうなるんじゃない？ 多分、これがH Pゼロの状態、買えばH Pが全快するとか、そういう仕様なんじゃないの？」

「マジかよ……」

それならば、確かにこの破格ぶりにも納得がいく。

だが、それでいいのか？

余計な騒動、引き起こすだけなんじゃないのか？

「他も見えない？」

「……おい」

まさか、と思いながら、俺は念のためにリンを諫めようとした。

「買わないわよ」

わかってるとばかりに、リンは《ハルバード》を収納しつつ答えた。

「ほら、行くわよ」

「へいへい」

俺は肩をすくめながら、念のために周囲を警戒しつつ、リンの後に付いていくことにした。

ハンドレッド・アイランズ
“百諸島”の全容が把握できたのは、ログインから1時間ほど経ってからのことだ。

どうやらここは、南洋の諸島群という設定らしい。島と島の間は、底が見えないほど深い場合もあれば、足首までしか浸らない程度に白い砂が敷き詰められている場合もある。あくまで感覚的なものだが、スタート地点にあたる神殿島がパンテオンアイランドフィールドの中央に位置し、ここなら迷路状に橋や浅瀬で結びついている島々を渡りながら冒険をしていく、という形のようなのだ。

あと、出現する敵の種類にも検討がつきだした。

突撃攻撃と舌による巻き付け攻撃をしてくる巨大蛙——ジャイアントフロッグ。

仮面に腰布を付けて槍を手に行っているドール——アイランドウォーリアー。

橋を歩いている時に突撃してくる巨大トビウオ——キラーフライフィッシュ。

最初はユーザーかと思ったトカゲ人間——リザードマン。

さらに。

「あれって……あれだよな？」

「あれだろうな」

俺たちはある島の岩山の上から、間近に浮かぶものを眺めていた。その島は、島は島でも岩島だった。橋は南に延びるものと、北に延びるものがあり、登ってみてわかったが、外縁の砂浜を迂回するだけで通過できるという、モンスターのいない島だった。ただ、岩肌には階段があり、これを登ると、海拔10メートルほどの高さに比較的平坦な頂上部が広がっていた。

頂上の東側は大きく窪んでいる。それもそのはず。その端まで近づくと、岩島の東側はちょっとした湾になっており、そこに、誰が

どう見ても帆船としか言いようがないものが浮かんでいたのだ。

しかも船体は、半ば朽ち果てている。

メインマストに張られている帆もボロボロだ。

というか、帆は黒く、描かれている図柄は頭蓋骨と交差する骨に見える。

朽ちた海賊船だ。

つまり。

「幽霊船？」

「問題は、あれがゴーストシップっていう単体のモンスターか、あの中に別のモンスターがいるか……どっちだと思う？」

「うーん」

リンは膝を抱え込むようにして、その場にしゃがみこみ、ジッと船を見下ろした。

「どうかなあ……甲板に転がってるの、スケルトンっぽい感じがするんだけど……？」

「ゴーストっぽいモンスターが出たら、厄介だな」

「幽霊系かあ」

「んっ？ 苦手か、そっち系」

「スプラッターは平気なんだけどねえ」

「ああ、わかるわかる。グロイのは平気だけど、じんわり系はなあ」

「そう。それよ、それ」

「しかもゴースト系だと物理攻撃、きかないかもしれないからな」

「杖は？」

「多分、それだな。魔法でどうにかしろってパターン。でも、聖なる攻撃とか無いよな？」

「うん、見たことないけど……追加されてるとか、そういうオチ？」

「ありそうだな……」

俺たちが所持している杖系魔杖は《トライデント》と《ハルバード》の2つだけだ。《トライデント》には《ライトアローLv3》、《ライトボールLv2》、《ブルーシールドLv1》の他に水系攻

撃の《ブルーアローLv1》が付いている。《ハルバード》は《ライトアローLv3》と《ライトシールドLv3》のみだが、その分、物理攻撃力が高いという設定のようだ。

つまりここは、《トライデント》で挑むべき、ということになる。残る問題は。

「どうやって船に乗り込むか……」

「もしかして行くつもり？」

「行かないのか？」

「うーん……ちょっとパスしたいけど、興味もあるし……うーん、どうしよう」

リンは真剣に悩みだした。

俺は苦笑しつつ立ち上がる。

「悩むぐらいなら行ったほうがいいだろ。どうせゲームなんだし」

「……でも、どうやって？」

しやがみこんだまま、リンが見上げてきた。

「そりゃあ……」

俺が少し考え込むと、思いついたことを口にしてみた。

「泳いで……とか？」

「泳いで？」

「あとは飛び降りるとか」

「じゃあ、泳いで」

リンは笑顔で立ち上がった。

「おまえなあ……そんなに泳ぎたかったのか？」

「そりゃあ、泳ぎたいわよ。だって、キレイじゃない。ここの海」

「まあ……そりゃあ、なあ」

俺は苦笑しつつ、先に歩き出したリンの後を追った。

階段を降り、砂浜に来たところで俺たちは装備を収納。以前、地下15階へのダウンボックスを探した時と同じように、身につけているものを《シャークスーツ》だけにした。

「やつほーっ！」

元氣よく波打ち際に走り出したリンは、そのまま急に深くなっているところに飛び込んだ。俺がゆっくりと段差のあるところまで歩いていくと、沖合いまで潜水していたリンは、バシャツと水面上に頭を突き出し、笑顔で俺に手を振ってきた。

「船はあっちだろ！」

俺は岩島の東側を指さした。

「わかってるーっ！」

声を張り上げたリンは、そのまま平泳ぎで東方向へと進み始める。俺は歩ける限り、ギリギリまで浅瀬を歩いたうえで、意を決して深いところに飛び込んでみた。

ヒンヤリとしている“百諸島”（ハンドレッド・アイランズ）の水は、海水ではなく真水であり、しかも透明度が恐ろしく高かった。水の中で目を開くと、遠くを泳ぐリンの体を見ることができた。

「――ふう」

どうにか慣れない立ち泳ぎで水面上に頭を突き出してみる。

波はあるものの、それほど大きくない。

サーフィン好きには面白みのないところだろうが、それほど泳ぎが得意じゃない俺としては理想的な場所だ。不慣れな平泳ぎで、苦勞しながら東へと向かうと、岩山をグルリと回ったところで、朽ち果てた海賊船の船体が見えてきた。

すでにリンは船縁から垂れているロープのようなものに掴まり、甲板までよじ登ろうとしているところだ。

実在現実での経験の差だろう。電算部の部長様がワイザード^{リアル}ってものを随分と持ち上げていたが、いかに“柔軟な脳神経系”^{ラバー・シナプス・ネットワーク}を持ち合わせていようと、しょせんはこんなものだ――といった証拠に思

える。

「ふう……」

俺はどうか、リンがよじ登っていったロープを掴み、一息ついた。

「ほら！ 早く登ってきなさいよ！」

甲板の縁から頭突き出しつつ、リンが俺に向かって声を張り上げた。

「わかってる！」

俺は怒鳴り返すと、これまた慣れていないロープ登りなんていう作業に苦勞することになった。鉄の棒なら、小学校の時に校庭に遊具があったのでなんとかなるはずだが……まあ、あれだ。俺はシSTEMのサポートを受けない運動に関しては、とことんなまでに使える人間らしい。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

どうにか船縁にあがったところで、俺は息を荒らげながら座り込んだ。

「なによ、これくらいで」

「無茶言うな……俺、単なるゲーヲタだぞ」

「そんなの言い訳にしないの。ほら、戦闘準備」

「つつたく……」

どうにか呼吸が整ったところで、俺は装備を身につけ、《ハルバード》の代わりに《トライデント》を具現化させた。リンも同様だったが、《トライデント》は左手に持ち、右手には《バーストガン》を持っている。

「銃はいいだろ」

「使える敵かもしれないでしょ？」

確かに、と頷きつつ、改めて甲板から船内を眺めてみる。

随所がボロボロどころではない有様の海賊船だが、こうして眺めてみると、見えている範囲では意外と壊れていないことがわかる。少なくとも中央にそびえ立つ1本マストは朽ちていない。

「戦うには充分なんじゃない？」

リンはそう告げつつ、甲板を何度も踏みつけていた。

「腐っては……いないみたいだし」

「気を付けろよ。落とし穴のひとつやふたつ……」

刹那、俺はザワツとしたものを何か感じ取った。

攻撃焦点を向けられた感覚に似ている。

リンも何か感じたらしく、俺と背中をあわせながら身構えてきた。

「なに今の。イベント？」

「……正解」

急に周囲が薄暗くなりだした。見ると、あれだけ明るかった空が、ものすごい速さで夜へと変わり始めている。そればかりか青から空は、あっという間に灰色の厚い雲に覆われていった。

――カタッ

甲板の骸骨が動く。

――カラコロカタコトカランコロン

人骨のぶつかりあう音色は、どこか木琴を連想させる。次々と組みあがっていく人骨は、頭にボロ布を巻いたり、アイパッチを付けたりと、それとなく海賊っぽい装飾が施されている。頭上には“C
ARSED SAILER”の文字と真っ赤なHPバーが出現。どうやらただのスケルトンでは無いらしい。

――バンッ！

背後のリンが、問答無用で《バーストガン》を撃ち込んでいた。

「ダメ。すり抜けるみたい」

「あれだろ。イベント中、踊り子さんに触らないでくださいって感じの」

「踊り子？ あれが？」

「まあ、もう少し待ってって」

実際、完全に空が真っ暗になると、どこからともなく高笑いが響いてきた。

「ようこそ“あおのまじょうし”よ！」

マネキン

NPC特有の聞き取りづらい棒読み言葉が船尾方向から響いた。

左右に階段、正面にドア、手摺りの向こうに舵輪があるという艦橋に、黒帽子に黒コート、鉤爪の右手を持つ“呪われた船長（CAPTAIN）”という名のスケルトンが立っていた。直後、俺とリンの前にウィンドウが強制展開する。

「なにこれ？」

「カースドキャプテンの台詞……だろ？」

実際、そこにはこんなことが表示されているのだ。

EVENTS INFORMATION

〔百諸島キャンペーンイベント「海賊王の遺産」〕

イントロダクション

ようこそ、ブルー・ウィズ《青》の魔杖師よ！

我は海賊。ハンドレッド・アイランズ百諸島に縛られし24の呪われし海賊船のひとつ、トゥエンティフォー・カースドシツプ十字架骨なり！

汝、我らに代わりて呪われる意志はあるや！？

海賊王ジェリー・ロジャーの遺産、彼方への鍵を求める意志はあるや！？

答えよ！ 汝の意志、ここに声高に宣言せよ！

※INFORMATION

これはキャンペーneyイベント「海賊王の遺産」のスタートイベントです

本キャンペーneyに参加するには、1名につき100万クリスタルを参加費が必要です

参加費はイベントクリア時、全額返金されます
リタイアした場合、参加費は全額没収されます
リタイアの条件は次の通りです

クリア前に百諸島以外のフィールドに移動したユーザー個人またはパーティ全員

HPがゼロ以下になりデッドしたユーザー個人
リーダーがパーティウィンドウでリタイアを選択したパーティ全員

クリアの条件は次の通りです

メンバーの誰かがアイテム「海賊王の遺産」を使用したパーティ全員

200万クリスタル（パーティメンバー2名分）を支払い、イベントに参加しますか？

YES NO

「キャンペーneyって……もしかして、あのキャンペーney?」

リンが目を輝かせながら俺を見上げてくる。

「らしいな」

俺は苦笑しつつ、ガリガリと頭をかいた。

『PHANTASIA ONLINE』には様々なイベントが用意されている——ということになっていたが、今までは実装されておらず、看板に偽りありの状況が続いていた。だが、今回の大型アップデートで、イベント類が実装されたらしい。

ちなみにキャンペーンは“ドラマ仕立ての連続イベント”ということになっている。ある意味、『PHANTASIA ONLINE』の目玉ともいえるべき要素であり、PVというメディアの特性を最も良く表せるものだとも言われている。

「200万(2M)なら余裕で出せるし、やってみない？」

リンは乗り気だ。

どうやら俺の相棒は、こういうイベント物が好きらしい。きっと、祭りなんかに出くわしてしまうと、参加せずにいられない性格なんだろう。俺のほうはそれと正反対に、祭りは眺めているほうが好きだったりするが……でも、このキャンペーンには惹かれるところがある。

なにしろ、海賊だ。財宝探しだ。

「ほら、宝探しって面白いそうじゃない！」

リンは今にも飛び跳ねそうな様子で、勢い込みながら俺を説得にかかった。

「海で、海賊で、財宝よ!? これぞゲームって感じじゃない! せっかく夏なんだし、やろうよ!!」

なんだ、その理由は。

まあ、俺のほうも異論は無いが。

なにより、初めてのキャンペーンイベントだ。そりゃあ、燃えるだろ。ゲーマーなら。

「そこまで言うなら、やってみるか」

「そうこなくちゃっ!」

リンは自分の目の前に展開しているウィンドウに手を伸ばした。確かめなくともわかる。

YESのボタンを押し込んだのだ。

#04-09

EVENTS INFORMATION

〔百諸島キャンペーンイベント「海賊王の遺産」〕

#01「呪われた海賊船を倒せ！」

恐れ知らずの魔杖師どもめ！ 財宝は我らのものだ！！

※INFORMATION

勝利条件 海賊団「クロスボーン」の全滅

敗北条件 パーティ全滅

勝利報酬 なし

イベントスタートまで 10 秒

「サクッと終わらせるぞ」

「魔法でいいかない？ 久しぶりに、いい練習になるでしょ？」

「OK、相棒」

俺は《トライデント》を床に突き立てると、深呼吸をしてみた。
アンダーグラウンド

地下では接近戦か銃撃戦に頼ることが多く、魔法はそれほど使って

いなかったからだ。要領的には波動拳と一緒なのだから、使っていたとも言えなくもないが……まあ、それはそれだ。

俺とリンは、同時に呪文の詠唱を始めた。

「光霊3柱、我が敵を射抜け（シューティング・マイ・エネミー）」
これは経験則からくるものだが、その日の最初のアビリティ使用は、できるだけ音声操作からしつかりと始めたほうが、あとあと上手く行く場合が多い。もしかすると験（げん）を担いでいるだけかもしれないが、少なくとも俺たちはそう考えている。

さて。

目の前に出現したままのウィンドウが、カウントダウンを続けていく。

残り6秒……4……3……2……1……！！

「「光の矢！」」
ライトアロー

ウィンドウが消えると同時に、俺たちは中腰に構えた《トライデント》の先端から3発ずるの光弾を撃ち出した。ドンツと撃ち出された光の弾丸は、真っ直ぐ3つの照準へと突き進んでいく。

一斉に骸骨海賊たちが武器や盾を持つ両手をあげ、関（とぎ）の声を上げた。

だが、そのうち6体に《ライトアロー》が着弾。
ぼふっ——という鈍い音と共に光が爆発し、当たった連中はよろめきながら、一瞬で緑一色に変わった頭上のHPバーを減らしていた。

「うわっ……かったあ」

リンが呆れ気味につぶやいた。

HPの減りが、想像以上に少ない。さすがは上級者向けフィードのモンスターだ。

「リン、これでも魔法だけか？」

「殴るの禁止っ！」

「マジかよ——うおっと！」

チリッという攻撃焦点を感じ、あわてて横に飛び退くと、赤い射

撃補助線が脇腹をしつかり捕らえていた。当然ながら逃げ切れず、銃弾を浴びてしまう。それでも、咄嗟に竜鱗で覆われる左腕でガードしたおかげで、ダメージはそれほどでもなかった。

「ったく、けっこうきついぞ！」

骸骨海賊の中には、骨董品っぽい短銃や長銃を持っている者もあるのだ。

しかも数が多い。

全部で20……いや、30ぐらい、いるだろう。

「ライツ！」

俺は《トライデント》を振り上げながら叫んだ。

それだけで照準が出現し、ピピピッとイメージした通りの場所に固定化される。

瞬間、《トライデント》を振り抜く。

先端から3つの光弾が飛び出した。

思考操作で、諸々の手順を一気に省略したのだ。

コツはイメージと“引き金”——うまく説明できないが、こうし

トリガー

よう、というイメージを即座に固め、イメージを具現化させる引き金となりうる何かを自分なりに決めておくと……かな？

この時、呪文名を組み合わせると成功度が高まりやすい。

そのあたりはマンガやアニメの影響なのだろう。

必殺技は名前を叫びながら放つ——そんな常識が、すり込まれているのかもしれない。

それはともかく。

「ライトツ、アローっ！」

リンも叫びながら魔法を放ってく。

1体に3発を集中。それでも骸骨海賊は崩れない。まだHPは半分しか減っていない。

「あああつ、もう！ 固すぎよっ!!」

「制限解除していいだろ!？」

「ア(・)レ(・)は無しだからね！」

「わかってるっ！」

俺は《トライデント》を骸骨海賊の1体に投げつけ、即座に《ハルバード》を具現化させた。

「たあ！」

渾身の力で惜しい掛かってくる骸骨海賊を横に薙ぐ。

《パワーシングルスピア》だ。

さらに銃を構える奴に向けて、

「ライツ！」

と叫びながら突進をかける。

先端を突き刺しながら、超至近距離で《ライトアロー》を放つ。

《パワートラストスピア》と《ライトアロー》による同時攻撃だ。一方、リンは《バーストガン》で応戦。相手は被弾面積が極めて少ない骸骨だというのに、面白いように銃弾を背骨や腰骨、頭蓋骨などに当てていく……

相変わらず常識の通用しない奴だ、俺の相棒は。

「ガンガン行くわよ！」

「OK、相棒！」

俺は《ハルバード》を振りかざしながら、骸骨海賊の群れに突進していった。



約15分後——これが実^{リアル}在現実ならへろへろどころではないだろうが、

どうにか骸骨海賊たちを全滅させた俺たちは、艦橋上で待ちかまえていた骸骨船長に裏技を叩き込んで……

「終わったあ！」

「もお、へとへとお」

背中をあわせながらへなへなと座り込んだ。

傍らでは、倒れた骸骨船長が全身を灰色へと変色させていつている。チャレンジ・ラビリンス“試練場”のドラゴン（ラスボス）と同じ消え方だ。つまりこれ、最初のイベントは終わってくれたらしい。

しばらく無言のまま休んでいると、ファンファーレが耳元で聞こえ、ウインドウが強制展開した。

EVENTS INFORMATION

〔百諸島キャンペーンイベント「海賊王の遺産」〕

#01「呪われた海賊船を倒せ！」

― CLEAR ―

諸君は呪われた海賊団「クロスボーン」を全滅させた！

だが冒険はまだ始まったばかりだ

諸君が乗る幽霊船は静かに次なる戦いの場へと動き出したのだ……

※INFORMATION

クリアボーナス なし

#02「海賊島への道」をスタートさせますか？

YES NO

俺がちょうど読み終わったところで、リンがYESを選択した。
ウィンドウが消える。

船体が軽く揺れ、ギギギツとイヤな音を随所から響かせた。

「今度はなんだ……」

「ねえ、動いてない？」

言われてみれば、確かにそうだ。ボロボロの帆船は、風も動力もないのにゆっくりと方向を変えていく。立ち上がってみると、さらに音もなく、スーッと滑るように進み出した。しかも、いつしか濃密な霧が立ちこめ始めている。

「演出にしては随分凝ってんなあ……」

もっともここは仮想現実の中だ。限定期な空間の視覚情報を細工するなど、それほど大した苦労も必要としないだろう。気になるのは、外側から俺たちのいるこの船がどう見えているかだが……いや、もしかすると見えていないのかもしれない。先ほどまでいた空間単位^{ブロック}から、イベント用の特別な空間単位に移動させられた可能性もあるし。

なんにせよ、次の準備だ。

「あつ——ねえ、シン。ちょっとまずいんじゃない？」

「なにが？」

「リミットタイム。もう少しで半分すぎちゃうし」

「あつ……」

ウィンドウを展開させ、時刻を確かめてみる。

時刻は10時26分。ログイン時刻が9時ちょうどであることを考えれば、ちょうど1時間半、つまり3時間しかないログインタイムの半分が過ぎようとしていることになる。これはけっこう重大な問題だ。

この幽霊船を見付けるまでかかった時間が約1時間。方向感覚には自信があるので、迷わず神バンテオンアイランド殿島まで戻ることはできるだろうが、それはあくまで、あの岩島まで戻れた場合の話だ。

「マズったな……」

「いざとなったらア（・）レ（・）でなんとかできない？」

「まあ、とりあえず次のイベントを終わらせてからでも——おつ、来たぞ」

再び俺たちの前にウィンドウが強制展開した。

EVENTS INFORMATION

〔百諸島キャンペーンイベント「海賊王の遺産」〕

#02「海賊島への道」

濃霧が立ちこめ 邪悪な海の魔物たちが蠢き出す

果たして生きて海賊島までたどり着けるのか……？

※INFORMATION

勝利条件 ユーザーの生存

敗北条件 パーティ全滅

勝利報酬 なし

イベントスタートまで 10 秒

「なにこれ？」とリン。

「あれだろ」

俺は腰の《バーストガン》を抜いた。

「ゲームで勝手に移動する何かに乗り込んだ場合といえど……」

――ザバーツ！

不意に船の左右から水柱があがった。そこから次々と何かが乗り込んでくる。

半魚人だ。

体は成人男性のそれだが、頭部は魚、表皮はヌメヌメとした鱗状、水かきがついている両手には鋭い爪が伸びており、甲板に降り立ったり、まるでゾンビのように両手を伸ばしながら、のた、のた、と艦橋に向けて歩き出していた。

「このパターンだろ？」

「納得」

リンは《トライデント》を収納、両腰の《バーストガン》をそれぞれ抜きはなした。

「気分はガンシューティング？」

「ゲームの文法なんて、そんな急に変わらないってこった」

俺たちは近づいてくる半魚人^{ディーブワン}を撃ちまくった。HPは高いようだが、銃に弱いらしく、3発から5発で次々と倒れていってくれる。

^{カートリッジ}「弾倉の残りは？」

俺は念のためにリンに尋ねてみた。

「そこそこ。武装商人^{アーチャン}に頼んで仕入れないと危険かも」

「じゃあ、使い切るつもりでいくか」

念のため魔法を撃ち込んでみたが、ダメージは今ひとつだった。というわけで、しばらくガンシューティングゲームのノリで、俺たちは半魚人狩りを続けた。俺はたまに外すこともあったが、リン

は全弾命中、1発も無駄にすることなく、次々と半魚人を討ち取っていく。

ほんと、こいつこそ本物のエルフかもしれない。

こいつの銃の腕前を見ると、才能ってやつのことを考えずにいられないのだ。

「もう終わり？」

約10分後――甲板から敵が消え、立ち上り続けていた水柱も消え去った。

ファンファールが聞こえる。

EVENTS INFORMATION

〔百諸島キャンペーンイベント〕「海賊王の遺産」

#02 「海賊島への道」

―― CLEAR ―

諸君は濃霧の海域を無事に通り抜けた！

その先に待つものは……？

※INFORMATION

クリアボーナス なし

#03 「呪われた海賊島…十字骨編」がスタートします

今度は強制スタートらしい。

「霧……」

リンがあたりを見回しながらつぶやいた。

「だな」

濃霧が晴れていく。霧の粒子が消えていく、というのが正しいのかもしれない。ただ、空は星空のままであり、薄い霧は残っているため、2、30メートルほど離れたところからは先が見えない。

「次はあれか」

霧の先に見えてきたものを見つめながら、俺は《バーストガン》を腰に戻した。

古城がそびえ立つ岩島だった。

もっとも、城の部分は遠目にも朽ち果てていることがわかる。これみよがしに、ロープで首を吊った骸骨が窓枠らしいところからぶら下がっているあたり、かない不気味な印象を漂わせている。

船はゆつくりと岩島の周囲を回りだした。

どうやら岩島は曲玉のような形をしているらしく、円のところに廃城がそびえ立つ岩山、尻尾のところに椰子の木が生い茂る砂浜があるという構造をしているらしい。砂浜にはログハウスのような建物が建っており、その傍らには、今の俺たちが求めてやまないものがポツンと建っていた。

「シン！ あれ、見て。あれ！ ボックスじゃないの！？」

「よしっ」

間違はなく、そこにポツンと立っているのは、見慣れたログインボックスだった。

数は1つだけだが、ログアウトするだけなら、順番に使えばいいだけのことだ。

「じゃ、さっさと次のイベントもクリアするか」

「帰り道の確保が先ってこと？」

「当然だろ？」

「だね」

リンは楽しげに微笑むと、弾倉を具現化させ、《バーストガン》に装填した。

#04-10

EVENTS INFORMATION

〔百諸島キャンペーンイベント〕「海賊王の遺産」〔

#03〕「呪われた海賊島…十字骨編」

幽霊船に導かれた諸君は、海賊団「クロスボーン」の秘密砦へとやってきた

だがそこは死者が住まう呪われた処だった……

※INFORMATION

勝利条件 悪霊ベリオンの撃退

敗北条件 パーティ全滅

勝利報酬 なし

イベントスタートまで 10 秒

そのウィンドウが表示されたのは、島の東側に突き出た栈橋に幽霊船が横付けされようとしている最中のことだ。

「なに、この勝利条件」

「降りてみればわかるんじゃないか？」

栈橋に船が横付けされたところで、イベントがスタートした。

それまで甲板の船縁に巻き付いていた縄ばしごが、自動的にバサッと降りた。

俺たちはそれを使って浮き栈橋へと降りていき、その先にある岩山に空いている穴の置く、登り階段の先へと向かってみた。

少し進むと、いかにも幽霊屋敷といった感じの薄汚れた木造建築の中に出た。

「今度は屋敷モノ？」

「ホラー系ゲームの伝統ってところだな」

実際、適当に開きそうなドアを開けていくと、たまに骸骨海賊があらわれ、襲いかかってきた。もちろん、1体ずつしか登場しないので、俺たちは瞬殺しながら部屋をいろいろと回っていった。

「そう言えばさ。昔の『バイオハザード』ってこんな感じじゃなかった？」

「昔って……旧約のことか？」

「ほら、リバイバルされたじゃない。NIN-DOで1、2、3がセツトになったやつ」

「ああ、あれか。確かに1っばいよなあ」

「2とか、ありえないくない？ 警察署なのにあの仕掛けって」

「ゲームだからいいんだよ。リアルすぎるとつまんだろ」

「でもさあ、いちいち警察署に仕掛けなんか作る？」

「それを言い出したら、ゾンビそのものがリアルじゃないだろ」

「それとこれとは別じゃない」

などと無駄話をしながら、俺たちは幽霊屋敷の探索を楽しんでいた。

とりあえず仕掛け（ギミック）がありそうなところを探していき、ゲームデザイナーの意図を考え、それに相応しいアイテムを探し出して、はめ込んだり、置いたり、流し込んだりしていく。これはゲ

ームだ、という意識が強いせいとか、ホラーアトラクションとして以上に、謎解きの部分に妙に燃えてしまった、という感じだ。

「なによお、なんで鍵が“鷹の像”なわけ？」

「ここに鷹が描いてあるんだから、そうに決まってるんだろ」

「他のものでもいいじゃないのお」

などと言いつつ、イベントを進めていく。

あくまで仮定の話をさせてもらおうと——カップルだったら、それなりに楽しめたかもしれない。突然落ちてくる首つり骸骨とか、不気味な笑い声とか、襲いかかってくる骸骨海賊とか……PVというより幽霊屋敷を意識した演出が随所に組み込まれていたのだから、普通の女ならキャラクターと五月蠅かったと思う。

だが、リンは普通の女じゃない。

というか、恐がらせるような仕掛けが動くと、間髪入れず《バーストガン》を撃ち込むのだから、仕掛けもくそも色気もない。

「はい、終わりっ」

最上階らしきところで、巨大な骸骨船長とのラストバトルがあったものの、俺たちはこれも裏技を使ってサクッと終わらせてしまい、灰色化する骸骨が風化するのを待つだけの状態になっていた。

「スタッフが泣くな、ここまで呆気なくクリアされると」

「わたしたちって、もとから基準になんないんじゃない？」

さもありなん。

「あっ、出た出た」

「どれどれ」

俺たちは巨大骸骨船長が消えた天井の無い礼拝堂っぽい場所で、目の前に強制展開したウィンドウを読み出した。

EVENTS INFORMATION

（百諸島キャンペーニイベント「海賊王の遺産」）

#03 「呪われた海賊島…十字骨編」

— CLEAR —

諸君は悪霊ベリオンを倒し、海賊団「クロスボーン」の呪いを解いた！

だが道標はここで途絶えている

新しい手がかりは 広大な海のどこかに……？

※INFORMATION

クリアボーナス なし

特別購入チャンス

諸君は「船」を購入することができる！

幽霊船が横付けされた栈橋まで戻ってみよう！

「だってさ。どうする？」とリン。

「買えってことだろ？」と俺。

俺たちは階段を降りていき、栈橋まで戻ってみた。

念のため時刻を確認すると、11時30分を過ぎていた。なんだかんだと屋敷の探索に1時間近い時間を費やしていたようだ。まあ、

いざとなれば水域を泳いで砂浜まで行き、そのログインボックスからログアウトすればいいので、慌てる必要も無いだろう。

「あ、NPC^{マネキン}」

栈橋に戻ると、俺たちが乗ってきた船が消えていた。

代わりに栈橋の先端に、小さな酒樽に腰掛けている小柄なNPCが座っていた。

近づいてみる。

「おお、まじようしさんか。わしはふなだいくの“ごるあー”じゃ。ふねがほしければうってやるぞ」

ウィンドウが展開する。

普通のNPC商店と同じに見えるが、取り扱っているカードは、どれも船舶関係、それもけっこう本格的な船名付きの帆船が売られている。そればかりか、リストの一番最初には《マップ・オブ・ハンドレッド・アイランズ》という古地図の絵が描かれているカードと、《コンパス・オブ・ハンドレッド・アイランズ》という羅針盤が描かれたカードが売られていた。

「リン。まず地図とコンパス」

「えっ？ あ、うん」

リンが《マップ・オブ・ハンドレッド・アイランズ》と《コンパス・オブ・ハンドレッド・アイランズ》を購入。思考操作でカードを呼びだし、テキストをじっくりと読み込んでからカードを収納した。

「パーティウィンドウに地図って項目が追加されるみたい」

「へえ」

展開して確かめてみると、確かに“MAP”という項目が追加されていた。

マップウィンドウを開いてみる。表示されたのは“百諸島（ハンドレッド・アイランズ）”の俯瞰^{ふかん}図っぽいものだった。ついでによく見ると、地図の右上には、赤い光点が点滅していた。

「赤いのが現在地みたい。あと……ほら、ちよっと見て」

リンはNPC商人のウィンドウを手にとり、俺に見せながら帆船のカードを指さした。

「ここに座標が書いてあるでしょ？ 帆船って、その座標に母港があるって設定みたい」

「……ああ、なるほど。ほとんどがパンテオンアイランド神殿島だな」

「北側かな？ 見てなかったもんね」

「だな」

そこから俺たちは帆船カードを1枚ずつ見ていき、

「ねえ、これって……」

「……だな」

あることに気が付き、うーん、と悩みこんでしまった。

それというのも――パンテオンアイランド神殿島を母港にする帆船は、どれも性能が悪そうなのだ。ただ、他の場所に母港がある帆船は、どれも高額な上に、購入条件というものが付いている。

ぶっちゃけると、氏族を結成していないと買えないのだ。

どうやら高性能の帆船は、船と一緒に母港となる島も購入することになるらしい。不動産物件の一種というわけだ。そして、説明によると、どの母港にもスフィアが付いているらしい。つまり高性能の帆船を買うなら、海賊団を旗揚げしろと……まあ、そういうことらしい。

「どうする？ 一応、全部買えるけど？」

「待て。一番高い帆船、2000万クリスタルもするぞ？」

「ほら。昨日、いろいろと売ったでしょ？ アーチャン武装商人に」

「いや、でも……2000万だぞ、2000万」

「ここまでのイベントで獲得した分もあわせたら……えっと、全部で2527万5403クリスタル」

俺は口をポカーンと開けた。

えっと。

まあ、なんだ。

なんでそんな大金が？

「あ、そっか。話してなかったけど、ベルンさんに運用のほうも任せてたのよ」

「……うん……よう？」

「ほら、蒼都の青空市場って、転売目的でいろいろやる人もいっぱいいたでしょ？ それにわたしたちがお金持ってたって、どうせ使わないんだから意味無いじゃない。それにベルンさんって信用できそうだから、投資してみたのよ。そうしたら、最初の100万が800万になって返ってきたし、追加の分も預けたてみたら、あれよ、あれよっていううちに、ここまで膨らんだのよ」

恐るべしマネーゲーム。

いや……この様子だと、裏に蒼海騎士団がいるな。確証は何もないが、こんな大金が市場で生まれるには、大量の流動資金が必要なのは。なにが目的なのかわからないが、わざと大量の金を市場に流してるとしか考えられない……

「どうせだから一番性能のいいやつにする？」

「……任せる」

俺は額を抑えながら答えた。

「うん。じゃあ、この《クロスボーンⅡプライベーター》ってやつね」

リンが購入手続きを済ませると、俺たちは母港とやらに強制転移させられた。



転移先は、いつものようにボックスの中だったが、鏡に表示されていた現在地は、“HANDRED ISLANDS”の“CROSSBONE ISLAND”というものだった。

そして、外に出た俺たちは、しばらく言葉を失っていた。

頭上には夏の青空。

目の前には白い砂浜と広大なる南洋のゆらめき。

「これが……俺たちの？」

「うわぁ……」

リンの目はキラキラと輝いている。

「すごい……すごい、すごい、すごい！」

相棒は声を張り上げながら波打ち際へと走り出した。

波打ち際は浅瀬だが、途中から急に深くなるらしい。リンは走りながら次々と装備を収納、《シャークウェア》だけになると同時に、きらめく波間へと身を躍らせていった。

元気なやつだ。

それにしても。

「大当たり……か？」

俺はガリガリと頭をかくと、改めて周囲を眺めてみた。

どうやらここは×印の小島らしい。中央に岩山があり、それ以外の部分は椰子の木に覆われている。岩山の南側には仮設トイレに見えるボックスが6台あり、その横にある木造の階段を登るとログハウスのような建物があった。

中に入ってみる。

屋根が軽く傾斜している二階建ての木造家屋に見えたが、リビング、ダイニングキッチンとつながっているエントランスホールは吹き抜けになっていた。天井では照明付きの大きな回転翼が3つも回っている。向かって右側には雨戸がズラリとはめ込まれているが、すべて外すと広いバルコニーに出られるようだ。

左側にはドアが3つと奥に螺旋階段がひとつあった。

ドアの向こうは客間っぽいベッドとテーブル付きのワンルーム。螺旋階段を登ると、寝室と2間続きになっている広々とした執務室に出た。

ここも天井が高い。シャンデリアと一体化しているプロペラが、音もなくゆっくり回っている。

他に家具らしいものは何も置かれていないが、それは自分たちで買えということらしい。
で。

「これが……」

執務室に入った俺は、執務机上に浮かぶものを見上げ、改めて感心していた。

サッカーボールほどの青い水晶を、3枚の黄金のリングが取り囲みながらクルクルと自発的に回転させているオブジェクト――スフイアだ。

これが配置されている不動産を手にいれなければ、たとえどれほど人数を集めていようと氏族を結成できない。逆にいえば、どんな形にしろ、これのある不動産さえ手に入れば、たった1人でも、そのユーザーは氏族を結成できる。そんな代物だ。

ちなみに氏族には、いろいろなメリットがある。

最大のメリットは“同族間の音声通信”だ。同じ氏族のメンバーであれば、異なるフィールド間であろうとも音声通信が可能になるのだから、その恩恵は計り知れないものがある。

また、パーティウィンドウのようにクランウィンドウというものが追加される。メンバーのログイン状態をチェックしたり、録音メー^{クランホーム}ルを残したりすることができるようになるばかりか、なんと氏族員はいつでも氏族本拠地のボックスへ緊急転移することができる。つまり氏族のメンバーになりさえすれば、リミットタイムぎりぎりだろうと、ボックスを探して右往左往する必要がなくなるのだ。

もちろん、一方通行なのだが、タイムアウトのデメリットが減るのは極めて重要だ。

「シン、どこお!？」

リンの声が聞こえた。

「ここだあ!」

俺は殺風景な執務室の中で声を張り上げた。
すぐ、半開きのドアが開き――ビキニ姿のリンが入ってきた。

「……………」

おい。

「あ、ここが克蘭リーダーの部屋？　へえ、あれがスフィアなんだあ」

呆氣にとられる俺を余所に、リンはスタスタとスフィアが浮かぶ執務机に近づいた。

「……待て」

「なに？」

リンが振り返る。

なんというか。

ええっと、だな。

一本に編み込まれた癖の無い金髪。

小麦色に焼けているとも言える浅黒い肌。

胸こそ貧相だが、四肢がスラリと伸びていることもあり、けっこうスタイルがいい。

んで、白いビキニの水着なわけだ。

そういえば今年の流行がこれだとか、飯時のTVで言ってたよう
な……。

「なにか問題でも？」

「……そんなもん、いつ仕入れたんだ？」

「昨日に決まってるじゃない」

リンは腰に両手をあてつつ、ムツとしながら俺を睨み付けてきた。

「で、なにか問題でも？」

「いや」

俺は頭痛を覚えながら、とりあえず姉貴の教え——女性に褒めて
おけ——に従おうと思った。

「まあ、あれだ。似合いすぎだろ。それ」

リンはなぜか、さらに強く俺を睨んできた。

「だったらなんなのよ」

「勘弁しろよ……」

目のやり場に困った俺は、とりあえず武器と《ハーフレザージャケット》を収納し、さらに《スケール・オブ・ブルードラゴン》も収納した。これで身につけているのは《シャークウェア》と《ハーフパンツ》と《ショックシューズ》だけになったが、リンが素足であることから、俺も《ショックシューズ》を収納し、楽な格好にさせてもらった。

「とにかく、さっさと氏族の設定すませて船のほう見に行くぞ」

「あっ、そっか。克蘭リーダーって購入時のパーティーリーダーだっけ？」

「デフォルトだとな」

つまり現時点では俺が仮の克蘭リーダーになっているということだ。

というわけで俺は、執務机を迂回し、椅子に座ってみた。

机の上に大きなウィンドウが出現した。

克蘭リーダーウィンドウ——克蘭のリーダーがスファイアターブルに設定されている場所で展開できる特殊なウィンドウだ。もともと、表示されているデータのほとんどが、今は“NONE”の状態になっている。これらすべてを登録しておかないと、氏族は結成したことになる。そういう仕様だ。

「名前、どうする？」

リンが俺の背後に立ちながら尋ねてきた。

「適当でいいだろ。なんかあるか？」

「急に言われてもねえ……」

「まあ……サブリーダーはおまえだろ？ クランタイプは“攻略”。

あとは……」

「メンバー募集はNOよね？」

「当然。シンボルは……」

「デフォルトの中から選ぶ？」

「……あ、これでいいだろ」

俺が仮選択したのは骨の×印を背景に、真ん中に海賊船長っぽい

帽子を被る髑髏が配置されている海賊『クロスボーン』のデフォルトマークだ。

「悪くないんじゃない？」

「じゃあ氏族名克蘭ネームもそのままにするか……」

「サブネームは？」

「なにかアイデアは？」

「ん〜っ……克蘭ネームと一緒にいいんじゃない？」

「シンⅡクロスボーンか……」

「そっ。わたしはリンⅡクロスボーン」

氏族に所属すると、氏族ごとに設定されているサブネームが外装名の後に表示される。氏族名のままでいいだろ、という意見もあるが、スタッフ的にはこだわりがあるらしい。

「じゃあ、そうすつか」

氏族名克蘭ネームは“クロスボーン（CROSSBORN）”。

副次名サブネームも“クロスボーン（CROSSBORN）”。

克蘭リーダー克蘭リーダー氏族長は俺。

サブリーダーサブリーダー氏族副長はリン。

克蘭タイプ克蘭タイプ氏族傾向は“攻略重視”。

克蘭シンボル克蘭シンボル氏族旗は暫定的に十字骨そのもの。

以上を決めると、ようやく氏族結成が認められ、さらに船体の氏族所有も正式に認められたとするウィンドウが展開した。

「おっし。じゃ、船を軽く見て、今日は終わりだな」

「あゝあ、もっと時間あれば、好きなだけ泳げるのに……」

「今度にしろ、今度に」

俺たちはログハウスを出て棧橋を歩き、帆船へと向かった。

そこでまたいろいろと驚いたり呆れたりしたあと、俺たちはリミットタイムが迫ったので、ログアウトすることにしたのだった。

ログアウト後、俺は母さんが作った昼食をたいらげ、母さんと2人で病院に向かった。俺の怪我を診て貰うのと、母さんのカウンセリングがあったからだ。頭の怪我也、左手首の捻挫も問題なく完治の方向にいつている俺は、最後にP.Vの専門家という人の問診を受けることになったのだが――

「こんにちわ。娘がいろいろとお世話になったようで……」
前にも会った専門医とは別の医師が現れ、開口一番、そう告げてきた。

最初はなんのことかわからなかったが、胸元の名札を見たところで気が付いた。

新島の母親だ。

「いえ、俺はなにも……」

「内気な娘だけど、仲良くしてあげてね」

見るからに優しそうな新島の母親は、専門医に会釈すると、すぐ外に出て行った。

「なんだ。君、新島さんの娘さんと知り合いなのかい？」

「……学校が同じなんです」

「ああ、それで――おっと、そこに寝てくれるかい？　最後にアンデルフィアⅡローカル・パターンをチェックするから。そういえばゲームでいろいろと活躍してるそうだね。VRNの人から、君についていろいろと尋ねられたよ」

「はあ……」

市長あたりがいろいろと聞いたのかもしれない。
いずれにせよ。

じつくりと時間をかけて検査をしたこともあり、マンションに戻ったのは午後5時を過ぎてからのことだった。

「あらあら。夕ご飯、どうしましょ」

母さんはパタパタと台所に向かい、冷蔵庫の中身を確認すると、親父に電話をかけて帰り際に買ってきて貰うものを注文。スエットパンツにTシャツという部屋着に着替えた俺がリビングに戻る頃には、Tシャツにジーンズというラフな格好で台所にたち、鼻歌交じりに夕食作りを始めていた。

「げっ……またカボチャかよ」

「あら、カボチャは体にいいのよ？　そうそう。黒酢、切れてるから、いつものところで買ってきてくれる？」

我が家では今年度に入ってから黒酢を大量に消費している。

元凶は俺だ。

リンから、黒酢は体を柔らかくするから――なんてことを聞いたのがキツカケであり、そのことをチロツと母さんに話すと、それから大量に黒酢を料理に盛り込みだしたのだ。最近はさらにゴマも好んで使っている。以前は料理という見た目重視だったが、最近は栄養重視になってきたらしい。まあ、もともと料理が趣味だし、料理の写真の載せているブログがけっこう人気で……俺の趣味人な性格、親父だけでなく、母さんの影響も強いよなあ、と思わずにいられないところだ。

「黒酢だけ？」

「ああ、ついでに牛乳も。お父さんには頼み忘れたの」

地方公務員である親父は、多少の残業があっても、午後6時になると家に帰ってくる。例外は釣りの約束がある時のみ。酒は一滴も飲めない人だが、釣りとなると帰社途中に岸壁で釣り糸を垂らすという人なのだ。

今日はどうかやら、市役所から直帰するようだが。

「黒酢と牛乳ね。了解」

俺は母さんの財布を預かり、サンダルをひっかけてマンションを出て行った。

マンションから歩いて1分のところに馴染みのドラックストアがある。親父の釣り仲間である遠藤のおじさんがオーナーをしている

元八百屋だ。俺がガキに頃に一度、店を畳んだのだが、商魂たくましい遠藤のおじさんはフランチャイズのドラックストアに店を改装。かつてのコネで生鮮食品も扱っているの、近所ではスーパーよりも重宝されるようになった場所でもある。

そこへと向かおうとマンションのエントランスを出たところで。

(……おいおい)

俺は少し離れた電柱の陰に、見知った人物を見付け、溜め息をつきそうになった。

半袖ブラウスに膝丈のデニムスカートという格好で、ミュールを履き、ポシェットらしきものをお腹のところに両手で持っている三つ編みお下げの女の子——つまりまあ、電算部の新島が、そこにいたのだ。

「つたく……」

昨日の今日で、今度はなんだ？——と思いながら、俺は彼女のもとに向かった。

ドラックストアがある方向でもあったからだ、そうでなくとも、病院で母親と会っている以上、無視するわけにはいかない。面倒このうえないことだが。

「おい。俺に用か？」

「あ……す、すみません……」

母親をして内気を言わしめるだけあって、新島は顔を伏せつつ焦りまくっていた。

俺は溜め息をついた。

「怯えんなよ。俺がイジメてるみたいだろ」

「……ごめんなさい」

「だからあ」

あああああ、もお！　なんかぶち切れそうだぞ！　このままの調子が続くと！

「電算部は退部したんだろ？　連中、また何か言ってきたのか？」

「い、いえ……あの……その……」

「んっ？」

「……お……お礼、を……言いたく……て……」

疲れる。

お礼を言うにしても、わざわざ人様の家の近くで待ち伏せするかあ？

いや、結果的にそうだっただけか？

でも電話で済ませれば……まあ、携帯電話の番号は家族とリン、あとワカさんにしか教えてないから無理にしても、ワカさんに聞けばマンションの固定電話番号ぐらい、すぐわかるはずだろ。

「別にいいよ。降りかかる火の粉を払っただけだって」

正直、付き合ってられない。

「じゃあな」

俺は手を軽く挙げつつ、新島の横を通り過ぎ、ドラックストアに向かった。

買い物済ませて戻ってくると、まだ新島は同じ場所に立っていた。

「おまえなあ……」

「……………」

新島は顔をうつむかせ、ポシエットをギューツとお腹に押しつけている。

なんだよ、こいつ。

いったい、なにがしたいんだ？

「慎一、どうした」

振り返ると車道の反対側に親父がいた。ちょうどマンション前にある横断歩道があるのだが、そこがちょうど青になったこともあり、鞆と買い物袋を手にした親父が、こっちへと近づいてきた。

微妙にイヤな予感がする。

「なんでもない。知り合いがいただけ」

「おっ、女の子じゃないか」

親父の目が、キラーンと輝いた。

やめろ、親父。

あんたがそういう目をした時、俺はろくな目にあってないんだ。岩手まで川釣りに行った時のこと、忘れてないんだぞ。あの時、マジで溺れそうになっただろ。しかもあんた、息子が死にかけてるのにゲラゲラ笑ってたよな。そりゃあ、救命ベストは付けてたし、少し流されれば足の付く深さになったけど……あの時の俺、マジで死ぬと思ったんだぞ。なんでまた、こんな時に、あの時と同じ目をしてやる。

「いやいや、これはこれは……ああ、私は慎一の父親でね。どうだい、新鮮なイカを仕入れてきたんだ。もし良ければ、うちで夕食でも一緒に――」

「親父っ！」

「は、はいっ！」

俺の声と新島の声が重なった。その時点で、その後の展開は決まったのも同然だった。



新島が名乗った時点で、親父は彼女と俺の関係を正確に把握してしまった。ICレコーダーの件で、俺からも電算部のことを話してあったせいだ。新島のことはそれほど詳しく話していなかったが……

「いやあ、こんな可愛らしいお嬢さんだとは。なあ、母さん」

「そうですねえ。慎一が女の子の友達を連れてくるなんて、何年ぶりかしら」

「……幼稚園以来だろ」

俺は冷ややかに言い返すが、この腐れ親父と天然母さんは止まることを知らない。

というか、俺が連れてきたわけじゃないんだが。

それ以前に――なんだ、この状況。

ダイニングテーブルに座る俺と、親父と、母さんと――そして、新島。

「どう？　うちは薄味なんだけど、お口に合うかしら？」

「あ、はい……とってもおいしいです……」

「まあまあまあ、これもどう？　ホウレンソウのおひたしなんだけど、このゴマ油、とってもおいしいのよ」

「……はい、おいしいです」

「まあまあまあ♪」

「あははは。母さん、そんなに勧めすぎると、逆に困るだろ」

「なに言ってるんですか。こんなに痩せてるんですもの。成長期なんですから、もっと食べないと、おっぱいも大きくならないじゃないですか」

赤面する新島。

黙々と食べる俺。

なんというか……まあ……新島もこういう展開は予想していなかっただろう。親父に背中を押されてマンションまで連れてこられると、勘違いしまくった母さんの天然パワーに押されるまま、なぜか夕食の用意を手伝いだし、こうして今は一緒に夕食を食べることになるだなんて……

なに、この急展開。

俺の意志は無視ですか。そうですか。

「ごちそうさん」

早々と夕飯を終えた俺は、呼び止めようとするやうに腐れ両親を無視して部屋に戻った。

学習机に座るが、リンからのアドレスコールはない。

今日は午後から茶道部の例会があり、そのあとも付きあいがあるから連絡がとれるようになるのは夜だ――ということ、向こうから連絡があるまで、こっちは連絡をしないことにしているのだ。

(電話すっかな……)

と思わずにいられないほど、愚痴りたい。
というか、誰か助けてくれ。

「なんだよ……このギャルゲーっぽい展開は……」

俺はしばらく、頭を抱え込んだ。

だが、こうしていても始まらない。

こういう時は――現実逃避だ。

「そうそう。新情報の投下を……」

俺はノートパソコンのモニターで『Xちゃんねる』にアクセス。
関連スレの一斉取得を行わせた。俺がチェックしているスレは本スレ、市場スレ、蒼都スレだけであり、他のスレは必要に応じて『マトメ』の過去ログ倉庫を読みに行くという形にして……

「んっ？」

蒼都スレが猛烈な勢いで加速している。

まあ、初抗争直前に騎士団がホテルを買って旗揚げするとか言ってたからなあ……

「後回し、後回しっ……」

俺はテキストソフトを立ち上げ、とりあえず本スレに投下する新フィールドの情報を自分なりにまとめてみるところから始めた。

徘徊するモンスター(ワンダリング・モンスター)の種類。外観。

攻撃パターン。撃退の指針。ドロップの傾向。あと“百諸島”ハンドレッド・アイランズのマ

ップ概要。キャンペーンイベントについては「海賊王の遺産」という名前と、そういうものがある、ということだけをまとめ、詳細は後日投下するという形にさせてもらった。そうでなくとも、かなり文章量になっている。

俺はそれまでの書き込みを読まずに、「過去スレ読まずにこんばんわ」と書き添えたうえで、次々と情報を投下していった。

「よしっ」

4つに分けたテキストの書き込みを終える。

途中、『Xちゃんねる』名物というべきキターの嵐が渦巻いてい

た。

「さて……」

俺は改めて、取得したスレを頭から読んでいった。

「んっ？」

眉間に皺が寄る。

「んんっ？」

さらに顔をしかめる。

「んーっ!？」

椅子のうえで胡座をかき、左手を左膝に乗せつつ、Page D o W n キーでタンタンタンっときき込みを斜め読みしていく。

部屋のドアをノックされたのは、その時だ。

「慎一い、お邪魔するわよお」

母さんの声だ。

「おーっ」

適当に答えつつ、今度は『マトメ』の過去ログも含めて蒼都スレを追いかけていく。

この頃になると、俺は自分のミスを自覚していた。

まずい。

いや、自業自得と言うか、浅はかだったと言うか……それでも、これはマズイ。

母さんは部屋の折り畳みテーブルを片付け、そこに何かを置いて出て行ったようだが、そんなことを気に掛けている余裕もない。とにかく俺は大急ぎで『Xちゃんねる』以外のサイトも巡っていき、最後に公式サイトを確認したうえで、『SCOP3』を立ち上げた。とりあえずアドレスコールをかけてみる。

しばらくたっても反応が無い。

机に置いた携帯電話をとり、大急ぎでリンにメールを投げる。

——緊急。話せないか？

携帯電話を充電器に挿そうとすると、リンから電話がかかってきた。

大急ぎで電話に出る。

「もしもし、俺だ」

へなに？ またトラブル？

「長話になる。大丈夫か？」

へ平気。今、家に向かつてる最中だから。それで、なに？

「また話題になってる」

俺は溜め息交じりにつけた。

「氏族のこと、もうネットでいろいろ書き込まれてんだ」

へ……………えっ？

これはリンにも予想外の出来事だったらしい。

さもありなん。

俺にだって予想外だよ、このこの展開は。

へえっ？　　どういうこと？　　氏族って……わたしたちの？

「ああ」

俺はネットの情報を、かいつまんで説明した。

話を整理してみよう。

俺たちは知らなかったが、市庁舎には結成された氏族の名前が表示される場所があるらしい。冒険派である俺たちには初耳のものが、市民派の間では、もともと知られていたものだったそうだ。といっても、市庁舎ロビーの黒板に、氏族名、氏族長名、氏族傾向、加盟者募集可否、加盟者数、スフィア所在地という基本的な情報が表示されるだけのものであり、加盟者募集をYESにしていた場合、黒板に触れることで展開するウィンドウを使えば加盟申請メールを克蘭リーダーに送ることができる仕様になっている、というだけのものさそうだ。

マニュアルには書いていない仕様だが、《緑》のユーザーの中に、ログイン中、スタッフから“そういうことが可能だ”と聞いた者がおり、めぐりめぐって《青》の市民派の間でも、それとなく話されてきたことでもあったわけだ。

ただ、どの陣営でも氏族の結成は今日になるまで行われていなかった。

スフィア付き物件が高額すぎたからだ。

それでも有力な未登録氏族が今日の夜、旗揚げ式を行う予定をたてている。そのほとんどは初の抗争に向けての決起大会も兼ねており、氏族の立ち上げはその前後が多いだろうと、誰もが考えていたそうさ。

ところが、早朝からゲーム初の氏族が立ち上がった。

氏族名は『クロスボーン(CROSSBORN)』。

氏族長名は“SHIN”。

氏族傾向は“攻略重視”。

加盟者募集可否は“NO”。

加盟者数は“2名”。

スフィア所在地は“百諸島 — 十字骨島”。

ハンドレッド・アイランズクロスボーン・アイランド

「——ってなわけで、市民派が騒いでるってわけだ」

俺は一通りのことを語り終えると、溜め息をついた。

「とりあえず蒼都スレ、すっごいことになってる。アンチが暴れてるんだわ。俺たちの氏族本拠地を襲うとか宣言してるやつもいるし」

「あちゃあ……もしかしてわたしたち、燃料、投下しちゃった？」

「らしい」

俺は加速しまくる本スレと蒼都スレを更新しては、溜め息をつくしかなかった。

「つたく……俺も迂闊だったよ。氏族結成無しで買える船にしとけば……」

「でも、性能違ったじゃない」

「そこなんだよなあ……そのあたりで言い訳しておくか？」

「まだ書き込んでないの？」

「キャンペーンのことはまだ何も。モンスターのこと書いてたら、かなりの量になったからな。ところでおまえ、家に付くのいつ頃？」

「あと少し。ちょっと切るね。付いたらこっちから掘るから」

「了解。じゃ、あとで」

「うん、あとで」

電話を終えた俺は、携帯電話を充電器に挿しつつ、さらに本スレと蒼都スレを更新した。

また加速している。

暴れているのはアンチだ。俺のことを罵倒しまくり、その相手をする住人の言葉が火に油となり……よくあるスパイラルに陥っている。ただ、市場スレはアンチの書き込みなど誰も相手せず、新たに実装された職人系アビリティと大量のNPCによる新たな経済モデルに関するアカデミックな話を続けていた。さすがと褒めるべきか、

あきれかえるべきか……なんともまあ、『Xちゃんねる』的な展開だ。

「つつく……」

俺はとりあえず、本スレに追加書き込みをしておくことにした。

442 名前…SHIN ◆O4TEsRfEf 投稿日…X0/
07/22 19:47:01 ID…*****

みんな、アラシを呼んだみたいで申し訳ない。

俺たちが氏族を作ったのは百諸島のキャンペーンのせいだったりする。

それというのもキャンペーン「海賊王の財宝」は、イベントを進めると、

「船」を購入せんと先に進まないようになってんのよ。

ただ、性能のいい船は、氏族単位でしか買えない。

というより、性能のいい船はスフィア付きの秘密基地とセットで売られてる。

バラ売りされてなかったのよ、これがまた。

ってなわけで、スフィア付き秘密基地とセットで船を買ったから、

結果的に氏族を結成することになっただけ。

キャンペーンの情報は、明日にも蒼都スレに投下します。

以上。騒がせて申し訳ない。

ノシ

「こんなところか……んっ」

と、メインモニターのSCOP3が自動起動し、リンからのアドレスコールを伝えてきた。俺は携帯電話用のブルートゥース送受信端子をノートパソコンに差し込み、インカムを装着したうえでアドレスコールに答える。

画面は暗いままだったが、

〈着替えながらだから、画像はあとね〉

というリンの声が聞こえてきた。

「了解。とりあえず、いい船はスフィアと抱きかかえだっただけ書き込んだいたが……」

〈どのスレ?〉

「本スレ。蒼都スレは大荒れだから、今は無視して――」

〈いらない。聡美^{さとしみ}たちと食べてきたから〉

んっ?

〈ああ、ごめん。今のうちのママ。晩御飯のことよ、晩御飯のこと。それより、もしかしてわたしたちがログインできない間に船とか家とか、襲われたりしない?〉

「俺もそいつを心配してんだが……」

ノートパソコンに表示させた公式サイトのマニュアルにザッと目を通す。

「今のところ微妙だ。だいたい、レッドゾーンに不動産があるって場合のこと、マニュアルにフォローされてないからな」

〈市長に聞く?〉

「いや。ゲーム外のトラブルならまだしも、これってゲーム内のことだろ。しかも不正ってわけじゃないからな……説明不足ってところを指摘するぐらいだろ。市長に何かするのは」

〈へえ、意外とキツチリしてんじゃないの〉

画面にリンが映った。今日は長い黒髪をバサツと後ろに流し、薄い青のキャミソールを身につけた姿で椅子に腰掛けるといった感じだ。ただ、俺のほうを向くなり、なぜか相棒はムツとした表情で俺を睨み付けてきた。

「その子、誰？」

「んっ？」

「後ろの子よ。後ろの」

「……んんっ？」

俺は肩越しに振り返り――凍り付いた。

そこには、麦茶を注いだグラスを乗せる御盆を手にしたままの新島が立っていたのだ。しかも新島は、耳まで真っ赤にしながら、顔をうつむかせ、おろおろと目を泳がせている。

ええっと。

うーんと。

そのーっ。

「……あっ」

そうか。母さんが何か部屋に持ってきた時に、一緒に部屋の中に――って、おい！

「い、いるならいるって言え！」

「は、はい……ごめんなさい……」

新島は怯えながら肩をすくませた。その拍子にグラスの麦茶が激しく揺れるが、こぼれるほどでは無いあたり、当人も気を付けているのかもしれない。というか、今はそういう問題ではない。

「例のツクヨミだ。電算部の」

俺はメインモニターに向き直りながら、額を抑えつつ溜め息をついた。

「夕飯前に買い物に行ったら、マンションの前にはやがった」

「それで部屋にあげたわけ？」

「親父がな」

「へえ……お父さんがねえ」

画面のリンは、ものごっつー冷ややかな目で俺のことを見つめている。

「ったく……」

俺はガリガリと頭をかいたうえで振り返った。

「おい、新島」

「は、はい……」

「用がないから、さっさと帰れ。ここは俺の部屋だ」

「ご、ごめんなさい……」

新島は御盆を折り畳みテーブルにいそいそと置くと、

「あ、あの……すみませんでした……」

ペコッと頭をさげ、部屋を出て行った。

リビングで母さんが何か話し掛けているようだが、もうどうでもいいので注意を払わないことにする。

「ったく……妙な勘違いしやがって……」

〈勘違いって？〉

「俺の女友達が家に来るの、幼稚園以来なんだよ。まあ、幼稚園の時だって、転んで怪我したヤツ、放っておくわけにいけないから連れてきただけだしな。それで母さんが、色めき立ったんだよ。親父は……ありゃ、確信犯だ。くそっ」

〈そういう勘違いされるようなこと、なにかしてたんじゃないの？〉
「絡むなよ。俺がこういうの面倒がるやつだってこと、知ってんだろ」

〈まあね〉

画面の中のリンは、ヘアゴムで髪を束ねだしていた。

〈でも、けっこう可愛いかったじゃない。いっそ付き合っちゃえば？〉

「ああ、もう。マジで勘弁し——」

俺は途中で言葉を止めた。

携帯電話が鳴り出していたのだが、表示されているのは「VRN」という名で登録していた番号なのだ。

「はい、もしもし」

俺は右耳にインカムを付けたまま、左耳で携帯電話をとってみた。
「ああ、シンくん。早速やってくれたみたいだね」

「市長!？」

俺の声に、画面内のリンも目を見開いている。

「なんだよ、そっちから電話って。なにかあったのか？」

「君たちがまたやらかしてくれたみたいだから、先に釘を刺しておこうと思ってね。まったく……人が動けない間に、いろいろとやらないで欲しいよ。氏族第1号なんて、目立つこと間違いなしじゃないか」

「動けない間って……」

「夜に抗争があるだろ？ それに備えて、メンテが明けて、少ししてから休んでたんだよ。そのあと仕事で打ち合わせがあってね。モニターに復帰したのは、ついさっきのことさ。そうしたら、君たちが氏族を旗揚げしてるんだから……もう、驚いたよ。『Xちゃんねる』でも大騒ぎみたいだし」

「ああ……悪い、市長。かなり無茶なお願いかもしれないんだが……」

俺は画面のリンを見た。

「あんたの手許にあるパソコン、SCOP3、インストールしてあるか？」



「音声だけにさせてもらうよ。個人のiPhone経由だからね」
2分割されたSCOP3の左半分には“VOICE ONLY”
という文字が表示されている。もちろん、右半分には苦笑している
リンが表示されていた。

「市長って仕事中じゃないの？」

「今は勤務外だよ。我が社はフレックス制だからね。今日の残る勤務時間は、全スタッフそろって、アップデート作業を行うメンテナンスと、陣営抗争の時間に焦点をあわせているんだ。もっとも、私みたいな立場になると、24時間、常に仕事しているような感じだけだね。おかげで最近、家にも帰ってないんだ。結婚してたら最悪だったよ」

今日の市長は意外と饒舌だ。市長も市長なりに、大型アップデートの適用でテンションが高まっているのかもしれない。

「ところで市長。いちいち電話してきたの、氏族の件だけか？」

「電算部の件でも少しあってね。ツクヨミ……だったね。相談してきたあの女の子、外装を再登録することになったんだ」

俺とリンは目を開けて少し驚いた。

「じゃあ、1ヶ月もログインできなくなるわけ？」

「いやいや、迷惑行為対策条項に基づいて、冷却期間無しで再登録できることにしたよ」

ああ、なるほど。

PVでは原則的に、外装の再登録を申請した場合、それまでの全データが消去されたうえで、30営業日の冷却期間を置かなければならないことになっている。だがユーザー規約の迷惑行為対策条項の適用が認められると、データさえ揃えられれば、即日の再登録も可能ということになっている。

「今回はシンくんが録音した音声データっていう物証もあったからね。さっきも若狭先生と電話で話したけど、学校のほうでも校長が電算部の問題を理解したって言ってたよ。ああ、そうそう。アマテラスくんの推薦者にも機密漏洩の件で注意しておいたから、シンくんは気にせず、ゲームを楽しんでくれれば……と、思っていたんだけどねえ」

市長の苦笑顔が目に見えそうだ。

「なんでまた、よりにもよって海賊王キャンペーンに……いや、百

歩譲って、それはいいとしても……君たちらしくもないじゃないか。スフィア無しでも買える船、いろいろとあったはずだろ？」

「性能が悪かっただろ」

「そうよ。操作性とか耐久力とは、全部C以下だったじゃない」

俺とリンは真っ向から反論した。

「それに氏族の情報が晒されてるなんて、わたしたち、知らなかったのよ」

「知ってると思ってたんですが……」

「だったら公式サイトで告知しろよ」

俺はムツとしながら言い返した。

「いくら俺たちでも、都市の微妙な変化なんて追い掛けきれねえって」

「無茶言わないでください。スタッフはデバックでたいへんなんです。公式サイトでの更新なんて、半分、趣味みたいなものなんですよ」

「ちよつと……趣味はないでしょ、趣味はあ」

リンもさすがに呆れている。

俺もそうだ。

「いやあ、面目ない」

市長も自覚しているらしい。

「オープンβになれば人員も増えるんで、担当者を置けるんですが

……今は、そこまで手が回らないんですよ」

その言葉に、俺は素朴な疑問を抱き、尋ねてみることにした。

「なんでそんなに不完全なんだ？ aテスト、やってんだろ？」

「そこがPVの面倒なところなんですよ」

市長は溜め息をついた。

「うまく説明できないんですが……PVという技術は“ユーザーの脳神経に蓄積された情報”、言うなれば“ユーザーの妄想”に依存している部分が大きいんです。そこを平均化させる作業がなかなかたいへんなですよ」

「医療用としていろいろやってきたんじゃないのか？」

「それをベースにしてるんですけど……ええっと、詳しい値段は覚えていないんですが、医療用は娯楽用に比べると端末の性能と値段が数段上なんです。しかも娯楽用の端末、さらなるコストダウンを進めている最中なんで、もっと性能の低い端末を使っても大丈夫なようにしておかないと、お話にならないってわけなんです」

「へえ……いろいろとたいへんなんだ」

「ええ。いろいろとたいへんなんです」

市長は再び溜め息をついた。

「P Vの技術的な理屈については概要程度しか知らない俺だが、なんとなく、市長の言っているデバック作業が“ひとつずつ潰していくしかない地味な作業”であることだけは理解できた。」

「そっか……じゃあ、一応、今回の件はユーザーの要望ってことで」

「ああ、ちょっと待ってください……はい、具体的に言ってもらえますか？」

「氏族の情報が公開されるってところ、マニュアルの氏族のところか、中枢都市の市庁舎のところに乗せておくべき」

「はい、承りました。ついでにシンくん、マニュアル書いてみませんか？」

「……はあ？」

「いやあ、猫の手も借りたいところなんです」

「そういうのは専門家に……あつ、いつそのこと公式サイトで募集してみたらどうだ？ アルバイトみたいな感じで」

「『マトメ』の魔王さんとか、喜んで応募しそうだね」

「言ってる。あの人、文章まとめたりするのも上手いな」

「なるほど、なるほど……参考になります。いやあ、目の前の仕事を片付けるだけでも手一杯になってしまつて、他のことを考えるの、そうできないもんなんですよ」

「ほんと、たいへんなんだな……」

「御苦労様です」

俺とリンが労いの言葉を告げると、

〈いやあ〉

と、市長は照れた。

〈これも仕事ですからねえ。あつ、そうそう。それと氏族の件。これはあくまで個人的な忠告ですが、君たちが少し強すぎるせいで、ユーザーからの苦情が増えつつある状況なんです。まあ、やっかみがほとんどですけど、本社からも初心者対策を心配する声が出てくるんですよ〉

「あちゃ……市長に迷惑かけてるってことか？」

〈迷惑ってほどでもありませんよ。ただ、オープンβに向けての作業が忙しくなり始める頃なんです。しばらく自重していただけると助かるというか……そうですね……できれば今月中だけでも、イベントを進めるの、少し抑えてくれませんか？〉

〈わたしはいいけど、シンは？〉

「世話になってるからなあ……あつ、ついでに聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

〈なんですか？〉

「船と氏族本拠、ユーザーがログアウトしてる間はどうなるんだ？レッドゾーンに起きっぱなしにしていることになってるんだよね？」

〈放置状態になりますね〉

「放置って……まさか、襲われたらアウトってことか？」

〈そんな時のためのNPCじゃないですか。船だってNPCの水夫を購入しないと動かないでしょ？ 同じように、ホームを守る兵士や傭兵を購入すればいいんですよ〉

俺とリンは絶句した。

〈んっ？〉

市長も何か気づいた様子で、カチカチカチッと何かを操作している音を響かせ出した。

〈……ああ、おふたりの船は“プライベート私掠船”シリーズでしたか。でした

ら――〉

市長はあることを教えてくれた。

俺たちは安堵しつつも、

「それもマニュアルに記載するか、ヘルプで参照できるようにしくべきだ、というユーザーの要望があったってことで」

「わかりました。ああ……本当にテキスト要員が必要ですよ。ここまでする」と

「ご苦労さん。まあ、俺たちのほうはイベント進めないようにしながら、ボチボチ、適当に遊んでおくわ」

「すみません。こんなこと、ユーザーにお願いするのは筋違いなんですけど……」

「いいの、いいの。相棒がいろいろとお世話になってるし」

「俺かよ」

まあ、事実なのだが。

翌23日（テスト60日目）、俺たちは朝メンテ直後にログインすることにした。抗争が始まった以上、早くから百諸島ハンドレッド・アイランズに来るユーザーは皆無に等しいだろうと考えての選択だったが、これはとりあえず大正解だったらしい。俺たちは船で誰もいない神殿島まで戻ったうえで、残金全てを最も高額なNPC警備兵に費やし、ついにて昨夜のうちにその存在が判明した追加建築物に何があるチェックすることにした。

その後は船を走らせまくりながら、突如出現するモンスターを嬉々として倒しまくり、残り1時間頃に拠点帰還で氏族本拠地ベースキャンプ クランホーム クロスボーン・アイランドの十字骨島に船ごと緊急転移。あとはまあ、相棒の強い希望で、海水浴としゃれ込むことになった。

「ものがヴァーチャルでも、やっぱり夏の海っていいよねえ」

「おまえ……前世は半魚人か何かだろ」

「なんで素直に人魚って言わないわけ？」

「人魚学園を思い出すから」

「うっ……」

「おまえ、人魚だな」

「……ぜんぜんうれしくない」

「それより、時間じゃないのか？」

「まーね。変なもの買ったら波動拳の追加、無しだからね」

それは困る。

「じゃあ、夜になったら空くと思うから」

「了解」

俺たちはカメラに拳を押しつけあったうえでIPヴィジフォンの接続を切りあった。

時刻はちょうど12時半だ。

こっちは予定も何も無い状態だが、向こうは面倒このうえない、

学校絡みのお嬢様がおつきあいがあるらしい。なんでも最大派閥で大きな力を持っている茶道部の副部長に呼び出されたとか。

お嬢様ってやつは、本当にたいへんな生き方らしい。

「慎一い！」

不意にリビングから母さんの大きな声が響いてきた。

「朋美ちゃんからお電話よう」

母さんの声は、ものすごく上機嫌だった。

「……………んっ？」

俺は小首を傾げた。

朋美という名前には、記憶が無い。

まあ、そうでなくとも人の顔と名前を覚えることを苦手としている俺だ。これまで一発で覚えられたことは……………んっ？　　そういえば相棒の名前が鮎川鈴音だってことは一発で覚えたぞ？　　なんでだ？

「……………」

どうでもいいことか。

それよりも。

「朋美……………朋美……………親戚でいたか、そんなやつ？」

なんてことをつぶやきながら、リビングに出てみる。

母さんは固定電話の受話器を手にしたまま、ニヤニヤと笑っていた。

イヤな予感がする。

「すぐ返す」

リビングにテーブルに置いてある子機を奪い、部屋へと戻った。

そのうえで、電話に出てみる。

「はいもしもし」

「あっ……………」

その小さなつぶやきだけで、相手が誰なのか、即座に理解できた。また新島なんとかだ。電算部の。昨日も俺の部屋にまであがりこんできた、あの。

「おまえ……………まだ俺になんかあるのか？」

〈ご、ごめんなさい……あの………あつ〉
一瞬の間。

〈やあ、神様〉

聞こえてきたのは、部長様の妙にさわやかな声だった。

俺は大きくため息をついた。

「てめえ……あれだけ警告してやったのに、まだ俺に関わるつもりか？」

〈こっちからも警告しておこうと思ってね〉

「そっちが警告？」

〈ローハラスメントって言葉、知ってるかい？〉

「……………」

〈知ってるみたいだね〉

「法律を盾にした嫌がらせてやつだろ。それがどうした」

〈君のしていることは、下手をするとそれに抵触しかねない。特にウィザード理論のことを勝手に機密と判断し、VRNのスタッフに密告するというのは――〉

「キャッチフォンだ。ちょっと待ってろ」

俺はそこで、一方的に保留を押した。

無論、キャッチフォン――別のところからの電話――がかかってきたわけではない。あくまで対応の間を作るための嘘だ。

「……なんなんだ、いったい？」

電話から聞こえる部長様の声からはイヤな感覚しかしてこない。

直感は、さっさと電話を切ってしまえと叫んでいる。

実際、そうしようと思う。

だが気になるのは……新島だ。

どうしてあいつがかけてきた電話に部長様が出てきたのか。そこが気になる。

いや、気になることはもうひとつ。

どうして部長様は、わざわざ俺と電話で話そうとしてきたのか？

「……ちっ」

ICレコーダーは、まだワカさんに預けたままだ。

いろいろと考えてみたが、途中からなんだか面倒くさくなってきた。

（なるようになれ、だ）

俺は再び固定電話の子機を耳にあてた。

「待たせた。で、要件は？」

単刀直入に切り込んでみる。

部長様は電話の向こうで、ふん、と鼻で笑った。

〈君を招待しようと思ってね〉

「どこに」

〈向こうだよ〉

「……今日のログインタイム、もう使い切ってるんだが？」

〈今ならその枷、無視できるとしたら？〉

俺は黙り込んだ。

〈警戒することないよ。とりあえず今から駅前まで出てこれるかな？　そこに誰か待たせておくから〉

「どこに連れてくつもりだ？」

〈こう言えば君にもわかるかな？　9月の発表まで関係者にしか存在が明かされていない日本全国に作っている最中のPVを柱にしたアミューズメントスポット……〉

部長様は再び、鼻でふんと笑った。

〈正式名称は『バーチャルステーション』って言うらしいよ、この施設。いちいち名前がダサかったりするのは、PVの宿命なのかな？〉

↑——ええ、ミゲルの建設は……ああ、コードネームです。バース

テことバーチャルステーションの。とにかく、バーステの建設はもう9割方、完了していますし、関係者にはそこからのログインテストを行ってもらっている段階です」

「じゃあ、俺にバラしても問題にならないのか？」

「なりません。シンくんが一般応募のテスターなら話は違ったんですが……」

「なるほど」

路面電車を降りた俺は、わざわざ出迎えに来たのがプチ部長様——名前は忘れたが、同じ学年の電算部テスター2号——だったとわかると、苦笑しながら片手をあげてみせた。向こうがムスツとしたまま俺に背を向け、まるで無視するかのようにスタスタと歩き始めてしまう。おそらく、ついてこい、ということなのだろう。ちょうどいいので、俺はようやくつかまえた市長との電話を続けながら後を追うことにした。

「俺もその程度には関係者ってわけか」

「ええ。ですからいっそのこと、もっと深みにはまってみませんか？」

「深み？」

「アルバイトの誘いですよ、アルバイトの」

「……中身は？」

「CMに出てみませんか？ お金はけっこう出ますよ？」

「落ち目の芸人でも使ってる」

「へん！っ、有名になること、そんなにイヤですか？」

「めんどくさい」

「相変わらずですね」

「悪かったな」

電算部テスター2号——長いので今後は電算2号と呼ぼう——が向かおうとしているのは市役所方向のようだ。

「すみません、シンくん。そろそろ私も打ち合わせがあるんで」

「あ、忙しいのに悪い」

へいえ、いい気晴らしになりましたから。ではなにかありましたらメールでも投げておいてください」

「わかった。お疲れ、市長」

電話を切り、とりあえずため息をついてみた。

（根回し終了……か？）

ワカさんは留守電になっていたのでメールを投げておいたが、一応、報告済みと考えていいはずだ。市長にも念のための報告を今、しておいたわけで……

まあ、部長様の父親というのが、なんでもVRN医療部門の函館におけるトップに近い地位にあるらしい。そのため、そうそう馬鹿な真似をしないだろうと言うのが市長の見解であり、ワカさんもこれに同意しているそうだ。でもまあ、後輩の女子をパワハラ(?)で食おうとした外道であることも事実。まだなにか勘違いしているようなら、それなりの対応を考えるしかなさそうだ。

「あっ……」

なんとなく聞き慣れてきた声が、少し遠いところから聞こえてきた。

函館市電（電車）しのめひろじが走る国道279号と函館市役所へと通じる坂道でもある東雲広路が交差する大きな十字路、警備員が物々しそうに立っている、まだ内部を隠すように工事用の囲いで隠されている建物の前に、昨日と違い、少し野暮ったい感じの半袖ブラウスにデニムパンツという格好をした新島の姿があった。

その表情は、どこかホッとしているようでもあり、泣き出しそうでもあり……

「なに出てきてんだ」

電算2号が不機嫌そうに言い放った。

「入ってろ、裏切り者」

「あ……その……私……」

「おい」

俺は怒鳴りつけようとしていた電算2号の背中を軽く押した。

「主賓の俺は無視か？」

振り返った電算2号が何か言い返そうとしてきたが、俺は無視して新島に目を向けた。

「新島。聞きたいことがある。歩きながらいい。ちょっと来い」

「は、はい……」

俺は電算2号を無視し、目の前の建物の出入り口に向かった。

と、警備員が立ちふさがった。

「すみません。カードを見せていただけないでしょうか」

「呼ばれたんだ。そんなもん、ねえよ」

「あ、こ、これ……」

新島が一枚のカードを差し出した。大きく“GUEST”と書かれたICカードだ。

これを受け取った警備員は、手持ちの機械に通したうえで、俺に尋ねてきた。

「お名前をお願いします」

「久賀慎一」

「生年月日を、西暦から——」

その後も本人確認らしき質疑応答がしばらく続いたうえで、ようやく俺は建物の中に入ることができた。

中は完全な内装工事中。歩ける場所もビニールシートで指定されており、余計なものに触れないように促し張り紙が至るところに貼られてある。ただ、それを差し引いても建物の中は呆れるほど広い。おまけに数え切れないほどのカバー付きリクライニングチェアがビニールに包まれたまま置かれてあり、どこか不気味な雰囲気を漂わせてさえいた。

「ああ、ようやく来たんだね。《青》のSHINくん」

部長様のわざとらしい声が響く。

やつがいるのはビニール包装をはがしたカバー付きリクライニングチェアが5席ある区画だ。チェアのカバーはいずれもワニの口のように上に上がっている。

こうなるともう、確かめる必要もないだろう。

「新型のPVデバイス……」

「ダイブチェア、という商品名になるらしいね」

部長様はチェアのひとつに手を置きながら語り出した。

「これまで5000メッシュで構築していたアンデルフィアⅡローカル場を半分以下の2000メッシュで構築する形にしてるんだ。それでもFAL強度70以上をキープするんだから、すごい進歩だよ。もつとも、製造コストのほうは——」

「新島」

俺は部長様を無視して、左斜め後ろに控えていた新島をにらみ付けた。

「ここにいる理由、俺に電話をかけてきた理由……言え」

「こ、これで……その……もう……二度と……」

「……ちっ」

大体のことは察しがついた。

「おい、強姦未遂男」

俺は続けて部長様をにらみ付けた。

「さっさと本題に入れ。それともこの場でめえを殴り飛ばして、俺が傷害罪で捕まったほうがいいのか？」

「予想通りすぎるよ、君の反応は」

余裕顔で言い返してくる部長様だが、腰は微妙に引けていた。

まあ、今の俺はけっこう本気でいらだっているわけで……引いてしまうのも当然かもしれないが。

「予想通りなら、さっさと本題に入れ」

「では、単刀直入に」

部長様は手を置いていたダイブチェアに腰掛けた。

「昨夜の抗争の結果は、もちろん知ってるね？」

「ああ。《青》の……というより、蒼海騎士団の大勝利ってやつだろ？」

ゲーム初の陣営抗争は、案の定、全員が贅沢な装備で身を固めた

《青》系総合氏族『蒼海騎士団』の大活躍により、《青》が大鉱床を掌握、さらに6つある中鉱床、スタート地点にあたるそれぞれの陣営砦に近い場所にあった計3つの小鉱床まで制圧し、ゲーム初日にして完全勝利を成し遂げるという快挙を果たしていた。

これにより蒼海騎士団の名は一躍有名になったわけだが……まあ、これに絡む一番の話題は、氏族装備である『アイスゴーレム』が大活躍したという点だと思う。そのバランスブレイカーぶりは尋常ではなかったらしく、ネットではあーだこーだと議論が起きているところだ。

「じゃあ、ランキングは？」

部長様の問いに、俺は無言で見返した。

抗争でランキング？ 初耳だが、なんとなく察しはつく。

「昨日は蒼海騎士団とアイスゴーレムが目立ったからね。ランキングのほうは大して話題にならなかった……だから、君も知らない。そんなところかな？」

部長様は意味ありげに、ふふっ、と笑った。

「陣営抗争で獲得できるクリスタルボーナス……実は、2種類あるんだよ。ひとつは鉱床によるもの。もうひとつは、どれだけ多くのユーザーをデッドさせたかというランキングによるもの」

いかにもありそうな仕様だ。

「ボーナスは1位が100万、2位が50万、3位が20万、4位から10位が10万。これとは別に、抗争では異なる陣営のユーザーを倒すと1人につき100クリスタルずつ獲得できる。まあ、味方をデッドにすると10クリスタル、自分がデッドになるとデスペナルティか罰金、お金があるなら自動的に1000クリスタルが引かれてしまうけどね」

かなりの大盤振る舞いに思える。なにしろ鉱床掌握のボーナスもかなりのものなのだ。

基準額は小鉱床1万、中鉱床5万、大鉱床10万だ。

抗争終了時、鉱床^{フラッグ}所有権を所持しているユーザーがいた場合、ま

ずパーティボーナスとして、そのユーザーと所属するパーティメンバー全員に基準額が支払われる。

次に、そのユーザーが氏族に所属していた場合、クランウィンドウで幹部のみが操作できるクランバンクに基準額の10倍が支払われ、さらに氏族メンバー全員に基準額が与えられる。これはフラッグ所持者とそのパーティメンバーにも適用されるため、二重に美味しいおもいができることになる。

そして最後に、同じ陣営の全員に基準額が支払われる。これも重複する。

すなわち、昨夜の抗争で《青》陣営のユーザーは大鉱床1つと中鉱床6つと小鉱床3つ分の基準額合計43万クリスタルを、《青》に所属しているというだけの理由で獲得したことになる。これは以前の感覚で言うところの地下4日分の稼ぎなわけだが……これだけでも、大盤振る舞いもいいところだろう。

だが、蒼海騎士団にはもっと金が入っている。

メンバーは全員86万クリスタルを獲得。ネットの情報によると、パーティボーナスは公平性を保つ意味で氏族預かりにしたとの話だから、仮にフラッグ保持パーティがすべて6人パーティだとすると、蒼海騎士団はクランボーナスの430万に加え、258万を氏族単位で手にいれたことになる。合計688万クリスタル。やつらにすればはした金だろうが、普通に考えればかなりの大金だ。

これにPKランキングが加わったとなれば……

「1位は、誰だと思う？」

部長様が尋ねてきた。

俺は即座に、思いついた名前を口にしてみた。

「ゼノン」

蒼海騎士団のリーダー。一度しか会ったことがないものの、あまりいい印象を抱けずにいるイカサマ賭博の王様。なんとなくだが、今も何らかの錬金術を駆使し、総資産を増やしているような気がする。そうでもなければ、《青》陣営の市場における金の流れの膨大

さが説明できないらしい……

「ああ、あいつは3位さ」

「……3位？」

「まだわからないなんて……かなり鈍いね、君は」
なるほど。そういうことか。

俺は腕をくみつつ、背後にいる電算2号を肩越しに振り返ってみた。

「そっちが2位で……」

部長様と向き直る。

「こっちが1位、か？」

「ご名答」

部長様はニヤリと笑いながら、ダイブチェアーに深々と座り込んだ。

「今ならリミットタイムを気にせず、選ばれた人間だけが立ち入れる場所で、思う存分、ペナルティ無しで戦うことができる……さあ、どうする？」

そんなもの、答えは最初から決まっている。

「どれに座ればいい」

「どれでも」

俺は適当に選んだダイブチェアに腰掛け、ふう、とため息をついた。

（なるようになれ……だな）

#04-14

```

| | Login Account .. 436-332-200
4-9719
| | FAL Check .. . . . OK
| | Vital Check .. . . . OK
| | Login Check .. . . . OK
| | Login Time .. 23, July 20X0 1
3..03..22
| | Limit Time .. No Limit
| | Contents Code .. PHANTASIA O
NLINE the NINE COLLOSSEUMS ver
C3. 0008
| | Login Place .. COLLOSSEUM / H
OKKAI DO AREA / LOGIN BOX 02
| | Login Sequence .. . . . .
. . . . . complete

```

慣れ親しんだ感覚を経て、俺は再び仮想現実世界で目を覚ました。
 (……んっ?)

このログインボックスは本家と少し違っていた。といっても、
 立ったままではなく、ダイブチェアに似た椅子に座った状態で実
 体化する仕様のため、その分、ボックスが広い、という程度の違い
 でしかないが。

立ちあがり、横の鏡で姿を確認してみる。
 俺が映っている。

SHINではなく久賀慎一が。
 「……あっ、そうだった」

ログインしたらウィンドウで外装を選べ——なんてことを、入りに際に部長様が言っていたことを思い出した俺は、左肩をダブルタップすることでウィンドウを展開してみた。

展開したのは見慣れたステータスウィンドウではなく、初見の**アバター**ウィンドウと名付けられたものだった。ここでは種類の**外装**が登録可能であり、あとから細々と調整することも可能らしい。もっとも、これから俺が行う方法で選択した**アバター**は、いろいろな特殊事項がくつつくそうだが。

「……ふーん」

POとは比べ物にならないほど丁寧な補助文が表示されている。俺はそれをザッと眺めながら、“SHIN”のデータをここで使えるよう設定した。

3枠のひとつが、これで埋まる。

アバターウィンドウの初期画面に戻ると、3枠の一番左側に、スツ、とSHINの全身像がフォログラフ的に浮かび上がった。サンダルにバミューダパンツ形の海パンを履いているだけという金髪濃褐色肌の俺の姿が……

（そういや、海から出てすぐだったな。ログアウトしたの）
いずれにせよ、それを選ばないことには話が始まらない。

俺は改めて**アバター・ワン**を選択。瞬時に俺は久賀慎一からSHINに変身した。

「うしっ」

すぐさま思考操作で冒険装備——《シャークウェア》、《ショックシューズ》、《ハーフパンツ》、《ガンベルト》に《バーストガン》、両腕両脚に《スケール・オブ・ブルードラゴン》、顔に《アイマスク・オブ・アサシン》——を具象化させ、装着状態にする。

ちなみに《ハーフレザージャケット》は昨日とかさつきというか、船上で戦ってる最中にアイテム耐久度がゼロになったらしく、突然、カシャンと音をたてて消えてしまった。仕方ないので今は髑髏マークのついた黒いTシャツを羽織っているだけだ。

まあ、リンが武装商人筋から聞いた話によると、武器防具が壊れやすくなった一方、材料カードと呼ぶべきもののさえ確保できれば、もっと上等な武器防具が簡単に手に入る変更が加えられているとか、なんだとか。

(ここで手に入るなら……)

などと不埒なことを一瞬だけ考えたが、すぐ忘れることにした。
理由は単純——不公平だからだ。

P Oは1営業日中に最高3時間しかログインすることができない。徹底的に入れ込んでいる古参になろうと、右も左もわからない初心者だろうと、この制限から逃れることはできない。

だからこそユーザーはログアウト中にいろいろと考える必要がでてくる。

次のログインでなにをやるか。

タイムオーバーしないためにどう動くべきなのか。

限られた時間を有効に使う——ある意味、これこそがP O攻略の鍵じゃないかと俺は思っている。外装操作がどうか、思考操作がどうかというのは、枝葉末節の部分にすぎない。P Oというゲームの本当の肝は“時間の使い方”、すなわち時間そのものをリソースとみなせるか否かという部分……

だが、ここはその前提をくつがえしている。

リミットタイムの存在しないP O世界。詳しいことは聞いていないものの、もしここでのリソースの変化——アイテムやクリスタルの変化——が本家にも影響するなら、いろいろな意味でP Oは破綻してしまう。

(……まっ、市長もそのあたり、わかってるだろうし……別にいいか)

俺は肩を軽く揉みながら、ボックスの外に出てみることにした。

シュッとボックスのドアが左右に開く。

ざわめきが聞こえてきた。

(……んっ?)

踏み出してみる。

そこは恐ろしく巨大な闘技場……いや、観客席の上半分がカフェ化しているサッカースタジアムっぽい場所だった。

ボックスがあるのは観客席最上段をぐるりと取り巻く幅広の回廊部分だ。建材は全て木製であり、カフェ部分のテーブル間や各段の仕切りには生の茂みが使われているらしい。無論、仮想現実なのだから設定さえすればどんなものでもアリなわけだが、それにしても“自然と融合した理想のスタジアム”と言うべきものがそこにあるのだから……

「有名建築家のデザインだよ。まだ完成していないらしいけどね」部長様の声がする。

右横に顔を向けると——ヴィジュアル系バンドのヴォーカルでもやっていそうな全身これ金色の異様な男が立っていた。

「……………」

反応に困った。

純白肌に金髪のアートロングは、まあ、よくある組み合わせだから問題ない。身長が190近くあることや、いわゆる細マッチョ系の体型なもの、外装としては珍しくない変更点なので、よしとしておく。オプションが《青》の“竜眼”に似た赤い“猫瞳”なのもそう。逆に目立たないくらいだから、悪くないと言っておこう。

だが服装が変だ。

形状だけ見れば、和装の袴姿と言えなくもないが、その全てが黄金色なのだから目に痛いというか、センスが痛いというか。一応、袴のほうは少し黒っぽい金色にしてあるようだが……んっ？ 腰に巻いているやつ、帯じゃなく、まさか、しめ縄？ 後ろで大きく蝶結びされてるとか、そんなところか？ ついでに頭につけてる金色の輪っか、まさか金色に塗った茨の冠とか言うなよ？

「……ふん」

背後から別の気配。流れからすると電算2号だろう。

今度はセン斯的な意味で覚悟したうえで、肩越しに振り返ってみ

た。

「……………」

こっちはそこそこまともだった。

赤毛で褐色肌の巨漢。服装は、まあ、赤黒い着流しを着込んだうえで、袖を脱ぎ、上を垂らしっぱなしにしている感じだ。一応、レギンス的なものを履いているようなので股間がチラリなんてことは無い。ついでにマッスルな胸元から両腕、さらには顔などに線や円や渦巻きや波線などのシンプルな赤いタトゥーを入れている。

まだ常識の範囲内にある外装だ。あくまでもPO的には、という注釈がつくだろうが。

——シュッ

電算2号の向こう側、ボックスのドアが開き、誰かが出てきた。
新島だ。

ただ、髪が金色になり、編み込んでいない状態でサラリと背に流している。肌は濃褐色。一瞬だけ目があった時に見えた限りだと、黒い両目の瞳孔は縦に割れていた気がする。おそらく“竜眼”のオプシオンを選んだのだろう。ついでに服装は無地の白いTシャツ、膝丈のショートパンツ、太めのベルト、サンダルという初期装備だ。つまり、作り直したばかりの外装だということだ。

「ふっ」

部長様が鼻で笑ってきた。

「TUCKYOMI……いや、新島くん。君が実在現実偏重主義に
ツクヨミ ナチュラリズム
趣旨替えするとは、驚いたな。それとも、あれほど気に入っていた
胸が大きく、腰がくびれ、大人の魅力に満ちた外装はもう——
アバター

「消しましたっ」

彼女はお腹の前で自らの両手をギュッとつかみ合わせながら言い返していく。

「もう、AMATUも抜けましたっ。陣営も《青》にしました。電算部も、辞めました。だからもう……本当に、もう、これで二度と……」

「約束は守るよ。もちろん……」

部長様が俺にニヤツと笑いかけてくる。

「君の素敵なナイト様が、この僕に勝った場合は……ね」

「そんなっ、約束が……」

「おい」

俺はスツと一步踏み出すことで、部長様と新島の視線の間に割り込んだ。

「てめえらの問題に俺をまきこむな。全員、つぶすぞ」

「ふん……身の程知らずが」

電算2号が人を小馬鹿にするように笑った。

かと思うと、急に表情を引き締め、部長様に向けて恭しい態度をとった。

「大御神様。おおみかみ 電腦の神髓を知らぬ井の中の蛙をかわずこらしめるのに、な

にも大御神様、自らが手を下す必要は無いと存じ上げます。ここはどうか、このSUSANOOHスサノオにお任せください」

「ふむ……だが今日は、観客が多いぞ？」

「承知の上です」

「よかろう。AMATUの力、思う存分、示すがいい」

「はっ！」

などと部長様と電算2号がナリキつてるところは無視するとして。

（観客？ ……ああ、いるな。確かに）

スタジアムの観客席には、かなりまばらな感じではあったが、確かに他のユーザーの姿が幾つかあった。いずれもカフェのテーブルに腰掛け、なにをするでもなく話し込んでいるだけのように見える。（なんのためにログインしてんだ？）

グラウンドは未使用状態だ。青々とした芝生の中に無数の巨石が転がっているという、対戦ステージとしてはそこそこ面白そうな場所に見えるが、誰もそこに降りていこうとしない。ということとは、本家の闘技場というトレーニングのように、パーティ単位などで何かする隔離されたブロックが別に用意されているのだろうか？

などと悩んでいるうちに、ナリキリごっこは終わったらしい。

「《青》のSHIN、下に降りろ」

電算2号がウィンドウを開きながら告げてきた。

「どうやって? ……ああ、いい。わかった」

ダブルタップでウィンドウを展開すると、アバターウィンドウの代わりにコンテンツウィンドウというものが開いたのだ。そこには“アバタッシュップ”、“フード&ドリンク”、“バトルグラウンド”というシンプルなロゴが表示されている。迷うことなく“バトルグラウンド”を選ぶと、注意事項が表示された。

バトルは予約制。

デスペナルティは無し。ただし、試合ルールを変更すればありにできる。

キャンプはカフェテーブルで可能。予約時にすませておくこと。

「ルールは?」

俺がそう尋ねてみると、部長様が代わりに答えてくれた。

「ノーリミットで1対1の時間無制限1本勝負」

「ノーリミット?」

「カードやアイテムに制限を加えない、という意味だ。……ああ、アビリティを変更するなら今のうちにすませたまえ。おまえは我らと違い、戦いの準備を整えているとは思えないからな」

部長様は口調まで変わってしまっている。ナリキリにはよくあることだ。

化粧ひとつで気持ちが変わるように、造形まで違う外装を使うと、まるで別の人格が生まれたかのような感覚に陥ることがある。これが過度に進むと精神症になるが、コントロールできるレベルなら、むしろストレス解消になっていいらしい。というより、ネット社会では誰もが2、3の全くことなる人格を演じわけているそうだ。詳しいことは俺もよくわからないのだが。

「俺ならいつでもいいぞ」

念のためアイテムを確認したが、問題はなかった。

海水浴としゃれ込む前に整理しておいたのが、こういう形で役に立つとは……やはりリンの言うとおり、節目、節目にはイベントリを整理するのが正解のようだ。今後はちゃんとするようにしよう。「しからばっ！」

電算2号が仰々しい声をあげつつ、ばんっ、と自身のウィンドウを強く叩いた。

俺の眼前に新しいウィンドウが展開する。

内容はバトル参加の確認。当然、YESを選択。すると視界の片隅でカウントダウンが始まった。バトルフィールドとなるグラウンドまでの転移時間のカウントダウンだ。

「あ、あの……」

新島が電算2号の背後から俺に声をかけてきた。

だが電算2号が、俺と新島の間に割って入った。

「貴様！ まだ裏切りたりないという気か！？」

「どけ、ザコ」

俺は電算2号を押しつけようとした。

これには電算2号もさすがに激昂してくる。

「ぞ、ザコだと！？ 貴様こそ神髄の一端も知らぬ名ばかりのザコのくせに！！」

「いいからどけ」

邪魔なので自分から横にズレることで新島と話そうとする。

だが意地になった電算2号が体を割り込ませ、邪魔をしてきた。

俺はあきれ顔で——と言っても《アイマスク・オブ・アサシン》のせいで目の表情までは伝えようもないが——マツチョ化している電算2号を見上げた。

「おまえ、小学生か」

「貴様こそ！」

と、電算2号が叫んだところで時間がおとずれた。ふわっと視界の全てが白くなる。

次の瞬間には、青々とした固めの短い芝生が生い茂る中に巨石が

点々と転がっているという広々としたグラウンドの一角に立っていた。

場所はグラウンドの中央にかなり近い。

向かい合うようにして電算2号の姿も見えた。

(……んっ?)

視線を感じる。ひとつやふたつではない。ロックオンされた時のような鋭さこそないが、数え切れないほどの細い棒で今にもつつかれようとしているような違和感がある。正直、モゾモゾしてきて落ち着かない。どうせ観客の視線なのだろうが、そうだと分かっているでも気持ちのいいものではない……

—— R E A D Y S E T

いかにもといった感じの女性的な合成音と共に、俺と電算2号の間に数字の9が出現した。これが1秒ずつ8、7、6と変わっていく。試合開始のカウントダウンのようだ。

「さて……」

俺はガリガリと頭をかきながら電算2号のもとへと歩き出した。

向こうは不機嫌そうな様子で何か、長いものを具現化させつつ、同じように歩き出してくれる。

具現化したのは、餅つきの杵のような長柄物だ。

槍系には見えない。ということは、杖系に分類されているのだろうか？

だとすると向こうの基本は呪文攻撃？

(……めんどくせえ)

性能がわからない杖系魔杖が相手というあたりが、特に面倒くさい。おまけに電算2号を倒せば終わり、というわけにいかないのだから、輪をかけて厄介だ。

「おしっ」

俺はカウントダウンが3秒のところで急に立ち止まった。

同時に、右腕を横に伸ばし、あるものを具現化させる。

具現化に要した時間は1秒。

「き、貴様っ!!」

なにやら電算2号がうろたえている。

「なんだそれは!？」

「なにつて……」

ガチャッ——とシヨルダーベルトでつり下げた回転式六連機関砲^{プラスチック}型魔杖^{ルカン}の前方取っ手と後方取っ手をしっかりと握りしめる。

「面倒な時には、これに限るだろ」

試しにトリガーを引いてみると、キュルキュルキュル、と砲身が回り出した。

カウントダウンは残る1秒。

「じゃ、いつてみよう」

「ま、待て！ 貴様、ひ——」

おそらく卑怯と言いたかったのだろう。だがその声は、“Rea
dy set”という文字が消え去ると同時に、俺がもう一段階、
トリガーを強く握りこんだことで聞こえなくなった。

代わりに響いたのは、爆音にも近い慣れした親しんだ2万円攻撃
の掃射音。

炎と煙を吹き出す砲身。

頭を抱えてうずくまろうとしたマツチヨ。

えぐれる地面。

碎ける巨石。

壊れた人形のように手足を踊らせてのたうち回るマツチヨ。

2万クリスタル分の専用弾を吐き出し終えた頃には、顔中を涙と
鼻水と唾液で汚しまくった電算2号が、必死に丸まりながらガキの
ように泣きじゃくっているという、なんとも言い難い結果になった
わけで……

だが、俺の視界に映っているやつのHPバーは、まだ半分も減っ
ていない。

頑丈なやつだ。

おそらく、多少の攻撃を無視できる程度の堅さをアビリティカー
ドなどで確保したうえで、あの杵のような魔杖で一撃必殺の攻撃を
仕掛けるというのが、こいつの必勝パターンなのだろう。

ところが、今回はそれを始める前に、俺が物騒な獲物をひっぱり
だしてきた。

「……そういやこれ、10個と出てなかったな」

もともと《ブラストバルカン》はレアな銃系魔杖だ。俺たちです

念のため、新たな専用弾のカードを引き出しておく。
直後、ボクシングのゴングのような、カンカンカン、という音が大きく響いた。

——WINNER 【SHIN】

女性的なマシンボイスによる宣言。

刹那、亀になった赤毛マツチョの傍らに部長様がフワッと出現した。

表情は、かなり険しい。

まあ、あれだけ豪語しておきながら、このていたらくだ。

「おい」

俺は《ブラストバルカン》をウィンドウに戻しつつ部長様に声をかけた。

「すぐやるか？」

「卑怯者！」

部長様はカッと猫目を大きく見開きながら怒鳴りつけてきた。

「開始と同時に重火器で力押しとは、卑怯にもほどがある！ 恥を
知れ！！」

「避けるよ」

俺はあきれ顔で言い返した。

「耐えて、壁張って、避ければいいだけの話だろ」

「耐えられると——！！」

「そいつだって、全弾浴びたくせにHP、3分の1ぐらいしか減ってなかっただろ」

「貴様は耐えられると言う気か！？」

「当然だろ」

なにを言ってるんだ、このキンキラ部長様は。

「こんなんじゃ死んでたら……………」

おっと。ア（・）レ（・）のことは隠せる限り隠さないと。

「とにかく。やるのか、やらないのか。どっちだ」

俺は面倒くさそうに言い放った。

実際、面倒だ。

陣営抗争でPKしまくったという話だが……その中に、リンは含まれていない。

つまりは、そういうことだ。

「……よかろう」

部長様は、ばさっ、と長い髪をかきあげた。

その瞬間、俺の目の前にウィンドウが強制展開した。バトル申請のウィンドウだ。条件はノーリミットの1対1、時間無制限の2本先取勝負。どうやら1本勝負はやめにしたらしい。

(なるほど)

今さらだったが、俺は連中が何を企んでいたか、ようやく理解できた。

もともと連中は、さっきの戦いの逆を狙っていた——不意打ちで手も足も出なくなるのは俺のほうで、向こうは高笑いでもあげながら蹴り続け、ぽつぽつという観客に強さを誇示する。そのうえで俺に勝った男として名声を獲得する。それが連中の目的だったのだ。ところが、あろうことか俺のほうが不意打ちを仕掛けてしまった。

おかげで予定が狂いまくった……そんなところだろう。

あと、これは俺の推測なのだが、電算2号のアビリティは徹底的に防御を固めるものばかりにしてあったのだと思う。それこそ、普通の攻撃であれば痛さなど微塵も感じないところまでやっていたはずだ。その結果、ダメージを食らうこと、そのものに慣れないまま今日に至ってしまった。だからこそ、『ブラストバルカン』程度の痛みと衝撃でパニックを起こしてしまった……。

(そうなる……向こうの仕掛けは、杵か?)

よくわからない。

わからない時は——トライ&エラー。当たって砕けろ。それがゲームの鉄則だ。

俺はバトル申請を受諾した。

今度は電算2号が強制転移していき、残された俺と部長様の間で、

残り30秒からカウントダウンがスタートした。

「3本勝負、だよな？」

俺は肩のストレッチをしながら尋ねてみた。

「……ふっ」

キンキラ部長様は、長い髪をかきあげながら俺に背を向け、離れていく。

どうやらそれなりに距離を置くつもりらしい。

まあ、いいか。

俺は言おうと思ったことを告げておいた。

「1本目は100数えるまで防御に徹してやる。その間に……“電脳の神髄”だったか？ おまえが俺の相手になるってところ、見せてくれ」

「ふん。大言壮語はそれくらいにしたまえ」

部長様は10メートル離れた地点で立ち止まり、くると俺に向き直った。

「我を誰と心得る」

「カルトの教祖様だろ」

「……貴様にチャンスをやる」

キンキラ部長様は、胸元に飛び込んでくる誰かを迎えるように両腕を広げた。

「未熟者の心を折った先ほどの一撃、我に打ち込むことを許す。もつとも、我はかすり傷ひとつ負わないことを、ここで宣言しておこう」

「はいはい」

面倒なので、言われた通りに《ブラストバルカン》を思考操作で具現化した。

カウントダウンは残り8秒。もう少しだけ猶予がある。

「おい、キンキラ」

「……アマテラスだ」

「これで俺が勝ったら、俺にも、新島にも、二度とちよっかいだす

な。いいな」

「よからう」

仰々しくキンキラ部長様がうなずいた。

「ならば、我が勝った場合、おぬしとあの娘には、我が忠実なる下僕となってもらう」

「断る」

トリガーを握る。砲身が、キュルキュルキュル、と回り始める。

「忘れたのか？ てめえは新島を使って俺をよびつけたんだ。その落とし前、ログアウトしたら拳で支払ってもらうつもりなんだが……それくらいこつちがムカついてること、まだわかってねえのか？」

「脅迫かね？ 傷害罪で警察の厄介になりたいのであれば――」

「なってやるよ」

俺が言葉を割り込ませると、部長様は眉間にしわを寄せた。

「何度でも言ってる。俺は、ムカついてんだ。とりあえず――」
カウントダウンが0になる。

「死んどけ」

問答無用でトリガーを最後まで強く握りこんだ。

爆音と共に銃火が吹き荒れる。

その直前、キンキラ部長様は両手を前につきだしていた。その手の中に、一瞬である杵が出現している。思考操作によるものだろうが、それにしても驚異的な具現化スピードだ。いや、もしかすると具現化の速さ、そのものが思考の影響を受けるのかもしれない。それに気づけただけでも、この戦いはそれなりの価値ができたように思える。

などと考えているうちに、バルカンの銃弾が雨霞と部長様に襲いかかった。

観客席がどよめいていた。

俺も、

(……ほう)

と、少しだけ部長様を見直していた。

部長様は《ライトシールド》の呪文で《ブラストバルカン》の攻撃を全て防いでいる。

理屈上、ありえないことだ。

なにしろ《ブラストバルカン》1発分の破壊力は《ライトシールド》数枚分に匹敵するのだ。つまり出すだけ無駄。せめて《青》陣営で言えば《トライデント》の《ウォーターシールド》のように、属性付きのスペルシールドなら強度も上がっているので多少はどうかできるのだが……

だがしかし、部長様は間違いなく白いスペルシールドで《ブラストバルカン》を防いでいる。1発だけではなく、何十発も、スペルシールドに当たるものはすべて、完全に防ぎ続けている。

もっとも、なかなかの暴れ馬である《ブラストバルカン》は、撃つてる先から銃口がブレていくため、よほどの怪力の持ち主か、銃弾の（・）魔女でもなければ全弾が一ヶ所に集中することはない。つまりまあ、スペルシールドを外れた弾丸が地面やら岩やらを碎いていき、その破片が部長様のキンキラな衣装を汚していつているわけ……ダメージは通っていないから、宣言通り、かすり傷ひとつ負っていないと言えなくもないが、全弾撃ち尽くした頃には、主に袴のあたりが跳ね上がった土埃でひどい有様になっていた。

「はあ、はあ、はあ……」

全身汗だくにもなっていた部長様は、杵を地面につきたて、俺をジロツとにらんだ。

「どうだ！ 驚いたか！！」

「……ああ、驚いた」

俺は《ブラストバルカン》を収納、頭をかきながら今の手品のタネを指摘してみた。

「思考操作による呪文の連続使用」

部長様は目を見開いている。即座に凶星をつかれ、驚いているらしい。

「驚くことないだろ」

「まさ……か……」

「呪文は効果が終わるまで再発動することができない。しかし、終わってさえいれば、再発動できる。だったら弱い呪文でも、発動と終了がほぼ同時になるような状況下でさえあれば、マナの続く限り、連続して使うことができるんじゃないか……誰だって真っ先に考えつくルールの穴だ」

俺は両手を後ろに回した。

「といったところで、今度はおまえの番だ。100数える間、無抵抗でいてやる。じゃあ……」

息を吸い、止め——わざと早口で数え始める。

「1、2、3、4、5、6、7——」

「……き、貴様……！ どこまでも我を愚弄する気か……！」

衝撃から立ち直った部長様は呼び出した《マナカード》を装填したうえで、勢いよく、杵を振り上げた。

「ぬおおおおおおおおお！」

キンキラ部長様が雄叫びと共に駆け寄ってくる。

杵のつくところに白い光球——射出前の《ライトアロー》が出現していた。

あれを叩き付けるつもりらしい。

距離は約10メートルから少しずつ……………

(……………)

遅い。走るのが遅すぎる。

電算2号同様、アビリティを全て防御に回しているからだろうが、あまりにも動きが亀だ。これじゃ、かもしにくれと言ってるようなものだが、本当にそれでいいのか？

ちなみに俺のアビリティは得意魔杖特化系のバランス型にしてある。

職種系は《グラップラーLv5》、《ランサーLv3》、《キャスターLv4》の3種。

増強系は《ストレンジスLv2》、《ディフェンスLv5》、《ダイエットLv3》、《スキングードLv2》、《アイアンフィストLv5》、《アイアンレッグLv5》の6種。

付与系は《ライトフィストLv3》、《ライトレッグLv2》、《エナジーショットLv3》の3種。

見ての通り、拳闘系魔杖寄りのレシピなのだが、実際には槍で戦っていることが多いという、けっこう謎な感じになっているのは秘密だ。

そういうわけで。

(……マジで耐えてみるか)

俺は自分の限界を確かめてみるべく、この勝負、1本目を捨てることに決めた。

部長様が迫る。

このまま行けば、杵が頭に振り下ろされることになりそうだ。

(……………)

さすがに頭は怖い。左腕で受けることにする。

《アイアンフィストLv5》と《スキングードLv2》、さらに《スケール・オブ・ブルードラゴン》で固めている左腕だ。よつぱどの攻撃でない限りダメージは通らず、痛みや衝撃も嘘のように打ち消してくれる。

もつとも地下では、これくらいの守り、軽々と吹き飛ばすような化け物どもがけっこうようようしていたりするのだが。

(さっ、お手並み拝見……)

と思った矢先だった。

杵先端の光球から球状のワイヤーフレームが広がった。しかも、大きくなるにつれて球の中心は杵から離れていき、決して杵の持ち主はワイヤーフレームの中に含めようとしないうまま……

「しまっ——」

咄嗟に俺は飛び退けようとした。だがその頃にはもう、部長様は、巨大化したボール状のワイヤーフレームを虫取りの網にでも見立てたかのように、杵を勢いよく振り下ろした。その時の部長様の表情は、嬉々としながらも一抹の不安をぬぐえない、といった実に複雑なものだった。

安心しろ。さすがにこれは、俺もやばい。

——ドドドドドドドドドドドドドドドドッ!!

ドフツという単発の爆音が間断なく全方向から轟いた。猛烈な衝撃と熱が全身をくまなく傷つけていく。

視界の左側に表示されている俺のHPバーは猛烈な勢いで減りだした。

俺は歯を食いしばった。

(くそっ、アロー系じゃなくボール系か!?)

攻撃呪文は今のところ、単体攻撃用のアロー系と範囲攻撃用のボ

ール系が用意されている。前者のダメージが後者より高いため、杖系のユーザーの大半は——俺を含め——アロー系を好んで使う傾向がある。だからこそ部長様もそうだろうと、つい思いこんでしまった。

失態だ。

我ながら自分自身に腹が立つ。

「……ちっ」

完璧なまでに、連続発動する《ライトボール》の範囲内に取り込まれている。

抜けられないこともない。

だが、かなり派手なことをする必要がある。

あれだけ言っておいて、今さら、そんなことは俺にできない。

「終わりか」

俺がそうつぶやいたと同時に、HPがゼロになった。

—— HIT POINT is EMPTY. YOU DEAD.
例のマシンボイスが聞こえた。

衝撃と熱が消え、視界がそれまでとは違う白さに染まったかと思うと、俺はこのボックスの椅子に座っていた。デッドジャンプさせられたのだ。

「……コロセウム以来か」

俺のデッド経験は、相棒とガチで殺し合ったあの時が最初で最後だ。リンもそう。死にかけたことなら数え切れないほどあるが、そのたびに片方がフォローに入る——もしくは手加減する——ため、意外とどうにかなっているのだ。

それにつけても……我ながら情けない。

「予想できただろ。ボール系だってことぐらい……」

確かに連続発動でPKをやるなら、アロー系のダメージに拘る必要はなくなる。むしろ、ピンポイントで狙わなければならないアロー系より、おおざっぱな狙いでも相手に攻撃が当たるボール系のほうが有利だ。

そんなことは考えるまでもなく、わかっていた。

ああ、わかっていた。

見抜いたとしても結果が変わっていなかっただろうこともわかっている。

そう、わかっている。

どうしてこんなに頭に来るのか、俺自身、不思議なくらいだったが、とにかくにも俺自身にムカついて仕方がない。おそらく、慢心で予測を違えたことが腹立たしいのだと思う。

「……………ちっ」

舌打ちをしながら立ち上がる。

視界の片隅でカウントダウンが始まっていた。

インターバルは60秒らしい。

俺はもう一度舌打ちをすると、頭をかきながら外に出た。

相棒^{リン}が不機嫌そうに立っていた。

「……………」

「……………」

なにはともあれ。

「……………おい」

とりあえず声をかけてみる。

「なによ」

ムツとした顔で言い返してくるその外装^{アバター}は、間違いなく相棒^{リン}のものだ。

「……………なんでいるんだ。ここに」

「こっちの台詞よ」

「例のカルトなアマテラスに呼び出された。そっちは？」

「ハメられた。蒼海に」

「蒼海？」

「ハメたというのは心外だな」

相棒の向こう側には、海色のノースリーブロングコートを羽織った妙にさわやかそうな男がいた。鳥の巣のような頭とダルそうな垂れ目、額の一本角が特徴的な男だ。その傍らには海色のアオザイを上品に着こなす胸の大きな女性の姿もある。どちらも見覚えがあった。見た瞬間、あの日のことを思い出していた。夕日がキレイだった俺とリンの隠れ家的な宿を去る原因になった、あの日のことを。

「てめえら……」

「詳しいことはまたあとで」

鳥の巣頭はグラウンドを一瞥した。

「念のために言っておくけど、東京のβ1（ビーワン）を集める話はずっと前からあったことなんだ。Ca（クーア）だけじゃ、祭りにならないからね。彼はそれを利用して、“SHINを倒した男”になりたかったようだけど……」

奴は苦笑する。

「それが実現しそうで、すこし驚いているところさ」

「次はてめえだ」

俺はカウントダウンが20を切ったのを確認した上で、ウィンドウを開いた。

「次？」

鳥の巣頭が不思議そうに尋ねてくる。

俺は鼻で笑った。

「決まってるんだろ……あのキンキラの次は、てめえをあそこでぶちのめすって言ってるんだよ」

そのまま俺はグラウンドに転移しようとした。

「シン」

転移の直前、相棒が呼びかけてきた。顔を向けた瞬間には、もう俺は転移に入っていたが、その一言は、しっかりと耳に届いていた。

「――許す」

次の瞬間、俺は巨石が点々とする芝生に覆われたグラウンドに出現していた。

「あーっはははははははは！」

キンキラ部長様は腹を抱えて笑っている。喜んでいところらしい。

「なんだ、あっけないじゃないか！ もっと耐えると思ったら、他のやつらと同じ！ あはははははははは！ なにが神様だ！ なにがSLだ！ 全然、全然すごくないじゃないか！ あーっはははははははは！ カウントダウンは10を切った。

（さて……）

困ったことになった。

なにが困ったかといえば……相棒に、許されてしまったことだ。なにを許されたか？

制限だ。

いざという時に備えて一切情報を出していない切り札を、なんでも使っていていいと言われてしまったのだ。

（……いや、あれは使っていていいじゃなくて……“使え”、だな）

より正確に言うなら“見せつけろ”かもしれない。

相棒は相棒で頭にきているようだ。

まあ、俺もそうだが。

だが初公開の相手が、こんなクズ野郎だと思うと……いや、お披露目相手としては、そう悪くない相手かもしれない。なにしろこいつらはガチガチに守りを固めている。装備を軽くしている理由まではわからないが、瞬殺されないことは間違いない相手だ。

気になるのは、観客が蒼海騎士団に絡んだ連中ばかりらしいというところだ。

ムカつく。

あの鳥の巣頭の垂れ目を思い出すだけで、妙にムカついてくる。

「あーっはははははははは！ さあ、《青》の神様！ そろそろ始まるぞ
！！！」

「でも、すぐ終わるけどね！ あーっはははははは！」

俺は部長様を一瞥すると、首を軽くもんだ。

「今さらなにを言っても負け犬の遠吠えだよ！ あーっはははははははははははははははは！！」

「おまえがさっきやったやつ、俺たちはずっと前から裏技って呼んで、自分たちなりに使い込んでるんだが……あとで教えろ。おまえらがなんて呼んでるか」

杵を振り上げている部長様は、笑顔を凍らせ、驚きのまなざしを向けてきた。

カウントダウンが終わろうとしている。
6.....5.....4.....

俺は軽く膝を曲げた。カウントダウンが終わる。

刹那、俺は《スケール・オブ・ブルードラゴン》の固定アビリティ《……》を発動させた。

四肢の鱗がすべて逆立ち、青い燐光を放ち始める。

腕力も脚力も何もかも2倍に強化された俺は、一瞬でキンキラへと肉薄、やつの目元を左手がガツシリと鷲掴みにした。

向こうに反応する暇など与えない。

そのまま俺は《エナジーショット》——掌から《ライトアロー》を放つアビリティ——を連続発動させた。

「ぐあ ああああああああああああ！？」

部長様が奇声を張り上げた。

《エナジーショット》のせいだけではない。俺が《スケール・オブ・ブルードラゴン》を發動させたまま、渾身の力でアイアンクロ―をかけ続けているせいだ。

いくらアビリティカードで守りを固めていようと、逆鱗を解き放っている今の俺の握力で顔を捕まれたらたまったものじゃないはずだ。実際、リンはこれをやられると速攻で負けを認める。おかげでこいつはリンと喧嘩する時でさえ、禁忌技にしているぐらいだ。

「ああああああああああああ——」
悲鳴が急に途絶えた。

—— W I N N E A R 【 S H I N 】

マシンボイスが勝利を告げると同時に、部長様の外装アバターが消えてしまった。さっきの俺のようにデッドジャンプしたのだ。

「なに地味な勝ち方してんのよ」

そう告げながら、俺の背後に相棒がスッと転移してきた。

「……………」

どうして転移できる？——と疑問に思いながら振り返ると、

「同じクランかパーティのメンバー、インターバル中なら仲間のところに行けるのよ。なんか文句ある？」

と言いつ返ししてきた。

無論、文句なら、ある。

「地味で悪かったな」

「ア（・）レ（・）でやっちゃえばいいじゃない」

「逆鱗これで充分だろ」

発動から100秒過ぎると、燐光は消え、逆立った鱗は元に戻ってしまった。これ1回につき1万MPも装填しないといけないアビリティだが、1万MPになるよう融合した《マナカード》は10枚以上、常に持っておくようにしてあるため、特に大きな問題はない。ちなみにアビリティの名前は《ゲキリン・オブ・ブルー》。市長には、あまりにもあまりな名前なので改名するよう進言してあるが、PO全体のネーミングセンスがけっこうすさまじいところを考える……あまり期待しないほうがいいだろう。

「だいたい、ア（・）レ（・）はまだ不安定すぎるだろ」

「だから試すんじゃない」

「ここで？」

「ここで」

「でもなあ……」

直後、部長様がグラウンドに戻ってきた。

「き、貴様！ 卑怯だぞ！！」

第一声が、これだ。

「スサノオを珍しい火器で脅したばかりか、我に対しても、そんな、貴様らしき持っていない装備でゴリ押ししてくるとは――」

「黙れ」

俺は、カウントダウンがまだ30秒以上あるのを確認しながら部長様に向き直った。

「ノーリミットだろ。言い出したのは、そっちだ」

「うぐっ……」

「なんならレギュレーション、今から決め直せ。ただし、1本勝負だ。それで決める」

「……くっ」

歯を食いしばった部長様は、その場でウィンドウを展開し、なにかを入力していった。

と、俺の前にウィンドウが強制展開する。

バトル中断の同意を求めるウィンドウだった。

俺は深く考えず、YESを押した。

すると続けざまに別のウィンドウが出現した。バトルロイヤルⅡポイントマッチ、ノーリミット、制限時間30分への参加募集を促すウィンドウだ。

「なんだこれ」

「早く参加しろ！！」

部長様は焦り気味に言い返してくる。

「あっ」とリン。「わたしも参加できるってこと？」

見ると相棒の前にもウィンドウが展開している。

まあ、それもそうか。ポイントマッチという部分が謎だが、バト

ルロイヤルなのだから他の連中が参加できてもおかしくない。気になるのは、わざわざそんなもので、部長様がなにをしようとしているのか、という部分だが……

「早くしろ!!」

部長様は焦っている。その理由は、すぐわかった。

「なにか楽しいことになってるみたいだね」

鳥の巣頭だ。

奴だけじゃない。その背後には次々といろんなユーザーが転移してきている。大多数は《青》系のようだが、中には《赤》っぽい機械の体を持っているユーザー、《緑》っぽいケモノ耳をはやしているユーザーなどもある。

おそらく、この全員が本当の意味での蒼海騎士団のメンバーなのだろう。

「邪魔すんな」

俺は近づいてくる鳥の巣頭に背を向けつつ、バトルロイヤルへの参加申請を行った。

部長様はそれを確認するが早いか、大急ぎで何かを操作していく。新たなウィンドウが表示される。

バトルロイヤル参加受付終了のお知らせと今回の参加者リストのようだ。少し気になるのは、リストには名前の横にCやBなどのリンク表示っぽいものがあることだ。俺とリンの表示はF、部長様がS、鳥の巣頭を含む蒼海騎士団の連中はCかBとなっている。

「……おっ、“SUSANNO—OH”？ どこだ？」

リストに名前が出ているので探してみたが、電算2号の姿はどこにも無かった。

隠れているらしい。

かと思ったら部長様もどこかに行ってしまった。

2人で一緒に隠れてしまったとか？——まあ、それも悪い作戦ではない。すでに視界の片隅ではカウントダウンが60から始まっており、0になると同時に大乱闘が起ることは誰もが予想できる状況なのだから……あっ、バトルロイヤルってことは、まさか相棒ともここでやり合うとか？

「なあ」

「休戦協定でしょ。わかってるわよ」

リンはウィンドウを開き、アイテムを確認しながら言い返してきた。

「それよりバルカンちょうだい」

「……おい」

「念のためよ」

「作戦会議かい？」

鳥の巣頭がアオザイ女と一緒に馴れ馴れしく俺たちの会話に割り込もうとしてくる。

俺はため息をついた。

「なあ……おまえがここにいる経緯、聞いていいか？」

「アオザイ着てるのがうちの……私立聖アンヌ女学院高等部の生徒会長一派の幹部で茶道部の副部長でもある北条院藍子ほうじょういんあいこさん。テスト1申請の検査に行った病院でわたしを見かけて、ずっと目をつけられてたってわけ」

「だめじゃない、鈴音さん。それ、個人情報こじんけいじょうの漏洩よ？」

アオザイ女がクスツと笑った。

「それとも、私が団長に教えたことへの意趣返し？」

凶星らしく、相棒はムツとしたまま黙り込んでしまった。

俺もなんとなくムツときた。

それを察したのか、鳥の巣頭が少し大きな声で会話に割り込んできた。

「ところで——！」

「黙れ」

俺は自分のアイテム・ウィンドウ（インベントリ）を確認、消耗品をクランウィンドウから補充、装填の必要なものは装填をするという作業を続けながら、忌々しげにつぶやいた。

「Xchの、俺の書き込み。知らないのか、てめえは」

「君の書き込みというと……どれのことだい？」

俺はため息をつき、ウィンドウを閉じた。

カウントダウンは30秒を切ろうかというところ。まだ少し時間がある。

「つたく……おい、新島！ いるんだろ！ 来い！！」

いることはわかっている。リストのランク表示、俺とリン以外にもう1人、Fランクのユーザーがいたのだ。

名前は“TOMO”。

新島の下の名前は思い出せないが、こういう状況でわざわざバトルロイヤルに参加してくる最低ランクらしいユーザーとなると、どう考えても新島以外に考えられない。だからこそ、振り返りながら怒鳴りつけてみたのだ。

「さっさと出てこい！！」

さらに怒鳴りつけると、案の定、少し離れた巨石の陰から新島が出てきた。蒼海の連中からも離れた場所で、ひとり、居場所もなく困っていたところらしい。

「……来い」

もう呼びかける。やっと新島がこっちに来た。

「時間が無い。端的に答えろ。やつらの持ってた杵、あれはなんだ？」

「あ……その……《ウッドハンマー》^{スベル・ワンド}っていう呪文系魔杖で、《緑》だと珍しくない魔杖で………」

「固有アビリティは」

「《ライトアロー》と《ライトボール》と《ライトシールド》……です」

「これから奴がやろうとしていることに、思い当たることは？」

「それは——」

^{クランアイテム}
「氏族装備だよ」

鳥の巣頭が割り込んでくる。

「彼らはまだ氏族を結成していない。でも、ここのバトルロイヤルはクランアイテムの使用が許されている。だから——」

「トモ」

新島と言いかけた自分をギリギリで制しつつ、俺は新島あらためトモに呼びかけた。

「なにを持ってた」

「ゴーレムですっ」

今度はトモが即答した。鳥の巣頭は、やれやれ、とため息をついている。

カウントダウンは10秒を切った。

「ああ、そうそう——リン、これが元凶の元ツクヨミ」

「知ってる」

リンは両腰の《バーストガン》を確認しながら応えた。

「あんたが死ぬ少し前に挨拶したから」

「あー、さっきか」

「そつ。さっき」

カウントダウンは5秒を切った。

背後の蒼海騎士団は壁役の甲冑盾騎士、削り役らしき槍や剣を持つている連中、これらの背後でカードを何枚も手にして打ち合わせしているのが呪文屋や治療屋だと思われる。こうして見ると、蒼海の連中は集団戦闘の練習をかなり積んできているようだ。少なくとも役割分担はしっかりとしているようだが……

カウントダウンは3秒を切った。

「じゃあ……」

俺はリンに向けて苦笑した。

「やるぞ」

「OK」

相棒は両手の銃の安全装置をカチカチッとはずした。

— BATTLE START

マシンボイスが聞こえた。

その瞬間、俺は逆鱗を輝かせ——振り向きざまに拳を繰り出した。鳥の巣頭の顔面に右拳がめり込む。かと思うと、鳥の巣頭の体は、

少し奥に控える蒼海騎士団の連中のところまで吹き飛んでいった。多分、俺より背が高かったせいだろう。顔面を狙ってストレートを放ったつもりだが、高さがあったせいで、微妙に上へと殴りあげてしまったのだ。

「えっ——」

アオザイ女が驚きながら吹き飛ぶ鳥の巣頭を目で追いかけたが、その腹に、相棒は両手の《バーストガン》の銃口をぴたりと押しつけている。

「藍子様」

リンは上品な笑みを浮かべた。

「ごきげんよう」

そのまま2丁の《バーストガン》が火を吹いた。吹きまくった。腹部を押さえようとしつつ、突然の凶行に対応しきれないまま芝生のうえに転がっていく相棒の先輩のアオザイ女。リンの紹介からすると、俺なんか想像もつかないほど上流な世界に生きている超お嬢様なのかもしれないが、こうなってしまうとお嬢様もなにもあったものじゃない。

と、相棒が俺を見た。視線がかみ合う。

「……………」

「……………」

俺たちは無言のまま、ニヤツ、と笑いあった。

蒼海の連中が騒ぎ出したのは、この時になってからだ。

「な、なにしゃがる!」

「だ、団長!　しっかりしてください、団長!」

「リユーネさんまで!」

「おまえら!　こっちは敵じゃないだろ!」

ここに来てまだそんなことを言っている上に、現在進行形で撃たれまくっているアオザイ女を助けようもしない。なかなかもって、実に使えない連中ばかりのようだ。それだけ組織化が進んでも言えそうだが。

一方。

——ゴゴゴゴゴッ!

俺たちから見て蒼海とは逆の方向から地鳴りのようなものが響いてきた。

巨石のひとつが、震えながら盛り上がっている。

かと思うと、巨石の脇の地面が水面のように盛り上がった。そこからズサササッと土砂をかきわけながら石造りの腕が突き出てきた。

——ズンッ!

巨大な手は、地面につくだけで揺れを生んだ。

「あーっはははははははは!」

どこからともなくキンキラ部長様の高笑いが「聞こえてくる。

「ノーリミットを承諾したのは貴様だぞ、《青》のSHIN!!」

「そ、そうだ! おまえが悪いんだ!!」

ゴゴゴゴゴッ——つと、もう1体、同じような巨体が起きあがる。

声は電算2号。多少は元気になったらしい。

「《ロックゴーレム》は《ストーンゴーレム》より上だぞ!! 強いんだぞ!!」

訂正。まだ尾を引いているようだ。

まあ、それもそうだろう。いずれ治るにしても、今すぐではないはずだ。

「シン!」

相棒が目を輝かせながら俺を見た。

「2匹いるんだから、1匹ちようだい!」

「じゃ、終わるまで俺は向こう」

と、隊列を組みだした蒼海のほうを顎で示した。

リンは一瞬だけ悩んだが、すぐ、うなずいてきた。

「でも、あまりは全部わたしの。OK?」

「OK、相棒」

俺は右拳を突き出した。

リンは満面の笑みを浮かべながら、拳を拳で殴り返してきた。

ようやくの、この顔だ。

しかしまあ、巨大な怪物と戦えるのがうれしくて心から笑顔になる、なんていう女は日本中を探してもコイツぐらいしかないような気がする。もっとも、類は友を呼ぶ、というだけの話しなのかもしれない。

いずれにせよ。

俺が蒼海のほうに突撃をかますなり、我が相棒は部長様と電算2号に、こう呼びかけた。

「よし……ねえ、スサノオはどっち？ アマテラスのゴーレムはシンのために残してあげるから、スサノオのゴーレム、手をあげえ！」

「な、なんだおまえ！？ 邪魔すんな！！」

「ああ、こっち？」

「いいからどっかいけ！ 僕の相手は——」

「あんた……いい度胸してるわね」

リンはニヤツと笑うと、《バーストガン》を腰のホルスターに収めた。

「わたしが誰なのか、まだわかんないの？」

「う、うるさい！ 邪魔すんな！ 僕は……僕は……！」

「スサノオ、待て！ その女は——」

「暴走海賊の片割れよ！」

相棒はそう怒鳴りつけながら《ブラストバルカン》を具現化させ、身のため4メートルはあろうかという巨大なロックゴーレムめがけて銃撃音を響かせていった。電算2号が悲鳴を上げたのは言うまでもなく、繰り返されるおおざっぱな攻撃命令を忠実に守るロックゴーレムが見ている合間にもどんどん削られ、無惨な姿になっていく。

「……さすが俺の相棒」

俺は蒼海の甲冑盾騎士を《ライトレッグ》——ゲーム的なダメージを一定時間増やしてくれるアビリティ——で輝かせた右足で踏みつけながら、そうつぶやいていた。最後の甲冑盾騎士がその一撃で

カシャンと砕け散り、消えていく。俺を取り囲む近接戦闘要員や銃器キヤスター&呪文要員らしき面々は完全に腰が引けているようだ。というより、剣槍の面々はともかく、火器の面々までグルリと取り囲むのは危険だと思うのだが……

「ガンナー！ 下がれ！ ヒーラーの前に2列横隊！！」

鳥の巣頭の声が聞こえた。

「残ってるタンクはソードに入れ！ 総員、ラスボス戦パターンB
！！」

指事の声と共に蒼海の動きが変わった。

戸惑いの目も一瞬にしてすっかりとしたものに変わっていった。

「いいな、みんな！ ラスボス戦パターンBだ！！ パターンBだぞ！！」

剣槍持ちの間から3本角の兜を被る海色の甲冑騎士が進み出てきた。純白の布地に横幅の広い両刃短剣を意匠化したクランマークを青く染め混んだマントを羽織り、手には片手で持っているのが信じられないくらいに極太で重厚、おまけに柄から峰にかけて珊瑚が彩られているという奇妙な片刃直剣を持っている。どう見ても、こいつが鳥の巣頭だ。

「不意打ちはないだろ、シンくん」

どうやら正解らしい。

「バカは黙ってろ」

俺は鳥の巣頭を見ずに釘を刺すことにした。

まるで狙ったかのようなタイミングで、逆鱗の燐光が消え去った。

「ことあるごとに何度も何度も何度も何度も、俺は言い続けてきたつもりなんだが……自分だけは例外だと思ってたのか？ だとしたら真正正銘のバカだ」

「……挑発にしては、安いね」

「挑発？ 違う。釘を刺す意味で言っただよ。なにしろさっきから、不意打ちがどうのとか、敵がどうとか味方がどうとか、卑怯だとかなんだとか……」

俺はため息をついた。

「ざけんな」

ぐるりと蒼海の全員をにらみつける。

「もう一度、ここでも、改めて、物覚えの悪いおまえら全員にわかりやすいように、しっかり教えてやる……いいか、よく聞け。トレーニングの全メニュー、ランクSクリアできないやつは、俺にとつてただの邪魔者だ。もっとわかりやすい言い方をすれば……敵だ。で……どうなんだ？ おまえはトレーニング全メニュー、ランクSクリアできる人間か？」

「残念ながらガントタイプだけだね。ギリギリ、S評価が出るのは」

「論外だ。そのくせ俺に近づいて……殴られて、不意打ち？ 何様のつもりだ？」

「そういう君は、何様なのかな？」

さすがの鳥の巣頭もカリカリきだしたようだ。

もっとも、俺とリンが感じた苛立ちと比べれば、まだまだささやかなものだろうが。

「何様だって？」

俺はふと、さっきの相棒の啖呵と、自分の着ているTシャツのマークのことを思い出した。

髑髏と十字の骨——海賊旗の定番とも言うべきマーク。

「——海賊様だ」

なんとなくつぶやいてみた。だが、妙にしっくりくるものがあった。

「……おい、リッンっ！」

俺はロックゴーレムの片腕を《バーストガン》2丁の連射で碎いている相棒に、大声で呼びかけてみた。

「俺たち、これから海賊ってことで、いいよな〜あ!？」

「忙しいからあっとっ！」

相棒は《バーストガン》2丁を投げ収めると同時に、ホルスターの《バーストガン》2丁を抜き放っていた。見ていると、挟撃を狙ってきたもう1体のロックゴーレムの右膝をうち碎いている……つて、なんだ、あのピンポイント攻撃。なにをどうすれば、あれだけ動き回りながら2丁拳銃である命中精度を……

「あいつは海賊っていうよりも魔女だな——」

——ドフッ!

額を撃ち抜かれた。痛い。気分はでこぴんだ。いや、マジでそれに近い。

「誰が魔女だって!？」

「天使、天使。エンジェルガンナー様だ、おまえは」

「あとでころーすっ!」

「やってみい」

俺たちは視線をあわせた瞬間、同時に右の親指で自分の首を切り、地面を指し示した。

さあ、これで次のログインでのガチ喧嘩、確定だ。

現在の勝敗は43戦8勝15敗20分け。早く勝敗で並びたいところだが……

「……ふふ……ふふふ……ふははははははははははははははは!」

鳥の巣頭が急に笑い出した。

「あはははは! いや、ごめん! ははははは、で、でも……ははは、その通りだ、その通りだよ、シンくん! 君たちはそれでいい

リンの頬がピクツと動く。

「……げき、りんっ」

某特撮ヒーローを連想せずにはいられないつぶやきをひとつ。相棒の四肢を覆う鱗が逆立ち、青い燐光を放ち始めた。これぞ真正銘、本物のゲキリン……なんつって。

「ほどほどにな」

俺は無意味を承知で軽くなだめつつ、リンのもとから離れた。ところで。

暴れ馬である《ブラストバルカン》は、撃ってる先から銃口がズレていく。そのため、よほどの怪力の持ち主か、銃弾の（・）魔女でもなければ、全弾を一ヶ所に集めることなどできない。だから俺には無理なわけだが……

ここに逆鱗を立てたリンがいる。

つまり、そういうことだ。

「いい加減に……しろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

相棒はバルカンの全弾をピンポイントで望むところに当てていった。

悲鳴がふたつ。

（自業自得……か？）

と思いつつ、改めて蒼海のほうを眺めてみた。誰もいない。

「あの……」

巨石の陰に隠れていた新島が出てきた。

「みなさん、リタイアを……」

「ああ、リタイアか。じゃあ……おまえもそうしとけ」

「その……シン、くんは……」

「いいから、さっさとリタイアしろ。あと、もう俺に関わるな。いな」

「う、うん……」

なにやらもじもじしていたが、新島はウィンドウを開き、リタイアしていった。

これで残るは俺とリンと部長様と電算2号だ。

「こ、降参します！ 降参！ リタイア！！」

「ま、け、ま、し、た、ああああああああああああああああああああああああ！！」

訂正。俺とリンだけだ。

「なによ。もう終わり？」

「残りは俺とおまえだけらしいぞ」

「そつ。じゃあ……」

相棒はバルカンに専用弾のカードを装填しつつ、ニヤツと笑った。

「誰にも邪魔されず、ひと勝負、できるってわけ？」

「そうだな」

俺もニヤツと笑いつつ、《ハルバード》を具現化させた。

「じゃ……逝けっ！」

「どっちが！」

俺の《ハルバード》が向こうの脳天めがけて振り下ろされると同時に、リンの《ブラストバルカン》が鈍器としてこっちの脇腹に襲いかかってくる。

「だああああああ！」

「てえあああああ！」

お互い、マジだ。多少の痛みなんていつものこと。かくして44回目のガチバトルは、エスカレートの一途をたどっていった。

《ライトアロー3》を3射しつつ、向こうの逃げていく方向にフルオートで《アサルトライフル》の弾丸をばらまいていく。だが向

こうは《トライデント》で《ブルーシールド》を連続起動、光矢も弾幕も受けきりながら巨石の陰へと飛び込んだ。

かと思うとすぐ飛び出してくる。

右手には《バーストガン》、左手には《グレネードランチャー》。俺は逆鱗を立たせ、横に跳んだ。

撃ち出されるグレネード弾。それをあの女は空中にあるちに《バーストガン》で撃ち抜いた。爆発……いや、白煙が一気に広がる。

《スモークグレネード》。煙幕弾だ。

「ちっ」

瞬時に3本の《トライデント》を具現化、自分を三角に囲むように突き立てる。

「……はっ」

後ろにのばした両腕を一気に胸の前まで持っていき、ぱん、と眼前に突き立つ《トライデント》を手のひらで挟み込む。触れた瞬間の思考操作に従い、3本の《トライデント》は俺が感覚的に設定した周辺に向けて《アイスボール》を撃ち出した。

裏技その2——並列起動だ。

これは今のところ相棒にもできない。俺だけの裏技だが、実を言えば成功率があまり良くなかったりする。何度も何度もトライ＆エラーを繰り返した結果として、ようやく最近、3本なら安定的に使えるようになってきたが、実戦に組み込むところまでは、まだ至っていないと自分では考えている。

しかし、今は煙幕で意表をつかれた。ここは逆に向こうを驚かせるために使うべき時だ。

事実、凍れる蒼光の半球が俺の周囲で3つ、爆発していった中にリンは飛び込んでいったようだ。すさまじいのは、そのまま《バーストガン》で俺の右脚を打ち抜いてきたこと。

「ぬおっ!?!」

あえて打ち抜かれた衝撃に逆らわず、半回転しながら倒れていく。その間に《エナジーショット》の連続起動をイメージ。超接近連

射を仕掛けてくるであろうリンに超々接近連撃でやり返す光景をイメージしておいた。こうした次の光景を思い描いておくことが、裏技をうまく起動させるための一番のコツなのだ。

「――！！」

爆球が消え去るより先に、そこに飛び込んだ勢いのままリンが飛び出てきた。

両手で《バーストガン》を1丁だけ、しっかりと握っている。

しかも、逆鱗を立たせていた。

まずい。2丁拳銃を想定していたが、1丁をしっかりと握られていると、腕を蹴ったところで銃口をそらせない。おまけにこっちは先に逆鱗を立たせている。残り時間は20秒を切った。無論、マナ装填の隙を見逃してくれるような相棒じゃない。逆鱗が切れると同時にラッシュを仕掛けてくるはずだ。だったらそれより先に、こっちが！

「はっ！」

右側に捻りながら後ろに倒れようとしていた俺は、《ライトフィスト》をまとう右拳を地面に突き立て、その反動で一気に体を起こした。そんな俺の胸にリンの《バーストガン》の射撃補助線が伸びてくる。

勝負だ。

「――！！」

歯を食いしばり、中腰気味に両足を踏ん張らせながら、両手でリンの頭を挟み込んだ。

「！？」

リンはギョツとしながらも、銃口を俺の胸に押しつけ、引き金を引きまくった。

ドドドドドツというもののすごい衝撃が胸部を連打してくる。

猛烈に痛い。

硬式野球の剛速球を何度も何度も胸で受けているようなものだ。いくらアビリティや装備でバリアの防御力が上がっているといっ

も、限度というものがある。

だが俺の両手も、しっかりとリンの頭部を挟み込んだ。

イメージはできている——《エナジーショット》連続起動、開始。
「んく——っ!!」

リンの顔も苦痛にゆがむ。頭部をぎゅちりと挟み込む俺の両手の力が痛いのだ。弱めてもいいが、そうするとこの女、これ幸いとかかりに離れながら撃ちまくってくるのは間違いない。HPバーの残りからみて、ここで逃がすと回復の暇すらなく撃ち殺されること、間違いない。だったらそれよりも先に向こうを削り殺すしかない。

「うおおおおおおお!!」

「ん、くっ……んっ……」

我慢比べだ。だが、その戦いは無粋なマシンボイスによって突如中断させられた。

——TIME OVER.

胸部の痛みと衝撃が消える。カチカチとトリガーを引いても弾が出なくなったからだ。

両手の輝きも消える。アビリティが使えなくなったからだ。

お互いの青い燐光も消え、鱗も、しゅー、と音でも立てそうな緩やかさで戻っていく。

「はぁ……」

「はぁ……」

俺たちは同時にため息を漏らし、少し離れあった。

ウィンドウが展開したのはその直後のことだ。

——WINNER 【SHIN】

「よしっ!」

「うそ!？」

「判定勝ちでも勝ち勝ち! はぁ……やっと9勝目かよ」

「それでも44戦15勝9敗20分。まだまだわたしのほうが勝ち越してるけど?」

「3連勝中だけどな」

「……ムカつくううう！」

「約束だ。《ベルト・オブ・ウィンドミル》、買ってもらうぞ」

「もう……わかったわよ。出せばいいんでしょ、100万」

などと話し合っていると、視界の粹にカウントダウンが表示された。“REMOVE”となっていているところを見ると、グラウンドを出ろということらしい。

「おっ……とりあえず出るぞ」

「りょーかい」

俺たちはウィンドウに出現していた離脱ボタンを押し、まずボックスへと戻ることにした。そこから出ると――

「……わお」

ものすごい数のユーザーが遠巻きに俺の出てきたボックスのあたりを取り囲んでいた。

「なにこれ」

遅れて出てきたリンも驚いている。

囲んでいるユーザーの中には、俺がブツとばした蒼海の面々も混じっていた。部長様と電算2号の姿はない。俺たちを見る態度は、半分が好奇心と好意的なものが混ざったような感じだったが、もう半分は不審げにうさんくさいものでも見ている、という感じだ。

「……なんか、やな感じ」

相棒がムスツとしながら、そうつぶやいてきた。

同感だ。

「出るか？」

「じゃ、家についたらこっちから掘る。少し時間、かかるだろうし」

「了解。またあとで」

「うん。またあとで」

俺たちは拳を軽くぶつけあったうえで、ウィンドウを開き、ログアウトを選んだ。

ログアウトすると、部長様と電算2号の姿はすでに消えていた。
(……素直に帰ったのか？ 本当に？)

釈然としないものを感じながらダイブチェアを降りる。

と、別のチェアのフードが上がっていった。トモ、ではなく、
新島のチェアだ。

彼女はスーッと目を開けていくと、

「……あっ」

と声をあげ、なぜか頬を赤らめながら前髪の乱れを整えだした。

「……おい」

「は、はいっ」

呼びかけると、新島はあわててチェアを降りてきた。かと思う
と、俺から3歩離れたところで、グーにした両手を胸元にもって
いきながら言葉を待っている。なんかこう……従うことに慣れている、
といった感じだ。

まあ、いい。

「とにかく……おまえの知ってること、全部話せ」

「あ、はい。でも、その……なにを……」

「だから……」

ダメだ、こいつ。打てば響いてくれる相棒と全然違う。というか、
よくいる女子って感じた。正直、疲れるだけなんで関わり合いたく
ないところだが……いなくなった部長様たちのこと、なにより蒼海
の連中のことを聞き出さないといけないわけで。

「ったく。長話になるってことか……わかったよ」

俺はため息をついた。

「おい。このあと、空いてるか？」

「えっ？ あっ、はい。特に予定は……」

「どっか落ち着いて話せるところで、じっくり聞かせてもらう。い

いな？」

「……………」

「おい」

「は、はいっ！ よ、よろしく願いします」

なぜか威勢良く答えてきた。

（あー、もう疲れてきた）

ガリガリと頭をかきながら外に通じるドアに向かおうとする。

すると俺が近づくだけで、警備員がドアを開けてくれた。どうやら中でのことは監視されていたようだ。もつとも、仮想現実あっちのほうまでは監視しきれてないらしい。

（……ああ、そういうことか）

俺はログアウト直後に感じた違和感の答えに気が付いた。

部長様と電算2号。

あの2人が先にログアウトしておきながら、ログイン中の俺や新島に何もしないまま去るとは思えない。そもそもログイン中の新島に対してイタズラのひとつやふたつはやらかしてもおかしくない連中だ。だが、そうした形跡はない。なぜか。警備員が、常に中を監視していたからだ。

「ご苦労様です」

俺は厳つい顔をした警備員に会釈をしてから外に出た。

新島が後続く。

時刻はまだ、午睡というには早すぎる頃合い。真夏の日差しが強く差し込む一方、北風が吹き込んでいるせいで少し肌寒い感じがする。

（このあたりだと……）

俺はとりあえず、東雲しのめひろじ広路を少し登った先にあるファミレス——親父が市役所で働いている関係で、このあたりに来た時には利用する機会が多い店——に入ることにした。

「ドリンクバー2つ。……おまえ、他は？」

「い、いえ……」

カチコチに固まっている新島の方もドリンクバーを頼んだ俺はブレンドコーヒーを用意、空いていた窓際の席で一息つかせてもらった。ちなみに新島はミルクティーをもってきたらしい。

「じゃ、聞くぞ。まずは――」

まずは。

クローズドβテスト開始以前、NEURO社は医療用のPVシステムを用い、POのαテストを実施した。これに参加した256名を“Ca（クーア）”と呼ぶそうだ。

この通称は、αテスト以前、POの元になったシステムのテストユーザーになってくれた長期入院患者たちに“Before α（αテスト以前）”という意味で“Ba（ビーア）”というコードネームが与えられていたことに由来しているらしい。また、Ba（ビーア）はαテストに参加していないため、その素性等については市長ですら知りようがないところなのだそうだ。まあ、今までの反応を考えると、市長はαテストのことすら詳しく知らない可能性があるが……

いずれにせよ。

Ca（クーア）は3ヶ月間、クローズドαテストを行い続けた。蒼海の鳥の巣頭、キンキラ部長様、さらには《緑》のCROWなどが、この時に大活躍して有名ユーザーらしい。

こうしてヴァージョンCが完成、“β1（ベーワン）”こと第一期クローズドβテスト、つまり俺たちが参加する次なる段階へと移行することになったのだが、これと並行して、Ca（クーア）にはバーチャルステーションの試験運用が依頼された。『PHANTASIA ONLINE the NINE COLLOSSEUMS（ファンタズム・オンライン・ザ・ナイン・コロセウムス）』と名付けられたバーステ専用コンテンツのαテストが始まったのだ。バーステは社内選考でさえあればβ1（ベーワン）でも加わって良いことになっていたが、最初、Ca（クーア）しか出入りしなかったことにより、特権的な秘密倶楽部に似た場所になり始めた。

「そして今に至る……か」

俺は2杯目のブレンドコーヒーを口に含んだ。

「で、ロックゴーレムなんてもん、どこで仕入れた」

「イ、イベントで……」

「イベント？」

各都市にはレアなアイテムが簡単に手に入る隠しイベントが幾つも設定されていたそうだ。もっとも、αテストの時に仕込まれたものは、当然のことながらすべて明らかになっている。Cα（クリア）の一部が、この情報をもとにそうしたアイテムを独占したらしい。

「そんな話し、どこにも流れてないぞ？」

「か、隠しイベント……Cα（クリア）でも、知ってる人、限られていたみたいで……」

即座に鳥の巣頭の顔が思い浮かんだ。

おそらくあいつも、その限られた人間のひとりだったに違いない。

「数人程度か？」

「は、はい。部長が言ってた限りだと、そうです。それで、あの、全リセットのあと、大急ぎで翠都の隠しイベントをクリアして……」

「手に入れたのはロックゴーレムだけか？」

「あ、はい。他のものは、全部、他のCα（クリア）の人たちにとられちゃったみたいで……」

「他のCα（クリア）か……」

なんとなくだが、蒼海がかなりのレア物を独占している気がした。少なくとも蒼都のレア物は全て手にいれているだろう。さらにバトルロイヤルの際に他陣営のユーザーも加わっていたことを考えれば、紅都や翠都のレア物も、それなりに抑えているような気がする。あの鳥の巣頭、そのあたりで抜かりのあるような奴だとは思えない。

「レア物、どんなのがあったかわかるか？」

「えっと……家に帰れば、その、手帳に……」

「手帳？」

「メ、メモ、とるようにしているので……」

「へえ」

俺は足を組みがらコーヒーを飲んだ。

「だったらレア物のリストもあわせて、おまえの知ってること、全部文章にまとめて俺のところにメールできるか？」

「は、はいっ！ 今日中に、必ず！」

「今週中ぐらいでいい。どうせ今すぐどうこうって……」

俺は言葉を止めた。視界の隅に、大股で歩み寄ってくる女子を見つけたのだ。

普通だったら無視するところだが、頭の中の警報が響きだしている。

改めて俺は、そいつを確かめてみた。

（……あつ、クラスの）

名前は相変わらず思い出せないが、パーマのかかった髪を束ね上げているこの眼鏡女、間違いないくクラスの女子だ。キャミソールの重ね着にパキンス、足下は素足にミュールという少し古い格好をした彼女は、なぜか俺をにらみながらこっちに近づき、

「こんにちわッ」

と、俺の傍らで立ち止まった。怒りを堪えているかのような声で。

「……よう」

挨拶するような間柄でもないのに——などと思いつつ、一応、答えておく。

向こうは黙ったまま俺を睨み降ろしてきた。

ちよつとムカつく反応だ。

「なんか用か」

「別にッ！ 楽しそうじゃないッ！」

「……ケンカ売ってんのか？」

「どっちが！？」

「……はあ？」

「よくもまあ、あんだけあからさまなラブラブ光線だしまくりのツ

ツキー、徹底的に無視しまくってるくせに……」

「陽子！？」

店に入ってきたばかりの客が大きな声をあげた。店内の視線を集めたその人物は、半袖ブラウスとネクタイにデニムスカートとパキンスを身につけたショートヘアの小柄な女の子だった。傍らには、ダンガリーシャツにブラウンのスリムパンツという格好をした、俺以上の身長があるベリーショートの子の姿がある。

後者は記憶にある。確か、クラスメートだ。

でも前者は？　なんとなく見覚えはあるが……？

「ツツキー、ホッシー、遅いッ」

陽子と呼ばれたパーマ頭の眼鏡女はレジのある出入り口のほうに早足で移動していった。

俺はため息をついた。

「……新島」

「は、はいっ」

「ケータイ出せ」

「……えっ？」

「いいから出せ」

「は、はいっ」

取り出してきたケータイは俺のケータイより一世代新しいものだった。やっぱり買い換えるべきか、などと思いつつ、赤外線でケータイのメルアドだけを交換しておく。

「あとでケータイのメルアドにPCのメルアド、送っとく。そこにメモっておいた全部の情報、まとめてテキストかドキュか何かにして送れ。今週中だ」

一方的にそう言いつつ、俺は財布から千円札を2枚取り出し、テーブルにおいた。

「支払い、やっつけ」

「あっ、私の分は自分で——」

無視して席から離れる。

その途端、俺のケータイが軽く震えだした。
見ると相棒からの電話だった。

「もしもし、どうした」

「タクシーで帰ろうとしたら渋滞にハマっちゃったから、遅れるって連絡。それより今、話しても平気？」

「ああ。元ツクヨミからのヒアリング、ちょうど終わったところ。ちよい待ち」

女どもがいるレジに近づいたので、一端、受話器の口を手でふさぐ。

話しかける相手は、あくまで店員だ。

「支払いは相席に」

そのまま店を出て行こうとする。

「ちよっと！」

と、パーマ眼鏡女が声をかけてきたが、ガン無視だ。

「待たせた」

「誰か呼んでなかった？」

「面倒そうだから無視」

東雲広路の坂道に出る。だが、追いかけてきたパーマ眼鏡女が俺の肩をつかんできた。

「ちよっと、人が呼んでるのに無視するってどういうつもりよッ！？」

「……すぐこっちから掛け直す」

「へりょーかい。がんばってね、トラブルホイホイ」

「てめえ……」

「じゃあね、相棒」

「あいよ」

電話を切り、振り返る。店の出入り口に続く短い階段を下りてきているのは、パーマ眼鏡女と長身坊主頭と短髪チビ女の3人だ。3人目がどうにも記憶にないが、まあ、きっとクラスメイトなんだろう。残り2人がそうなのだから。

「で？」

「……あんた、最低ッ」

パーマ眼鏡女が軽蔑のまなざしを向けてくる。だが、それ以上に冷やかな目で俺は3人をジロツと一瞥した。

「街でバツタリ会うなり、睨んでくるわ、怒鳴りつけてくるわ、絡んでくるわ……それが最高って言うなら、確かに俺は最低だな」

「あんたねえ——！」

「陽子っ」

短髪チビ女がパーマ眼鏡女の腕をつかんだ。今にも泣き出しそうな顔をしていたが、俺が見ていると気づくと、バツとうつむいてしまった。

「やめて……」

「でも！」

「やめて……」

二度、同じ言葉を繰り返されると、パーマ眼鏡女は歯をかみしめながら、黙り込んだ。

まあ、どうでもいいや。

「じゃあ」

と立ち去ろうとした間際、ようやく俺は短髪チビ女のことを思い出した。

隣の席のおかつば頭だ。どうやら髪を切ったらしい。

「前よりいいな、それ」

俺は自分の髪を軽くつまんでみせながら、短髪チビ女に苦笑を投げかけた。ちようどチラツとこっちを見た彼女は、ボフツと音が聞こえそうな勢いで耳まで真っ赤になりながらうつむいてしまう。

こんなに恥ずかしがるやつだったっけ？ ……よく覚えてないが、まあ、いいか。

俺は今度こそ坂を下りだし、相棒に電話をかけた。

「待たせた」

「へ今度のトラブルはなに？」

「なについて言われてもな……」

へじゃ、順番に詳しく。包み隠さず。なにもかも

「……おまえ、暇だろ」

へわかる？ 渋滞、ほんとすごくてさ——

俺は電車に乗らず、電話をしながら歩いて帰ることにした。

後にして思えば——この一日（テスト61日目）の出来事が、後々の“戦争”の序曲だったのだと思う。もちろん、この時の俺はそんなこと、欠片も考えていなかったし、予想もしていなかったわけだが……

LOG 04 ” BUCCANEER ”

End

To Be Next Chapter

#04-19 (後書き)

以上が既掲載分になります。

次から新章です。

毎週1話ずつの更新を目指していますが、体力等の問題もあるので、週刊を確約できない点、予めご了承下さい（一応、各話の文書量を少し抑えることで連載を継続する目処もたてていますが、それもどこまで持つか……）。

未改訂版の改訂は新章が一段落したところで始めるつもりです。誤字脱字や校正指摘等は、その時にしていただけると幸いです。

ほとんど自己満足のために書いているような作品ですが、今後ともお楽しみ頂ければ幸いに思います。ではでは。

p. s.

お気に入りとか感想とかポイントとかの増加数が……うう、心臓に悪い（メンタル的な意味でw）。新章も、あまり期待しないでくださいね？

#05-00 (前書き)

新章です。今後は毎週水曜日の0:00の更新を目指していきます。ただ、必ず週刊で掲載できるとは限らない点、予めご了承下さいませ。

薄暗い部屋の中、3つの人影が飲み物を手に談笑していた。

「アマテラスがやられたようだ」

「ククク……奴はC^{クレーア}a四天王の中でも最弱……」

「C^{クレーア}aの面汚しよ……」

静寂。それは3秒ほど続いたが、

「……ぷっ」

ひとりが小さく吹き出すと、

「ぶぶっ、ぶふぁははははは！」

「くくくっ……お、お腹痛い………」

「ははははははははは！」

3人とも腹を抱えて笑い始めた。

直後、薄暗かった部屋のLED照明がピツと音をたてて光度を増していく。

「なにやってんだか……」

部屋に入ってきたのはデニムのエプロンを身に着けた小太りの男性だ。左手に持っているトレイには、香ばしい匂いを漂わせているイカの揚げ物が載られている。

「あっ、できた？」

目元に涙すら浮かべて笑っていた女性が手伝おうと席を立ちあがるが、小太りな男性は照明リモコンを持ったままの手を軽くふり、テーブルにスペースを作るようにと目で促した。

「おー、きたきたあ！ 旦那のイカリングさいこー！！」

「いっふりだっけ？」

女性を手伝いながら、ビール缶やグラス、スナック菓子類などが広がっているテーブルを他の2人も片付けていく。

片方はリングが揺れるピアスをつけたソフトモヒカンの軽薄そう

な青年。

もう片方は短い髪を逆立てている垂れ目気味のメガネの青年だ。

「確かC^{クイア}α中だったから……半年前？」

「そうっすねえ」とソフトモヒカン。

「そっかあ。もう半年かあ」とメガネ。

「早いもんねえ」

小太りの男性のためにウーロンハイを作り出した女性は、懐かしそうに目を細めた。

『P H A N T A S I A O N L I N E』クローズドαテスト
——通称“C^{クイア}α”。それは、医療用として開発されたPVRを娯楽レベルまでデチューンすることを目的としたデータ取りの一種だった。

テストの過半数はNEUROジャパン社に縁故を持つ者たち。

ここにいる四人も、メガネの青年が当時のNEUROジャパン社で契約社員として働いていたことからC^{クイア}αになれた幸運な者たちなのだ。

「ところで先輩」とソフトモヒカンが女性に尋ねた。「《青》のあれ、いつまで放置しとくんっすか？」

「あれって？」

「ほら、騎士団の連中、狡いことやって……」

「ああ……奴らね。うん」

女性は自らの前髪を指先でいじり始めた。

「あれって……どう考えても、金儲けの手段に使おうとしてる……よね？」

「だろうね」

ウーロンハイを持った小太りの男性が苦笑混じりに頷いた。

「でも、だからといって全否定されるものでもないよ？ そりゃあ、僕らみたいに生粋のゲーマーからしたら、ああいうのは目障りにしか思えないけど、下手に潔癖すぎるとVRMMOってジャンルそのものを閉じてしまいかねない。いろいろ、微妙なところだよ」

「でも旦那、逆にイメージ、悪くなるんじゃないっすか？」

「うん。だから、一応は警告を……したんだよね、平井くん」

小太りの男性は、メガネの青年に尋ねた。

「ええ、しておきました」

メガネの青年はビール缶で喉を鳴らしてから答えた。

「といって、僕はもう契約社員じゃないんで」

「社長様だもんねえ」と女性。

「ひゅーひゅー」とソフトモヒカン。

「からかうなよ」

メガネの青年はソフトモヒカンの肩をこづき、照れを隠すようにビール缶を煽った。

「おもいきったよねえ、あの時点で起業だなんて」

「賭けですよ、賭け。これからPVR市場が賑わうなら、うちみたいにオブジェを作る仕事が増えるじゃないかって。まあ、今はP Oの下請けだけですけどね」

「で、どこのデザインを？」

「企業秘密です」

「くくく」と女性。ブローキン・ポリス「倒壊都の教会に――」

「あー、なんのことですかねー、せんぱーい」

メガネの青年がわざとらしく大声を出すと、場には笑いが起こった。

「でもさ」

と、女性が梅酒ハイを口にした。

「いいところ、ついてると思うよ？ PVRのオブジェデザイン、

普通に見た目を整えるだけで終わりってわけにもいかないわけだし」

「だからこそ！」

ソフトモヒカンが力説した。

「騎士団っすよ、騎士団！ 奴らのせいPOがコケたら洒落にならないんすよ！」

「あー、実はこいつ、うちに就職する気なんで」

「「ああ」」

女性と小太りの男性が納得の声をあげた。

「いやいやいや！ それだけじゃないっすよ！ マジですって！！」

「はいはい、わかったわかった」

女性は苦笑まじりに手をヒラヒラとさせた。

「あなたの気持ちはよくわかったから。それにね、うちの陣営でも、ちょーっとばかりそのあたりのこと、鬱憤が溜まってるし……パパ、どう思う？」

「んーっ、そういう話、確かに増えてるねえ」

「やるんですか？」

メガネの青年が楽しげに尋ねた。

小太りの男性が笑う。

「おいおい。君はマトメの魔王様なんだから、中立を保たないといろいろとまずいだろ」

「《赤》にはいつもお世話になってますし」

「そうっすよ！ それに引き替え《青》の連中ときたら！」

ヒートアップするソフトモヒカンの様子に、他の3人は苦笑を漏らしあった。

「そうだ。平井くん、《青》といえばSLだけど」

小太りの男性がメガネの青年に尋ねる。

「SL、両方が“クイッカー”なんだって？」

「ええ、そうらしいんです」

「すごいなあ。Ca^{クイッ}から数えて……6人目と7人目？」

「えっ？ 7と8じゃないの？」

女性が異議を唱えた。

「えっ？」

「んっ？」

「ええっと……」

他の3人が、それぞれ数え始める。

「……Ca^{クイッ}だと、先輩、平井さん、姫、ミモリっち、団長、神様の

6人っすよね？」

「ああ、ミモリちゃんがいたか」

「学校、たいへんらしいよ。正式版になっても復帰は難しいかもって」

「ほー」

女性がニヤリと笑う。

「平井い。連絡、とりあってんだー」

「そりゃあ、仲間でしたし」

「姫とは？」

「それが全然。メール送っても反応が無くて。相変わらずって感じですよ」

「あの子も《赤》に来ればよかったのに……」

「呼べばいいじゃないですか」

「呼ぶって、今から陣営変えろって？」

「まさか」

彼はメガネを押し上げ、ニヤツと笑った。

「先輩が《赤》の最強、^{アネゴ}“ANE5”として、^{クリスタル・マウンテン}“水晶山”で暴れれ

ばいいんですよ。どうせ姫のことだから、騎士団なんて相手にもしていないでしょうし。やりましょうよ、先輩。^{クーパー}Caの戦闘狂ソロテスター集団“ゾロ”の親睦会。盛大に、徹底的に……やってくださいいよ。俺たち、落選組のためにも」

LOG. 05 ” VERSUS ”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9691z/>

ONLINE

2012年1月4日01時54分発行